
とある暗部と学園都市

晃甫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある暗部と学園都市

【Nコード】

N9340P

【作者名】

晃甫

【あらすじ】

学園都市。

人口230万人のうち実に8割が学生という学生の街では、超能力開発が行われ日常生活の中や授業のカリキュラムにまで取り込まれている。

そんな学園都市の中には7人しか存在しない超能力者、レベル5がいる。

これはそんな超能力者たちとその周囲の物語―

第1章

暗部抗争編

第2章（E p・21）

学園都市内戦編

第3章（E p・43）

暗部総力戦編

2011・03・22

E p・1を改稿しました。

2011・03・24

E p・4を改稿しました。

Ep・i 『グループ』（前書き）

時系列的には現在14～15巻の間くらいからのスタートになります。

なので帝督も麦野もバリバリ生身で参戦します。

そのうち上条さんや美琴も出す予定です。

駄文ですが楽しんでいただけたら幸いです。

2011・03・22

改稿しました。

E p . i 『グループ』

学園都市

東京都西部を開拓してつくられたこの都市は、人口230万人のうちの実に8割が学生という学生の街である。

この学園都市は周囲とは高さ5m、厚さ3mという巨大な外壁によって隔絶され、技術水準が2、30年進歩している。

そして忘れてはならない学園都市の特徴と言えば、超能力の開発だろう。

『記憶術』や『暗記術』などと銘打って学生の脳を開発し、当たり前のように超能力を授業のカリキュラムに取り入れている。

その発現した能力は能力測定によってレベル0（無能力者）～レベル5（超能力者）の6段階に振り分けられる。

これはその中でも学園都市に7人しかいないレベル5たちと、学園都市に存在する闇で活動する少年たちの物語

学園都市には『表』の世界を守るために『裏』で暗躍する小組織が存在する。

その中の1つ、暗部組織『グループ』。

「今日の仕事は簡単だ、統括理事会の1人、親船最中を暗殺すると犯行声明をだしてきた武装グループ『カスタム』を速やかに処分すること」

第七学区にある『グループ』のアジトの一つで任務の書類を広げながらそう言うのは金髪にサングラス、アロハシャツをという派手な恰好の少年、土御門元春。

「その『カスタム』というのはどういったチームなのですか？」

スーツを着用し、ニコニコした笑顔が特徴で紳士な雰囲気が漂う青年、海原光貴が尋ねる。

「にゃー、どうやらレベル0からレベル2程度の集団みたいだねー。だがその分所持してる武装はそうとうみたいだねー」

「そんなのに私たちがわざわざ出向く必要があるのかしら？」

そう反発してくるのは薄いピンクのサラシに紺色のブレザー、更に

は極端に短いスカートという露出度の高い服装をした先輩系巨乳女子高生、結標淡希だ。

「ンなもんはどーだっていんだろぅがア、なんならてメエ1人で行くか？」

「私に喧嘩売ってるのかしら？一方通行」

「ハッ、それはこっちの台詞だ結標エ」

結標と睨み合っているのは白髪で首筋あたりにチョーカー型の電極を装着してしる細身の少年、学園都市第一位の超能力者（レベル5）、一方通行。現代的なト字トンスファアをソファに立て掛け、気だるそうにソファに寝転がっている。

この4人が所属する『グループ』は『表』の世界の大切な者を守るため『裏』で活動している。

一方通行は打ち止め（ラストオーダー）という少女のために。

結標淡希は収監されている少年たちのために。

海原光貴はとある少女と周囲の世界を守るために。

土御門元春は大切な義妹を守るために。

「現場は第一七学区の広場だ。詳しいことは移動中の車内で話す。いくぞ」

土御門はソファから立ち上がり、外にスタンバイしているであろう

黒塗りの回収車へと向かう。

一方通行や結標、海原もそれぞれ腰を上げてアジトを後にする。

こうして『グループ』の任務が幕を開けた。

Ep・i 『グループ』（後書き）

グループ始動です。

Ep.2 レベル5の実力（前書き）

駄文ご勘弁ください；

Ep.2 レベル5の実力

「親船を暗殺してどうしようってんだ？」

車で第17学区へ移動中の車内、一方通行が土御門に聞く。

「どうやら親船暗殺と引換に学園都市上層部の情報を要求しているみたいだぜい。」

「なら親船なんかじゃなくて潮岸あたりを狙っほうが早いんじゃないかねのか？」

親船最中は統括理事会の中でも極めて珍しい善人だ。

それをおもしろく思っていない人間も少なくはないだろう。

「あんなバワードスーツ駆動鎧を24時間着ている奴をどうやって暗殺するんだよ。」

土御門が大きいめのハンバーガーを頬張りながら問う。

つまりはそういうことだ。

同じ権限をもつ統括理事会の人間を暗殺するなら警備が甘い人間に限る。

当然親船も何人かのSPは配置しているだろうが、それで武装している『カスタム』を押さえきれるとは思えない。

「面倒な仕事だなア、全く。」

そう言いながら一方通行はいかにも辛そうなチキンにかぶりつく。

「…アンタたち栄養管理って言葉知ってる？」

高級そうなカップに入ったサラダをフォークでつつきながら結標が呆れ顔で言う。

「栄養管理は妹に任せてるからにやー。」

「食い物なンざ腹に入ればどれも同じようなもんだろ。」

絶句する結標の隣で海原はその光景を楽しそうに眺めている。

ひとしきり食事を終えた土御門が作戦の内容について伝え始める。

「今の時刻は午前11:40。親船の演説が始まるのが午後1:00ジャストだ。だから俺たちはその時間までに奴らのアジトに潜入して『カスタム』を潰さないといけない。」

「そのアジトというのは場所はわかっているんですか？」

海原が質問する。

「ああ、上層部からの報告だと演説予定の広場から北西に1kmのホテルの地下だ。」

「で？そのホテルの地上には何の変化もないわけ？」

「いや、実際はホテルはほぼ占拠されてると見間違いないだろうな。」

親船暗殺が公になるとまずいだろうから大きなアクションは起こしていないが、

と土御門が付け加える。

「まあ簡単なことなンだろ、そのホテルの『カスタム』を全員潰しまえばいいンだからよ。」

「よし、俺と一方通行はホテルに侵入して『カスタム』の殲滅、結標と海原は外で見張り、脱出してくるやつがいたら片付ける。」

それからおよそ10分後、

『グループ』を乗せた車はあるホテルの近くで停車した。

「うーん、一般人を装おっちゃんいるがあれは間違いなく『裏』の間だにゃー。」

『カスタム』が占拠していると見られるホテルの入口や裏口の周辺には私服をきた若い青年たちが散らばって辺りをうろついている。

「堂々としても構わねエンだなア。」

「上層部はなるべく一般人には気付かれないようにって条件をつけてるんだぜい。」

「チッ」

「ここは結標に任せようぜい。」

ここはホテルの最上階。

30階建てのホテルの頂上にあたる。（このホテルに屋上はない）

そこを警備していた『カスタム』の構成員の1人が、2人の人間がいきなり現れるのを目撃した。

1人は金髪サングラス、1人は白髪にトンファーのような杖。

もちろんこれは結標準淡希の能力、

↑ポイント
座標移動

によるものなのだが、そんなことを知らない青年には突然人が現れたようにしか理解できない。

「チツ、こんなところにまで見張りがいやがンのか。」

「一方通行、ここは俺がやる。お前は『カスタム』の頭を潰せ。」

はいはい

と気だるそうに返事をした一方通行は階段を使って下に降りていく。

見張りの青年が一方通行を止めにかかろうとするが、その直線上には金髪サングラスの男が。

「悪いがこつから先は通すわけにはいかねえ。死にたがりなら別だけどな。」

こうして最上階から戦いは始まった。

一方通行は階段をひたすら降りていく。
見張りがいたのはさっきの最上階だけで、今のところ人の気配は感じない。

『一体どこにいやがんだ？』

と考えていたその時、

パンッ

銃声が響いた。

『オイオイもうおっぱじめてくれちゃってんのかア？』

一方通行な銃声が聞こえたフロアに下りる。

そこには縄で縛られ中央に集められている従業員と客の人質の姿と、その周りを取り囲みフロア全体に散らばっている黒いジャケツトに身を包み様々な武器で武装している『カスタム』の姿。

「さアて」

一方通行は首筋あたりのチョーカーに手を伸ばす。

「ゴミ掃除の時間だ。」

電極のスイッチが入れられた。

遡ること数分、

ホテルの外で待機する海原と結標。

「今の銃声よね、始まったのかしら。」

「かもしれませんね。」

「結構上の階から聞こえたわよ、やっぱりこのホテル占拠されてるのね。」

「加勢にでもいきますか？」

「冗談でしょ？死んだら死んだ奴の責任よ。私が行く義理なんてないわ。」

これが『グループ』。

けて友情や信頼などという見えないもので繋がっているわけではなく、あるのはただ自分の利益のみ。

それだけが『グループ』を繋ぎとめている理由である。

「ま、あいつが死ぬなんて考えたこともないのだけけどね。」

フロアの入口から白髪の少年が堂々と歩いてきた。

その赤い目は、とても一般人の目ではない。
そう直感した『カスタム』の副リーダーは一斉に一方通行に向かって発泡。

それで終わるはずだった。

しかし一方通行はこれを全て反射、発泡した者たちに次々と弾丸が突き刺さる。

「なっ…!？」

その一撃でこのフロアにいた3分の1ほどが戦闘不能になった。

「なんだア？この程度で親船暗殺なんかしようとしてたわけじゃねエよなア？」

「能力者が…!」

『カスタム』のメンバーは拳銃を床に放り投げ、ポケットから小さな金属のついた四角い箱を取り出す。

それを展開。すると

『あん？演算のジャミングでもしてやがンのか？』

頭に鈍い痛みが走る。

「これはスキルアウトと共同で開発した能力者用の妨害装置だ！^{ジャミング}いくらお前が能力者でもこれの前ではただのガキだぜ！！」

『スキルアウト…、あの駒場の野郎と似たようなもんなのか？』

なら問題はねエ。

一方通行は腰から拳銃を抜き取り大きな窓に向かって発泡、窓一面が砕け散る。

砕け散った窓からは強烈なビル風が流れこんでくる。すると展開されていた金属の箱の範囲領域の粒子が外へと流れ出す。

「それはもオ勉強済みなんだよクソツたれが。」

「ひっ…」

他にも様々な武器を用意していたはずの『カスタム』だが、能力者用の武器が破壊されたことで動揺してしまっている。

「こんなもんしかねエようじゃあ、頭の実力も知れてンな。」

圧倒的実力を持つ、
学園都市第1位の破壊活動が始まった。

一方通行が暴れ始めたころ、ホテルの地下。

「なんだか上が騒がしいな……」

リーダーらしき男が部屋の中央に置かれているソファーに腰掛けながら呟く。

部屋の電気は消され、ソファーの隣に置いてあるインテリア用の蛍

光灯だけが部屋を照らしている。

そんな部屋に『カスタム』の構成員である男が慌てて入ってきた。

「河原さん！大変です！」

息をきらしながら『カスタム』リーダー、河原へ状況報告をする構成員。

「…なんだと！？白髪に赤い目…？そいつはまさか…！」

「はい！間違いありません！あの学園都市第1位の一方通行です！」

そう言った瞬間、

ホテル全体が大きく震えた。

Ep.2 レベル5の実力（後書き）

一方通行の活躍を書きたかったんですが…うまくいっているでしょうか…？

Ep.3 『カスタム』 vs 『グループ』

窓ガラスは割れ、壁は剥がれ、床には一方通行を中心に無数の亀裂が入っている。

「あらかた片付いたか。」

そう言っただけ一方通行は電極のスイッチを切る。

近くに転がっていたトンファのような杖を拾い上げ、フロアをあとにする。

そこに残されていたのは『カスタム』だった人間。
今は人間なのかの区別もつかない。

それを行った張本人、一方通行は携帯を取り出して電話をかける。

『どうした一方通行。』

電話の相手は土御門だ。

「フロアにいた連中は片付けた、これで終わりか？」

『いや、おそらく地下にリーダーとその側近がまだいるはずだ。俺も今からそっちへ行く。』

土御門との通話を切って一方通行は地下を目指す。

『コンなくだらねえ仕事はさっさと片付けて帰るとしますかア』

『カスタム』のリーダー、河原は慌てていた。

上層部に親船暗殺の犯行声明を送った時点である程度能力者がやつてくるかは予想できていた。

だから構成員に演算妨害用の道具も渡してあったし、それである程度の能力者には対処できるようにしていた。

しかし、
それは所詮
ある程度、の能力者にしか効果がない。

学園都市に7人しかいないレベル5、しかもその第1位がこの『カ
スタム』を殲滅するために駆り出されている。

「学園都市第1位がくるなんて完全に予想外だ……！くそお！！」

河原はソファーを殴りつける。

側近の部下3名も動揺が隠せない。

『今は12：20、親船最中の演説まであと40分もある。一旦こ
こを脱出して他の場所に身を潜めるか……？』

極度の焦りから思考が上手くまとまらない。

そのとき、

バンツと勢いよく河原たちの目の前の扉が開かれた。

河原と部下3名は扉に向かって銃を構える。

『このタイミングで一方通行か！？くそっ、逃げられねえ！！』

「お前がリーダーの河原大悟だな？」

現れたのは金髪サングラスの男！

土御門元春。

「誰だてめえは！！」

河原の怒号が地下室に響き渡る。

「お前らと似たようなもんだよ。」

サングラスの奥の瞳をギラつかせながら土御門は河原のもとへと詰め寄る。

その距離10m -

「こんなところで殺されてたるかよ!!」

河原と部下3名は一斉にポケットから小さなボールを取り出し、思いきり床に投げつける。

瞬間、地下室を大量の煙が覆う。

「チツ、煙幕か!」

土御門は急いで地下室の扉の外にでて周りを見渡すが既にそこには誰もいない。

「クソが!」

急いで携帯を取り出して電話をかける。

『もしもしどうしましたか?』

通話の相手は海原だ。

「リーダーとその部下を逃しちまった。おそらくこのホテルから出るはずだ。探し出して片付けてくれ!」

その通話を横で聞いていた結標が横やりを入れる。

「何やってるのよ全く、私にまで迷惑かけないでもらえるかしら。」

結標の愚痴を携帯越しに聞きながら土御門は階段を駆け上がる。

すると丁度降りてくる一方通行と鉢合わせた。

「ンだよ、そんな血相かえやがって。」

「お前はどれだけマイペース野郎なんだあ！！」

土御門がキレるが一方通行は聞く耳を持たない。

「バカか土御門、あいつらが俺から逃げられるわけねエだろオが。」

一方通行は再び電極のスイッチに手を伸ばし、能力使用モードに切り替える。

脚のベクトルを操作し、天井を突き破って一気に1階のロビーまで跳躍する。

「これはもオ一般人に気づかれねエようにはムリかもしんねエなア。」

周りを見回すとホテルの裏口に続く通路を走っている人間が4人。

「逃げるならもつと俺を楽しませてみるってんだ。」

一方通行はそのへんに落ちていたコンクリートの破片を軽く蹴飛ばした。

本当に軽く蹴っただけなのだが、ベクトル操作されたその破片は弾丸の如く飛んでいき4人のうちの1人の背中に直撃、ボキッという嫌な音が響く。

「ぐがつ…？がハッ…」

破片を喰らった部下は倒れこむ。

その様子に気付いた他の3人は一方通行の姿を見ると血の気が引い

ていく。

だが一度は逃げたが腐っても暗部『カスタム』。

3人のうちの1人

リーダーの河原が言う（一方通行は誰がリーダーなのかは知らない。）

「てめえに俺たちの計画の邪魔はさせねえ！！」

1人はライフルを、

1人はマシンガンを、

1人はショットガンを撃ちながら一方通行に向かって走っていく。

「いいねエ。」

一方通行が笑う。

「お前らなかなかおもしれエぞ。」

一方通行は反射を展開、1分後には決着がついていた。

「結局私たちの援護は必要ありませんでしたね。」

帰りの車内の中で海原が言う。

結局『カスタム』は一方通行が殲滅。
親船の演説も何事もなく終了した。

「いやあ煙幕使われた時はちつとばかり焦ったんだけどにやー。」

「煙幕にやられるっていつの時代の人間よあんだ。」

結標が土御門をなじる。

「まあまあとりあえず任務は終わったんだからいいじゃないですか。」

海原の仲介でその場をなんとか抑える。

一方通行は海原の横でトンファーのような杖をずっと弄くり回している。

また今回みたいなジャミングがあると面倒くせエし、あのガキとの代理演算どーにかしねエとな

とかなんとかブツブツ言っている。

そんな一方通行を、ずっと笑っている海原を、にゃーにゃーうるさい土御門を順番に眺めて結標は思う。

『こんなんで大丈夫かしら…』

ちよつと本気で心配になる結標をよそに、4人を乗せた車は軽快に進んでいく。

Ep.3 『カスタム』vs『グループ』(後書き)

楽しんでいただけたら幸いです。

Ep. 4 「超電磁砲」(前書き)

美琴登場です。

2011・03・24

改稿しました。

Ep.4 「超電磁砲」

第七学区にある西洋風の豪奢な造りの建物。

私立常盤台中学校

学園都市の五本指の一角であり、世界有数のお嬢様学校である常盤台は強能力者（LEVEL3）以下の人間はたとえ王族であろうが入学が許されないというとても敷居の高い学校だ。

そんな常盤台に通う1人の少女、御坂美琴は移動屋台のクレープ屋の行列に並んでいた。美琴以外は小さな子供が多く中学生である彼女は端から見ても中々に目立っているが、今の美琴にとって人の目など全く気にならない。

そわそわしながら列に並んでいる美琴の目的はクレープではない。お目当てのモノはクレープを買うとついてくる“オマケ”のほうだ。クレープ屋台限定ゲコ太ストラップ、この緑色の両生類のストラップが欲しいがため、今彼女は自分の順番が今か今かと待ち望んでいるのである。

ちなみに同じ部屋の後輩、白井黒子にはゲコ太をさんざんバカにされているため、このクレープ屋に並んでいることは秘密だ。

（まったく黒子のやつ、私の趣味をさんざんバカにして）

現在時刻は夕方6時、そろそろ生徒は完全下校時刻の時間だ。

が、美琴はとくに気にしてはいない。

怖い寮官に見つかるのだけは本気で勘弁だが、あのツンツン頭を一晚中追いかけたり、夜中にこっそり寮を抜け出したりとあのお嬢様学校に在籍しているとは思えない行動をとったりしているためか、あまり時間を気にしたことがないのだ。

そうこうしているうちに美琴の番になり、いつぞやのように目の前の客でストラップが底をつくこともなくついに念願のゲコ太ストラップクレープ屋さんバージョンを手に入れることができた。

「あゝ、ゲコ太ゝ」

クレープとゲコ太ストラップ片手にテンションが急上昇する常盤台のエース。

しばしクレープを見つめていた美琴だったが、クレープを持って帰るわけにもいかなかったので近くのベンチに腰掛けクレープを食べ始める。

クレープも食べ終わり日が沈んできたのでそろそろ帰るかなあ、と美琴が考えていると、

「ねえねえ！君可愛いね、これから俺たちとどっか遊びにいかない！？」

おそらく高校生から大学生くらいの男が5、6人美琴に声をかけてきた。

見るからにチャライ、金髪にピアス、それに大きなサングラス。カッコイイとも思っているのだろうか。

（はあ、またこの手のバカか……）

よくからまれる美琴ではあるが、こうあからさまに来られると溜め息の一つも吐きたくなる。

「いいじゃんいいじゃん、遊びにいいこうぜ」

見ると周りの人が警備員アンチスキルに連絡するか？とか大丈夫かなあ　とかヒソヒソ言っているのが聞こえる。

こんな時あの馬鹿なら迷わず助けに来てくれるのだろうか、などという考えを頭の隅に置きながら、

「はあ……」

本気で面倒くさそうにため息をつく美琴。

「うるさいわねえ、こっちは何にもアンタたちに用はないわよ」

「そんなこと言わずにさあ」

「たっぷり楽しませてあげるから」

としつこく誘ってくる不良少年たち。

その1人が美琴の腕をグイッと引っ張りベンチから立たせようとしてきた。

「……………」

バチィッ!!

「ギャアッ!?!」

美琴の腕を掴んでいた少年が一瞬で黒焦げになった。

「なッ!?!」

「お前高位能力者か!?!」

(いやいやアンタらアタシの制服見て普通気がつくでしょうが……………)

まさか本気でウチの制服を見て気付かなかったのかと思った美琴だが、どうやらそのようで、

「お、おいコイツの制服って……………」

「ま、まさか……………」

「常盤台!?!」

今ようやく気がついたようだ。だが、不良どもも声を掛けた手前すくには退けないのか強がった態度でなおも、

「お前常盤台だからって調子にのってんじゃないやねえぞ?この人数相手して勝てると思ってるのか!?!」

そう言つて男の1人が美琴の胸ぐらに掴みかかろうとすると、バチ
イツと美琴の前髪から電流が放たれて男に直撃、そのまま気絶した。

「なっ、てめえなにしながら!!」

「アンタたちが先に喧嘩売ってきたんでしょっが」

紫電を前髪からバチバチと走らせながらゆっくりとベンチから立ち
上がる。

電流をバチバチさせながら男たちを見つめる。

すると男の1人がなにか気付いたようでもう1人の男に話しかける。

「常盤台でいまの電撃……、まさか……」

「……とっ、常盤台の超電磁砲!?」

気付いた瞬間に気絶した男を抱えて逃げ出す男たち。

「逃げるくらいなら始めから喧嘩売るんじゃないわよ」

多少は溜まっていたストレスを解消できると密かにワクワクして
いた美琴だったが、一目散に逃げて行く不良たちを見て気が削がれ
てしまった。

特にこれ以上この場に留まる理由もないため、先程もらったゲコ太
ストラップをポケットから取り出し、それをニコニコと眺めながら
寮へと帰っていった。

*

「お姉さま！！また不良どもと立ち回ったようすわね！！」

常盤台女子寮に戻り、部屋に入った途端白井黒子が美琴に詰め寄ってきた。

「えっ！？なんでもうそれ知って……、って違うわよ！あれはあいつらが先に喧嘩売ってきたんだから！！」

「権限のない学生が暴れ回ってはいけませんとあれほどわたくし口を酸っぱくして言いましたのに！！」

「わかってるわよ、でも売られた喧嘩は買うのが礼儀じゃない？」

「ぜんぜん分かってもらえてませんの……」

本気で頭を抱える白井をよそに、美琴はシャワールームへと向かう。

と、

「お姉さまったら、またこんな無粋なお召し物を……」

一瞬腰の辺りが涼しくなったような感覚の後、美琴は異変に気付く。

「~~~~ツ!？」

バツ、とスカートの裾を引っ張った。

急にスカートの中が涼しくなったと思ったら、穿いていたはずの短パンが無くなっている。

そして見れば、白井の手に握られていたのは間違いなく美琴が穿いていたはずの短パン。

「そんなもんをテレポートさせるなって言ってるでしょーが!！」

美琴の電撃が短パンを持っていた白井を直撃。

白井の悲鳴が轟く。

しかしその悲鳴はどことなく嬉しそうな悲鳴に聞こえなくもない。

「あッ、お姉さまそこは……!！」

ゾワゾワ、と鳥肌が立つのを感じ、

「この変態があー!！」

さっきよりも強烈な一撃が白井を襲った。

「そういえばお姉さまご存知ですか？第一七学区のホテルが倒壊した事件」

シャワーから出たあと、バスタオルで髪の毛を拭いていた美琴に白井が尋ねる。

「ああ、倒壊させた犯人もわかっていないっていうやつでしょ？従業員たちはみんな無事だったっていう」

「ええ、私たち風紀委員^{ジャッジメント}は現場に呼ばれなかったので詳しいことは分かりませんが、どうやら何者かが能力を使って倒壊させたらいいんですの」

「能力って……、ホテル1つ倒壊させるなんて相当の能力者ってことになるわよ!?」

「この事件は警備員も詳しいことは知らされていないようで、これ以上のことは分かりませんが……」

「なんか怪しいわよね……」

顎に指を添える姿勢で美琴が呟く。

「お姉さま？まさかちよつとそのホテルまで行ってみようかなーとかお思いになっていませんか？」

「!? な、なっていないわよ！ そんなのぜんぜん興味ないし!」

白井の発現にあたふたしだす美琴。

「いいですかお姉さま！一般人がこれ以上詮索するのは危険ですよ！そのホテルにも警備員が立ち入りを禁止していますし、行ってもなにも得られませんわよ!」

「だから行かないってば!!」

私もう寝るから、
と言ってベッドに入る。

白井はしばらく美琴を見つめていたが、それ以上は何も言わず自分もベッドに入って眠りについた。

（能力者による事件……）

白井には背を向けた状態で美琴はその事件について考える。

（第一七学区か……）

Ep.4 「超電磁砲」(後書き)

これからたくさん出てくる予定です(^o^)(

Ep.5 『アイテム』の日常（前書き）

アイテム登場です！

Ep.5 『アイテム』の日常

『グループ』が第17学区で『カスタム』を殲滅した翌日、第7学区のファミレス。

「でね、『カスタム』はグループに殲滅されたんだってさ。」

そう言うのはスラッとしたスタイルに長い茶髪を揺らめかせている
麦野沈利。

「それもう聞いたし、結局グループが手柄全部持ってっちゃうんだ
よねえ。」

「超気に入りませんねグループの奴ら。」
そう会話しているのは金髪碧眼の少女フレンドと見た目12歳程の
少女絹旗最愛。

「あれ？もう言ったっけ？」

あれー？

と言いながら麦野はコンビニで買ってきたのであろうシャケ弁をフ
ファミレスで堂々と広げて食べ始めた。

「……」

何も言わずにただ天井を見続けているのは脱力系少女、滝壺理后。

この4人が所属しているのは暗部組織『アイテム』。

グループと同じ機密レベルで扱われる『裏』の組織だ。

「でさ、今回の任務の話なんだけどね、浜面ー。」

呼ばれたのは見た目不良の青年だ。

「浜面、任務の説明するからみんなの携帯にデータ送って。」

「はいはいわかったよ。」

この少年、浜面仕上が妙に従順なのは以前麦野に突っかって殺されそうになったからだ。

それぞれが携帯に転送された任務のデータを開く。

「？なんですかこの超たるそうな任務は。」

「結局これって私たちが行く必要ないんじゃない？」

口々に文句を言うフレндаと絹旗。

「文句言わないの。それにこの任務なかなか報酬がいいのよ。」

いくら？

いくら？

と麦野の隣でフレндаが興味津々で聞いてくるのでフレндаに耳打ちする。

…ええー！！！！

絶叫するフレンド。

彼女はかなり金に執着するタイプだが、その彼女がこれほど驚愕を露にするとはいれほどの報酬なのだろうか。

「ほらほら、ちゃっちゃんとやって帰りましょ。」

麦野の合図で全員がファミレスをあとにする。

「目的地までの脚がないなあ、あ、そうだ浜面、その辺から適当に車盗ってきて。」

「なんで俺が！？てゆーかお前結構金持ってたろ！？車くらいすぐレンタルできるじゃん！！」

「乗り捨てた時にアシがついたら困るでしょーが。」

抵抗虚しく一瞬で切り捨てられる浜面。

「大丈夫だよ浜面、私はそんな浜面を応援してる。」

ちくしょー！！

半分涙目の浜面はしっかりと車を頂戴した。

「で結局どこまで行くんだったけ？」

「第17学区の倒壊したホテルだつてば。」

今回『アイテム』に与えられた任務は

「倒壊したホテルの回りを嗅ぎ回っているスキルアウトの殲滅、
言わば『グループ』の後始末だ。」

麦野自身最初は全く乗り気ではなかったのだが、その報酬の高さゆえに承諾した。

やはり麦野だって年頃の女子、お金はいくらでも欲しい。

だがこの任務を快く思っていない人物が約1名、浜面仕上だ。

『こいつら俺が元スキルアウトのリーダーだってこと忘れてねーか！？』

浜面はついこの前まで一時的にリーダーだった。駒場が一方通行にやられ、臨時でリーダーになりその最初の任務でツンツン頭の少年に邪魔をされてスキルアウトから出ていった。

スキルアウトは各地に点在しているため浜面の知り合いが今日殲滅される中にいる可能性は低いが、それでも可能性はある。

「だいたい、なんでスキルアウトなんかが倒壊したホテルなんか嗅ぎ回ってんだ？」

運転しながら助手席に座っている麦野に聞く。

ちなみに浜面はこのホテルがグループによって倒壊したことを知らない。

「なんかそのホテルで戦った奴らの武器の残骸集めて能力者用の兵器造る気らしいのよね。」

能力者用の兵器？

以前駒場が使用していたチャフシードのようなものだろうか。

「着いたね。」

目の前には完全に倒壊したホテル、その周りには警備員が貼ったで
アンチスキル
あるう黄色の立ち入り禁止のテープ。

「このホテルの近くで活動してるやつらなんだから…あの辺の路地裏が怪しいな。」

麦野が指差す方はホテルの奥にある一本の路地。外壁にはスプレーで落書きがされており、いかにもな雰囲気が漂う。

「私と絹旗で行くから、フレンドと滝壺と浜面は車で待機ね。」
そう言いつと麦野と絹旗は車から降りて路地裏へと向かった。

スキルアウトが好みそうな場所だ。

細い路地の入口は一般人の侵入を拒むかのような雰囲気醸し出している。

おそらく一般人はもちれん風紀委員などもなかなかここには踏み込め
ジャッジメント
ないだろう。

が、麦野の絹旗は迷うことなく路地裏へと踏み込む。

「超怪しい雰囲気なんですが麦野、これはその辺に実はたくさん
敵が超いるパターンですかね？」

麦野と絹旗の足が止まる。

「絹旗の言う通りみたいだね。」

麦野と絹旗の前には10人ほどのスキルアウト。みんな手にナイフや拳銃を持っている。

「オイオイ姉ちゃんいけねえなあ、こんなトコに入ってきてきちゃあ。危ない目にあっても知らないぜえ？」

いかにも悪そうな笑みを見せるスキルアウトたち。

「麦野、超なめられてますよ。」

「そうねえ、ちよつとム力つくわね。」

「ごちゃごちゃ言つてねえでこつちこいよ！」

スキルアウトの1人が麦野の肩を掴む

：より前にその男を絹旗が思いつきりぶん殴った。

殴られた男は横の壁に激突し気を失った。

「な、なんだてめえらわあ！！？」

「超くだらない質問です。答える必要はありませんね。」

そう言うとき絹旗は一直線にスキルアウトのもとへと走る。

それに反応したスキルアウトは絹旗に向かって発砲するが、

「なつ、拳銃が効かねえ！？」

絹旗最愛の能力は

オフエンスアーマー

レベル4の窒素装甲

体の表面から2cmほどのところで窒素を固め、弾丸を弾いているのだ。

スキルアウトのすぐ前まで詰め寄った絹旗は目の前にいた男を殴りつける。

窒素装甲によって強化された拳の威力は抜群、まとめて3人程がぶっ飛ばされる。

「ダメだ！このガキは強すぎる！あっちの女を狙え！」

スキルアウトは絹旗からただ立っていた麦野へ標的を変更、ナイフや拳銃で一斉に襲いかかる。

「なめられたものね。」

ジュツ！！

と皮膚が焼ける臭いがした。

見ると麦野の前でスキルアウトたちは全身がただれて真っ赤になっている。

「一応手加減はしといてあげたわよ。」

何事も無かったかのように先へ進む麦野。それに絹旗もついていく。

やはりスキルアウトはあれだけではなかったようで、いたるところで襲いかかってきたが瞬殺。

終わってみれば任務時間は15分程だった。

強い。

絹旗は思っ。

さすがは学園都市第4位のレベル5、『原子崩し』。

麦野と1対1で闘って勝てる人間など学園都市にそういないだろう。
そんなことを思いながら絹旗は麦野と共に車へと戻る。

）

車内へ戻ってきた麦野の携帯が鳴る。

「へえ。」

麦野が携帯画面を見て呟く。

「次の任務よ。」

Ep.5 『アイテム』の日常（後書き）

なかなか楽しく書けました

E P・6 第7位の男（前書き）

あいつが登場です。

Ep.6 第7位の男

学園都市の暗部組織『アイテム』が第17学区でスキルアウトを殲滅しているところ、第18学区

第18学区は能力開発関連トップの学校が集まる学区だ。ゆえに、第7学区にある『学舎の園』としてのぎをけずっている。

例としては長点上機学園が有名だろう。

大覇星祭では常磐台を破って2年連続優勝。ほかに霧ヶ丘女学院などが有名だ。

そんな第18学区を歩いている白い特効服のようなものを着た1人の少年。

現在時刻はちょうど昼にさしかかったところ。普通の学生ならば学校に通っている時間なのだが、この少年はいろいろと普通ではなかったりする。

『アレイスターの野郎…、暗部の後片付けが雑すぎるぜ。』

そんな事を考えながら大通りを歩いていると、脇にそれた路地で女の子らしき悲鳴が。

路地を見てみるといかにも不良二人が昼食を食べに出てきたのだろっ少女二人を囲んでいる。

「なーいいじゃねえかちょっとくらい。俺たちいい場所知ってんだよ。」

「や、やめてください…」

女の子二人は今にも泣き出してしまいそうだ。

そんな光景を見て黙っていられる人間ではない少年は路地に入って不良二人に話しかける。

「ダメだ、ダメだなあお前ら。根性ってモンが足りてねえよ。」

いきなり現れた白い特効服を着た少年に一瞬キョトンとする不良二人と女の子二人。

「よってたかって女の子を泣かせやがって。お前らは最近のガマンが足りない子供たちなのか!？」

その言葉にカチンときた不良二人は少年のもとへと近づいていく。女の子二人は心配そうに少年を見つめている。

「女の前だからってあんまり調子に乗るなよ兄ちゃん。痛い目みるぜ?」

「すごいパンチ」

ドッゴオオオン

という強烈な音とともに不良の1人が吹き飛ぶ。

「てめえ何しやがる!!!」

残った不良がナイフを取り出して少年の腹に突き刺した。

ドサッ

と少年の体が地面に倒れる。

…が

「ふううん!!」

ナイフで刺されたはずの少年は何事もなかったように立ち上がる。
とゆーか刺されたはずの傷口には血など一滴もでていない。

「お、お前一体何者なんだよ!？」

「聞かれれば答えよう俺は学園都市第7位のレベル5削板軍覇だ!
!」

どばーん と削板の後ろで戦隊ヒーローのようなカラフルな爆発が
巻き起こる。

「れ、レベル5かよ!!…待てよ、第7位ならレベル5の中で一番
弱いんだよな。それなら俺でももしかしたら倒せ!…」

「すごいパンチ」

「やっぱむりだぎゅうつう!!」

残った不良の1人も吹き飛んでいった。

「あの、ありがとうございます!」

絡まれていた女の子二人がお礼を言う。

「気にすんなよ。俺は困ってる奴らを見過ごせねえだけだ。」

そう言つて深々と頭を下げている女の子二人のもとを去った。

夕方――

削板軍覇は第7学区へとやってきていた。

『この時間は学生が多いなここは。』

この時間の第7学区は学校帰りの学生で人通りがとても多い。
すると、

コンビニの前で不良に囲まれていれ1人の少女を発見。

『やれやれ、今日は根性が足りてねえやつが多いな。』

そう思い削板は少女を助けるためにコンビニへ向かう。

そして

不良たちの悲鳴が響いた。

――不良たちの??

見れば少女は体から電撃をバチバチと発し、周りの不良どもは全滅している。

「オイオイこりゃあすげえ根性もった娘だな。不良どもを倒しちま

うなんてよ。」

削板はその電撃少女に近づいていく。
すると向こうもこちらの存在に気がついたようで、電撃を浴びせてきた。

「うがあああ！」

その場に倒れる削板軍覇。
そしてきつちり3秒後、

「ふつかあああつ！」

電撃を浴びせた少女は目を丸くしている。

「初対面の男にいきなり電撃を浴びせるとはなかなか根性あるじゃねえか。」

「な、なんなのよアンタ。」

「俺は削板軍覇だ。お前は？」

「御坂…美琴。」

「…！なるほどお前があの超電磁砲か。」

『私の電撃をモロに食らってピンピンしてるなんて…あり得ないわ！』

「…ちょっとアンタ。」

美琴の目が獲物を見つけた。

「なんだ超電磁砲。」

「私と勝負しなさい!!どっちが強いかわ黒つけるのよ!!」

その提案に削板は

「いいな、そいつは根性のある台詞だ。いいぜ相手になってやる。」

そして学園都市に7人しかいないレベル5同士の戦いが始まる。

E P・6 第7位の男（後書き）

美琴が参戦。ちゃんと前の話と繋がりますのでご安心を。

E p . 7 超電磁砲 V S 最大原石（前書き）

対決です。

Ep.7 超電磁砲vs最大原石

日も沈み夜の静寂だけが周囲を包む。

ここは以前上条当麻と御坂美琴が勝負した堤防だ。

周りには美琴と削板以外には誰もいない。

「準備はいい？」

美琴がストレッチを終えて削板に聞く。

「おう。いつでもこいよ超電磁砲。」

「なら…お言葉に甘えて!!」

美琴の前髪から青白い電撃が削板に向かって放たれる。

「さっき喰らったやつか、俺に同じ攻撃は…きかん!!」

電撃を直撃しても倒れることなく笑みを浮かべる削板。
信じられないタフさだ。

「やるわね、だったらこれでどう!？」

美琴は周囲の砂鉄を集めてて手元でチェーンソーのように振動する
刀を作り出す。

『さすがは学園都市最強の電撃使い（エレクトロマスター）、応用力が半端ねえな。』

「考えてる時間なんてないわよ!!」

美琴が刀を振るう。

それを間一髪のところまで横に避ける削板。

「甘い!!」

美琴の一言で砂鉄でできた刀はまるで意思をもっているかのように蛇行し削板めがけて向かってくる。

「ぬう！！ここまで操作できるのか！！」

瞬間――

削板が美琴の前から消えた。

「え？…」

「ふう、なかなかいい攻撃だ。」

振り返るとそこには削板軍覇が立っていた。

「アンタ…どうやって？」

「別に難しいことは何もしちゃいない。ものすごい速さで回避しただけだ。」

なんだそのものすごいアバウトな説明は。
と美琴は少々呆れたが今はそんな場合ではない。

「こいつ…、レベル5クラス的能力者ね。」

美琴の目がギラつく。

「根性が宿ったいい目だ。なら次はこっちからいくぞ。」

その瞬間削板は美琴の目の前にいた。

「女を殴る趣味はねえが、真剣勝負は話が別だ。」

拳を繰り出す。

「まず…!!」

美琴はとっさに自分と橋の下の鉄骨に磁場を生み鉄骨の磁力を強くして緊急回避をとる。

削板の拳は空をきり 美琴は鉄骨に激突した。

「ん!? なんだよすげえ技があるじゃねえか。」

「これ自分にも負担かかるからあんまし使いたくないのよね。」

「ふむ、なら次で決めさせてもらうとするかな。」

「私も全力でいくわよ。」

削板は拳を握り、

美琴はポケットから取り出したコインを宙に放る。

『あの構えは、超電磁砲か。』

『あれは、必殺技ね。』

刹那 - -

削板軍覇のすごいパンチこと^{アタッククラッシュ}念動砲弾と、

御坂美琴の代名詞

超電磁砲が激突した。

堤防には半径15mほどのクレーターができている。
その端々に二人は立っていた。

- - 相撃ち。

「どうやら引き分けのようだな超電磁砲。」

「認めたくはないけど、どうやらそうみたいね。」

こいつは強い。

レベル5の私と互角、いやそれ以上かもしれない。

「久々に根性のあるやつと戦えてよかった。またな超電磁砲。」

「あ、ちょっと待…」

そう言ったときにはすでに削板の姿はどこにも見当たらなかった。

「…結局アイツは何者なのよ。」

その日、寮に帰った美琴の制服がボロボロなのを白井が発見し再び
お説教をくらったのは言うまでもない。

堤防を離れ、とあるアパートの裏にたたずむ削板軍覇。

「あれが超電磁砲。なかなか根性ある一撃だったな。だが、超電磁砲1人じゃまだ足りねえ。とにかく今は戦える人材を探さねーと。」

削板軍覇が動き始める。

Ep.7 超電磁砲vs最大原石（後書き）

上手く戦闘シーンを書けたでしょうか……？感想などお待ちしております

Ep. 8 『スクール』（前書き）

今回は少し短いです；

Ep・8 『スクール』

『グループ』、『アイテム』と並び暗部で活動する組織がある。
『スクール』

その活動拠点の1つである第3学区の高級ホテルの1室に、1人の少年と1人の少女がいる。

180cmほどある長身に整った顔立ちの少年、垣根帝督はソファに腰掛け目の前のテーブルに任務の書類を広げている。

「それなんの任務？」

そう垣根帝督に問いかけるのは赤いドレスを纏った金髪の少女。

「ああ、さつきアレイスターのクソ野郎から回された任務だ。」
そう言つて垣根はドレスの少女に書類を渡す。

「……なにこれ？こいつを見つけて処分するのがなんで最高ランクの任務なの？」

ドレスの少女は理解ができない、といった表情で書類を見つめる。

「俺にもよくはわからん。ただそいつはむこうからしたら相当な重要人物らしくてな、まだ居場所すらわかっていないらしい。」

ふーん

とドレスの少女は興味なさそうに書類をガラスでできた机の上に放り投げる。

「でもそっちの任務は後回しだ。まずは先に来てたこっちを片付ける。」

そう言う垣根帝督の手にはさっきとは別の書類。

「下部組織に任せるのも面倒くせーし、俺が直直にやってやるよ。」
そう言う垣根帝督はその部屋をあとにした。

1人残されたドレスの少女は先ほど垣根帝督が持っていた書類に目を向ける。

「要人暗殺リスト」

書類をめくるとそこには数人の人間の名前とデータが記載されていた。

1人1人が学園都市にとって反乱因子として判断された人間。
ドレスの少女はその書類を床に放り投げ、部屋を後にした。

「まずは1人つと。」

ここは第23学区の空港近く。学園都市から脱出しようとしていた反乱因子を処分したところだ。

『あと二人殺らないといけないんだよな。面倒くせー、やっぱ下部組織にやらせりゃよかった。』

地面に転がる死体を横目に垣根は後悔した。 後始末は下部組織に任せ、その場を後にする。

時刻はそろそろ深夜の1時にさしかかる。当然人通りもなく、垣根は1人広い歩道を歩く。
ガサッ

いきなり歩道の脇の茂みから男が二人現れた。
よく見ると垣根がこれから処分していく予定だった二人だ。
どうやら同盟を組んで垣根を殺しに来たらしい。

「……いいね。こっちから出向くのは面倒くせーと思ってたんだ。」

黒服に身を包んだ二人は腰から拳銃を抜き垣根に向けて発砲。弾が尽きるまで打ち続ける。

だが、

「オイオイ、いきなりひでーな。」

垣根の体には傷1つない。

「そしてムカついた。てめーらまとめて惨殺してやる。」

悲鳴をもらす黒服二人は垣根の圧倒的な力によってこの世を去った。

- - 翌日。

昨日とは違う高級ホテルの1室に垣根帝督はいた。

「さて、今日はこの任務だな。」

手にもっているのは最高ランクの任務の書類。

おそらくこの任務は他の暗部組織にも通達されていることだろう。

おもしれえ。

「たとえ前面戦争になっても俺はてめえを潰すぜ、一方通行。」

『スクール』に依頼された最高ランクの任務

- とある少女の殺害

Ep. 8 『スクール』（後書き）

次からレベル5たちが行動開始です！

Ep. 9 暗部への依頼（前書き）

頑張って書きました。

Ep.9 暗部への依頼

『スクール』のリーダー垣根帝督が新しい任務の内容に目を通して
いる頃、他の暗部組織にも同じような任務が与えられていた。

ここは第7学区のとある教師用のマンション。その一室に、『ゲル
ープ』の4人はいた。

「それで？今回の任務ってなんなのかしら？」

結標淡希が土御門に尋ねる。

「今回の任務は今までとはちょっと違うぜい。とある少女を捜しだ
して保護することだ。」

「迷子捜しなわけ？」

結標が面倒くさそうに言う。

「いや、迷子というよりは亡命者だ。」

土御門が3人に説明を始める。

「一方通行や結標はあまり馴染みがないと思うが、これは魔術側か
らの依頼だ。」

- - 魔術。

科学の最先端をいくここ学園都市にとって魔術とはオカルトの類いでしかない。

だが現実には土御門や海原が魔術を行使している以上、一方通行や結標も一応は魔術の存在を認知している。

「ンでその魔術とやらが何でガキの保護を学園都市の暗部に依頼してやがんだア？」

「そうだな、まずは魔術側の話をお前ら二人にも分かりやすいようにしてやろう。」

そう言う土御門はどこから出したのか紙芝居を取り出した。

「オイ待て、てメエどっから取り出しやがった。」

「しかもものすごく絵が下手だね。」

そんな二人の声を無視して土御門は話を始める。

「まず学園都市に亡命してきた少女の名前はソフィア＝ブラウン、スペイン星教に所属していた12歳のシスターだ。」

土御門は紙芝居を一枚めくる。

「ソフィアが学園都市に亡命してきたのは、魔導書の原典に触れてその一部を体内に取り込んだからだ。」

海原の顔つきが変わる。

「その魔導書ってのは何なんだよ？」

「それを手に入れた者は世界を支配できると言われてる代物だ。」

「それを手に入れてなんで学園都市に逃げてくる必要があるのかしら？」

結標が脚を組み換えながら言う。

「魔導書がやばい代物だつて言つたろ。魔導書を持つということはそれだけで大きな戦力になる。」

つまり、

「ソフィアはローマ正教とロシア成教に狙われてるんだよ。」

「なるほど、それで学園都市なわけですね。」

海原が納得といった表情で言う。

「ど奥いうことだ？」

「基本的に魔術は科学に、科学は魔術に干渉しないことになっていく。」

それを聞いて結標が呟く。

「そうか、学園都市に亡命してしまえばそのソフィアの命を狙ってるなんとか教は手を出せないってわけね。」

「そうだ、事実このソフィアが学園都市に亡命してきたのは3日前だが外からの動きに変化は見られない。魔術サイドはこちらに干渉できないんだ。」

「それで俺たちを通してガキの保護ねエ、かつたるい任務だなア。」

一方通行がだるそうに呟く。

すると土御門は言う。

「いや、問題なのはそこじゃない。問題なのはローマ正教とロシア成教がそれぞれ学園都市の暗部に依頼をしていることだ。」

「なんだと？」

一方通行が眉を潜める。

「俺たちに依頼をしてきたスペイン星教はソフィアの所属する宗教だ。当然ソフィアを殺せなんて命令は出じゃない。」

だがな、

土御門が付け加える。

「ローマ正教とロシア成教は違う。ソフィアの持っている魔導書を狙っているわけだから当然生かしておく理由はない。他の暗部には俺や海原みたいな魔術師はいないからおそらく上層部のやつらが上手くそのへんはごまかしてるんだろうな。」

「とゆうことは……」

海原が言う。

「ああ、他の暗部よりも先にソフィアを発見、保護しなければなら
ない。」

『グループ』 4人の顔つきが変わった。

- 同時刻、

第7学区のファミレス。

「前の任務のときに来た新しい任務だけどさ、女を見つけ出して処分することだつてさ。」

「アバウトすぎて超わかりませんよ麦野。もう少し詳しく説明してください。」

むー

面倒くさいなー

あつ、

「浜面ー、またデータみんなの携帯に送って。」

「またかよ…、はいはいわかりましたよやればいいんだろやれば。」

そう言つて浜面は自分の携帯にはいつていた任務の資料を添付してメンバーに送る。

ほどなくして全員の携帯にメールが届く。

…そこには浜面秘蔵バニーちゃんコレクション動画が。

その瞬間、彼女たちはバシンと携帯をたたんだ。

彼女たちは軽蔑と哀れみの眼差しとともに心の扉を閉じ、心の地下エレベーターを降って心の核シェルターへの避難を完了させた。

「待て！！違うんだ！！これは何かの間違いなんだああ！！」

必死で弁解する浜面。しかし彼女たちは、

「浜面……」

「結局浜面ってキモいんだけど。」

「浜面的にはバーニーさんがどストライクなんですか。」

「大丈夫だよ浜面、私はそんな浜面を応援してる。」

ちくしょおお！！

と叫ぶ浜面は今度こそ任務のデータを転送する。

「超外人さんですね。」

「結局外人って何か私とキャラ被ってない？」

被ってねえよ、と浜面は心の中で呟く。

「ふむふむ。名前はソフィア＝ブラウン、スペインからの密入国者か、まずは見つけるところから始めないとね。」

つーわけだから、

浜面、脚用意して。

今度は逆らうことなくスムーズに駐車場から手頃な車を拝借する浜面。

その車に『アイテム』が乗り込む。

「なんか他の組織にも依頼がいつてるらしいからさー、報酬ほしけりゃそいつらも潰しとかないかね。」

彼女たち『アイテム』を乗せた車は、第7学区をあとにした。

『アイテム』がファミレスから車を出したその5分後、1人の銀髪の少女がファミレスの前を通った。

彼女の名はソフィア・ブラウン。

『はやく、はやく探さなくちゃ。』

彼女の探しものは未だ見つからない。

・・・その頃『スクール』の拠点の1つ。

「さて、このソフィアってやつを処分すればいいんだな。」

垣根帝督はホテルの一室でコーヒーを飲んでいた。

「その女ってスペインからの密入国者なんでしょ？それをロシアが上層部を介して学園都市の暗部に押し付けるなんて変な話よねえ。」

赤いドレスを着た少女が紅茶を飲みながら言う。

「向こうの事情なんざ知ったこっちゃねえよ。こっちはこっちの仕事をするだけだ。邪魔するやつは潰す。」

覚悟しとけよ、
一方通行。

メインプランになるのは俺だ…！

「ああそうだ、砂皿緻密にも出るように言っとけ。」

なんで私がー！？

とドレスの少女はぶーたれているが、渋々砂皿に連絡、その後垣根帝督とともにホテルを出る。

『まずはどこから当たるかな。』

学園都市は広い。

いくら暗部でそれなりの地位にいるとしても動かせる人材と時間には限りがある。

『手当たり次第にいくしかねえか…。』

垣根帝督とドレスの少女は下部組織の車に乗り込み、第3学区をあとにした。

「くそっ、見つからねえ。根性か？俺の根性が足りてねえのか！？」
そんなことを道のと真ん中で叫ぶ少年、

削板軍覇。

「そろそろ『裏』の連中も動き出すころだな、チツ間に合わなかったか。」

削板は再び走り出す。とある少女を見つけるために。

御坂美琴は登校途中珍しい人間を見た。

歳は自分より下だろうがとてもキレイな銀色の髪の子。

なんだかとても急いでいるみたいだったが、何かあったのだろうか。

現在時刻は午前8：30

そしてその銀髪の少女、ソフィア＝ブラウンは第7学区にあるとある高校の前に来ていた。

E p . 9 暗部への依頼（後書き）

次回ついにあのツンツンが…

Ep・10 彼女の探し者（前書き）

こんな駄文な小説を見てくれる人がいると思うととてもありがたいです。

そしてあのツンツン頭登場！！

Ep.10 彼女の探し者

1限目の授業開始のチャイムが流れる。

『土御門のやつ、今日は休みなのか。』

土御門が本来いるはずの席を眺めながら、黒いツンツン頭の少年、上条当麻は不思議に思う。

『あいつまた魔術の事件に巻き込まれてるんじゃないやねえだろうな...』

上条当麻は土御門が魔術師であることを知っている。

以前、旅行先で神と呼ばれる力の術式を破壊したり、大覇星祭のときに学園都市に侵入してきた魔術師から学園都市を守ったり。

平凡安心安全な生活を求める上条当麻にとってそんなイレギュラーな事件は大変困るのだが、残念なことに最近はその事件に巻き込まれるのが当たり前のようになってきた。

「はあ...、この平凡な高校生活こそが上条さんのライフスタイルだよなあ。」

そんなことを言いながらふと窓から外を見る。

...なんか校門付近をうろついている銀髪修道服を身につけた女の子、見るからにシスターがいる。

『……インデックスさん?』

心底困ったような表情のまま固まる上条当麻。

「先生え!! お腹がいたいで保健室にいつてあわよくば早退します!!」

ガタンツ と

勢いやく席を立ち、ものすごいスピードで保健室とは反対方向の校門へと向かう。

『ちゃんと家で待ってろって言つといたのになあ……』

上条さんの言うことを全く聞いてくれないのね、諦め顔で校門へ向かった。

- - ここが日本の高校というもののなか。スペインにいた頃は小学校にも通っていなかったため、異国の学校というのはかなり新鮮に感じる。

学校へ行かなくてもスペイン星教内で年上のシスターたちが勉強は教えてくれたから学に問題はない。

- - ここにいるのかな。

「おい。」

声のするほうを見てみると、なにやら黒いツンツン頭の日本人がこちらに向かって走ってくる。

「？」

「…あれ？」

上条当麻とソフィアが対面する。

「インデックスじゃねえ！！よく見りやせんぜん修道服とか髪のがさとか違うじゃん！！」

がつくり肩を落とす上条当麻。

「あの…」

少女が話しかけてくる。

「お前、日本語話せるのか？」

「はい、あの…この街で私捜してる人がいるんですけど…」

「誰だ？」

「…私のお兄ちゃん。」

どうやらこの少女は兄を捜しているらしい。つまりは迷子なのか。でも修道服着た迷子が学園都市にいるのか？

などいろいろ考えこむ上条だったが、思考を一時シャットアウト。

「なら俺が兄貴探しを手伝ってやるよ。俺は上条当麻。よろしくな。」

「

…ソフィア＝ブラウンです。」

上条とソフィアは学校をあとにした。

御坂美琴は退屈な授業を上の方で聞いていた。

今の授業はA I M拡散力場がもたらす自分だけの現実の授業だ。パーソナルリアリティ

美琴は以前、そのA I M拡散力場の集合体である化物と戦った経験がある。

なのでどんな影響を与えるかというのは今話をしている教師よりもよく知っているのだ。

『毎回同じような話じゃ退屈なのよねえ。』

御坂美琴は外を見る。今日はいい天気だ。雲ひとつない空がどこまでも続いている。

- -とふと下の通りを見てみれば、登校途中に見かけた銀髪修道服の少女と、

…その横には美琴のよく知るあのツンツン頭の少年。

『なんでアイツがあの子と二人仲良く歩いてんのよ!』

頭の中でなにかモヤモヤしたものが渦を巻いている。
そして、

「あの、すみません体調が悪いので保健室へ行ってきます。」

「あら、大丈夫ですか？」

上条当麻と全く同じ方法で学校からの脱出をはかる御坂美琴。
この二人はへんところでシンクロしている。

「ちょっと待ちなさいよアンター!!」

常磐台中学の前を歩いていたツンツンに叫ぶ。

「ん？ゲツ…御坂。」

「アンタこんな時間に学校にも行かずになにしてんのよ。」

それは美琴にもバツチり当てはまる質問なのだが自らのことは棚に
上げている。

「いやーなんかこの娘が兄貴を探してるっていうからさ。一緒に探
してやってるんだ。」

御坂美琴の視線がツンツン頭の隣にいる銀髪修道服の少女に向けら
れる。

『いつも連れてるあいつじゃないのね…』

「ソフィア…ブラウンです…。」

「私は御坂美琴、せっかくだから私も兄探し手伝っわよ。」

「いやお前まだ授業中だろこの時間。」

真面目にツッコミをいれてくる上条当麻。

「い、いーのよ別に！！私は学園都市に7人しかいないレベル5なのよ！！」

わけのわからない理由をつけてくる御坂美琴。

「レベル5……」

上条の隣で話を聞いていたソフィア「ブラウンの顔色がかわる。

「？どーしたの？」

「いえっ、なんでもないです。」

「…この人もレベル5…？」

なら、私を狙っている組織の1人なのだろうか。

「でも見たところそんな様子はない…普通の一般人なのかな。」

普通の一般人だしたらこの二人を私に関わらせてはいけない。私のせいで危険が及んでしまう。

こんな親切な人を、

巻き込むわけにはいかない。

「…あ！兄です！！」

いきなり大声で言うソフィア。

「え！？どこだ！？」

ソフィアの向いているほうを向き、探してみる上条当麻だがその通りには何人かの男性がいて誰が兄なのかは分からない。

「ありがとうございます！兄を見つけられました！」

笑顔で上条たちのもとを離れ、向こうへ走っていく。
しばらくして彼女の姿は見えなくなった。

後に残された上条当麻と御坂美琴。

『こ、これってまさか、二人つきり！？』

急なこのシチュエーションに赤面する美琴。

「どーした御坂？顔赤いぞ？」

「な、何でもないわよ！！」

両手を顔にあてて

上条に背を向ける美琴。

「これからどーするかなあ、学校は早退しちゃったし。やることなくなっちゃったしなあ。」

上条は頭を掻きながら言う。

一方美琴はそれどころではない。

二人つきりというまさかの展開に頭からは湯気のようなものまでたっている。

「…もしもし、御坂さん？どうされましたかー…？」

その瞬間、美琴の思考回路は吹き飛んだ。

「よーし行くにゃー。」

電撃をバチバチさせながら上条の首ねっこを掴んでズルズル引きずりながら美琴は歩いていく。

どこへ！？ねえどこへ！？

という上条当麻の悲痛な叫びは美琴の耳には届いていなかった。

凄惨な光景だった。――

ここは第6学区のアミューズメント施設の一画だ。

学生たちが楽しむために作られたアトラクションや機械はことごとく破壊され、周囲には粉塵と残骸が舞う。

「まさかてめーらが駆り出されてとは思わなかったわ。『グループ』。」

「なんだア？ビビってガクガク震えちまってンのかア？」

広大なアミューズメント施設を無惨な残骸に変えた張本人、

一方通行と麦野沈利。

「てめーらはもう銀髪の女を見つけたの？」

麦野が一方通行に問う。

「さアな。」

現在この第6学区に残っているのは『アイテム』のリーダー麦野沈利と『グループ』の一方通行。

そして『アイテム』構成員の絹旗最愛と『グループ』構成員の海原光貴だ。

他の『グループ』と『アイテム』の構成員は車で銀髪の少女を捜しているだろう。

何故こんなことになったのか。
時を10分ほど遡る。

第6学区を移動中だった『グループ』の車に、いきなり攻撃が加えられた。

攻撃が来た方を見ればそこには二人の女の姿。

「あれは…『アイテム』の麦野沈利か!？」
土御門が言う。

「どオやら俺たちに喧嘩売ってやがるよオだぜ。」

一方通行の笑みが凶悪なものになる。

「向こうは二人ですか…、なら自分が出ましようか。」

そう言ったのは海原光貴だ。

「てメエちゃんと働けるンだろオな？」

皮肉まじりに一方通行が言う。

「ご心配なく。仕事はちゃんとこなしますよ。」

海原はボンネットが破壊された『グループ』の車から降り、それに一方通行も続く。

「さアて」

一方通行が杖から手を離す。

「本物の悪党つてヤツを見せてやる。」

『アイテム』の麦野はいきなり一台の車に向かってメルトダウンをぶっぱなした。

「ちょー！いきなりなにしてんだ麦野オオオ！！」

浜面の言葉も聞かず、麦野と絹旗は車から降りる。

「浜面、アンタたちは先に女を捜しにいきな。私らはあいつらを潰す。」

『あの車…、暗部の車だったのか？』

ようやく理解した浜面。

レベル5の戦いに巻き込まれたらひとたまりもねえ！！

急いでハンドルを切り返し、その場をあとにする。

『グループ』のメンバーもその辺に停車してあった車を頂戴し、アミューズメント施設から離れる。

そして、

学園都市第1位と第4位、レベル4と魔術師の戦いが始まった。

Ep・10 彼女の探し者（後書き）

まともなバトルに突入しました。

Ep・11 グループvsアイテム

第6学区のアミューズメント施設、
今はもう見る影もないその施設で、暗部組織同士の戦闘が行われている。

抗争しているのは学園都市第1位が所属している『グループ』と学園都市第4位が所属している『アイテム』。

ドオオオオン！！

アミューズメント施設の一画で轟音が響く。

「そのナイフ、超厄介ですね。」

「あなたのその能力も十二分に厄介ですよ。」

絹旗最愛と海原光貴がにらみ合う。

絹旗最愛は全身を^{オフエンスアーマー}窒素装甲で強化し、海原光貴の右手には黒曜石でできたナイフ、`トラウイiscalパンテクウトリの槍`。

金星の光を反射して相手を攻撃。当たった相手は分解されるというものだ。

今日は快晴。

『金星の光がよく届きますね。』

トラウイiscalパンテクウトリの槍を構え、絹旗へと光を反射する。

「また超光の反射ですか…!!」

反射された金星の光は絹旗に直撃。

…だが絹旗最愛は分解されない。

『本当に厄介ですねあの能力は。』

反射された金星の光を受けて分解されたのは絹旗最愛が全身に纏つ
ていた室素装甲だ。
オフエンスアーマー

室素によって全身を覆われている絹旗自身には光が届かない。

『まずはあの厄介な能力をどうにかしないとけませんね。』

一方海原の攻撃を受けた絹旗最愛。

『超なんなんですかあのナイフは。超能力を使っているふうには見え
ないですし、何か別の力を使っている?』

絹旗最愛は魔術の存在を知らない。

ゆえに、海原の攻撃を理解することができない。
しかし、

『近距離戦闘に持ち込めれば…』

絹旗の得意な戦闘スタイルは室素装甲により強化された肉体での肉
弾戦だ。

「さて、」

まずはあの面倒くさいナイフを超どうにかしないといけませんね。

絹旗は足に力を込めて一気に海原に向かって突進。

一瞬で間合いをつめると海原の持っているナイフめがけて強化された拳を振るう。

『超もらった!!』

だが、

絹旗最愛の拳は空をきる。

「なっ…!？」

海原は今も絹旗の目の前にいる。

だが、そのさらに後ろにも海原の姿が。

「簡単な魔術の一種なんですけど…、まあここ（科学サイド）に住んでいる人間にわかるわけじゃないですね。」

そう言つて海原はトラウイスカルパンテクウトリの槍で金星の光を反射、絹旗を覆っていた窒素装甲を分解する。

「くっ、超むだなことを…!」

すると瞬間、

海原が絹旗の目の前にいる。

『超ありえません!やつはまだ向こうに…』

絹旗が見るとやはり奥にも海原の姿。

しかりすぐに海原の姿が霞んで見えなくなる。

「蜃気楼…！？」

「なかなかいい線いってますね、まあ本質は違っていますが。」

海原は絹旗をナイフで斬りつける。

室素装甲を展開する時間はなかった。

「地面のあちこちに亀裂が入り、周辺のアトラクションは融解していた。」

「チツ、相変わらずデタラメな能力だな一方通行。」

麦野の口調がキツイものになっている。

その視線のさきには無傷で立っている一方通行の姿。

「何だ何だよなんですかア？所詮レベル5つつつてもこの程度なのかよオ？」

「なめてんじゃ…ねえよ！！」

メルトダウンを放つ麦野。

「バカの二つ覚えみてエに同じモンばつかぶっぱなしでンじゃねエよ」

メルトダウナーに対してなんの対処もすることなくただ立ちつくしたまま退屈そうに言う。

一方通行は反射を展開、メルトダウナーを反射し麦野のもとへ正確に向かつていく。

「チツ!!」

横っ飛びでメルトダウナーを回避する。

「惜しいな、自分の技で殺されりゃアおもしろかったのによオ。」

「てめえどんだけ私を舐めてやがるんだ!!」

二人の周囲をメルトダウナーによって発生した熱気がつつむ。だが熱気を反射している一方通行は汗1つかいていない。

「つーかよオ、こつちも暇じゃねーんだわ。さっさと終わらせてガキを探したいわけだ。」

だからよオ、

「…いいかげん楽になれ!」

脚のベクトルを操作し弾丸のごとく麦野へ突っ込んでいく一方通行。

「なめんじゃねえ!!」

麦野はメルトダウナーを連続で放つ。

しかし一方通行は全てそれを反射。そのまま麦野の顔面を殴りつけ

る。

「グッ……！」

麦野の体が水平に5mほどふつとぶ。

「……んだよ、レベル5つつつても所詮は第4位、超電磁砲より弱エえんじゃ話になンねエな。」

首筋の辺りの電極のスイッチを切る。

――瞬間、

メルトダウナーが一方通行を襲った。

電極を切った状態の一方通行は思考する程度の演算能力しかない。

――メルトダウナーが一方通行を直撃した。

絹旗の服が裂かれ、斬られた右肩からは赤い液体が流れ出す。

『超油断してました。むこうの思惑どおりということですか……。』

肩を押さえ海原光貴をにらむ。

彼はすでに絹旗と距離をとっている。

「超面倒な相手とあたってしまったわけですか。」

「私としては早く降参してくれると有難いですね、いくら暗部でも少女を手にかけるのは気がひけますし。」

「超上から目線の発言は撤回してほしいです。」

絹旗と海原が再び距離を縮める。

先に動いたのは絹旗。

一気に海原に詰めより、肉弾戦に持ち込む。

『ここまで早いと魔術を発動できませんし、目標座標がこつ動き回られては光を反射しても意味がないですね…。』

接近戦闘を展開する絹旗と海原。

室素装甲によって強化された拳が海原へと襲いかかる。

「ですがまあ、」

絹旗の拳を最小の動作でかわしながら海原光が呟く。

「私は近距離戦もいけるクチなんですよ。」

ドンッ

と海原光の蹴りが絹旗のみぞおちに入る。

「くっ…」

室素装甲で体表を覆っていてもこの威力、見かけによらず力は強いようだ。

「侮っていました、まさかそのナリで近距離戦闘もいけるだなんて。」

「いやいや、アナタのスピードについていくのがやっとですよ。」
ニコやかにそう言う海原をよそに絹旗が今までとは違う動きを見せる。

「超覚悟してください、本気でいかせてもらいます。」

絹旗の周囲の空気が唸る。

それに海原も気付いた。

『どうやら本気のようなですね。』

海原光貴も迎え撃つため行動を開始した。

Ep.11 グループvsアイテム（後書き）

必殺技やらなにやらが出てくるかもしれませんが、法則など無視した作者のオリジナルについてはご勘弁を……；

Ep.12 グループvsアイテム？

絹旗の周囲の空気が振動する。まるで絹旗の元へ空気がかき集められているようだ。

このアミューズメント施設一帯の空気全てが凝縮されているのかと思えるほどその様子は異常だった。

海原光貴が絹旗との距離を一步、無意識にとる。

『！？』

驚いているのは海原自身だ。

『私の生存本能が危険だと叫んでいるんですね…。』

海原は苦笑し、視線を絹旗へと向ける。

『実際にやってみたのは超初めてでしたが、上手くいったみたいですね。』

海原に見せている余裕の表情とは裏腹に、内心失敗したらどうしようというものすごい不安で押し潰されそうになっていた少女、絹旗最愛。

『でもこれができるなら私の能力も超使い用があるということですかね。』

絹旗最愛の周囲を取り囲んでいた空気が絹旗の意思で動きを止める。

「空気中の7割以上が窒素ということは超ご存知ですよね？」

絹旗が一步踏み出す。

「私は窒素を操る能力者です。言ってしまうえば、超それだけしかできない人間なんです。」

周囲の空気（絹旗が操っているのは空気中に含まれている窒素のみ）が絹旗を中心にして大きな球体を展開する。

「本来私の能力は体の表面から2cmほどまでしか窒素を操作できません。ですが窒素で強化された+2cmを私の体積として演算することでそこから更に+2cm窒素を操ることができます。」

- 演算するたびに複雑になっていくのが超面倒なんですけどね。

「- そして超演算すること250回、半径5mは私の能力範囲です。」

自身の周囲をオフエンスアーマー窒素装甲によって完全武装した絹旗最愛が海原へ攻撃の態勢をとる。

・自らの体積を毎回変更しながらこの短時間でそれだけの演算を―

…

「少しみくびっていたみたいですね…。」

海原光貴は内心後悔していた。

『これは使いたくなかったんですが…』

海原は着ているスーツの懐へと手を伸ばす。

取り出されたのは、

1つの霊装。

先ほどまでのトラウイスカルパンテクウトリの槍とは違う霊装だ。

「これは『ヴァルハラ』の杖」という霊装なのですが…」

取り出されたのは長さ20cm程の古木を削って造ったような杖。

「あなたに言ってもわかりませんよね。」

「超どうでもいい話です。」

絹旗最愛には説明しなかったが、霊装『ヴァルハラ』の杖は使用者の周囲に敵が侵入した場合、有効範囲内全てを真空状態にして相手の戦闘力を削ぐというものだ。（ただし使用者に限っては真空状態の範囲内においても効果を受けることはない。）

- - その有効範囲は、
5 m。

有効範囲が5 mである二人の元々の距離はおおよそ10 m強。

つまり、今の二人の距離はほぼ0に等しい。

二人が距離を詰めるために少しでもだけ重心をさげ、走り出す

- - 瞬間、

爆音が轟き、二人の立っているはずの地面に大量の亀裂が走る。

「! ? 一体なにが! ?」

「これはマズイですね…、ひとまず決着はお預けですか。」

二人は急いでその場から離脱した。

海原と絹旗の戦闘が行われていた場所から500 mほど離れた地点。

麦野沈利は瓦礫の上に立っていた。

服は破れて埃を被り、整った顔の額からは血が流れ、殴られた頬は青黒く腫れている。

ペツ　と口の中に溜まった血を吐き出しながら麦野はメルトダウナ―を放ったほうを向く。

周囲を包んでいる粉塵が晴れば、血まみれの一方通行が横たわっているはずだ。

あの時確かに一方通行は電極のスイッチを切っていた。

能力の使えない一方通行などただの生意気なクソガキでしかない。そうならばレベル5の敵ではない。

しかし、

粉塵の先から現れた一方通行には、傷1つついていなかった。

「な！バカな！！確かに直撃したはずだ！！」

一方通行は何事もなかったかのように言う。

「ああ？直撃してもこの程度の威力しかねえってことなンじゃねエの？」

不適な笑みを浮かべ、一方通行が挑発する。

「てめえ……！！」

怒りの形相を浮かべる麦野。

「確かに電極のスイッチを切ってたはずだ！なのにどうして反射が生きている！？」

「その動きはフェイクだアホが、切ったふりして反射だけを一時的に解除しただけだ。」

「なっ……」

「こんな子供騙しに引っかかりやがって、第4位も形なしだなア。」

そう言った彼は足を大きく振り上げ、地面に振り下ろした。

アミューズメント施設全てを破壊する一撃が放たれた。

一方通行は破壊の中心に立っていた。

今度こそ電極のスイッチを切り、その辺に落ちていたトンファー型を拾い上げる。

「海原の野郎オ巻き込まれてくたばってンじゃねエだろオナア。」

「ちゃんと生きていますよ。」

一方通行が振り返るとそこには海原の姿。

「いきなり現れンじゃねエよ。」

「そんなことより少々やりすぎではないですか？」

「小せエことは気にすんな。」

いやこれはいくらなんでもやりすぎでしょう

と海原光貴が呆れる。

「始末したのか？」

「あなたの一撃のせいでそれどころではなくなってしまいました。」

「こっちもどオやら取り逃がしたみてエだ。伊達にレベル5に君臨してねエってことか。」

「とりあえずここから離れましょう。これだけ大きい騒ぎだと下部組織だけでは処理しきれませんし警備員アンチスキルもくるでしょうから。」

「だなア。」

そう言つて二人は第6学区から離れた。

「超無事でしたか麦野。」

麦野と合流した絹旗が言う。

「まあね、あのバカ野郎のせいで警備員でてきちゃいそうだったから逃げてきたけど…続けてたら危なかったかもね。」

絹旗は一方通行と直接対峙したことはないが、『アイテム』のリーダーであり第4位の麦野をここまでボコボコにする男の存在に寒気がした。

「とりあえずフレンドたちと合流しないとね。」

「超浜面たちをここに呼びますか？」

「向こうは向こうで女捜してるんだし、こっちもこっちで捜しながら合流しましょ。」

「超了解です。」

二人は第6学区を離れ、少女捜しを再開した。

・・・なぜこんな展開になった。

時刻は午前10時すぎ。平日でありながら上条当麻と御坂美琴は第7学区のファミレスに来ていた。

理由は上条も美琴も学校を早退してしまったからなのであるが。

なぜかいきなり御坂の顔色がおかしくなり（上条視点）、

このファミレスに引きずられてきたのである。

「ほんとお前どうしたんだ？さっきからバチバチこっちが危ないんですけど。」

「な、なんでもないわよ!」

真っ赤な顔をして否定されてもまったく効果がない。

『どーしよう…、これってで、デートなのよね…?』

なんかもいろいろな異常が起きている御坂美琴。

そんな状態の彼女だから、窓の外の店のすぐ前を走っていく白い特攻服のようなものを着た少年に気がつかなかった。

Ep.12 グループvsアイテム？（後書き）

感想などいただけると嬉しいです。

Ep.13 「根性なし」(前書き)

削板の性格が大好きです(笑)

Ep.13 「根性なし」

削板軍覇は第7学区を走り回っていた。

「ちくしょう…！　いつたどこにいるんだ！？」

彼は目下人探し中だ。かれこれ2時間以上走り続けているのではないだろうか。

額にはうっすらと汗が滲んでいる。

「だーっ！！　もつと根性いれて探さねえと見つからねえぞ俺！！」

周囲を歩いていったサラリーマンや大学生らしき人たちがその声に驚いて削板のほうを向く。

とそのとき、

削板の目に映った1人の女の子の姿。

「もしかして…あの子か…？」

ポケットから渡された写真を取り出しそこにいる女の子と見比べる。

「間違いねえ、見つけたー！！」

その大声にびつくりしたのか女の子が泣き出しそうになる。

「ああ、すまねえ。」

急いで歩み寄る。

「君がりんちゃんか？」

「お兄ちゃん誰？」

「君のお母さんが心配してるよ。いこうか。」

削板は少女の手をとってファミレスへ向かった。
ファミレスにはりんという少女の母親がいた。

娘がいなくなつて困っていた母親を削板が見かけ、迷子探しを行なっていたのだ。

「本当に、ありがとうございます!!」

母親が頭を下げる。

「次からは目を離しちゃダメだぜ。」

「お兄ちゃんありがとお。」

笑顔でお礼を言う女の子の頭を撫でて、削板軍覇はファミレスから離れた。

「ふう、なかなか根性が必要な人探しだったぜ。」

削板軍覇はあてもなく第7学区を歩き回る。

一応名義上彼は名門、長点上機学園に在籍しているが、学校には一

度もでたことがないし、第一制服をもっていなかった。彼に今まで与えられてきたのは専ら研究対象にされた実験だ。ゆえに学園都市の深い闇にも精通していたりする。

『ん？…あれは』

ふと足をとめる。

どうやら路地に入っただけで、ここからではよく見えないが、銀髪のシスターらしき少女が10人ほどの黒スーツの男たちに追われているようだった。

『あいつらは確か、スクールの下部組織…』

削板軍覇は進行方向を奴らが消えていった路地へと変更する。愛と根性の男の真骨頂が幕を開けた。

「下部組織から連絡があった。どうやら女を見つけたようだ。」
大型バイクを走らせながら『スクール』のリーダー、垣根帝督が彼の運転するバイクに取り付けられたサイドカーに座るドレスの少女に言う。

「第7学区なら近いじゃない。」

「ああ、このままいくぞ。」

「やめてください!!」

黒スーツの男に腕をつかまれてもがく少女。

彼女の周りには何人もの敵、さらに場所も人通りの少ない路地裏だ。

「貴様がソフィア・ブラウンで間違いないな？」

「!!!っ」

「間違いないのだな、よし連れて「待ちやがれ。」

後方から聞こえる声に振り返る黒スーツの男たち。

「てめえら、よってたかってか弱い女の子に何やってんだ。」

ズンッ

と削板軍覇が一步を踏み出す。

「誰だお前は。部外者は引っ込んでろ!!!」
そう言った1人が削板を殴ろうとする。

ゴドンッ!!!

黒スーツの男が壁に激突、そのままめり込んだ。

「確かに俺はその娘のことはなにも知らねえ。てめえらにどんな事情があるかにも興味はねえ。」

だがな、

彼は続ける。

「困ったやつを見過ごして生きるほど、俺は根性なしじゃねえんだよ！……！」

学園都市第7位、
最大原石の削板軍覇が暗部の殲滅を開始する。

追われていた少女
ソフィア＝ブラウンは、信じられないような光景にしばし口をひらくことができなかった。

Ep・14 未元物質vs根性（前書き）

気がつけば掲載から4日でpv10000、ユニーク1200を突破してました！

皆様に感謝です（泣）

ではお楽しみください。

Ep・14 未元物質vs根性

ソフィアは目の前の光景が信じられなかった。

自分はもう助からない、そう思ったとき突然現れた少年。

「やめて」と言いたかった。

一般人を巻き込むわけにはいかない。

だが、

言えなかった。

怖かった。

黒スーツの男たちに捕まったとき、死を間近に感じた。

あの少年は立った1人で10人近くいる敵に向かっていった。

「片付いたか。」

削板の周りには倒れている黒スーツの男たち。

「あなたは、いたい…」

「俺は削板軍覇だ。何に巻き込まれてるかは知らねえが、困ってるんなら手を貸すぜ。」

ソフィアは答えられなかった。嬉しかったのだ。この学園都市で、まだ自分の味方がいてくれたことに。

上条や御坂などの一般人を巻き込むわけにはいかないと自ら突き放

し、味方を作らなかつたソフィアにとって、削板の言葉は涙がでるほど嬉しかった。

「…あり、がとお…。」

「困ったときはお互いさまだ。」

そう言つて削板は彼女の手をとり、ひとまずここから離れようと路地裏から通りに出ようと歩き出す。

「おいおい何だよこれ。」

前方に人影。

バイクにまたがりヘルメットを被っているのでよくわからないが、高校生のようだ。

「…つたくだから下部組織は使えねえんだよ。」

バイクから降りてヘルメットを外す。

「俺がやらなきゃいけねえじゃねえか。」

現れたのは、垣根帝督。

「おいそこの白いの、女を渡せば命は助けてやるぜ。」

「垣根帝督か。残念だがその気はない。」

削板はソフィアを自分の後ろに引き寄せる。

「あ？てめえ俺を知ってんのか。」

「学園都市第2位のレベル5は俺と違って有名だからな。」

「誰だよてめえ。」

「学園都市第7位の超能力者、削板軍覇だ。」

それを聞いた瞬間垣根帝督はニヤリと笑った。

「そうか、お前があのも最大原石、ナンバーセブンの削板軍覇か。会
うのは初めてだな。」

クックッ

と垣根は笑いをこらえきれなかったように笑う。

「おもしれえ、原石の力とやら、見せてもらおうか。」

「そこをどかねえってんなら、容赦しねえぞ。」

第2位と第7位の
戦いが始まった。

その頃バイクのサイドカー。

「私はここで待ってていいのかしら…?」

「行くぜ第2位!!」

削板が一気に突っ込む。

「…速いな」

垣根に反応する余裕はない。音速を軽く超えるスピードで移動する削板はそのまま垣根の顔を掴んで壁にたたきつけた。

壁には大きな亀裂が入る。垣根帝督は亀裂の始点になっていた。誰が見ても必殺の一撃。これを受けて立ち上げられるものなどいないだろうというもの。

だが、

「あー、服が汚れちまうじゃねえか。」

何事もなかったかのように立ち上がる垣根。

「だがまあさすがはレベル5といったところか、なかなか速い。」

あの速度をなかなかと言ってしまう垣根帝督。その体には傷1つない。

「ム力ついた。」

垣根の声色が変化する。

「――絶望しろコラ」

垣根帝督の背中から3対6枚の翼が展開される。

「まさかお前は…妖精なのか!？」

「真顔で言つな気持ちわりい。自分でも似合つてない自覚はある。」

そう言うところ垣根は翼を大きく羽ばたかせ舞い上がる。

削板は上空にいる垣根に狙いをつける。

「すごいパンチ!!」

あえて目の前に不安定な念動力の壁をつくりそれを自らの拳で刺激を与えて壊すことによって、爆発の余波を遠距離まで飛ばす必殺技「念動砲弾」（本人談）

が垣根帝督に襲いかかる。

しかし、そのすごいパンチは垣根に触れる前に翼に激突。翼には傷1つついていない。

「どうやらお前は念動力者の一種らしいな。なら話は簡単だ。念動力で操っているこの世界の力場や法則を変えちまえばいい。」

削板軍覇を見下しながら垣根帝督は言う。

「これが未元物質^{ダークマター}、ここはてめえの知る場所じゃねえんだよ。」

「そんなことは知らん!!」

削板が垣根のいる上空へ垂直にジャンプ、5mほど一気に飛び上がる。

「でたらめな身体能力してやがるな。」

「根性で出来ないことなんざねえ!!」

そのまま垣根に向かって拳を繰り出す。
しかしまたも翼に阻まれ本人まで届かない。

「!？」

削板の拳が真つ赤に火傷している。

「たやすくこの翼に素手で触れないほうがいいぜ。今の翼の温度は100を越えてるからな。」

地面に着地した削板に向かって翼から光線が無数に発射される。
それをギリギリで交わす削板。

『チツ、右手の感覚が麻痺してきやがった。』
それでも彼は右拳を握る。
たった1人の見ず知らずの少女のために。

「そろそろくたばれ第7位。」

急降下してきた垣根の蹴りが削板のみぞおちに直撃する。

「ガハッ……」

その場に倒れこむ削板には目もくれず、奥にいる銀髪修道服の少女に目をむける。

「やあ、俺は垣根帝督。仕事だから君をつれていく。」

さつきと違って少し紳士的な態度をとる彼。

「いや……こないで……!」

ソフィアは垣根から逃れようと逃げ道を探すが、ここは袋小路、逃げ場などない。

「チツ、手間かけさせんなよ、心理定規!」
メジャーハート

女の相手は厄介だし面倒くさい。こういうのは同じ女に任せたほうが効率がいい。

「なによ、いきなり呼ぶから何事かと思えば私は世話係じゃないのよ?」

若干機嫌が悪いドレスの少女。ずっとサイドカーに座っていて腰が痛いことも機嫌の悪さに拍車をかけ、帝督とプチ口論になる。

「あーうるせえな淫売が。とつとと連れていけよ。」

「私はあなたの部下じゃないのよ?」

「お前のほうが能力使えば早いだろうが。」

そう言われたら言い返せない。

しぶしぶドレスの少女は嫌がるソフィアの手を掴み、自らの能力を発動させる。

ソフィアの様子が変わる。

『おかしい…私は今すぐここから逃げたいのに、逃げられない…』

彼女の能力「心理定規」によってソフィアとドレスの少女の心の距離が0になった。

「よし、さっさとバイクのサイドカーに乗せろ。」

「私はどうやって帰るのよ!？」

「知るかよ、走ってでも帰れ。」

なんなのよそれー!

とドレスの少女が喚いていると、不意に垣根の肩に何かが触れた。

「…あ？」

瞬間、垣根の顔に右拳がクリーンヒット、
よろめく。

ジロリと相手を見てみれば、そこには満身創痍の削板軍覇が立っている。

「…心理定規。お前はその女つれてさっさといけ。」

言われたドレスの少女は何も言わずにソフィアを連れて走っていく。
分かっているのだ。

- - 今の垣根帝督がマジ切れ寸前までできていることに。

きっかけは顔への一撃。少しの油断があっただとはいえ、口から血を流している自分と、その相手が許せないのだ。

「…イラついたよ」

垣根帝督から再び翼が展開され、周囲を覆っていく。

「生きて帰れると思うなよ…！」

翼は垣根帝督と削板軍覇の周囲を完全に取り囲み、半球体のような

形状になっている。

「死ね。」

翼によって造られた半球体の内側全てから削板に向け高温の光線が発射される。

全方位からの攻撃に、逃げ場などない。

光線は削板軍覇に直撃した――

展開された翼を解除し、倒れている削板軍覇に目を向ける。

白かった特攻服のようなものは血に染まり黒く焦げ、皮膚は赤くただれているところもある。

「じゃあな、第7位」

そう残し垣根帝督はその場をあとにする。

「……待てよ。」小さく、聞き取るのもやっとなはずのその声には、確かな芯が通っていた。

垣根が振り返ると、

削板が立ち上がるところだった。

「待てよ、未元物質…、あの娘を返せ…」

そう言う彼の口からは血が流れ、意識も朦朧としているのか目の焦点も定まっていないように見える。
当たり前だろう。

垣根帝督の本気を受けたのだから。
しかし、彼は立ち上がる。

「あの娘に何があつたかは知らねえ、でもなあ…、だからつてめえらみたいな暗部に捕まって、勝手な都合で殺されていいわけがねえ！！」

瀕死な体であっても彼の目には確かな闘志。

「見せてやるよ、本物の根性つてヤツを！！大それた理由なんかいらねえ。曲がらず腐らず正面に行く男は、赤の他人だろうが何だろぅが、傷つけられた女の子のために立ち上がることができるんだ！！」

彼は湧き出る力に抗うことはせず、垣根帝督のもとへ走った。

ただ、前へ。

垣根帝督は口元を緩め、笑った。

シンプルなまでの攻撃力と地球上に存在しない理解不能の力が激突した。

E p · i 4 未元物質 v s 根性（後書き）

最後の軍覇の名言をどうしてもいれなかったんです。

Ep・15 役者は揃った

削板軍覇は路地裏で倒れていた。

その服はボロボロで、体のアチコチは傷だらけで出血や火傷も軽くない。

「…ちくしょう。」

削板軍覇は、ただ後悔する。

目の前の少女を助けられなかった、ただその一点のみにおいて。

「まだ、諦めねえぞ…。」

動かすだけで激痛が走る身体を無理矢理叩き起こし、削板は路地から離れ、ソフィアを追う。

――『スクール』リーダー垣根帝督はバイクでドレスの少女を追っていた。

彼の服は右肩のあたりが破れている。

削板軍覇の最後の攻撃によってつけられたものだ。

「…チッ、俺もまだまだだな。」

ドレスの少女はソフィアを連れて自らの足でスクールのアジトへと向かっているため、先に自分が着いてしまっただけは時間のムダだ。ならば一度は行かせてしまっただけがもう一度拾ったほうが効率がよいだろう。

「さて、どこにいるかな…」

「ターゲットを発見した、第7学区だ。」

土御門が結標に連絡をとる。

『あら、それなら私が一番近いじゃない。いいわ、私がいつてあげる。』

「俺もできるだけ急いで向かう。それまでにターゲットに接触してくれ。」

『敵にぶつかったら？』

「迷わず潰せ。」

結標淡希は通話を切る。

視線のさきには資料で見た銀髪修道服の少女ソフィア。

…の隣には暗部組織の人間。

「フフ。」

結標の口元がつり上がる。

「迷わず潰せ、ね。」

一般人も多く通行している第7学区の大通り。
そんな『裏』とは一切関係なさそうな場所で、前触れなく戦闘が始まった。

「浜面！麦野から連絡あったよ！結局ターゲットは第7学区だって
！！」

浜面の運転する車の後部座席で麦野からの連絡を受け叫ぶフレンド。

「第7学区！？ならこっからすぐじゃねえか！よしすぐに向かうた
だし俺は絶対この車から降りないからな！！」

自らの意思を断固主張する浜面。

「結局浜面には期待してないから大丈夫よ。」

もしかしたらちょっとは役にたてるんじゃないかとひそかに思っていた浜面の精神的支柱をへし折るフレンドの一言。

「大丈夫だよ浜面、私はそんな浜面を応援してる。」

励ましたはずのその一言は浜面をさらにどん底へと叩きこんだ。

そんな3人を乗せた車は第7学区を目指す。

『あア！？第7学区だア？だったら最初っからそう言えよなア、さつき通りすぎちまったじゃねえか。』

「すみません、私も今土御門さんから連絡を受けたもので。」

『チッ、まアいい。今からすぐ向かってやる。』

ブツッ

通話が切れる。

「さて、私も向かいますかね。」

海原光貴は走りだす。

「第7学区は一度しらべたはずなんですが超盲点でしたかね。」

「ターゲットも移動してるんだから鉢合わせるかどうかは運よ。まあその運はスクールの連中にあつたみたいだね。」

麦野と絹旗は第7学区につながる通りを歩いていた。
ターゲットの地点までは直前距離で400m程度。

たとえ他の暗部に確保されていようが横取りするつもりなので問題はない。

「いくよ。」

「超了解です。」

何もなかったところからいきなりコルク抜きが肩を貫いた。

「!?!?これは...?」

「あらごめんなさい。」

前から歩いてくる女の姿。

人通りの多いこの場所で1人だけ明らかに『裏』の臭いがする女。

「額に突き刺して終わりにしてもよかったのだけれどね?」

軍用ライトをくるくると回しながら、

結標淡希は笑う。

「...結標淡希!」

ドレスの少女の顔が苦痛と怒りに歪む。

「その少女をこちらに渡してもらえるかしら?」

「バカね、従うとも思ってるわけ？」

「結局横取りになるわけよ。」

突如ドレスの少女と結標の周囲に小型爆弾が投下される。

ドンドンドオオンー！！

連続して巻き起こる爆発の中でなおも会話は続く。

「いいや、その女は俺たちのターゲットだ。」

煙が消えて少女ソフィアの隣に立っていたのは垣根帝督。

「悪いがお前らの任務は失敗だな。」

垣根が笑う。

「いい気になってんじやなねえよカスが。」

結標の立っている後ろから歩いてくるのは麦野沈利と絹旗最愛。

「これはこれは皆さんお揃いで。」

「賑やかだにゃー。」

いつのまにか合流していた土御門と海原が目の中のビルの壁にもたれかかっている。

そのビルの上、

タンツと軽い音をたてて着地して下を見下ろす。

「ハッ、全員集合つかア？」

一方通行が凶悪な笑みを浮かべる。

「見つけたぜ……」

垣根帝督の後ろから現れたのは最大原石、削板軍覇。

役者はそろった。

時刻はそろそろ午後1時。

人通りの多くなるこの時間帯、学園都市の『裏』の組織が『表』を気にせず暴れだす。

Ep.15 役者は揃った（後書き）

感想などお待ちしています

Ep・16 激戦の幕開け（前書き）

楽しくなってきました（作者が）（笑）

Ep・16 激戦の幕開け

『グループ』所属の一方通行、土御門元春、海原光貴、結標淡希。
『スクール』所属の垣根帝督、ドレスの少女。

『アイテム』所属の麦野沈利、絹旗最愛、フレンド。

世界最高の原石、削板軍覇。

学園都市の暗部組織の抗争にさらにレベル5が4人。

事情を全く知らない一般人が集まっているメンバーのプロフィールを聞いたら卒倒すること間違いなしだ。

もはや、第7学区のこの場所、デパートやビルに面した大通りは火の海になるのは間違いない。

「その少女を渡してもらうぞ。」

金髪サングラスの男、土御門がソフィアの隣に立っている垣根に言う。

「力づくで奪ってみろよ。…できるもんならな。」

嘲りの笑みを見せる垣根帝督。

「…そオカよ。」

声が聞こえた瞬間にはすでに垣根帝督の真上に一方通行。
ビルの上からベクトルを操作し異様な速さで飛び降りてきたのだ。

ゴオッ！！

と反射を展開した一方通行と翼を広げた垣根帝督が激突する。
周囲に発生した突風はもはや台風と言っても過言ではないクラスだ。

「待ちきれねえでフライングか？一方通行。」

「悪いナア。つい踏み潰したくなっちまってよオ。」

至近距離でにらみ合う二人。
これが合図となって開戦された。

「来なさいよ。」

結標が余裕の表情でドレスの少女に宣戦布告する。

「後悔するわよ…！！」

ドレスの少女はドレスをたくしあげ、右太もあたりのベルトから小型の拳銃を取り出し、それを結標に向かって立て続けに発泡する。

「私を嘗めてるのかしら？」

結標が軍用ライトを振りながら退屈そうに言う。

瞬間放たれた弾丸は突如結標の前に現れたマンホールの蓋によって進行を妨げられる。

「拳銃なんか私に通用するわけじゃない。」

コルク抜きが宙を舞う。

「…おい、お前らあの娘を殺そうとしてんのか…？」

傷だらけの削板はビルにもたれていた海原光貴に問いかける。

「私たちは保護が任務ですから、彼女を殺す気なんてさらさらありませんよ。」

「そうか…。」

安心したような表情になる削板。

「ですが…」

海原の目付きが変わる。

「彼女たちは処分が目的ですがね。」

正面から歩いてくるのは『アイテム』の麦野と絹旗。

「おやおや奇遇ですね。またお会いするとは。」

「上っ面の嘘は超やめてほしいものです。私のイライラ度が超すごいことになってますから。」

海原は微笑み、

絹旗は蔑み、

二人の鬭いが始まった。

「ってことは私はまずコイツから殺らないといけないわけか。」

ボロボロの削板軍覇を見て麦野がため息をつく。

「面倒だな、早いとこ一方通行のクソ野郎をぶちのめしたいってのに。」

「オイオイ…なめてんじゃねえぞ、原子崩し（メルトダウン）」。

「

「ほう…、ならせいぜい楽しませろよ!」

麦野のメルトダウンがビルを直撃。20階はあろうかというビルが瞬く間に倒壊していく。

このビルはたまたま倒壊予定のビルで中に人はいなかったため死人はでていない。

ただし、飛んできたコンクリートの破片が通行中だった学生や大人たちに襲いかかる。

「てめえ！！一般人を巻き込みやがって！！」
激昂する削板軍覇。

「一般人なんて知ったことか。後始末は下の奴らにやらせればいいんだよ。」

嘲笑する麦野に対して削板は傷ついた拳を握る。

「なんて根性のねえ台詞だ…。いいだろう、俺がてめえに根性たたきこんでやる！！」

麦野のメルトダウナーと削板のすごいパンチが激突し、周囲は粉塵に包まれた。

「結局私の相手はアンタなわけね。」

金髪が金髪に話かける。

「できれば女には手をだしたくないんだが…しょうがないか。」

「何ブツブツ言ってるのか結局よくわかんないけど、自分の周りよく見たら？」

フレンドが得意気に言う。

「…!!」

土御門の周囲の地面や建物には白いラインのようなものが引かれている。

「本来はドアとか焼き切るツールだけど、こんな使い方もできるわけよ！」

フレンドは手に持っていたペンのようなものを落とす。

その先についた導火線のようなものと白のラインが接触。

「…まず!!」

土御門が気づいたときにはもう遅い。

一瞬で爆発は土御門を巻き込んだ。

その光景を少し離れたビルの屋上から双眼鏡を使って眺める浜面、その隣には滝壺。

「…あんなところに行ったら俺秒殺だな…。」

「浜面なら一分は大丈夫だと思うよ。」

「滝壺、それは全くフオローになっていないぞ。」

「麦野たち大丈夫かな…？」

「心配ねえだろ。あいつは第4位のレベル5だし、絹旗やフレンドも簡単にくたばったりしねえさ。」

ちなみに、

浜面は最近暗部に足を踏み入れた人間なので、今あの中で闘っている中にレベル5が4人もいるということを彼は知らない。

- - 圧倒的。

結標はドレスの少女の身体にまた1本、コルク抜きを空間移動させ^{レポート}る。

ドレスの少女の赤いドレスに赤い血が重ねられる。

「これで終わりにしようかしら。」

結標がさらにコルク抜きを空間移動させようとした時、ドレスの少女の前に保護対象であるソフィアが立ち塞がった。

「な!？」

「私の能力を忘れていないかしら? 結標淡希。」

自分の意思に反して立ち塞がるソフィアの顔は恐怖に染められている。

「さあどうする？あなたたちはこの女を保護しないとイケないんでしょう？」

結標の能力は空間移動なので対象との間に壁があろうが移動は可能だが、その座標を演算するにはかなり複雑な式を組み立てなければならなかったため、1つ間違えれば保護対象であるソフィアに移動してしまう恐れがあるのだ。

「く…！」

人質を取られた結標はコルク抜きをテレポートできなかった。

Ep・16 激戦の幕開け（後書き）

ドレスの少女って戦闘能力高いんですね…？

Ep・i7 ソフィア（前書き）

とある？の五和おしぼり作戦アニメで見ました。
五和超かわいい

Ep.17 ソフィア

至るところに小型のクレーターができている。

これらは全てフレンドの化学薬品による爆発でつくられたものだ。

その無数のクレーターの中心に、土御門元春は立っていた。その身体のアちこちには切傷や擦り傷ができている。

いかに運動神経のいい土御門であっても、同時に飛来する爆弾全てを避けきることは不可能だ。

「結局手も足もでない感じ？」

ニヒヒと笑いながらフレンドはもう一発爆弾を投げる。気体爆薬で酸素に触れると爆発するため、小型のビンごと土御門のほうへ投げつける。

「チツ!!」

土御門が横っ飛びした瞬間、ビンが割れて中身が空気に触れる。

訪れるのは――

先程の小さなクレーターをつくった爆発など霞んでしまっほどの大爆発。

ドオオオオン!!

「にゃーはっはっは!!」

高笑いするフレンド。眼前には粉塵。

「…まったく、むちゃくちゃしゃがるなあ…。」

その粉塵の中からアロハシャツの袖が破れた土御門が現れる。

「げっ…。」

「まったく上の連中もムチャ言いやがるぜ。魔術の使えない魔術師に能力者の相手をさせるなんてよ。」

正確には魔術は使えるが使うと肉体へのダメージが大きいため使わない、というのが正しい。

「女の子に手をかけるなんざ男として気がひけるが、任務の邪魔するってんなら仕方ない。」

土御門はポケットから何かを取り出す。

「？」

フレンドがよく見てみるとそれが折り紙で折られた鶴であることに気づく。

色違いの鶴の折り紙が4つ、土御門の手の上に並んでいる。

「地上に生ける者よ、バカどもここに現れ敵を討て（さっさと働け）！！」

土御門がなにか叫んで鶴を4方向ひ投げっていく。

投げられた鶴は土御門から均等な距離を保ち、宙に浮いている。

「悪いが俺にも時間がないんでね、本気でいかせてもらっぜ。」 4

方向の鶴の中心に立ち、フレンドに言う。

「こいつは鶴と俺を起点にして発動する、青の式、って魔術だ。その効果は対象者の周囲を隔離すること。」

そう言う土御門はその4色の鶴の折り紙をフレンドにむかって投げる。

「なんのつm…」

フレンドが言おうとした瞬間、青の折り鶴をフレンドの上空に配置、周囲を赤、黄、緑の折り鶴が囲み透明なアクリル板のようなピラミッド型の壁が形成される。

「なんなのよこれえ!?!」

隔離された空間の中で騒ぐフレンド。

「……!?!」

しかし土御門には聞こえない。

「安心しろ。この仕事が終われば解放してやるからよ。」

そう言う土御門はソフィアがいる所、結標淡希のもとへと向かった。

「超ム力つきますソレ。」

見た目12歳くらいの少女、絹旗最愛が忌々しげに海原の持つている杖を睨む。

「あなたの室素装甲もとても厄介なんですがね。」

ニコニコしている好青年、海原光貴は室素装甲を自分の体積として
オフエンスアーマー
何度も演算を繰り返し、身体から5mまで室素を操っている絹旗に
言い返す。

つい先程のレジャー施設での戦闘は一方通行の尋常ではない衝撃波
によって中断されてしまったが、今はその一方通行もはるか向こう
で戦闘中、邪魔が入ることはないだろう。

「超決着つけさせてもらいます。」

「臨むところです。」

己の出せる最大の力を溜め、二人は視線を合わせる。
そして絹旗は拳を、海原は杖を全力で振るった。

ゴオッ!!!

二人の力が激突し辺り一面に突風を巻き起こし砂埃を舞いあげる。
一瞬にして二人の姿が包まれ見えなくなってしまう。

砂埃の向こうから現れたのは、杖を手にした海原光貴だった。
向こうには絹旗が力を出きったせいか倒れている。

『彼女の周囲は真空状態だったはずなんですが…液体窒素を常備していたんですね。』

余裕そうに見える海原だが実際は肋骨に数本ヒビが入っている。かなりつらいはずだが、海原は倒れている絹旗を担ぎ、その場から移動する。

「こんなところに置いておいたら死んでしまえますからね。」

それは比喻でもなんでもなく、今現在周囲で戦っているレベル5たちの戦闘に巻き込まれてしまえば簡単に命を落としてしまうだろう。

海原は安全な場所に気を失っている絹旗を下ろし、再び戦場へと舞い戻る。

すでに周囲の建物は跡形もなくなっている。ビルだった建物は融解し今やただのガラクタに成り下がり、地面だったはずのアスファルトはめくれあがっていた。

そんな地形にし第4位のレベル5、麦野沈利。

「おらおらちょこまかと逃げてんじゃねえよ!!」

手の平から発射されるメルトダウナーを建物の壁を垂直に走りながら避け続ける少年、第7位のレベル5、削板軍覇。

「避けなきゃ死ぬだろうが。」

彼が建物を走り回るせいでメルトダウナーが建物に直撃しこのような惨劇を生んでいるのである。

『くそつ。原子崩し（メルトダウナー）相手だつてのに右手が使いもんにならねえなんてよ。』

軍覇の右手は数時間前の帝督との戦闘により火傷を負い、とてもじゃないが戦闘に使える代物ではない。

「逃げ回ってばっかいないでかかってきやがれ^{ナンバーセブン}最大原石!!」

麦野の怒号と共にメルトダウナーが削板を襲う。

「このっ!!」

削板は無事な左手でメルトダウナーを思いきりなぐる。

メルトダウナーは方向を変え削板の手前に激突した。

「はあ!?!」

自身のメルトダウナーを素手で弾かれたことに驚愕する麦野。あれ

は素手なんかで触れるものではない。触ったが最後、一瞬で融解し蒸発するしかないのだ。

それを、やつは素手で殴りつけた。

「…おもしろいじゃない。」

さらに凶悪な笑みを浮かべ削板を睨む麦野。

それを察知した削板も攻撃態勢に移る。

麦野は両手で真つ白な光のような球体を形成。メルトダウンを限界まで圧縮しているのだ。

一方軍覇は建物から地表へと降り、左手を後ろに引いて正拳突きのような構えをとっている。

「くたばれ!!」

「すごいパンチ!!」

レベル5同士の必殺技が二人の中心あたりで衝突。
瞬間、空気が震えた。

「何だ何だよ何ですかア?逃げ回りやがってビビってンのかよオ!」
「?」

「バカかお前、ターゲットは俺たちの手中にあるんだ。ムリにてめえの相手なんざする必要ねえんだよ。」

麦野と削板からやや離れた位置でベクトルを操作している第1位のレベル5、一方通行と白い翼を背中から生やし攻撃を防いでいる第2位のレベル5、垣根帝督。

彼らは先程からずっとこんな問答を繰り返している。

「俺に勝てねエからって逃げてンじゃねエよ!!」

腕の動きのベクトルを操作し異様な筋力で垣根を殴りつける一方通行。

「なんで俺がてめえから逃げねえといけないんだよ!」

それを翼で防ぐ垣根帝督。

このままの状態では埒があかない。そう判断した帝督は一方通行と戦うことを止めドレスの少女のもとへと向かう。

「待ちやがれ!」

一方通行も後を追った。

「どうしたのかしら? テレポート、しないの?」

目の前にソフィアを立たせ、悠然と振る舞うドレスの少女。

「くっ…」

結標淡希は限りなくレベル5に近いレベル4の空間移動能力者だ。テレポーター

彼女はどこそジャッジメントの風紀委員とは違い、直接物に触れなくてもテレポーターさせることができる。

しかしそれゆえに彼女は座標位置の演算を移動前と移動後同時に行わなければならないためかなり高度な演算を用いなくてはならない。

それは少しの演算ミスが大惨事を招くことを意味している。

よって膠着状態。

ソフィアを盾にしたドレスの少女は後ろにいるが、うまく隠れているため座標位置の特定が不安定だ。

そんな状況でテレポートを行うわけには行かなかった。

「結標!!」

結標が振り返ると土御門が走ってきた。戦力になるかと思っただが彼の腹部からはひどい出血が見られる。

「土御門、アナタ…」

「ニャー魔術を使っちゃった副作用みたいなものだ。気にする必要はない。」

そうは言ってもその量は決して少なくはない。包帯をまいて一応は止血してあるが包帯からはすでに血が滲んでいた。

「そんなことよりあのシスターだ、はやく回収しないとめんどろぞ。」

「それがあの女の能力のせいで手間どっているのよ。」

土御門と結標はソフィアとドレスの少女の方を見据える。

「何人でも結果は同じよ？」

クスクス笑いながら土御門たちを侮蔑する。

「二人と三人は違うと思いますが？」

背後から現れた海原光貴に一瞬氣をとられるドレスの少女。それを土御門は見逃さなかった。

「結標！やれ！！」

瞬間結標は軍用ライトを降りコルク抜きをテレポート、ソフィアは土御門が今の一瞬で回収したため座標を誤ることはない。コルク抜きは的確にドレスの少女の右肩を貫いた。

「くうう！」

右肩を押さえ膝をつくドレスの少女。彼女自身の戦闘能力はそれほど高くないようだ。

土御門に救出されたソフィアは未だに恐怖で固まってしまっている。それは目の前であれだけの戦闘が行われれば恐怖するのは当たり前だろう。

その恐怖を取り払うため、ソフィアに向かい土御門は言う。

「安心しろ。俺たちは見方だ。スペイン星教からの依頼でお前を保護しにきた。」

「…スペイン星教が…？」

ようやく話すソフィア。スペイン星教と聞いて少しは落ち着いたのだろうか。

『スペイン星教のみんなが…』

そう思うソフィアの顔はなんだか嬉しそうだ。戦闘真っ最中のこの場所には似つかわしくないが。

『みんな…私を助けてくれるんだ…』

彼女はゆっくりと瞼を閉じ、やがて透明な滴が頬を伝った。

Ep・i7 ソフィア（後書き）

次はソフィアの過去編です。

Ep. 18 ラプンツェル（前書き）

ソフィアの過去です。

Ep・18 ラブンツェル

暗く冷たい闇の中。彼女が幼少時に育った場所は、まさにそんな場所だった。

彼女には生まれつき両親がいない。物心つくころすでに1人。あてもなく毎日スペインの路地裏をさまよい歩き、その日その日を生きることに精一杯。

ソフィアにはこの世界が地獄に見えた。

何故私は此処にいるのだろうか、私は生きている価値なんてあるのだろうか。

そう考えていたとき、1人のシスターがソフィアに手を差し伸べてきた。

ソフィアには彼女が天使のように見えた。

彼女の名は

ノゼ＝オリフィアン

スペイン星教所属のシスターであり、のちにソフィアが姉のように慕う存在である。

ノゼはソフィアをスペイン星教のもとにおくことで彼女をあのだ獄から救った。

ソフィアもまた、救われたことで少しずつ笑顔を取り戻していった。

それから毎日を楽しかった。ノゼはソフィアより4つ程上なので勉強や基本的な礼儀作法などを教えてもらったり、やがてできた同年代の友達と一緒に遊んだりシスターとしての夢などを語ったり毎日がソフィアにとってかけがえのない時間だった。

- - それから5年、ソフィアが12歳になったときだった。

「ねーノゼ、それはなに？」

何人かのシスターと共に強張った表情で包みを運んでいたノゼにソフィアは尋ねた。

「ああ、なんでもないわよソフィア。さ、向こうで勉強してらっしゃい。」

軽くあしらわれたソフィアは少しムツとしていたがおとなしく礼拝堂に戻り友達と勉強を始めた。

それを確認したノゼは再び歩み始め、普段は立入禁止の地下へと向かう。

- - それを礼拝堂の入口からこっそり見ていたソフィア。

『あそこって司教様が立入禁止にしてる地下の倉庫だよね…、ノゼ何しにいくんだらう。』

その日のよる、ソフィアは数人の友達と地下倉庫へ向かった。普段は厳重に鍵がかけられているはずなのだが、今鍵はかかってい

なかった。

意を決して扉を開ける。

倉庫内に入ってみるとそこには古めかしい本や地図、木箱などが左右の棚に置かれていた。

その棚の一番上、

ソフィアたちの身長ではギリギリ届かないその場所に、昼間ノゼが持っていた包みが置かれていた。

この位置からではよく見えないがどうやら一冊の本のようで、それを包んでさらに回りを何かの札で縛っている。まるで封印でもされているかのようにだった。

「ソフィア、あれ？」

友達の1人がソフィアに確認をとる。

「うん、ノゼが持ってたのはあの包みだよ。」

1人の身長では届かないので2人でソフィアを持ち上げるという作戦にでる。

そしてソフィアは目の前の包みに手をのばした。

- - その手が包みに触れた瞬間、

包みの周囲に貼られていた札は全て弾け飛び、包みから一冊の古めかしい本が現れた。

「なんだろう…？」

二人に地面に下ろしてもらい、ソフィア手にもっていた本に目を落とす。

「なにになにー？」

その本に興味をもった友達の1人が何気なく本を開いた。

「ギャアアアアアア！！！」

突然本を見た少女はこの世のものとは思えない声を発して絶叫する。目や口からは血が溢れている。

「リーサ！！どうしたの！？！」

もう1人の友達がリーサと呼ばれる友達の異変に気づいてかけよっていく。しかし、その友達もふと視界にその本のページをいれてしまった。

「アアアアアアア！！！！！」

再び地下に響く絶叫。彼女も先程のリーサと同じく目や口から血を流し、頭を抱えてその場に倒れこんでしまう。

それを呆然と眺めることしかできないソフィア。

「何…、何が…？」

涙を流しながらその凄惨な光景を見つめる。そこでソフィアは先程

の本に目を向ける。

リーサはあの本を開いてあんなことになった。

- - 怖い。

きっと私もあんなふうになってしまっただろう。

でも、私には責任がある。リーサたちだけが不幸だなんてイヤだ。
シスターは皆に平等でないといけないから。

おそろおそろ本を手にとり、そして本を開く。

瞬間、ソフィアの頭に雪崩のように流れこんでくる大量の内容。なかみ 彼女は
この本が大昔の童話だということを悟る。

- - 「ラプンツェル」。

日本名では「髪長姫」

この童話は長年子供がいなかった夫婦がようやく子供を授かるが、
妻が家の隣の魔女の庭に成るラプンツェルがどうしても食べたくな
ってしまい、夫が魔女のもとへ向かい事情を説明すると魔女は好き
なだけ食べるという、ただし生まれる子供をよこせと条件をつける。
しかたなく生まれた赤ん坊を魔女に差し出すことで妻はラプンツェ
ルを食した。

引き取られた赤ん坊は魔女の塔に幽閉された。

それから何年もたったある日、森を歩いていたある国の王子が美しい歌声を聞きそれが魔女の塔の最上階から聞こえることを知ると壁をよじのぼって歌っていた少女に出会う。

その少女はとても美しい長い髪をもっていた。

二人はやがて恋に落ち、魔女に隠れて会うようになるが、ある時それが魔女にばれて少女は髪を切られ捨てられてしまう。そのことを知らずに会いにきた王子は事実を知りショックをうけて塔から飛び降り失明してしまう。

しかしやがて二人は再開し王子の目はよくなり少女の髪もののび幸せに暮らす、という物語。

その物語に隠された本当の意味、感情が1度に大量にソフィアの頭に流れこんでくる。

「うぐああああ!!」

頭が割れる、全身が粉々になる、比喻ではなく本当にそれくらいの痛みがソフィアの体内を駆け巡る。

「あゝ あ!! があああ!!」

その叫び声を聞き付けた修道院内にいたシスターたちがバタバタと地下に降りてくる。

降りてきたシスターたちは倉庫内の光景を見て絶句した。

「ソフィア! ソフィア!!」

他のシスターたちを掻き分けてノゼがソフィアのもとへと走りよつ

てくる。

痛みと悲しみで頭の中をぐちゃぐちゃに掻き回されたソフィアは深い思考ができなくなっていたが、ノゼが名前を呼びキツく抱き締めてくれていたことは感じられた。

ノゼの頬を伝う涙がソフィアの顔に落ちると、それが合図であったかのようにソフィアは気を失った。

ソフィアの目が覚めるとそこは修道院内の治療室のベッドの上だった。

ベッドの脇にはずっと看病してくれていたのだろうかノゼが覆い被さるようにして眠っている。

ソフィアがなんとはなしにノゼの頭を撫でると彼女は目を覚ました。

「…ソフィア」

ソフィアが生きていると実感したノゼはソフィアを抱き寄せた。

「よかった…、本当によかった…!!」

涙を流しているノゼにつられてソフィアも涙をこらえられなかった。

「ノゼ…ごめんなさい…」

二人して涙を流し続ける。泣き声はしばらく止むことはなかった。

聞くところによると私は1週間生死の狭間をさまざまに迷っていたらしい。

「ノゼ…、あの本は一体なに…？」

見ただけで精神が破壊されてしまいそうなほど本。普通のものであるはずがない。

「…あれは、魔導書よ。」

言い淀むノゼ。

「あれは、普通の人間なら1文字見ただけでも精神は崩壊し廃人になるわ。それほどのものなの。」

事実、ソフィアより前に魔導書を見た二人は精神が完全に破壊されただけの人間になってしまったそうだった。

「…でも、私は平気だよ…？」

確かに見たときはとてつもない苦痛を味わったが、今はなんともない。

「それは魔導書があなたを受け入れたからなのよ…。」

悲しそうな表情で告げるノゼ。

「あなたはあの魔導書、「ラプンツェル」を見て頭の中に様々な感情が流れこんできたはずだわ。それを理解したことで魔導書はあなたを所有者として認めたのじゃないか。」

ソフィアは思い出す。「ラプンツェル」を目にして頭に流れこんできたのは狂ってしまいそうなほど邪悪で凶悪な憎しみと怒り、そして触っただけで砕けてしまいそうなほど儚げな悲しみ。

「魔導書というのは存在するだけで兵器なの。それを人間が所持して自由に扱えるのなら国なんて簡単に滅びるわ。」

ノゼの言葉に何も言えないソフィア。彼女に魔導書の使い方などわかるはずもないが、所持しているだけで強力な戦力になるということとはなんとなくわかった。

「あなたが眠っていたこの1週間であなただけが魔導書の所有者になったということはすでにローマ正教やロシア成教に伝わっているわ。あなたはここから逃げなさい。直にこの修道院も攻撃されるわ。」

「そんな…、逃げるってどこへ!？」

「イギリス清教の最大主教アイクヒショップの繋がりで学園都市への亡命を行ったわ。あなたを受け入れてくれるそうよ。」

学園都市は科学の街。魔術国家であるヨーロッパ諸国とは不観不渉の関係を築いているので、そこに逃げてしまえばソフィアが命を狙われることはないだろう。

だがソフィアにとって重要なのはそんなことではない。

「また私は1人ぼっちになるの!？」

涙ながらに訴えるソフィア。
この修道院もいずれは攻撃されるとわかっていてノゼはここに残ると言っているようなものだ。

「この修道院は私が育った場所だから…簡単に離れられないわ。」
残念そうな笑顔を向けるノゼ。
ソフィアは再び涙が溢れる。

「あなたは生きなくてはダメよソフィア。たとえ今が辛くても、きっと仲間ができて、楽しい毎日が未来にあるはずなんだから。」

自分の服にしがみついて泣いているソフィアの頭を優しく撫でながら、姉ではなく母親のような仕草でソフィアに語りかける。

その時、
バアアアン！！

修道院を守っていた結界が破られる音がした。おそらく敵の攻撃によるものだろう。狙いはもちろん魔導書の所有者となったソフィアだ。

「さあ、行きなさいソフィア。荷物はまとめておいたし、修道院の近くの運河までいけば私たちの協力者があなたを学園都市に連れていてくれるわ。」

「ノゼえ…」

未だに泣き止まないソフィアを見てノゼは苦笑する。

「泣き虫ねえソフィア。そんなんじゃないつまでも子供扱いされちゃうわよ？」

「ノゼだって、泣いてるくせに。」

「え？」

自分では気づかなかったようだがノゼも瞳から透明な液体が溢れていた。

「はは…私もまだまだ子供ね。」

ノゼは笑い、最後にソフィアを抱き締めた。

「…頑張って生きるのよ。生きていれば、いつか必ず会えるから…。」

「うん…！」

そう交わすとソフィアは治療室をでて他のシスターに案内されてまだ敵に気づかれていない裏口から修道院を出る。

ソフィアは決めていた。決して振り返らず、前だけを見て歩き続けると。

ノゼで約束したのだ。生きていれば、必ず会えると。

ソフィアは修道院から出て運河まで走る。

その途中。

ゴオツ！！

いきなり背後から熱風が襲いかかってきた。

思わず振り返ってしまうとそこには真っ赤な炎に包まれ豪快に燃え盛る修道院。

「ノゼー！！！！」

ソフィアの悲痛な叫びが無情にも空に吸い込まれ、そして消えていった。

Ep.18 ラプンツェル（後書き）

次から戦闘に戻ります。

Ep. 19 何度でも（前書き）

短いです（T | T）
ご了承ください；

Ep・19 何度でも

ハッとしてソフィアは我に帰る。

ノゼたちのことを思い出していた。あの燃え盛る修道院の中にいても、きつと脱出して生きている。

生きていれば、必ず会える。

ソフィアはこの言葉を信じてこの学園都市までやってきたのだ。

ノゼが必死になって救ってくれた私の命を、私自身が簡単に諦めていいはずがない。

『私の代償は、なにがあっても生きること！』

「あなたは、私を殺すつもりはないんですね？」

「ああ、俺たちはお前の所属していたスペイン星教から依頼で動いているからな。お前を守ることが俺たちの任務だ。」

土御門は抱き抱えていたソフィアの質問にキツパリと答える。

「そうですか。安心しました、もう大丈夫です降ろしてくださいさあ。」

今になって気付いたがソフィアは若干恥ずかしそうにしている。それもそのはず、土御門がお姫様抱っこなるものを自然にやっていたからだ。

「ああスマない。」

だが土御門はこれといって気にしているふうではない。

この男、真剣なときは超真面目になるのだ。

土御門に降ろされたソフィアは力強く言う。

「私は絶対に生きぬきます！ですがあなたたちの力が必要なのです、どうか私を守ってください！！」

この切実な願いが届かないやつは、この『グループ』の中にはいない。

「もちろんだぜい。」

「あなたを守るのが我々の任務ですから。」

「ま、報酬さえもらえればいいのだけれどね。」

土御門、海原、結標の3人はソフィアを囲うように陣形を組む。

一方ソフィアを奪われてしまったドレスの少女。

「っ…、油断したわ…。まさか私の能力を破るなんて。」

肩に刺さったコルク抜きを抜きながらドレスの少女は忌々しげに唇を噛む。

このままでは任務は失敗だ。そんなことになるわけにはいかない。

「なんだよ淫売、ターゲット回収されてんじゃねえか。」

突如現れたのは垣根帝督。

「これで俺と戦う理由が出来たンじゃねエかア？」

土御門たちの前に降り立つ一方通行。

「そうみてえだな。チツ面倒くせえ、潰させてもらっぜ一方通行。」

「やれるモンならやってみやがれ。」

今度こそ、学園都市が誇る超能力者の頂上対決が始まった。

麦野は両手から限界まで圧縮された原子崩し（メルトダウン^{アタッククラッシュ}）を放ち、削板は左手で渾身の念動砲弾をぶっぱなす。

その二つの激突が生んだのは周囲の建物全壊という恐ろしいものだった。

自分の力にリミッターさえかけなければ超電磁砲など瞬殺できてしまっほどの破壊力をもつメルトダウンと科学最先端のこの学園都市であっても未だに解明できない原石の力の念動砲弾がぶつかったのだ。

当然と言えば当然の結果なのだろうが、周囲の被害は甚大だ。

「チツ、むちゃくちな野郎だなナンバーセラン最大原石。」

麦野の服は至るところが破れ、頬からは血がでていた。

自分の限界ギリギリまで威力を高めたせいか両手とも火傷したように赤くなっている。

「メルトダウンをぶっぱなすお前に、むちゃくちやだとか言われたくねえな。」

削板もまた無事ではない。服はあちこちが溶け、無事だった左手の拳も今や使い物にならないだろう。

だが、

それでもなお、

根性の男削板軍覇は両拳を握る。

痛みを感じていないはずがない。その証拠に削板の顔は苦痛に歪み、額には大粒の汗が滲んでいる。

それでも、一步を踏み出す。

「なっ……!？」

自分よりも深いダメージを受けているにもかかわらず、こちらに向かってくる削板に思わず一步後退りする麦野。

「お前にはわかんねえだろうがな…」

また一歩、重い足を地面に踏み出す。

「来るな…！」

「お前にだって…大切なものがあつたはずだろうが…」

また一歩、着実に麦野との距離を縮めていく。

「何度倒れようが、何度踏み潰されようが、たった1人の女の子を守るために俺は根性で何度でも立ち上がる…!!」

さらに一歩、削板の拳が届く距離に麦野がいる。

「来るなああ…！」

メルトダウナーを放つよりも前に、麦野の顔面に左ストレートが炸裂した。

Ep. 19 何度でも（後書き）

そろそろ話はクライマックスです。

Ep.20 そして平穩は訪れる（前書き）

クライマックスです。
頑張って書きました。

Ep・20　そして平穩は訪れる

暗部たちの戦闘が行われている場所より少し離れたビルの屋上。そこに『アイテム』のメンバーである滝壺理后と下部組織の浜面仕上はいた。

「信じられねえ。あの麦野沈利がやられちゃった。」

双眼鏡を片手に持ちながら浜面は啞然とその光景を見ていた。麦野沈利は学園都市が誇る7人の超能力者の第4位だ。浜面も身をもつてその強さや恐ろしさを知っている。

だからこそ、彼女が誰ともわからない男にやられた瞬間は何が起きたのか分からなかった。麦野が地面に倒れて初めて第4位が倒されたという事実を理解することができたのである。

「麦野を拳で倒しちゃうなんて、あいつは一体何者なんだ…!?!」

「…確かあれは最大原石だよ、はまづら。」

隣で見ていた滝壺が久しぶりに口を開く。

「ナンバーセブン最大原石？　なんだよそれ。」

聞き慣れない言葉に首を傾げる浜面。

滝壺はゆっくりながらも丁寧に説明してくれる。

「今麦野を倒したのは、麦野と同じレベル5。」

「なにぃ！？それじゃあいつも超能力者なのかよ！！」

今まで知らなかった事実には驚く浜面。滝壺はなおも続ける。

「あの人は自然に能力を開花させた原石。」

原石？とまたもや首を傾げる浜面だったが、滝壺はもう話すつもりはないようだ。ただひたすらに雲一つない青空を見つめている。

「…麦野を倒したのが同じレベル5の人間ならまあ納得いくけどよ、まだ残ってるやつがいるじゃねえか。」

浜面は麦野たちがいた方向とは別方向を見る。

そこには白髪の少年とホストのような少年が戦っている。

こちらもどう見てもレベル4程度の實力ではない。それに白髪の少年には浜面もなんとなく見覚えがあった。

「まさか…！」

浜面は知っていた。白髪の少年が学園都市の頂点であることを。

土御門、海原、結標とドレスの少女はその場から動こうとはしない。

下手に動けば彼らの戦いに巻き込まれてしまうからだ。

「どうした一方通行、ビビって攻撃できねえのか、」

土御門たちの遙か上空を翼をはためかせ移動する垣根帝督。

「安心しろ、何もかも終わらせてやるからよオ。」

ベクトル操作によって垣根に急接近する一方通行、その腕が垣根帝督の翼に触れる。一方通行の能力、ベクトル操作によってその翼は簡単にもぎ取られる。

…はずだった。

「あア？」

一方通行が訝しげに顔をしかめる。一方通行が触れたはずの翼は、以前と変わらずそこに存在していた。

『俺の能力が効いてねエ？いや、発動しねエ？』

そんな思考をめぐらせる一方通行に対し、垣根帝督は笑みを浮かべながら言う。

「ククク、反射が効かなくて動揺してんのか？」

垣根は身体を捻り一方通行に回し蹴りを放つ。反射を展開している一方通行に対してそれは自殺行為である。

が、

「ガッ…！？」

反射を展開しているはずの一方通行のみぞおちに垣根帝督の蹴りがクリーンヒットする。

その威力に逆らわず態勢を立て直す一方通行。垣根帝督は依然として空中に浮遊している。一方通行は信号機の上に着地し垣根を見上げる。

「そオか、それがてめエの能力だったな、三流。」

「今頃思い出したのかよチンピラ。」

一方通行と垣根帝督の視線が交差する。

ジュツ

と一方通行の頬から肉の焦げる臭いがした。

「チツ、俺の反射が通じねエのか。」

「今のは回折だ。」

垣根帝督が一方通行を見下しながら告げる。

「これが“未元物質”、ここはてめえの知る場所じゃねえんだよ。」

これが学園都市第2位の垣根帝督の能力、“未元物質”^{ダークマター}。その名の通りこの世に存在しない物質を創り出す能力。

まだ見つかっていないとかそんなレベルではなく、本当に存在しない物質を創り出すのだ。それは垣根帝督の脳内によって生成される。垣根はこの能力を応用して一方通行の反射を破ってみせたのだ。

一方通行がいくら核ミサイルを受けて傷一つつかないとしても、全てを反射しているわけではない。

空気を反射してしまえばいくら一方通行と言えど生きていられない、おそらく奴は無意識のうちに自分にとって有害なものと無害なものを分け、その有害なものだけを反射しているのだろう。

- - ならば、俺にも勝算は十分にある。

反射を破った以上一方通行は反射を使わない。いや、効かないとわかっていてのだから使わない。

ただのベクトル操作だけならば俺でも対処できるはずだ。

垣根帝督がそう考えていると、不意に一方通行がそれを遮るように言う。

「チンケな能力だなア三下。俺の反射を破ったくらいでイイ気になりやがってよオ。」

一方通行の笑みがより凶悪なものへと変わっていく。

「反射が使えねえお前なんざただのヒョロイもやしだろうがよ。」

なおも余裕の姿勢を崩さない垣根に対し、一方通行は呆れたように言う。

「だからてめエは三下なんだよ、てめエがこの世にない物質を使って俺の反射を通り抜ける物質を創り出してゐるってんなら、それも含めて演算し直せばいいだけの話だ。」

飄々と言つてのける一方通行だが、どんな物質かわからない状態で演算し直すなど常人にできるような事ではない。

「…できるって言つのかよ。」

明らかに不愉快そうな顔で垣根が言つ。

「三下の能力なンざいくらでも演算し直せんだよ。」

ブチッ

と垣根の額から血管の切れたような音がした。

「やってみろチンピラ!!」

垣根は3対6枚の翼から陽射しのような光線を一方通行に向け多数放つ。

この時決して垣根帝督は一方通行に対して慢心があつたわけではない。

事実、放たれた6発の光線はそれぞれ違う物質を創りだして混ぜ込むことで必ず一方通行にダメージを与えられるようにしていた。

しかし、

一方通行はその全ての光線を反射した。

「なっ……!？」

いくつか反射されることを前提に攻撃していた垣根だったが、まさか全て反射されるとは思っていなかった。

「何驚いてやがる。まさか今のがてめエの全力だったってのかア？」

一方通行の余裕の表情が垣根の神経を逆撫でする。

「……ナメてんじゃねえぞチンピラがああ!!」

急降下して一方通行との距離をつめにかかる垣根。それに対して一方通行は、

「だから三下だっつってんだよ。」

頭を掻きながらやる気のなさそうな声で言っただかと思えば、

「てめエに本物の悪徳ってヤツを教えてやるよ。」

口元を大きく吊り上げ笑う一方通行。
本物の悪魔がそこにいた。

「一方通行ああ!!」

瞬間、垣根帝督の純白の翼と、一方通行の拳が交差した。

「ガハッ……!？」

顔を殴られ大きく仰け反る垣根帝督。

彼の攻撃は一方通行には届かず、さらには未元物質までもが彼の演算能力によってあるものとして組み込まれてしまったのだ。

「何でてめエが第2位で俺が第1位なのか知ってるか？」

目の前で口から血を流している垣根に対して特に警戒もせず近づきながら聞く一方通行。

「俺とお前には、絶対的な力の差があるからだ。」

決定的は一言。

垣根を激昂させるのにそれ以上の言葉は必要なかった。

「イイ気になってんじゃねえぞ……、たかだか俺の未元物質を2つ3つ攻略したぐらいで……、てめえに俺の底は見えてねえ！」

「浅い底だ。」

一蹴。

どれほど未元物質を生成し攻撃を加えようともしそれを直ぐ様分析、演算することで一方通行の“自分だけの現実”パーソナルリアリティにはそれがこの世に存在する物質として認識される。認識できるものは反射できる。

一方通行に死角は見当たらない。

「…殺す。」

ユラリと顔を下げ垣根から完全に表情が消える。

削板に顔を殴られたときとは比べものにならないほど今の彼はキレイにいる。

「てめえは殺す。なにがあっても殺す。」

低く殺気の籠った声が一方通行へと投げ掛けられる。

「三下が、吼えてンじゃねエよ。」

それでも一方通行は垣根に対して警戒はしない。

「くたばれ!!」

垣根帝督の翼が突如巨大に広がっていく。6枚の翼の一つ一つが5m以上の大きさにまで巨大化し、まばゆく光り始める。

「……。」

それをただ見ている一方通行。

「破滅の光。」
アーチエンド

そう言った瞬間翼は大きく羽ばたき、各翼の先端に光の球体が形成されていく。それぞれが太陽エネルギーのような光と熱量を所持し、

さらに垣根の能力によって存在しない物質へと変換する。

彼が一方通行を倒すための最終手段、いわば奥の手だ。

存在しているだけでこの世界に影響を及ぼす物質のようで、膨大な熱と光量によって垣根周辺の建物や地面は融解して消滅している。第4位の原子崩し（メルトダウナー）など比ではないだろう。

「メルヘン野郎が、天使にでもなったつもりかよ。」

「似合ってねえのは分かってんだよ。」

そう言って垣根の翼が大きくはためき、6枚の翼から6つの光球が猛スピードで放たれる。それらは空気に触れ酸化することさらに化学反応を起こし光り輝く光球は真っ白な球に姿を変え、一方通行へと襲いかかる。

決着は一瞬だった。

「ガッッ……」

血を吐きながら倒れたのは、垣根帝督だった。

理由は単純、破滅の光さえ一方通行は認識し反射したのだ。回折も意識的に反射されていたらしくもう彼の皮膚を焼くこともできなかった。

「これが俺とお前との力の差だ。」

「ッ……！」

尚も睨む垣根帝督だが、今すぐ戦える状態ではない。

一方通行は電極のスイッチを切って現代的なトンファーのような杖を拾い土御門たちのもとへ向かう。

「長かったな。」

「うるせエ。」

土御門に悪態をつきながら1人先に用意されていた回収車に乗り込む一方通行。

それに続くように土御門、結標、海原、ソフィアも回収車に乗り込む。

こうして任務は『グループ』がソフィアを保護したことで終了、『スクール』、『アイテム』の任務は失敗に終わった。

戦闘が終わった広場に残されたドレスの少女は垣根のもとへと向かう。

垣根は全身から血を流していたが、その目には未だ闘志があった。

「…あの野郎、必ず殺す。」

垣根帝督はドレスの少女に肩を借りながらスクールの回収車へと向かった。

「麦野!!」

土御門の魔術“青の式”からようやく解放されたフレンドは倒れて

いた麦野のもとへと向かう。

「麦野！麦野！！」

フレンドが肩を揺すってようやく意識を回復した麦野。

「ッ……くそ。」

任務を失敗したことで何より自分が敗北したことを悔いる麦野。そんな彼女のもとに絹旗をおんぶした浜面が駆け寄ってくる。

「麦野大丈夫か！？」

「……浜面に心配されるようじゃ私も終わりだね。」

苦笑いを浮かべる麦野は、浜面やフレンドとともに滝壺の待つ車へと向かった。

広場から少し離れた路地裏、削板軍覇は荒い呼吸を整えながら座り込んでいた。

両手はしばらく使い物になりそうになく、身体中傷だらけだ。

しかし彼の顔は晴れやかだった。

『よかった……。あの女の子は死なずにすんだんだな。』

安堵した削板は、地面に倒れそのまま意識を失った。

直に騒ぎを聞きつけた警備員と風紀委員が到着するだろう。
アンチスキル ジャッジメント

時刻はそろそろ午後3時 - -

『グループ』の回収車内、おのおのがリラックスした状態で時間を潰していた。

「今上層部から連絡があった。ソフィアは無事にスペイン星教へ送り返されることになるそうだ。」

携帯で通話していた土御門が言う。

「まあそれが今回の任務だったわけだしね。」

結標はどこから取り出したのかアイスクリームを舐めている。

「彼女が無事に帰ることができて何よりですね。」

海原はニコニコしながらソフィアを見て話す。
そのソフィアは、

疲れていたのだろう小さな寝息をたてて寝てしまっている。

それを見てついロリコン魂に火がついてしまう変態、土御門元春。

『やばい、よく考えたらこの子まだ12歳!』

そんな変態野郎の視線に気付いた結標が釘を刺すように冷やかに言う。

「やめなさい変態。^{ロリコン}」

「なっ、シヨタコン野郎に言われたくないニヤー。」

ブハッ

とアイスクリームを吐き出す結標。その顔は真っ赤になっている。

「な、ななな…」

言い淀むところを見てもどうやら間違いなさそうだ。

「あ、そういえばソフィアに伝えなくていけないことがあったんだニヤー。」

寝ているソフィアを今度は普通の目で見て土御門が言う。

「伝えることって?」

吐き出したアイスクリームの処理を終えた結標が聞く。

「聞いたらソフィア驚くぜい。」

ニヤツと笑いを浮かべて土御門が言う。

「ソフィアを逃がしたスペイン星教のノゼたちは生きている。」

それを聞いた結標と海原は一瞬驚き、やがて穏やかに笑う。

『表』の世界を守るために『裏』で暗躍する組織、『グループ』。彼らに乗せた車は軽快に走っていく。

Ep.20 そして平穩は訪れる（後書き）

次回は事件後の風紀委員や上条御坂サイドの予定です。

E p ・ 2 0 ・ 5 終わりの始まり（前書き）

上条さんたちの話です。

短いですが楽しんでいただければ幸いです。

Ep・20・5 終わりの始まり

暗部組織が抗争を繰り広げた第7学区の広場は今や黄色いテープで立入禁止にされ、警備員や風紀委員がその捜査、情報収集にあたっていた。

「一体どんな能力を使えば建物がこんな風になりますの…？」

融解した建物の前で腕を組み考え込む風紀委員、白井黒子。

目の前の光景はあきらかに能力使用によるものだが、それは明らかにレベル5級の能力者によるものだ。

『一体何が起きていますの…？』

言い知れぬ不安をよそに、白井は本来の作業へと戻っていった。

「おいどうしたんだよ御坂！？」

不幸な少年、上条当麻は本日も絶賛不幸だった。なんか語尾にニヤーがつきはじめた御坂さんにあちこち振り回され、拳句の果てには今現在勝手に走り出してしまった御坂を追いかけている状況なのだ。

「いいから黙ってついてきなさい!!」

さっきまでの精神崩壊一步手前の表情とは違い真剣な表情で走る御坂。

そしてある広場の前で立ち止まる。

「…何だよ、これ…」

声を発したのは当麻だった。広場一帯の地面は大きく抉れ、周囲の建物は崩れ、溶けているようなものであった。

そして広場の周りに張り巡らされた立入禁止用の黄色いテープ、近くには警備員や風紀委員の姿も見受けられる。

『これは…』

御坂美琴は絶句した。彼女が突然広場に向かって走り出したのは大きな轟音が響いたからだ。

そして現場にきてみれば目を疑うような惨状。

「なんなのよ一体…」

「お姉さま!？」

突然前方から声がしたかと思うと突然美琴の目の前にテレポートしてきた白井が現れた。

「黒子!？これ一体どうしたことなの!？」

しかし白井はその質問には答えない。

彼女の視線は御坂美琴の隣の人物、つまりは不幸なツンツン頭の少年に向けられていた。

なんだか不幸な予感しかしない当麻は一步後退りする。
が、もう遅かった。

「なぜお姉さまといえるんですのこの類人猿があああああ!!!」
絶叫とともに白井は当麻の頭上へレポート、そのまま後頭部へ全体重をのせたドロップキックをぶちこむ。

「不幸だあああ!!!」

彼の不幸はまだ終わらない。

「…お姉さま？確か今日は具合が悪くて早退なさったんではなかったんですの…？」

「うつ…」

もつともなところを突かれ言い返せない美琴。

「それが何ですの!?!?よりもよってこんな類人猿とデートだなんて!!!むきいいい!!!」

御坂のやや後ろで魂が切り離されそうなツンツン頭を指差しながら地団駄をふむ白井。

「ち、違つたよ！？こいつとは偶然…」

突如顔が赤くなる美琴を見て白井の顔がムンクの叫びも真つ青な何とも言えない表情になる。

ふっふっふ、そうです、お姉さまそういうことですの

とかなんとかブツブツ言いながらダークサイドに堕ちていく白井黒子。

そんな二人のやり取りを横目にうつ伏せに倒れていた上条当麻は思う。

『…不幸だ。』

E p . 2 0 . 5 終わりの始まり（後書き）

次から新章です!!

Ep・21 集う戦力（前書き）

今回から新章です！！

では楽しみください。

Ep・21 集う戦力

東京都、首相官邸。

その一室に、日本の政治界トップクラスの重鎮たちが一同に介していた。

その部屋は完全に和風。20畳以上はあるつかという畳張りの部屋の四方を襖で囲い、襖を開けて廊下へ出てみれば目の前は日本特有の侘びを感じさせる石造りの庭園と鯉の泳ぐ静かな池。

…なんというかまあヤザの組長の屋敷みたいな家に、日本トップクラスの政治家やはたまた大財閥の社長など総勢30名の人間が首相を上座に置き綺麗に二列に向かい合って座っている。その光景はまさしくヤザの総会であろう。それを狙っているのかいないのか首相は着物を着ている。これでは完全に一般人が見れば間違われてしまっだろう。

「首相」

唐突に沈黙が破られる。話したのは防衛省のトップ、八神刃緑。やがみじんろく

「もう我慢なりません！！先日の事件もそうですが一体奴らは何をしているんですか！！」

明らかに怒りが込められている言葉を首相に向かい言い放つ。

「彼らは学生に対して超能力などという不確定なものを開発しているのですよね？」

八神の質問に間を割って言うのは環境省のトップ、英田正治。あいだしょうじ

「そつだ。学園都市は超能力の開発を行っている。」

首相、萩乃皇閣はぎのあつかくが穏やかな物腰で英田の問いに答える。

「ならなぜあんな事件が起こるのです!!」

なおも怒気をあらげる八神が食い下がる。“あんな事件”とは先日ソフィアを巡って暗部組織のいくつかが抗争しそれによって学区の一部分が多大な被害を被った事件のことだ。

暗部組織たちが撤退したのち、実は警備員アンチスギルや風紀委員ジャッジメントが到着する前に下部組織の人間たちが事件の後始末、つまり隠蔽に來たのだが、さすがに多くの一般人に目撃されていたことと周囲の建物への被害の量、そしてなによりも1人で一個師団を圧倒してしまうような学園都市最強の超能力者（レベル5）が4人も好き放題に暴れたため、隠蔽しきることが出来ず、暗部が抗争したためという情報までは広がることはなかったが、能力者による大規模な戦闘という題目で学園都市のみならずその外、つまりは日本にまで情報は流れていたのである。

「フム、統括理事会からは何らかの事故であると報告は受けているが。」

着物の袖下に逆の手を通し思案するように答える萩乃。
それにすかさず八神が噛みつく。

「奴らは明らかに何らかの兵器を製造しているのでしょうか!! 防衛省の人間として、見過ごすわけにはいきません!!」

つい声を荒げ立ってしまう八神。ふと気がつけば周りからは冷やかな視線が自分に注がれている。少し度が過ぎたと思った彼は静かに腰を下ろした。

「お前はどうしたいのだ八神。」

首相萩乃が八神へと投げ掛ける。

「はっ、学園都市が必要以上の戦力を擁しているようなのであれば、こちらこそそれなりの処置をとるべきだと思います。」

先程までとは一変して冷静に主張する八神。さすがは防衛省という日本を守る組織のトップ。自分の感情の抑えかたは心得ているようだ。

「つまり武力行使か。」

英田が割って入る。

「そういうことになる。」

八神は首相に向かって確認をとるように顔を向ける。

「学園都市と日本は不可侵協約を結んでいる。だが世界的には学園都市は日本に属する。そんな協約なんぞ同国間で結ぶ必要などない。名義上は戦争ではなく内戦、という形にはなるな。」

「お待ち下さい首相。」

英田が待ったをかける。

「我々環境省の意見とさせて頂きますと内戦による環境汚染が問題です。」

「そこらは学園都市の科学力がなんとかするだろう。」

英田の意見を一蹴する萩乃。どうやら八神の意見には賛成しているようである。

「だがまだそうと決まったわけではない。学園都市に声明を送れ。1度しっかり学園都市の上層部を見せろとな。話はそれからだ。」

萩乃を始めその場にいたトップクラスの政治家が空気が変わるのを感じた。

始まるかもしれないのだ。

平和国家日本で、血で血を洗う戦いが。

それから3日、
学園都市。

窓のないビルの一角に培養器に逆さまで漂っている不思議な人物がいる。

アレクスター・クロウリー

学園都市のトップにして自身が魔術師であった過去を持つ。
なぜそんな人間が魔術と正反対の科学の街学園都市にいるのかは彼
以外に誰も知らない。

「これはどういふつもりだアレクスター。」

培養器の前に立ちアレクスターに話しかける金髪サングラスの男、
土御門元春。

「見てわからないのか、日本からの通達だよ。」

興味がないとでも言うように一瞥もくねず言うアレクスター。

「そついうことを言ってるんじゃない！」

土御門が珍しく声を荒げて言う。

「これは宣戦布告だろうが！まさか貴様が日本国家に統括理事会の
全容を見せるなんて有り得ないだろうしな。」

「まあそついうことになるだろう。」

アレクスターの性格をなんとなく理解している土御門は大きく舌打
ちする。

もしも学園都市と日本国家が戦うようなことになれば、関係のない
学生にまで危険が及ぶことになるからだ。

「通達では上層部を見せろだの言っているが奴ら（日本）の目的は

そんなものではない。」

「なに？」

「畏れているのだよ。いつか我々が反旗を翻して日本を攻撃してこないかとな。何せ技術水準が我々と奴らでは30年以上の差があるからな。ならば叩けるうちに叩いておきたいのだろう。」

「珍しく饒舌じゃないかアレイスター。まさかこれも貴様の計画のうちだとも言うのか？」

土御門の問いには答えずただ笑みを浮かべるアレイスター。

「チツ、それで俺にどうしろっていうんだ。」

「なに、難しいことではない。」

土御門が不審な表情を浮かべる。彼が自分を呼ぶときは決まって面倒な仕事を押し付けてくるからだ。

「君には人集めをしてもらいたいのだ。」

「人集め？」

「奴らと戦うことになる場合、アンチスキル警備員やジャッジメント風紀委員といった治安機関は日本の戦略部隊と戦うには非力すぎる。我々もそれなりの戦力を整えなくてはならん。協力な人材を集めてもらおう。ここにリストを出力しておいた。」

土御門の前に現れたデータを見ると、そこには学園都市有数の実力者の名前が羅列されていた。

「……表の人間まで巻き込むつもりなのか、アレイスター。」

「使える人間ならば私は誰だろうと使うよ私は。」

「ならば俺から1人推薦したい人間がいる。」

突然の土御門の提案に興味を惹かれたのか興味深そうに笑うアレイスター。

「……ほう。だが相手はただの人間だぞ？彼の能力は意味を成さないだろう。」

「あいつがいるだけで戦況は大きく変わってくる。」

「フム、ならば君に一任しよう。」

「それともう一つ。」

土御門が付け加える。

「絶対に一般人は巻き込むな。」

「安心したまえ。一般人にはメディアを通して情報操作をさせる。それは奴ら（日本）も同じだろう。自分の子供がいる学園都市に日本が攻撃をしているなんて知ったらバッシングの嵐だろうからな。」

それを聞いた土御門はアレキスターに背を向け結標の能力によって窓のないビルを後にした。

翌日、土御門はアレキスターに言われたように様々な人脈を駆使しリストにあった人物に事情を説明していく。

まずリストにあったのは『グループ』のメンバー、一方通行、結標淡希、海原光貴。

「日本と戦争だア？」

明らかに不機嫌になる一方通行。彼には守るべき少女がいる。学園都市が戦場になる可能性が高い以上それはしかたないことなのだが。

「安心しろ。一般人には情報操作をして内戦をしてるってことすら知られないようにするらしい。」

「それに私達が招集されているというわけ？」

「私もですか。」

「ああ、これは俺たちの大切なものを守るための闘いでもある。」

『グループ』の3人は承諾し、土御門は次のターゲットへと向かう。

「外と戦争？」

「正確には内戦な。」

第7学区のとあるファミレス。そこには土御門と『アイテム』の4人の姿があった。

「つーかあんたよくあんな事の後で私たちの前に顔出せたわよね。」

麦野が皮肉じみた表情で言う。

ソフィアの処分という任務に失敗した『アイテム』の面々は相応のペナルティを負っていたようだ。

「率直に言うぞ。招集がかかっているのは麦野、絹旗の二人だ。」

「超私ですか。」

「私は招集されてないわけー!？」

フレンドが文句を言っているが土御門は華麗にスルーする。

「私らのメリットは？」

「あの事件の失敗は帳消し、報酬は3倍だ。」

仕事の顔になった麦野はしばし考え込むが、

「のった。」

割りと返事は早かった。

『スクール』に直接乗り込むのはいくら土御門でも死を覚悟しなくてはならなかったため『スクール』の上からの指令という形で招集のかかっていた人物、垣根帝督を呼び寄せる。

「あとはっと…」

土御門は現在第18学区のとあるアパートの前にいた。扉の横の表札には“削板”の文字。インターフォンを押すとすぐに中から反応があった。

『はい。』

「土御門だが、ちょっと話がある。」

あの事件後土御門と削板軍覇はちょっとした顔馴染みになっていた。

『おう、鍵は開いてるから上がれよ。』

促され部屋に入る。中はこれといった特徴はなく、良くいえば片付いている。悪くいえば殺風景だった。

「で、何のようだ？」

さつそく本題に入る土御門と削板。

「実はな、学園都市と外とで内戦が始まるかもしれない。」

「はあ!？」

突然の話で仰天する削板。この反応は当然と言っていいだろう。

「当然一般人は巻き込まない。そこでお前の力が必要だ。」

「…まあお前らには前の借りがあるからな。いいぜ、手を貸してやるよ。」

快く承諾してくれた削板にお礼を言い、土御門は部屋をでて再び第7学区へと向かう。

集める人間はあと4人。

土御門は忘れていたが今日は水曜日、学校がある日だ。ならば彼は絶対いるはずだ。

土御門は自らも通うとある高校へと向かった。

E P . 2 1 集う戦力（後書き）

次回は初登場のキャラも出てくる予定です。

EP・22 常盤台のLEVEL5（前書き）

筆が進む進む（笑）

Ep・22 常盤台のLEVEL5

『土御門のやつ、今日も学校休みなのか?』

とある高校のとある教室、窓際の席に座って4時間目の授業を聞きながら黒髪ツンツン頭のこの上なく不幸な少年、上条当麻は思う。

なんだか最近土御門がよく学校を休むようになっていく気がする。

『まさか何かの事件に巻き込まれてるんじゃない?』

ガラッ

当麻がそんな事を考えていると不意に授業中の教室のドアが開いた。

「土御門ちゃん?これだけ盛大に遅刻しやがって何か言い訳はあるのですか?」

ニコニコ笑っているように見えるが実はまったく笑っていない担任、小萌に説教をくらう土御門。

「スマンですたい小萌先生、実は目覚まし時計が…」

「土御門ちゃん、放課後コロンブスの卵決定です。」

軽い死刑宣告を受けたような土御門はそのまま席につき、不意に当

麻のほうへと顔を向ける。

「上やん、ちょっと話がある。昼休みきてくれ。」

さつきまでの表情とは違い、真剣そのものだ。当麻は土御門がこの表情をするときはどんなときなのかを知っている。ゆえに、二つ返事で当麻は頷く。

「わかった。」

――昼休み。

「で？話って一体なんなんだよ。」

体育館の裏にやってきた当麻と土御門は会話を始める。

「…そうだな、まずはどこから話すべきか…。」

「なるべく簡潔に言ってくれよ…?」

「そうか。なら上やん、戦争しろ。」

……………。

流れる一瞬の沈黙。

「はあああああ！？何言っただお前！？戦争！？何そんな不穏なキーワード言っちゃってんのおおお！！」

ギヤーギヤー喚く当麻をよそに土御門は話を進めていく。

「やっぱり最初から話したほうがいいな。」

隣でどんよりしている不幸な少年に向かって1から説明を始める。

「いいか上やん、先日日本政府から学園都市宛てにある通達が届いた。」

「通達？」

「ああ、上やんは最近第7学区の広場で起きた事件を知っているか？」

「事件：？ああ、あの建物とかが溶けていた能力者の犯行のやつだろ？」

「そうだ、その情報が学園都市外に漏れそれが日本政府にまで届いた。」

「なんで日本政府は通達を送ったんだ？」

「やつらは畏れてる。超能力を科学で証明してそれを実用化させちまうその科学力にな。だからやつらは俺たちにやられる前にやつち

まおうって魂胆だ。」

「そんなのただの言いがかりだろ！ちゃんと説明すれば……」

「ああ、確かにこんなのはただの言いがかりだ。学園都市側に日本を攻撃する理由なんか一つもない。」

だがな、と土御門が続ける。

「人間てのは自分たちとかけ離れた生物を嫌う。超能力なんかが使えちまう俺たちは日本政府のやつらからしたら恐怖の対象でしかないんですたい。」

「……。」

「それにな上やん、恐怖ってのは人の正しい思考能力を奪っちゃまうんだぜい。」

「学園都市は…応戦するつもりなのか？」

当麻が土御門に聞く。

「それは最後の手段だ。穏便にすめばそれにしたことはないが…最悪の状況になる可能性は高い。」

唇を噛む当麻。

まさか一般人も多くいるこの学園都市が戦場になろうとは思ってもみなかったのだろう。

「でもどうして俺を呼ぶんだ？魔術関連の話ならともかく…俺の幻

想殺し（イマジンプレイカー）は普通の人間にはなんの効果もないんだぞ？」

当麻の言うことはもつともだ。彼の右手に宿る異能の力、あまりにも特殊すぎるために身体検査さえも正しく測定することができない
システムスキャン
“幻想殺し”はたとえ神の奇跡だろうと打ち消してしまう代物だ。

だがその反面、普通の人間や拳銃などの武器の前ではなんの役にもたたないのである。

しかし土御門は言う。

「ニヤー、実はまだこの情報は極秘なんだが…、実は日本政府がロシアと手を組んだらしい。」

「ロシアと…！？」

「正確にはロシア成教と…だ。」

その言葉に絶句する当麻。彼は少しかり魔術に関わっている。それゆえにイギリス清教に知り合いがいるし、ローマ正教とも面識があり、ロシア成教の殲滅白書のシスターとも会ったことがある。

「ロシア成教だつて…？」

世界最大の領土をもつ大国ロシアの宗教組織、ロシア成教。

「ああ、どうやって日本政府がロシア成教と繋がったのかは分からないが、向こうにも魔術師がいる以上、上やんの力は間違いなく役に立つ。」

だが、

「上やんはあくまでも一般人だ。無理矢理巻き込むわけにはいかない。だからこれはあくまで勧誘程度に考えてくれ。関わりたくないなら関わりたくないで断ってくれてかまわない。」

しかし、その言葉を言う前に当麻の心は決まっていた。

「…俺にも参加させてくれ。」

それを聞いた土御門はニヤリと笑う。

「一般人を傷つけさせるわけにはいかないからな。」

微笑む当麻は土御門と握手を交わす。

「上やん、ちょっとついてきてくれ。」

土御門は昼休みもそろそろ終わりだというのに校門の方へとテクテク歩き出す。

「おい土御門どこにいくんだよ!?!」

「常盤台中学だニヤー」

それを聞いた瞬間、当麻から本日2度目の絶叫が響いた。

私立の名門、常盤台中学校。

今は5時間目の授業を受けている。

そんなあるクラスで御坂美琴は退屈そうに授業を聞いていた。

『はあ、なんか退屈ねえ。』

ペンをクルクル回しながらそんなことを思っていると、不意に校内放送が入った。

『生徒の呼び出しをします。2年御坂美琴さん、同じく2年天上院真紀さん。至急校長室まできてください。』

突然の呼び出しに美琴の肩がビクウツ!!と上下に揺れる。

周りを見ればクラスメートたちが美琴の方をジッと見ていた。

『一体なんなのよ!?!』

周りの視線にいたたまれなくなった美琴はその場から退散するように教室を後にした。

所変わって校長室。

美琴は校長室のドアをノックし、失礼しますと言って室内へと入る。

「やあ御坂さん。よくきてくれたね。」

物腰柔らかそうな女校長が御坂に話しかける。

「校長、なんで私が呼び出されたんですか？」

全く思いあたる節がない美琴にとっては当然の疑問であろう。その疑問を解決してやろうと言わんばかりの笑顔で校長が言う。

「どうやら急ぎの用らしくてね。詳しくは彼らに聞いてくれたまえ。」

「

そう校長が言うと横の控え室から男子二人が出てきた。

1人は金髪サングラスにアロハシャツというこの常磐台にこのうえなく似合わない服装をした少年と、……

なんかよく知っているツンツン頭の少年、というか上条当麻がいた。

「な！な、な、何でアンタがここにいんのよ！！」

突然の遭遇に顔は真っ赤になりアタフタしだす常磐台のエース。もしこの現場をあのかの風紀委員に見られていたら当麻はそれはもう無惨なことになるだろう。

「おや御坂さんと彼らは知り合いでしたか。なら話は早い。あとは天上院さんが来れば話が始められますね。」

校長がそう言うのを待っていたかのように扉をノックする音が聞こえる。

校長がどうぞと言うと1人の少女が入ってきた。

背中の真ん中くらいまでありそうな長く艶やかな髪先端をカールさせている。

「校長、私に何かご用ですか？」

丁寧なお嬢様口調で話す少女。御坂とは大違いだなと内心当麻は思う。

「彼らが話があるというので聞いてもらえるかな天上院さん。」

校長の視線の先にいる人物二人を見た天上院はなんだか幻滅しているように見えたが。

「かしこまりました。」

と了承したので土御門、上条に続いて御坂、天上院が隣の控え室へと入っていく。

控え室へて入った4人はとりあえず黒革のソファに向かい合って座

る。

「とりあえず自己紹介をしておこうか。俺は土御門元春、高校１年だ。」

土御門につられて慌てて当麻も自己紹介する。

「俺は上条当麻。こいつと同じ高校１年だ。」

「私は御坂美琴。２年生よ。」

「天上院真紀と申します。２年生ですわ。」

自己紹介を終えたところで当麻がこっそり土御門に耳打ちする。

「御坂はレベル５だから必要な人材つてのはわかるがこの見るからにお嬢様な少女はなんで呼び出したんだ…？」

「何言つてんだ上やん、彼女だつてレベル５だぜい？」

「はっ!？」

つい大きな声を出してしまった上条を常磐台の二人が呆れた顔で見ている。

「アンタこの子のこと知らなかったわけ？」

話が聞こえていたらしい美琴が呆れたように言う。

「私が学園都市第5位のレベル5、メンタルアウト“心理掌握”の天上院真紀ですわ。」

学園都市における精神感应系の最強の能力者。

十徳ナイフとも言われるその第5位が当麻の目の前にいた。

「まじかよ…。」

事態がよく呑み込めていない当麻を置いて土御門は話を始める。

「さて、これからお前ら二人に話すのは極秘事項だ。他言無用で頼むぜい。」

土御門の雰囲気が変わったことで二人も真剣な表情に変わる。

「率直に言おう。今学園都市は日本政府と戦争を起こそうとしている。」

「…!?!」

突然のことに頭がついていかないといった表情を浮かべる二人。

「このままだと一般人まで巻き込む恐れがある。そこでだ、お前ら学園都市が誇る最高戦力レベル5に手伝ってもらいたいというわけだ。」

「闘いになったときに一般人の避難とかをするわけ？」

「いや違う、詳しくは言えんが日本政府は協力的な兵器を持っている。お前らにはその被害が学園都市内部まで広がらないように境界ラインで食い止めてほしいんだ。」

つまり完全武装した軍人相手に戦えということである。

「もちろん強制はしない。お前らは女の子だし、断つてくれても構わない。」

「やるわよ。」

「やりますわ。」

二人の返事は早かった。

「学園都市の危機なんですよ？だったら黙ってられないじゃない。」

「私も同じ意見ですわね。日本政府の好きにさせるなんて癪ですし。」

二人の快い返事に安心した土御門と当麻。

4人は常磐台をあとにして今回の任務に参加する者が集まる第3学区の高級ホテルへと向かった。

Ep.22 常盤台のLEVEL5（後書き）

第5位の名前やイメージは作者の妄想です；

Ep・23 交差する思惑（前書き）

またまた新キャラ登場です。

ではお楽しみください。

Ep・23 交差する思惑

ロシアのとある執務室。その部屋に1人の男がいた。

『ククク、好都合だ。』

ロシア成教が所持する魔術の中でも最上級の防御結界で守られている執務室には明かりはついておらず、机上のランプの光だけが部屋全体をぼんやりと照らしている。

『いずれは学園都市は叩かねばならんとは思っていたが、まさか日本政府から要請がこようとは。流石に想像していなかった事態だよ。しかしまあこれで学園都市を潰す口実ができたというものだ。』

薄暗い部屋の中で怪しく微笑む男、

ニコライ＝トルストイ

彼の思惑が学園都市へと降り注ぐ。

当麻たち4人は第3学区にある高級ホテルの前に来ていた。

「…まじかよ。」

どう見ても自分のような貧乏学生が足を踏み入れているようなホテ

ルではないことを悟る当麻。

「何してんだ上やん、置いてくぜえ。」

ホテル入口で突っ立っていた当麻を置いて土御門、御坂、天上院はスタスタとフロントへと向かう。

よくよく考えてみれば御坂や天上院は常盤台に通う生粋のお嬢様、土御門は多角スパイとして様々な場所へ潜入している、よってこの3人は当麻のような感覚を持ち合わせていないのだ。

「土御門だ。」

「土御門様ですね、こちら1108号室のキーになります。」

受付の女性から土御門はキーを受け取り4人はエレベーターに乗り込む。その中、

「なあ土御門、俺たちのほかに誰が来てるんだ？」

「上やん以外は皆能力者だぜい（魔術師含）。」

「てことは学生ばかりってことか！？」

「まあ年齢的には未成年ばかりだにやー。」

「そんなに大丈夫なのか？相手は日本政府にロシア成教なんだぞ？」

「心配無用ですたい。何たって学園都市有数の能力者たちだからに

やー。」

そうこうしているうちにエレベーターは11階で動きを止め、1108号室へと向かう。

キーを差し込み扉をあける。そこには――

「遅いじゃない土御門。」

「すまない結標、いろいろ立て込んでな。」

当麻は絶句した。

何故ならその部屋にはかつて当麻が倒した一方通行、レムナント残骸回収のさい倒れていた巨乳な女子高生、夏休み最後の日に戦った魔術師たちがいたからだ。

隣を見れば美琴も一方通行の姿を認め顔色が変わる。

「落ち着け上やん、御坂。俺たちは今から仲間だ。」

「仲間ア？ふざけたこと言ってンじゃねエよ土御門。」

「同感ね、私たちは仕事で来ているに過ぎないわ。」
ビジネス

「お久しぶりですね上条さん。」

当麻が周りを見回してみると見た目小学生くらいの少女やホストのような少年、白い特攻服のような学ランを着た少年など個性豊かな面々がこの一室に介していた。

「12人…これで揃ったな。」

土御門が人数を数え確認をとる。

「とりあえずよく集まってくれた。皆各々事情は聞いていると思うがもう1度状況を確認するぞ。」

当麻たちも近くにあったソファに腰掛け土御門の話を聞く。

「まず3日前、日本政府から学園都市に一通の通達があった。内容は学園都市の上層部を見せること。」

表の人間である当麻、美琴、天上院は上層部の意味がいまいちよくわかっていないようだが、他の者は上層部がどういったものなのを理解している。

ゆえに学園都市が日本政府に対して対抗することは目に見えているのだ。

「学園都市はこの通達を無視する意向だ。つまり、これから日本政府とやり合うことになる。」

「日本政府だけなら楽勝だろうがよオ。」

一方通行がやる気なさそうに言う。

「いやそう簡単にはいかない。ここにいるお前らだから言うが、日本政府はある国に援助要請をだした。」

「ある国？」

麦野が腕をくみながら聞く。

「ロシアだ。正確にはロシア成教。」

「何だよロシア成教って。」

削板が質問する。

当麻や『グループ』を除けばいくら学園都市の暗部に関わっている人間と言っても魔術というワードには聞き覚えがない。

「あまり詳しくは言えんがロシア成教は俺たちと同じような能力を使う。」

「超能力者ってことか？」

垣根が言う。

「いや、超能力とは別の力だ。科学の街にいるお前らに説明してもややこしくなるだけだからここは省く。」

「ちょっとアンタ、アンタは何か知ってるんじゃないの？」

不意に美琴が隣に座っていた当麻に詰め寄る。

「上条さんだってさっきこの話聞いたんですよ？知ってるわけないじゃないですか。」

深い溜め息とともに言う当麻。

その見た目とは裏腹に、

『御坂には魔術の話は言わないほうがいい。関わっちゃだめだ。』

冷静に状況判断していた。

「じゃあまずはお互い自己紹介といこうか。」

土御門が陽気にそんなことを言い始める。だがその目は暗部に身を置く者たちに語っている。『裏』のことは話すな、と。

それに気付いた彼らは必要最低限のことだけ言うことにする。

「海原光貴です。」

「結標淡希、ムーブポイント“座標移動”のレベル4よ。」

「一方通行だ。能力はベクトル操作でレベル5。」

「麦野沈利、第4位の“原子崩し（メルトダウン）”よ。」

「絹旗最愛、能力はレベル4の“オフエンスアーマー窒素装甲”です。」

「削板軍覇、ナンバーセブン一応最大原石と呼ばれている。」

「垣根帝督、第2位の“ダークマター未元物質”だ。」

と順番が回ってきた当麻たちに回ってきた。

「上条当麻、レベルは0だ。」

「レベル0?」

反応したのは垣根だ。

「オイオイちょっと待てよ。俺たちはこれから一国とやり合おうってんだぞ？そんな闘いにレベル0なんかが首突っ込んだら即死だろうが。」

垣根の言うことも最もだ。これから闘う相手は日本という国家。国一つ相手にするのに何の能力も無い人間が割って入るなどただの足手まといにしかない。

「確かに上やんはレベル0だ。だが、コイツには身体検査では測りきれない特殊な能力を持っている。」

「その能力が役に立つてのか？」

「ああ、間違いなくな。相手がロシア成教って組織ならなおさらだ。」

それに、
と土御門が付け加える。

「上やんは学園都市第1位を倒した実績だってあるんだぜ？」

「「!？」」

皆の視線が一気に当麻のほうへと向けられる。

「こいつが…？」

「あの一方通行を？」

その一方通行はチツと舌打ちして機嫌悪そうにしている。

「なるほどな、資格は十分でことか。」

垣根は納得したように笑う。

当の本人上条当麻はえ？え？と勝手にテンパっている。

「なら続きといこう、御坂。」

土御門が促す。

「御坂美琴、レベル5第3位よ。」

「天上院真紀、第5位の“心理掌握”メンタルアウトですわ。」

「へえ、あんたがあの心理掌握なの。」

麦野が天上院に対していう。

そこでふと土御門が気付いた。まだ1人自己紹介をしていないことに。土御門が集めた人物は自分を含めて12人、今まで自己紹介したのは11人、1人足りないのだ。

残る1人が誰だかすぐにわかった土御門は呆れるように言う。

「鳴神、でてこい。」

「てへ、バレてたか。」

土御門の言葉の後いきなり1人の人間が現れる。

「テレポーター空間移動能力者か？」

削板軍覇が言う。

現れた人間は肩まで伸ばした明るめのブラウンの髪、肩が大きく出た白いシャツに七分丈のデニム。
第一印象は美少女だ。

「違うよ最大原石、僕の能力はそんなじゃない。」

……ボクッ娘？

「オイオイ何だアこの女はア？」

一方通行でさえも面識がないらしい。

「なるかみよつじ鳴神葉次、第6位のレベル5だよ。」

「「6位!!?」」

その場の全員が驚きの表情を隠せない。
今まで誰も第6位に会ったことがなかったからだ。

「まさかこんな女だったとはなア。」

「一方通行、それは違うぞ。」

「あア？」

「僕の名前聞いてなかったの？葉次はつじ、男おとこなんだけど。」

「ええええええええ！？」

どこから見ても美少女にしか見えない葉次はニコツと笑う。

「でも僕としては葉次はつじって呼ばれるよりも葉次はつじって呼ばれるほうが好きだからはづきって呼んでね。」

可愛らしく微笑む葉次。そこいらの女よりも普通に可愛いと思ってしまった当麻はいきなり隣の御坂から殴られてしまった。

「能力は何なの？」

麦野が興味深そうに尋ねる。

「軌道支配オービットだよ。」

聞きなれない単語に首を傾げる麦野だったが土御門が話を再開した。

「いいか、ここからは作戦を伝える。」

場の空気が真剣なものへと即座に変わる。

「日本政府が動き出すのは明日の夕方ごろ、これは確かな情報だ。だが学園都市のどの方角から来るのかがわかっていない。」

そこでだ、と土御門が話を続ける。

「東西南北にそれぞれ数人ずつ配置して日本政府を迎え撃つ。」

提示された作戦は単純なものだった。
つまり数人で日本政府とロシア成教の部隊を相手にしろということだ。

「そして現れた方角へ残りのメンバーも向かう、という予定でいく。その為に俺が学園都市内部に残ってそれぞれに指示を出し、結標にはレポートを使って移動手段を確保してもらう。」

つまり土御門と結標はバックアップに徹するということだ。

「次に東西南北に配置するメンバーを言うぞ。まず北のゲートに垣根と鳴神。」

垣根が露骨に嫌そうな顔をする。彼は女が大嫌いなのだ。

「僕は男だぞ。」

その心の声を読んだかのように葉次が垣根に言う。

「東側のゲートには麦野、絹旗、天上院が向かってくれ。」

「はいはい。」

「超了解です。」

「わかりましたわ。」

「次に南側、一方通行と海原で頼む。」

「チッ。」

「わかりました。」

「そして西側ゲート、上やんと御坂と削板で守ってくれ。」

「おう。」

「わかったわ。」

「任せろ！」

土御門は全員に小さな紙切れのようなものを手渡していく。

「これは通信用の霊装：まあ通信機みたいなもんだ。そいつを体の周りに身につけておけばいつでも連絡がとれるぜい。」

「便利なものね。」

土御門から受け取った紙切れをポケットにしまいながら結標が言う。

「まあこつというのが俺の仕事だからにやー。」

作戦の内容を伝え終えた土御門はソファに座りルームサービスでメロンソーダを注文しだした。

作戦決行は明日の夕方。一般人はこれから学園都市と日本政府が闘うという事実さえ知らない。

「…そうか、学園都市はあくまでも正当防衛という形で我々と争うつもりか。」

首相官邸で部下からの報告を受け学園都市の意向を確認する首相、萩乃。

「やむを得まい。」

立ち上がり部下に伝令をだす。

「防衛省に連絡を入れろ！戦略自衛隊の出勤を要請する。さらにロシア成教へも通達を入れろ！」

学園都市

日本政府

ロシア成教

三者三用の思惑が絡み合い、そしていずれ交差する。
その時期は近い。

のちの第二次世界大戦の引金となった学園都市対日本政府、ロシア
成教の戦争が始まろうとしていた。

Ep. 23 交差する思惑（後書き）

次回闘いの火蓋が切って落とされます！

Ep. 24 開戦の狼煙（前書き）

短いです；

うまく描写できません（T—T）

Ep.24 開戦の狼煙

翌日の夕方。

学園都市は異様な静けさに包まれていた。

東西南北のゲートに隣接しているそれぞれの学区が建造物の耐震強度の検査ということで一般人は侵入禁止になったためだ。

立入禁止学区周辺には警備員が武装した状態で巡回、待機している。アンチスキル武装しているのは万が一ゲートが突破された場合、彼ら警備員が応戦しなくてはならない可能性が発生するからだ。

今回の内戦は学園都市、日本両陣ともに一般人には極秘事項として秘匿されている。なので学園都市同様、日本政府も東京、神奈川、山梨などの一部に避難勧告を発令し住民は避難させている。

一般人に極秘にしているため戦車やミサイルといった大型の戦略兵器を使用するわけにはいかず、また学園都市も六枚羽などの科学兵器をおおっぴらに飛ばすわけにはいかない。

つまりは肉弾戦。

科学最先端の学園都市を舞台にまさかこんなにも原始的な争いが起きることになるとは誰も予想していなかっただろう。

日本政府からの最終通達によれば、侵攻開始は午後6時。

現在時刻は午後5時半を回ったところだが、皆各々の持ち場に既についていた。

開戦の時は近い。

『そっちの様子はどうだ上やん？』

「今のところ特に動きはないぜ。」

学園都市の西側にあるゲートの一つ。

そこで上条当麻は土御門と通信用の霊装を通じて連絡を取り合っていた。

『なにか動きがあればすぐに伝えてくれ。』

「ああ分かった。」

当麻は周囲を見渡す。

彼らがいる西側ゲートは山梨に隣接している。眼前には広大な森林、夜にもなれば辺り一面真っ暗で敵がやってきても分からないかもしれない。

高さ5m、厚さ3mある学園都市をぐるりと囲う壁に背を預け当麻は思案する。

『どんな軍隊がやって来るのかは知らないけど魔術師が来るってんなら俺の右手で対応できる。学園都市に侵入なんざさせねえ！』

「ちよろつとー」

「うおっ!？」

不意に隣から声をかけられ驚く当麻。
そこには美琴が立っていた。

「何怖い顔してんのよアンタは。アンタがそんな顔したって何にも怖くないんだけど。」

腕を組み当麻の隣に立ちながら美琴が言う。どうやら相当怖い顔をしていたようだ。

「アンタが気張る必要なんてないわよ。私がいるんだから。」

「…そうだな。ありがとな御坂。」

サラリと言われた感謝の言葉を理解した時には既に美琴の顔は真っ赤になっていた。

「わ、わかればいいのよ…」

モジモジし出した美琴を見ても鈍感フラグ建設野郎こと上条当麻はなんのことだかサッパリわからず頭上にいくつかの?マークを浮かべていた。

「おーい。」

その声に当麻と美琴は反応し頭上を見上げる。そこには壁の上に仁

王立ちで一点を見つめる削板軍覇が。

「どーしたんだ削板？」

「なにか見えたの？」

「上条に超電磁砲、準備しな。」

その言葉を聞いた二人はすぐに眼前の森林へと視線を移す。

日も落ちかけているためはつきりとはわからないが微かに地面を擦るような音が聞こえる。それも一つや二つではない。

壁上では削板が笑っていた。

「来やがったな。」

「超わかりました。」

所変わって学園都市東側ゲート。

ここには麦野、絹旗、天上院がスタンバイしている。

「西側で敵が現れたらしいです。」

「あら、正反对じゃない。」

ゲート付近で話し合う麦野と絹旗。

天上院はどこから持ってきたのか高級そうなイスに腰掛けている。

「アンタ闘う気あるんでしょうね？」

麦野が天上院へ言う。

「もちろんですよ。」

学園都市が誇る最高戦力、第4位の原子崩し（メルトダウン^{メンタルアウト}）と
第5位の心理掌握^{メンタルアウト}。
彼女たちには全く緊張が見えない。

『この二人を見ていると自分が超馬鹿馬鹿しくなってきましたね。』
絹旗がつくづく思う。レベル5にはまともな人間はいないのだろうか、と。

そのとき、

「…絹旗。」

「麦野？」

いきなり麦野と天上院の雰囲気が変わった。

「来ましたわね。」

天上院もイスから立ち上がり前を見据える。

東側ゲートの周囲はビルが乱立した都会的な町並みが並んでいる。だが彼女たちが見ているのは町並みなどではなう、その町からぞろぞろと現れてくる迷彩柄の服を着た大量の人間。

「あれは…自衛隊か？」

「超迷彩柄の意味がありませんね。」

「ロシア成教とやらではありませんのね。」

3人はゲートを塞ぐように横一列で並ぶ。

「ぶっ殺す。」

麦野のその一言が開戦の合図となった。

「そうですか。」

海原が土御門からの連絡を受ける。

「一方通行さん、どうやら始まったみたいですよ。」

「どオやらそオみてエだなア。」

二人がいる学園都市南側のゲートの前には大きな川が走っており、こちらに渡ってくるには鉄橋を渡ってくるしかない。もしくは川を泳いでくるか。

ゲートの左右にまるで門番のように立つ一方通行と海原。一方通行は杖をついた状態で外壁にもたれ、海原は懷からトラウイスカルパンテクウトリの槍をすでに取り出している。

「……あア？」

一方通行が目を細める。鉄橋や川に人間の姿はない。

「はッ、まるでお伽噺みてエだな。」

一方通行が見ていたのは空。

遙か遠くの上空に空を飛んでいる巨大な木造の船。

「あれは…ロシア成教の移動式霊装、“ノアの方舟”ですね。」

魔術師である海原はそつち方面の知識はカバーできる。

「俺たちが当たりだったみてエだな。」

杖から手を離し、そのまま首筋へと腕を伸ばす。電極のスイッチが入れられる。

「さア」

一方通行がベクトル操作によって一気に上空まで飛び上がる。

「俺を楽しませてみやがれ!!」

一方通行とノアの方舟が激突した。

「こないねー。」

「うるせえ俺に話しかけるんじゃない。」

学園都市北側ゲート。垣根帝督と鳴神葉次はどうやら相性が悪いらしい。（垣根が一方的に嫌っているだけだが。）

「冷たいなー帝督は。」

「名前で呼ぶんじゃないよ。」

「じゃあ垣根っち」

「殺すぞ。」

「ひどいよね。僕の扱いひどいよね。」

ブーブー言いながらいじける鳴神。

見た目美少女な男子はなんだかいろいろ特殊だ。

「…帝督。」

ふと顔をあげた鳴神が帝督を促す。

「…ああ。」

帝督もそれに応じた。

気づけば北側ゲートの周囲を大勢の人間が囲っている。

「ハッ。」

それを見た帝督は軽く鼻で笑う。

相手は日本政府の自衛隊、手加減など無用だ。

「鳴神、おっ始めるぞ。」

「わかってるよ。」

やられる前にやれ。

レベル5の二人は自衛隊が包囲網を完成させる前にそれぞれ動き出した。

轟音と共に火蓋が切って落とされる。

「全方位からだ！？」

土御門は焦っていた。まさかいきなり全方位から仕掛けてこようとは思わなかったのだ。

「私も出ようかしら？」

「いや、結標は待機だ。お前を失うのはこちらにとってマズイからな。」

「そう。」

『ここはアイツらに任せるしかないか…。』

レベル5を含む彼らを信じるしかなかった。

「始まったか。」

首相官邸の一室で戦闘開始の報告を受けた萩乃が呟くように言う。
これで後戻りはもうできない。

まもなく夜を迎える学園都市の外周で巨大な轟音と粉塵が巻き起こった。

E p . 2 4 開戦の狼煙（後書き）

次回鳴神の能力が…！

Ep・25 突然の惨劇（前書き）

目次に 章とつけてあるのカッコイイなあと思うんですがやり方がいまいちわかりません；
誰か教えてください（T|T）

Ep・25 突然の惨劇

ドンドンドンドンドンドンドンドン

学園都市西側ゲート付近。すっかり日も落ちた学園都市に似つかわしくない銃声が響き渡る。

当麻、美琴、軍覇は只今絶賛交戦中だ。

「不幸だあああ!!」

戦場にこだまするツンツン頭の絶叫。

美琴に励まされた当麻は気合いを入れ直しいつちよやってやるか、と意気揚々と待ち構えていた。

……そこまではよかったのだが現れたのは魔術師などではなく迷彩柄のジャケットなどを着こんだ日本政府の軍隊。

よって当麻にとって唯一活躍できる可能性が残されていた“幻想殺し（イマジンプレイカー）”も全く役に立たない。実弾相手に右手をとおうものなら体ごと蜂の巣にされていることだろう。

ゆえに、彼は軍隊と戦おうなどとは思わない。いや、そんな危険な行為に走ろうとは思えない。

「ムリだって!!こんな俺には荷が重すぎますって!!」

なんだか涙目になってきた当麻は外壁の隅にあった窪みに滑り込む

ことでなんとか蜂の巣にされることだけは防いだ。

そこから少しだけ顔を覗かせて戦況を見守る。

『はあ…、御坂が戦ってるってのに情けねえなあ俺…。』

交戦中の美琴や軍霸を見て自分の無力さを痛感する。

「はあああ!!」

美琴を取り囲んでいた兵士たちが電撃によってなぎ倒されていく。

「なんだこのガキ!?これがあの超能力ってやつなのか!？」

現場に派遣されている兵士であっても学園都市の詳細な情報は教えられていないらしい。

「怯むな!!相手はたかだかガキが二人!!こつちには500人も
の人手がいるんだ!!」

この軍隊のリーダー格であるらしい男が声を張り上げ指示を出す。

「まずはあの白いガキを倒せ!!」

軍隊たちがまず目をつけたのは電撃少女ではなく未だ外壁の上で仁王立ちで彼らを見下ろしている削板軍霸だ。

兵士たちは軍霸に向かってライフルやショットガンなどの銃口を向け、そして引金をひいた。

ドンドンパンパン!!

無数の弾丸が軍覇に突き刺さりそのまま仰向けに倒れ込む。

「削板!?!」「ちよつと!?!」

「やったか!?!」

何の抵抗もなく撃たれた軍覇を心配する当麻と美琴。
それに対して簡単に排除できたことに高揚する軍隊。

それからきつちり3秒後 ……

「むううん!!」

蜂の巣にされたはずの軍覇がガバツと勢いよく起き上がった。

「なに!?!」

困惑する軍隊をよそに何事もなかったかのような軍覇が喋り始める。

「無抵抗の人間にいきなり発砲か。根性がねえなあお前ら。そんな大人には絶対なりたくねえぜ。」

タンツと高さ5mの外壁から飛び降り、何事もなかったかのように着地し立ち上がる。

その行動に軍隊だけでなく美琴や隠れていた当麻までも驚きを隠せ

ない。

「あんた、一体何者なわけ？」

「言つたる超電磁砲、俺は削板軍覇、第7位のレベル5だ。」

「いやそういうことでなく……」

美琴は軍覇が撃たれても平然と立ち上がりたり高さ5mから飛び降りても何とも感じていないその異常なタフさの理由を知りたかったのだが、軍覇は当たり前のように解りきった情報しか言わない。

「……つと無駄話はおわりだ、くるぞ。」

軍覇と美琴の周りには完全武装した兵士たちがズラリと取り囲み今にも攻撃してきそうな雰囲気は滲み出ている。

「そうみたいね。」

「やられるなよ？」

「誰が……！」

そう言つて二人は左右へ走り出す。それに反応した兵士たちは分散した二人を再び取り囲み徐々に輪を小さくしていく。

「おらあ……！」

軍覇が思いきり地面に拳を叩きつけると地面が砕け破片が周囲の兵士たちへ襲いかかる。

「ぐわあ!？」

「気をつける!!こいつも能力者だ!!」

「気をつける。今日の俺はちょっとスゴいぞ。」

そう言った軍覇は突如兵士たちが取り囲んでいた輪から姿を消した。

「!?!一体どこに」

「超すごいパンチ!!」

ドゴオオン!!

「ぐわあああ!？」

見えない衝撃波によって30人ほどがまとめて吹き飛ばされ学園都市を囲む外壁へ激突、意識を手放していく。

「まだまだあ!」

第7位の蹂躞は続く。

それを視界の隅で見ていた美琴。

『むちゃくちゃねアイツ...』

圧倒的な戦闘能力に舌を巻く美琴。それほど軍覇は強い。

「くらえ!!」

中学生の少女へ躊躇いもなく発砲する兵士たち。

「普通の中学生の女の子への対応じゃないわよねえ…」

発砲された弾丸を地面から展開した砂鉄が切り裂いていく。

「なっ!? 砂鉄!？」

「わかったところでどうしようもないわよ!!」

砂鉄の剣を作り出した美琴は兵士たちがもっている銃などを正確に切り裂き使用不能にしていく。

「く! 仕方ない…!! オイ! アレを使え!!」

1人の男が後ろに待機していた兵士たちへ指示を出す。
すると森林の茂みから何やら大きな鉄の塊が姿を現す。

「ガキ相手にこんなもの使いたくなかったが仕方ない。覚悟しな!!」

現れたのは大砲という名の近代兵器。
それを美琴へと照準を合わせる。

「まったく…」

美琴は呆れたように兵士たちを見回した後、ポケットから一枚のコインを取り出す。

「は！！そんなもんでどうしようってんだ！！まさかこの大砲と張り合おうってのか！？」

高笑いするリーダー格の男など眼中にないといった様子で美琴はコインを弾く。

ピイン

という音とともにコインは宙高く舞い、やがて重力にまかせて落下を始める。

「私の異名、知らないなら教えてあげるわ。」

「くらえ！！」

大砲から砲弾が発射されたのと同様、美琴が落ちてきたコインを撃ち出す。

電磁加速が加えられたコインは眩い光を放ちながら音速の3倍以上で飛んでいき、大砲が発射した砲弾を一瞬で貫き、更には大砲へと着弾。

もたらせるのは言っまでもなく爆発。

ドガアアアン！！

「うわあああ！？」

「ギャアアア！！」

爆発によって融解した超高温の破片が周囲の兵士に降り注ぐ。

リーダー格らしい男はただただ呆然としている。

「嘘だろ…？今の、155mm砲と同レベルの威力だぞ…！？」

「超電磁砲。それが私の異名よ。」

燃え盛る大砲を横目に美琴がリーダー格の男に告げる。

「化物か…！？」

「平気で女の子を殺そうとする奴に化物って言われても説得力ないわよ。」

「くっ…！！！」

美琴がリーダー格の男を気絶させようと電撃を放とうとした瞬間

……

ドオオオン！！

突如巻き起こる爆発。

一瞬美琴はさっきの大砲が二次爆発を巻き起こしたのかと思ったが
すぐさまその考えを撤回する。

なぜなら、その爆炎の中から1人の人間が現れたからだ。

明らかに軍隊とは思えない服装をした女。黒いローブを着た金髪の
女が美琴のほうへと歩み寄ってくる。

「ほんと使えないわね一般人なんて。」

見た目20代のその女性は周辺に倒れている兵士たちを蹴りながら
言う。

「結局私たちが殺るはめになるんだから。」

笑いながら美琴を見る。

「アンタ、超能力者なのね。」

瞬間、美琴は急激な悪寒に襲われる。

『何……！？コイツ、兵士じゃないのは分かるけど何者なの？』

「私のターゲットかしらねえ…?」

女はローブから一枚の写真を取り出す。

「ンッフ、当たりね。」

その写真には美琴の姿があった。

当麻はその女が美琴へ近づいていくのを見て嫌な予感がしていた。

『まさか…アイツがロシア成教の…!?!』

兵士たちとは明らかに違う服装、金髪。

そして当麻の嫌な予感は、女が懷から写真を取り出した瞬間に的中することとなる。

「あなたが私のターゲット、死んでね?」

「やっぱりか!?!」

物陰から飛び出し御坂のもとへと走っていく当麻。

御坂は突然の出来事にまだ頭がついていかないようだ。

次の瞬間 ……

美琴の体を、女が手を触れることなく切り裂いた。

「御坂ああああ!!」

美琴の体は力無くその場に倒れ込んだ。

「なんなんだコイツらは!？」

学園都市北側ゲート。そこで戦闘していた兵士が驚きを隠せない。日本政府からは学園都市には超能力を使う奴らがいるとは聞かされていた。

油断していたわけではないが今まで超能力なんてのは信じていなかったし、せいぜいスプーンを曲げる程度のことだと思っていた。

だが今日の前にいる超能力者らしい子供たちは、銃弾などにまるで臆していない。

当たらないのだ、銃弾が一発も。

「便利なもんだなお前の能力は。」

「帝督の未元物質には負けるけどね。」

周囲から銃弾の嵐に晒されているというのに目の前の少年二人は呑気に話をしている。

「くそがあー!!」

痺れを切らした兵士の1人がライフルを放り投げロケットランチャーをぶっぱなす。

「子供に向けて撃つていいモノじゃないよね。」

鳴神が腕を正面につきだすと能力を発動、発射された弾丸は軌道を変えてロケットランチャーを抱えた兵士へと舞い戻る。

「ギャアアア!!」

爆発とともに響く絶叫。近くにいた兵士たちも何人が巻き込まれたようだ。

「僕の軌道支配オービットの前で飛び道具は無意味だよ。」

学園都市第6位、

鳴神葉次オービットの能力

“軌道支配”

銃弾はもちろん自然に起こる風や光でさえも軌道を変えてしまえるという能力。

これによって放たれる銃弾も葉次の能力の効果範囲半径4 mに入っていないと自由軌道が操作できるわけである。

ちなみに昨日ホテルで葉次がいきなり現れたように見えたのは室内灯の光の軌道を自分から反らし屈折によって周囲から自分を認識できないようにしていたからだ。

「なんでてめえが6位なのか疑問だな。」

「それは企業秘密つてやつだよ。」

軽口を叩き合う二人はその後兵士たちを殲滅、わずか10分足らずの出来事だった。

Ep・25 突然の惨劇（後書き）

鳴神の能力は半ばチートです。

Ep. 26 殲滅白書

<Annihilation> (前書き)

なかなかの急展開ですね。

では楽しみ下さい。

学園都市をぐるりと囲む高さ5m、厚さ3mの外壁、その東側のゲートで彼女たちは日本政府の軍隊と交戦中だ。

「超吹っ飛べ!!」

『アイテム』所属の少女、絹旗最愛は銃口を向けて発砲している兵士たちがけて一直線に突っ込み、その拳をただ振るう。

それだけのはずだが、彼女の能力“オフエンスアーマー室素装甲”によって強化された拳は破壊力抜群、喰らった兵士は呻き声をあげながら倒れてしまった。

「雑魚ですね、超話になりません。」

兵士たちはその1人の少女に歯がたたない。

「くそ！こいつらが超能力者ってやつか！1人で行くな！！多人数で囲んで潰せ！！」

普通の少女相手にこんな台詞を吐く大人がいればまさに凶悪な犯罪者だが、そんな台詞を聞いても絹旗は微塵も同様しない。

彼女は暗部組織、それかなり上位の組織に身を置いているのだ。殺し合いなど日常茶飯事、珍しいことではない。

「麦野、超どうしてくれましょうか。」

絹旗は後ろで腕を組んで静観していた麦野へと視線を向ける。

「アンタに任せるわ。」

麦野の隣では天上院が再びイスに腰かけてどこから取り出した洋書を読んでいる。

なぜこの二人が闘っていないのか、なぜ狙われないのか、時は少々遡る……

およそ10分前、

彼女たちの前に現れた軍隊。最初は麦野たち3人へ一斉に攻撃を仕掛けた。が、絹旗以外は自らの能力を使って銃弾を防いだためこれといった回避行動も取らず立ったままだった絹旗に的を絞ったのだ。

ちなみに麦野は原子崩しを展開し銃弾を防いでいたが天上院がどうやって防いだかと言うと、その能力を使って兵士の何人かを洗脳、相打ちさせたのである。自ら手を下さずとも勝手に自滅していく。十徳ナイフの名に違わぬその能力の便利性だ。

そんなわけで早々に麦野と天上院への少数での攻撃を断念した軍隊は絹旗を最初に潰そうとほとんどの人員を割いて攻撃にあたっているのである。

しかし彼らは気づくべきだったのだ。

絹旗最愛という少女の本質、こと近接戦闘において学園都市有数である彼女の實力に。

「おらあああ！！」

兵士の1人がマシンガンを乱射するそれらは正確に絹旗へと命中しているのだが……

「残念ですが……」

乱射している兵士のすぐ前まで一瞬で間を詰め、拳を溝尾へと叩き込む。

「おげえ！？」

そのまま周囲の兵士を数人巻き込み倒れていく。

「私の室素装甲はマシンガンごとくでは貫けませんので。」

「くそ！！」

兵士の大半がたった1人の少女によって倒されてしまった状況を見て愕然とするしかないリーダーらしき男。

そんな折……

「なあにやあってんだよお……。」

ひどく間延びした声。リーダーらしき男が後ろを振り返ったときには、既に男はこの世にいなかった。

「「「!?!?!」」」

麦野、天上院、絹旗が一斉に視線を向ける。先程までリーダーらしき男がいた場所には首から上が消し飛んだ人間。だった。物体、隣には真つ赤なローブを着た若い金髪で煙草を加えた女が佇んでいた。

「誰だアイツ？」

不審に思った麦野がスツともたれていた外壁から離れ臨戦態勢に入る。

「少なくともさっきまでの奴らとは違いますわね。」

天上院も洋書を閉じてイスから立ち上がる。

「超誰ですか？」

絹旗に聞かれた赤いローブの女は煙草の煙を吐きながら答える。

「私はあ、ロシア成教の魔術師い、エグジット「バーナード」お。」

「魔術師……!?!」

「土御門が超言っていたやつですね。」

魔術師と名乗るエグジット「バーナード」は懷から一枚の写真を取り出して3人に告げる。

「こおの中にい、麦野沈利って奴あいるかい？」

「私に何か用か？」

その反応にエグジットは口が裂けるのではないかというくらい笑う。

「そおおか、お前が麦野かあ。」

右手に持っていた写真をクルリと反転させて麦野たちに見せる。そこには麦野の姿。

「てめえの狙いは私ってわけか。」

「ごお名答お。」

「絹旗、下がってな。」

絹旗は天上院のいるゲート前まで後退する。

「殺すぞお。」

「こっちの台詞だクソアマが。」

ドンッ！！

激しい音と共に麦野とロシア成教の魔術師が激突した。

「うじゃうじゃいやがるなア。」

ノアの方舟へと突っ込んだ一方通行は内部にいた大量の魔術師たちを見て笑った。

皆同じような焦茶色のローブを纏い一方通行をジロリと睨む。

瞬間周囲にいた魔術師たちが全員立ち上がり、一方通行へと詰め寄っていく。

『チツ、こんな狭い場所で暴れるには人数が多すぎるな。』

一方通行はポケットに土御門から受け取った通信用の霊装があることを確認して話す。

「オイ海原あ。」

『なんです?』

「この舟ブツ壊せ。」

『お安い御用です。』

バカッ

と奇妙な音をたててノアの方舟がまるで分解されていくかのように壊れていく。

魔術師たちは突然の出来事に理解できないようだ。

「こんなもんですね。」

彼、海原光貴は右手に黒曜石で出来たナイフのようなもの、“トラ
ウィスカルパンテクウトリの槍”を持ちながら崩れていくノアの方
舟を地上から眺める。

「あとは彼の仕事ですね。」

海原は夜の空を滑空する一方通行を見ながら呟いた。

周囲の魔術師たちは一瞬思考が停止したがすぐに状況を把握、一方
通行への攻撃を開始する。

各々が剣や杖、鉄球のような武器を所持している。彼女たちは一斉
に魔術を発動し強化されたそれらの武器から色とりどりの光が発射
されていく。

一方重力に逆らわずに自由落下している一方通行はその色とりどりの
攻撃が迫っているのも気にせず地面に着地してからのことを考えて
いた。

『どオやらこいつら本当に魔術師みたいだな。あんなモン超能力じ
やできねエ。』

ドオン！！

と一方通行が地面に着地しクレーターを作ったのと攻撃が反射され魔術師たちに直撃したのはほぼ同時。

魔術師たちは自身の攻撃を受けて墜落していく。

「こんなモンじゃねエよな？」

未だ空中に漂っている魔術師たちに向かって一方通行が呟く。

「この程度じゃねエよなア！！」

学園都市第1位が圧倒的な虐殺を始める。

「御坂あああ！！」

突如現れた黒いローブを着た金髪の女。

手も触れていないのに御坂の体は切り裂かれた。

「御坂！おいしっかりしろ御坂！！」

当麻が駆け寄り倒れた御坂を抱き抱える。幸いにも息はあった。だがその顔色は悪く、出血量が多いせいかみるみる体が冷たくなっていくのがわかる。

「土御門!!」

『どうした上やん!?!』

当麻の異変に土御門も気づいたらしくすぐに内容を聞く。

「御坂が魔術師にやられた!!すぐに運んでやってくれ!!」

『!!...わかった、すぐに結標を向かわせる。』

ヒュン

と軽い音とともに結標が現れる。

「...これは酷いわね。」

出血の酷い御坂を抱えて結標はレポートし消えていった。

「てめえ...、魔術師なんだな?」

怒りで拳が握り潰されてしまいそうなほど力のこもっている当麻が目の前にいる黒いローブの女に尋ねる。

「キャハハ。そうよ、私はロシア成教の魔術師、カルガンⅡサンクチュアリ。」

「なんで御坂にあんなことしやがった。」

「あらやだ、何も知らないわけじゃないんでしょう?理由なんて解り

きつてるじゃない。」

当麻の質問に馬鹿馬鹿しいといった表情で答えるカルガン。

「…殺す気だったのか。」

「当たり前じゃない。まあもともと、あの子咄嗟に磁場を展開して私の攻撃を逸らしたみたいだからすぐには死なないと思うけどね。」

「上条!!」

騒動に気づいた軍覇がやってきた。

「軍覇…」

「こいつが魔術師ってやつか？」

「あらやだ。」

カルガンが話に割って入る。

「私をそこらにいるただの魔術師だと思わないでよ？」

カルガンは首飾りを外しそれを宙に投げる。すると巨大な剣が現れた。

「私はロシア成教所属、殲滅白書のメンバーカルガンⅡサングチュアリ。戦闘に特化したプロの魔術師なのよ？」

殲滅白書と聞いて当麻には思い当たる節があった。

以前海の家で現れた天使、その媒介となっていたのが殲滅白書のメンバー、サーシャ・クロイツェフだったのだ。

「殲滅白書だと…?」

「あら知っているの? そんなに有名だっかしら?」

「お前らは学園都市に手を出そうとしてるんだな…?」

「くだいわね、初めからそう言っているじゃない。」

「…そうか。」

当麻が真っ直ぐにカルガンを見据える。

「学園都市には手を出させねえ…、ここには大切なやつらがいるんだ。」

静かに、だが確かに芯の通った声が放たれる。

「お前らがこのまま侵攻を続けるってんなら、俺がその幻想をぶち殺してやる!」

「いいな、そいつは根性ある台詞だ。加勢するぜ上条。」

「おもしろいわね、私に勝とうと思っているところがだけど。」

両者は睨み合い、やがて走り出す。
幻想殺しと最大原石、殲滅白書の魔術師が相対した。

Ep. 26 殲滅白書 <Annihilation> (後書き)

魔術側というのはなかなか難しいです；

EP・27 学園都市の強さ（前書き）

そろそろ中盤戦です。

Ep・27 学園都市の強さ

周囲一帯は異様な熱によって包まれていた。

学園都市東側ゲート、学園都市第4位の超能力者（LEVEL5）、“原子崩し（メルトダウナー）”の麦野沈利とロシア成教殲滅白書所属の魔術師、エグジット＝バーナードの交戦によってもたらされたものだ。

麦野は両手から白く眩い光を発し、エグジットは右手に自分の身長の二倍はありそうな長剣を携えている。

「さあすがは学園都市が誇る最高戦力、とでもいったところかあ？」

長剣を肩に担ぎながら麦野に対して称賛する。

「ナメてんのかよ魔術師。」

右手を振りかざしメルトダウナーを放つ。エグジットへ一直線に放たれた攻撃はしかし、彼女に届くことはない。

「チッ！！」

麦野は忌々しそうに舌打ちをする。先程からこの応酬の繰り返しだ。埒があかない。

「どおしたあ？まあさかこんな程度でえ、終わりじゃあないよなあ？」

見下すように言うエグジット。彼女はその場から一步も動いていない。その必要がないからだ。

「こおの剣はあ、霊装“フォーレルスファイア”。敵からの攻撃はコイツの一振りで瞬く間に消滅しちまうって代物だあ。」

「消滅だあ？私のメルトダウナーが簡単に消滅するわけないんだが…。」

麦野が放つメルトダウナー。正式名称は“粒機波形高速砲”。曖昧なまま固定された電子を強制的に操る能力であり、それはその場に留まる性質を持つ。

だと言うのにメルトダウナーはフォーレルスファイアの一振りであっという間に消滅してしまうのだ。

『あの剣をどうにかしないとマズイわね…』

「集中しろよお。」

「！！！」

一瞬の隙についてエグジットが麦野の眼前に迫る。振りかざされたフォーレルスファイアは麦野の右肩辺りをズブリと切り裂いた。

「っがあ…！！！」

右肩から少くない量の血液を流す麦野。切口の深さは5cmにまで及んでいた。

「おやおやあ？そおれじゃあもう右腕は使い物にならないんじゃないかあ

ないかあ？」

楽しそうに剣をクルクルと回しながらエグジットが麦野を見て言う。
麦野は何も言わない。ただ目の前の敵を見据えているだけだ。

「麦野！！」

たまらず絹旗が加勢に入ろうとする。が、

「下がってな絹旗、こいつは私が殺る。」

左腕を出して絹旗を制す。

絹旗はそれを見て渋々ではあるが足を止めた。

「いいのかあ？せえつかく加勢に入ってくれるやつがいたというのに。」

「ナメンじゃねえぞババア。勝負はこれからだろうが。」

麦野のはポケットから何かを取り出す。トランプのようなそれを宙に放り投げ、タイミングを見計らってそれにメルトダウナーを放つ。放たれたメルトダウナーはソレを通して無数に分岐し、様々な角度からエグジットへと襲いかかる。

「むう……！？」

「シリコンバーン拡散支援半導体、弱点に対策を講じるのは当然だろうが。私を舐めるなよクソババア。」

いくらあの剣が攻撃を消滅させると言っても当たらなくては意味がない。

ならば当たらないほど攻撃を浴びせばいいのだ。

ドドドドドドドドドド……

分岐したメルトダウンナーがエグジットを直撃した。
巻き起こる粉塵が周囲を覆い尽くしていく。

ビュオッ！！

巻き起こっていた粉塵が突然吹き飛ばされていく。

「！？」

「やあれやれ……なかなか機転が利くんだねえ……。」

そこにはロープを脱ぎ捨て立っているエグジットバーナードの姿。
さすがに全てを捌くことはできなかったのか所々に火傷があるのが
伺える。

「今のを喰らってその程度のダメージかよ……、魔術師ってのは化物
なのか？」

顔を引き吊らせて麦野が言う。

「なあに言ってるんだ？ 私なんか下っ端もいいところだあ。」

「な……！？」

麦野だけでなく、静観していた絹旗や天上院までもが驚愕を現にする。

それはそうだろう。学園都市の第4位と互角以上に闘える魔術師がただの下っ端だというのだから。

「こおれで少しは分かったかあ？」

凶悪な笑みを浮かべ笑うエグジットが言う。

「お前ら学園都市とお、我ら殲滅白書の力の差がどれほど開いているのかということがあ！」

数瞬、

フォーレルスフィアが敵を切り裂いた。

「これで全部だな。」

「そうみたいだね。」

学園都市北側ゲート、垣根帝督と鳴神葉次はあらかじめ兵士たちを片付け土御門に連絡をとっていた。

「土御門か、こっちは終わったぜ。」

『そっちには魔術師が来なかったのか？』

「は？魔術師？」

『いや、来ていないのならいいんだ。』

「帝督。」

土御門と話をしていた所に割って入る葉次。

「いるよ、まだ。」

「……ハッ」

土御門との通信を切り、気配がするほうへと視線を移す。

「おや、気づかれてしまいましたか。」

現れたのは青いローブを着た黒髪の女。

「誰だてめえ。」

「私はロシア成教殲滅白書所属のシスター、リエラ＝ポーンと申します。」

「魔術師、てやつか。」

「如何にも。ここに垣根帝督という殿方はいいでですか？」

ローブから一枚の写真を取り出して見せる。そこには帝督の姿。

「俺が垣根帝督だ。」

「おや貴方がそうだったのですか。それは失礼致しました。」

丁寧な口調とは裏腹に全身から殺気が放たれているということに丁寧は気づいていた。

「鳴神、お前は手出すんじゃないぞ。」

「はいはい。」

葉次はその場から離れゲート前で座りこんだ。

「よお、リエラつつたか？俺に何のようだよ。」

帝督は解りきっていた。この女から放たれる殺気を見れば言うまでもない。

「分かっているはずですよ？殺しにきたのです。」

「そおかい。」

帝督が微笑む。

リエラは突如円盤のような60cmほどの丸い物体を出現させる。よく見ればその周りは刃のようにするどく研がれている。

巨大なチャクラムとも言ったところだろうか。

「これは“デオガラム”という霊装でして、まあ追尾型の武器とでも言いましょうか。」

「そんなこと俺に教えていいのかよ。」

「問題はありませんよ。死人に口なし、殺すのですから。」

「クハハ」

思わず帝督は笑ってしまった。

それをみたりエラは怪訝そうに顔をしかめる。

「何がおかしいのです?」

「いや、気にするなたいしたことじゃねえよ。」

尚も笑い続ける帝督にイラついたのかいきなりリエラはデオガラムを投げつけた。

「おっと」

帝督はソレを体を反らすことでかわす。

「言っただけですよ、追尾型であると。」

帝督のかわしたデオガラムはそのまま旋回し帝督の背後から襲いかかる。

ニッ

と微笑んだのはリエラではなく帝督のほうであった。

バギーン!!

帝督の背中から展開された純白の翼によってデオガラムは迎撃されて破壊される。

「なっ…!？」

デオガラムはあんな簡単に破壊できる代物ではない。幾重にも重ねられた防御呪文によって強化され、ダイヤモンド以上の強度を誇るのだ。

……それがいとも簡単に破壊された。

「っ…………。」

絶句するリエラ。

「あ？ああ悪い悪い、あれがアンタの必殺技みたいなもんだっただな。」

悪びれもせずリエラに言う。

「バカな！？あれはそんな簡単に破壊できる代物ではないはずですよ!!」

「残念だが、俺の未元物質に、常識は通用しねえ。」

「…………!!」

リエラは背筋に冷たいものを感じた。

『これが、学園都市の頂点…………』

「悪いなりエラ、俺は善人なんかじゃねえから加減なんざしねえ。」
確実に迫りくる死の時。

「……フ、私の實力不足、ということですか。」

「まあそんなとこだな。それともうひとつ……」

純白の巨大な翼がりエラもろとも叩き潰した。
後に広がるのは凄惨な血の海。

「……お前らが思ってるほど学園都市は弱くねえよ。」

ドオン！！

「な……！？」

麦野のメルトダウナーの威力が増している。

「なあんだあ？威力が……？」

「つたく、セーブしてたんじゃ勝てないわよね。」

そう、麦野のメルトダウナーは生存本能がストップをかけているせいで第4位という序列に位置しているが、全力をだせば超電磁砲くらい瞬殺できるのだ。

「私の体もつギリギリまで……！！」

麦野は左腕にメルトダウナーを溜めはじめる。

『これはあまずいなあ、フォーレルスフィアじゃあ打ち消せる容量キャパを超えちまう。』

チヂチヂチ

と集められた光球から音がする。

「消し飛べ!!」

メルトダウナーが放たれた。それはそのままエグジットのフォーレルスフィアに接触、しかし消滅することがない。

「ぐう…やはり容量を超えている…抑えきれん…。」

ボツ!!

メルトダウナーがエグジットもろとも全てを焼き消した。

「キャハハ!!ほらどおしたのぉ?全然当たらないよぉ?」

当麻と軍覇は苦戦していた。カルガン〃サルクチュアリは実体を眩ませる霊装を所持しているらしく、目まぐるしくカルガンのいる位置が変わるのだ。

「くそっ!!」

当麻は闇雲に拳を振り回すが当たるわけがない。

「どこ向いてんのよ!!」

ザシュッ

と当麻の背中が切り裂かれる。

「ぐあ!!」

おそらくこれが御坂を襲ったときの攻撃だろう。

「姿を見せねえなんざ根性のねえ野郎だ!!」

「なんとかできないのか!？」

「そうだな…ちょっと離れてろよ上条。」

言われるがままに当麻は軍覇から離れる。

「オラアアアア!!」

軍覇が思いきり地面を殴り付け、擬似的な地割れを起こす。

ビキビキと音をたてて走っていく亀裂の中で、一ヶ所だけおかしいな地点があった。

そこだけ亀裂がはしっていないのだ。

それを見つけた軍覇は叫ぶ。

「上条!! あそこだ!!」

瞬間当麻は走り出す。強く拳を握りその地点に向かう。

「うおおおお!!」

パキイン!!

当麻が思いきり拳を突きつけると何かが割れる音がしてその先には今までいなかったカルガンの姿があった。

「うそっ!？」

なにが起きたのかわからないカルガンに止めをさすべく当麻は尚も拳を握る。

「喰らいやがれ、これは御坂のぶんだあ!!」

ドゴッ

反撃しようとしていたカルガンにそれを許さず当麻は顔面を思いきり殴り付ける。

数m吹き飛ばされたカルガンはその後動がなくなった。

Ep. 27 学園都市の強さ（後書き）

帝督強すぎた…笑

Ep・28 彼女が舞い戻る先に待つモノへpallameds

「う…」

うつすらと瞼を開く。彼女、御坂美琴は第7学区にある病院のベッドの上にいた。

「っ…」

すぐに思い出されるのは魔術師に手も足も出せずに負けた自分。情けなくて涙が滲む。

「おや、気がついたのかい？」

病室へ入ってきたのはリアルゲコ太…もとい“冥土返し（ヘヴンキヤンセラー）”と呼ばれているカエル顔の医者だ。

「君が運ばれてくるなんて珍しいんだね。傷も軽くはなかった。」

「私はどのくらい寝ていたの!？」

「運ばれてきてから2時間程だよ。」

「ならすぐに…っ!!」

起き上がるうとした美琴の身体を激痛が駆け巡る。あまりの痛みに美琴の顔が苦痛に歪む。

「ムリ言っちゃいけない。君はまだ闘えるような状態ではないんだ

ね。」

「……ここで、私1人がのうのとリタイアするわけにはいかないのよ。」

「その身体で戦場へ戻っても二の舞になるだけだ。それでも行くのかい？」

「それでも……」

脳裏に浮かぶレベル0、無能力者の烙印を押し付けられたツンツン頭の少年。

アイツが闘っているのに、レベル5である私がリタイアするわけにはいかない。

「それでも、私は戻る……！この闘いは、この戦争は！学園都市を、私たちの居場所を守る闘いだから……！」

放たれた言葉には美琴自身の強い意思が込もっていた。

「……そこまで言うのなら、もう止めはしないんだね。」
カエル顔の医者病室の扉を開き、美琴を促す。

「行くがいい、自らの戦場へ。死ぬなよ、死なない限りは助けてやる。」

美琴はカエル顔の医者を背に病院内を走る。病院を出て駐車場まで出たところで通信用の霊装で土御門へと連絡をとる。

「聞こえてる!？」

『その声は、御坂か!？』

「時間がないの、すぐに私をあそこに移動させて!」

『身体はいいのか!？』

「こんな程度で私が根を上げるわけじゃない。」

『…わかった、すぐに結標に移動させる。』

……ヒュン

と御坂は駐車場から姿を消した。

傷付いた身体がすぐに癒えるわけがなく、身体を駆け巡る痛みに顔をしかめてしまう。それでも、
彼女は戦場へと舞い戻る。

「やはり殲滅白書と言えどもただの構成員では学園都市の最高戦力を倒すことはできんか…。」

学園都市より遥か遠くの地、ロシアの教会からそう呟くのはニコラ

イラストイ。

彼は通信用の霊装を用いて学園都市での戦闘の様子を眺めていた。

「やはり、アイツら」を連れて行って正解だったな。ワシリーサたちを動かすことは出来なかったが及第点という所だろう。」

腰掛けていた高級そうなソファから立ち上がりニコライはうつすらと微笑む。

「アイツら」ならばあるいは……」

手に持っていた殲滅白書の構成員が記載されている古紙とは別に取り出された羊皮紙。

そこには……

殲滅白書暗殺専門独立部隊

“ 壊滅将隊 (palamedes) ”

桁違いの実力者が学園都市へ迫る。

Ep. 28 彼女が舞い戻る先に待つモノへ *palamedes* (後書き)

次回本格戦闘!!

E p・29 復活の超電磁砲（前書き）

神話などという分からないものに手を出してしまったが故に今調べ
ております（汗）

では楽しみ下さい。

Ep・29 復活の超電磁砲

学園都市南側ゲート、その周辺にはバラバラに分解された船のような残骸が辺り一面に散らばり、ロシア成教のシスターたちは皆一様に地面に倒れていた。

その中心に立つ人物。

白髪で紅眼の少年、一方通行は首筋あたりにある電極へと手を伸ばしスイッチを切った。

「ハッ、こんなモンなのかよ。」

首をゴキゴキと鳴らしながらゲート入口まで歩いて戻っていく。彼に傷は一つもない。返り血さえも付着していない。一方通行の反射がそれを許さないのだ。

「お疲れさまです。」

ゲート前で一方通行の戦闘を静観していた海原光貴が言った。

「こんな程度なのかよ魔術師ってのはよお。」

「ロシア成教の戦力はこんなモノではありませんよ。」

魔術師である海原が一方通行の意見を否定する。

「ロシア成教には殲滅白書という戦闘専門の魔術師もいますし、ロシア成教でも存在が秘匿されている部隊もありますから。」

「ハッ、ならさっさと来てもらいたいもンだがなア。」

そんな軽口を一方通行が放ったのといきなり背後で轟音が鳴り響いたのとはほぼ同時だった。

「あア……？」

轟音がした方を振り向くとそこには直径5m程のクレーターができしており、その中心に1人の男が立っていた。

「……どうやら来たみたいですね。」

海原の表情が若干強張っている。

それを見た一方通行は今日の前にいるのがただ者ではないということとを悟る。

『少しは骨のあるヤツらしいなア。』

「全く、いきなり上空から落とすのは止めてほしいものだな。」

クレーターから出てきた男は筋肉質で大柄、漆黒のインナーとパンツを身に付けている一方で頭髮は服装と反比例するように真っ白だった。

「てめエも魔術師か？」

「如何にも、我輩は壊滅将隊《palamedes》のメンバー、ゴード＝ライムラン。」

「壊滅将隊！？」

反応したのは海原だ。壊滅将隊とはロシア成教でも知っているのは司教クラスの人間だけであり暗殺専門の独立部隊だ。壊滅将隊は7人のメンバーと1人のトップで構成されており、トップはロシア成教の大司教と同等の権限を持つ。

その中の1人、ゴード＝ライムラン。

最重要機密として扱われている壊滅将隊の中で唯一海原が知っている人物が、今目の前にいる。

「やはり一介の魔術師では学園都市は落とせぬということだな。」

ゴードは周囲に倒れている魔術師を見て言う。

「貴様がやったのか？」

「だったらどオだつてンだよ。」

「決まっているだろう。」

瞬間、一方通行の前からゴードが消えた。いや、消えたのではない。一方通行がベクトルを操作して弾丸のように突っ込むが如く、一瞬で一方通行の目の前にまで移動したのだ。

「…何もしないのか。」

既に拳を一方通行の鳩尾へと向かわせているゴードが呟く。

「必要ねんだよ。」

ゴンッ！！

響き渡る鈍い音。

一方通行に傷はない。反射を設定しているからだ。

ゴードにも傷はなかった。

「ああ？」

怪訝な顔でゴードを見つめる一方通行。

反射状態の自分を殴っておいて拳が無事なはずがない。

「…フム。」

しかし、やはりゴードには傷はない。殴った拳をグーパーさせて調子を確かめているかのような動作をしている。

「…てめエ、なんで反射が効かねエ？」

「貴様こそなぜ無傷なのだ。」

睨み合う両者。

ぶつかり合う視線を切り裂くように突如上空から人間が降ってきた。

ズズンッ

という音を立てながらクレーターをつくり1人の人間がこの場の雰囲気完全に全く合わない陽気な声で話し出す。

「ゴード、1人だけ先に行くなよな！」

現れたのは中学生くらいの男の子。ゴードとは違い真っ白なローブを身に纏い巨大な剣を背負っている少年。

「到着が遅いのだアルガ。」

「ゴードが早いんだってば!!」

なんだか親子のようにも見えなくはないこの二人。

「よオ。」

その二人のやりとりに痺れを切らしたのか一方通行が低く呟く。

「潰すぞ。」

「…やってみたまえよ。」

うつすらと笑みを浮かべたゴードが答える。

「なら俺はアイツね。」

アルガと呼ばれていた少年が海原の方を向き近づいていく。

『彼も壊滅将隊の一員なんですかね。』

「あ、お前今こんなガキが壊滅将隊なのかよって思っただろ。」

思っていたことをズバリ当てられた海原は黒曜石のナイフをゆっくりと構える。

「ん？アンタ魔術師？それアステカの霊装だろ。」

「よくご存知ですね。」

「なめんなよ。壊滅将隊メンバー、アルガ「ディバイトを。」

アルガは背中に背負っていた巨大な剣を一気に引き抜く。

「こいつはグザファン、アンタのその霊装とは相性悪いかもね。」

身の丈ほどの剣を軽々と振り回し言うアルガ。刃も柄も全てが真っ白な剣はよく見ると刃の中心に細かい魔方阵が幾重にも重ねられていた。

アルガがグザファンを手に海原へと走る。海原は迷うことなくトラウイスカルパンテクウトリの槍をアルガへと向け攻撃を放つ。

金星の光を反射して攻撃するトラウイスカルパンテクウトリの槍を受けたものは例外なく分解される。

しかし、アルガは分解などしていなかった。

「残念！そんなんじゃ俺は倒せねえ……ぜ！！」

横から思いきり振り抜かれる大剣グザファンを後ろへ下がることで避ける海原。

「！？」

グザファンが振り抜かれた軌道に数瞬遅れて現れた正方形の小さな物体。幾つも現れ地面へと落ちていく。

「……なるほど。」

それを見ただけで海原は相手が分解されていない理由を知った。

「……構築、ですか。」

「お、やるねえ。今のだけでグザファンの術式を見破るなんて。」

構築――

トラウイスカルパンテクウトリの槍の分解とは対となる性質。

「さっきの一撃も構築によって防いでいたわけですか。」

「そおだよ、その槍が分解の術式を組み込んでるのは知ってたから自分の前にグザファンでどうでもいい物質を構築して身代わりにしただけ。」

海原にとっては最悪と言ってもいい相手だろう。いくら分解しようにもいくらかでも構築されてしまう。消耗戦となるのが目に見えている。

「…厄介ですね。」

「厄介程度で済むと思うなよ!!」

いきなりアルガが自分の真横の何もない空間を切り裂いた。

「…!!」

海原は目を疑った。

「そんなことまで出来てしまうわけですか…。」

空間から構築されたのは神話上の生物。

“キマイラ”

「こんな程度で驚くなよ。」

アルガはそう言うと今構築したばかりのキマイラをグザファンで切り裂いた。

「!?!」

海原には理解ができない。

バキバキッ

何かが割れる音がしてキマイラの顔がバツクリと割れる。

その顔から現れたのはキマイラ。

だがさつきよりも小さい。

「構築したモノから再び構築するとちっちゃくなっちゃうのは難点
なんだけどさー、その代わりに分解できなくなるんだよね。」

「!！」

猛進するキマイラに黒曜石を向けるのを止めて全力で回避に移る海原。

先程まで海原が立っていた場所は地面がキマイラによって抉りとられていた。

「さあ…、キマイラに噛み殺されたい、それともグザファンで斬り殺されたい…？」

少年とは思えない程に邪悪で暗い笑みが海原を見つめていた。

「こいつ、殲滅白書って言ってたよな。」

当麻が目の前でのびている魔術師、カルガンⅡサンクチュアリを見
て言う。

「知ってんのか？」

隣に立っている軍覇が当麻に聞く。

当麻が思い出しているのは以前インデックスと一緒に家族と会いに行った時のこと。

あの時は殲滅白書の所属と言っていたミーシャ・クロイツェフ（本名はサーシャ・クロイツェフ）が天使の力を行使して“一掃”を不完全ではあったが発動させた。

「まさかアイツらも来てるってのか…!?」

彼女たちの事情は知らないが、闘いたくないと当麻は思う。

「アイツは来ないよ」

「…!!」

突如として聞こえた声に当麻と軍覇は声の出所を探す。

声がしたのは学園都市の周囲をぐるりと囲む外壁の上だった。

そこで座って足をぶらぶらさせているのは首まであるジャケットのフラスナーをあげたり下げたりしている女。なぜかそのジャケットは首まであるのに丈は極端に短くヘソが見えている。下は細身のパンツにブーツ、全て黒で統一されている。

まったく魔術師に見えない女を見て当麻は開いた口が塞がらない。露出度が高すぎるのだ。

ジャケットの袖はなぜか肩のところだけが切り取られているしパンツにもいくつものスリットが入っている。

「アナタが幻想殺し（イマジンブレイカー）ね？」

タンッ

と軽い音をたてて外壁から飛び降りる。

高さ5 mから飛び降りたとは思えないほど柔らかい着地だ。

「…お前も魔術師なのか。」

「ご名答 壊滅将隊所属の魔術師、ウィディン＝ルーレット お前を殺しに来たぜ」

バチーン

と片目をつむってウインクするウィディン。このノリはいかがなものだろうか。

「壊滅将隊…？」

当麻が怪訝に思ったのはそこだった。

さつき相手にしたのは殲滅白書という部隊であり、壊滅将隊などという部隊ではない。増援にでも来たのだろうか。

「しっかしまあ、ホント役に立たないわよねえコイツら。」

側で倒れていたカルガンを一瞥しウィディンは溜め息をつく。

「…お前ら、仲間じゃないのか？」

「は？仲間？私が？コイツと？やめてよそんな冗談！！私がこんなのと仲間なわけないじゃん！！」

笑いとともにウイディンは倒れていたカルガンの頭を蹴り飛ばす。

「なっ…！？」

当麻は突然のことに理解できなかった。

なおもウイディンはカルガンを蹴り続ける。

「ほんつと止めてほしいわね。私が！こんなやつと！同類みたいに言うのは…！」

ドゴッ

最後に強烈な蹴りをカルガンの鳩尾へと放ったウイディンはスッと当麻と軍覇の方へと向き直る。

「アナタは幻想殺しだけどアナタは…ああ、アナタ^{ナンバーセブン}最大原石ね？」

軍覇を見ていたウイディンは思い出したように言う。

「フフ、幻想殺しに最大原石、私ってばツいてるわ」

「…お前、何にも思わねえのかよ…。」

「は？」

「アイツはお前と同じロシア成教の魔術師なんだろうが…！なんであんな蹴り飛ばすようなことしてんだよ…！」

「だから言ったじゃん、あんなの仲間でもなんでもないっつーの。」

彼女たち壊滅将隊にとって、ロシア成教という枠組みはあっても仲間という概念は存在しない。

あるのは実力者のみが生き残る弱肉強食な世界。仲間などという甘ったれた意識は持ち合わせていない。

「もともとコイツと私たちとは格が違うのよ。」

ギリッ

当麻が奥歯を噛み締める音がした。

当麻にとつたたとえ敵であつたとしても目の前であれだけの光景を見せられては怒りを覚えて当然だ。

しかも当人はまったく悪びれてもいないのだから。

「…根性のねえ野郎だな。」

隣にいた軍覇も気に入らないのか額に青筋をたてている。

「何？怒ってるわけ？意味わからないわ、やっぱりお子様ね。」

妖艶な笑みを浮かべるウィディン＝ルーレットの前に、当麻は右拳をきつく握りしめ、軍覇は羽織っていた特攻服のような真っ白な学ランを脱ぎ捨てた。

「…いいぜウィディン、お前らがそうまでして学園都市を襲おうってんなら、まずはその幻想をブチ殺す！！」

「てめえに見せてやるよ、本物の根性ってヤツを！！」

「私に勝てると思ってるわけ？あり得ないんだぜ」

直後、当麻と軍覇がウィディンへと一直線に走り出す。

ウィディンがそれに応戦しようと両手を上げたとき、

- - - 眩い光を放ち轟音を轟かせる閃光が当麻たちとウィディンの間を横切った。

当麻は今日の前を横切ったモノの正体を知っている。

自分にいつも喧嘩をふっかけてくる常盤台中学の女の子。

学園都市第3位に君臨する最強の電撃使い（エレクトロマスター）
が使う必殺技
……

“ 超電磁砲 ”

あり得ない、と当麻は思った。

彼女は先の闘いで重症を負って戦線を離脱したはずだ。

おそろおそろソレが放たれたであろう方角へと目を向ける。

「 ったく、私を置いて勝手に始めてんじゃないわよ。 」

まごうことのない、
御坂美琴がそこには立っていた。

E p . 2 9 復活の超電磁砲（後書き）

グザファンは神話に出てくる道具です。

Ep. 30 天使の力（テレズマ）（前書き）

なかなか話が進みませんね；

Ep・30 天使の力（テレズマ）

上条当麻は未だに自分の目が信じられなかった。

目の前を通過した閃光、“超電磁砲”。

それを放つ少女は先程重傷を負って戦線を離脱したはずだ。
だが、目の前には身体中から紫電を走らせる少女、御坂美琴が立っていた。

「まったく、私を置いて勝手に始めてんじゃないわよ。」

「御坂!？」

「なによ人を幽霊みたいに。」

「いやだってお前……」

「あの程度で私がやられるとも思ってたわけ？」

こちらに向かつて美琴は何事もなかったかのような動きで近づいてくる。

だが、当麻は気づいていた。いつもの歩き方に見えてもどこかを庇っているのか動きがぎこちない。

普通の人なら気付かないだろうそのわずかな違和感を常に追い回されている当麻は感じとっていた。

だが彼は彼女には何も言わない。彼女が帰ってきたのは自分の意志

だから、自分が首を突っ込むのはお門違い。

『…強がってるのが見え見えなんだよ。』

フツと当麻は軽く微笑み、美琴の頭にポンと手を置いた。

「え？え！？」

その行為に顔を真っ赤にする美琴だが当麻は気づいていない。

「今度は倒れるんじゃないぞ、御坂！！」

「誰に言ってるのよ！！」

当麻と美琴が前方にいるウィディンを睨む。

「あれあれ？超電磁砲は戦闘不能って報告受けてただけだなあ
」？
」

どこかおどけた調子で言うウィディン。

「報告に誤りがあったということなのでしょうね。」

「「「！！？」」「」

当麻、美琴、軍覇の3人は唐突に聞こえた声に振り返る。

「おっそいのよシオン。」

当麻たちの背後に立っていたのは身長190はあるだろう長身に肩

につくつかつかないかというオレンジ色の髪の毛、紺色のロシアの貴族が身に纏うようなスーツ。

気品が漂うその風貌とは裏腹に放たれる確かな殺気。

「…お前も壊滅将隊ってやつのメンバーなのか？」

当麻の問いにウィディンからシオンと呼ばれていた青年が答える。

「ウィディン、我々の存在は秘匿されるべき事なのですよ、口を慎んでいただきたいものです。」

「ごめんごめん」

「さて、申し遅れましたが壊滅将隊所属、シオン＝ラファールガと申します。」

丁寧にお辞儀しながら言うシオン。
それに反応したのは美琴だった。

「アンタ、本物の貴族なんかでしょ。」

ピクッ

とシオンの身体が反応する。

「その服装といい今のお辞儀といい、一般人が適当にできるものではないわ。」

「…よく気づきましたね。」

ゆっくりと顔を上げ美琴を見るシオン。

「私を誰だと思ってるわけ？常盤台の生徒なのよ？礼儀作法から服装の合わせまで完璧なのよ。」

「…なるほど。」

シオンが薄く微笑む。

「上条、超電磁砲。」

軍覇が二人に向かって言う。

「アイツは俺がやる。お前らはあの女を頼む。」

先程上着を脱ぎ捨てた軍覇は既に臨戦態勢へと移行している。

「貴方が私の相手で間違いないのですか？」

「ああ、俺が相手だ。」

シオンの問いに答える軍覇。

「最大原石ですか。世界で50人程度しかいない原石の頂点、その実力見せてもらいましょう。」

シオンは自分の首に着けていたネックレスを外し右手に持ち、それを宙に投げる。

ゴオッ！！

という音と共に衝撃波が軍覇を襲う。

「っ！！」

真正面から衝撃波をモロに食らった軍覇はそのまま3m程吹き飛ばされる。

「今のは“ストラトフの首飾り”という霊装でして、まあ術式自体は簡単なもので対象に衝撃波を放つぐらいのものでしかありませんが…なかなか威力はあるでしょう？」

シオンが倒れている軍覇に向かって言う。先程宙に投げたネックレスはいつの間にか首元にぶら下がっている。どうやら直接破壊しない限りは再生するようだ。

「…効かねえ。」

ムクッ

と軍覇が立ち上がる。体には外傷は見られない。

「効かねえな、魔術師。お前の攻撃には根性がねえんだよ。」

「根性だけで片付けていいものか甚だ疑問を感じますね。」

「ボサツとしてんなよ！！」

突如軍覇がシオンの視界から消え、一瞬で背後へと回り込む。そのままの勢いで拳を握り攻撃態勢へ。

「速いですね。」

軍覇の拳がシオンに当たることはなかった。

「!?!」

気がつけばシオンは軍覇より10m程離れた所に立っている。

「...お前も速いな。」

軍覇がシオンを見つめ呟く。

「言っておきますが、私は壊滅将隊の中では最速ですよ。」

「ほお。」

軍覇がより好戦的な表情へと変貌する。

「私は水星を司るオフィエル（Ophiel）テレズマの力を行使することが出来ますから。」

軍覇には全く理解できない単語ばかりがシオンの口から紡がれる。

「オフィエル？テレズマ？わけわからねえし知ったこっちゃねえな。」

「そうですね。まあそうですね、惑星1つ相手どるとでも考えてください。」

そう言うとシオンは徐に小さな小瓶を幾つも取り出す。中には何か液体が入っているようだ。

「なんだそりゃ。」

「水銀、というのはご存知ですよね。」

小瓶の1つを軽く振って軍覇に見せる。

「まあこれは私の術式には必要なモノですよ。」

「水銀なんざ…」

軍覇が言い終わるよりも速く、シオンは軍覇の目の前に接近していた。

『速え！！』

「こつという風に使うですよ。」

ビシャッ

小瓶の中身だった水銀が軍覇に浴びせられた。

パキパキ

「なに！？」

軍覇の身体を見れば水銀をかけられた箇所が変質しているのがわかる。

「この水銀を浴びせられた箇所は銅へと変質するんですよ。」

「…魔術ってのはなんでもアリなのかよ。」

銅へと変質していく右脇腹を抱えながら軍覇はシオンに再び攻撃を加えようと力を込める。

「うおおおー!!」

叫びとともに切り込む軍覇に水銀が浴びせられた……

「壊滅将隊だど!?!」

学園都市内部で各場所の状況をチェックしていた土御門はその単語を聞いて思わず叫んだ。

「なんなのソレ?」

横にいた結標が聞く。

「壊滅将隊ってのは学園都市で言えば超能力者みたいなもんだ。同じ魔術師でも殲滅白書の構成員なんかとじゃレベルが違う。」

ギリッ

と奥歯を噛む音が聞こえる。土御門としてもまさかロシア成教の暗部がでてくるとは思っていなかったのだろう。

「まずいな…東側はただでさえ麦野が負傷して戦力が削られてるっ

てのに…」

『土御門！！』

突然土御門へと入る連絡。声の主は絹旗だ。

『なんか超妖しいのが出てきたんですが！！』

「…最悪だ。」

苦虫を噛み潰したような表情の土御門はせめて自分の想像がハズレていることを願った。

「チツ、次から次へと…」

肩を負傷していた麦野は傷口を押さえながら現れた男を見る。

不気味な男だった。

大きなテンガロンハットを被り服の色は全て朱色。上のジャケットから下のブーツまで全てだ。

眉毛と下唇にはピアスが二つずつ付けられている。

「…超能力者、カ。」

ひどく機械的な声だった。その問いに麦野が答える。

「そういつてめえはさっきのやつ仲間か何か？」

「某ヲ殲滅白書などト同類視しないでくれ。」

被っていたテンガロンハットをとり丁寧に挨拶する男。

「某ハ壊滅将隊所属、ゼロルド^{テレスマ}ピピン。火星ヲ司るファレグ（Phaleg）の天使の力を扱える人間ダ。」

「はあ？意味わかんないんだけど。」

「超同感です。」

「理解に苦しみますわね。」

「まあ致し方ない、貴様ヲを始末するのが某の任務故。」

「…ふ。」

動いたのは天上院だ。

「おいお前…！」

「アナタは下がってらして第4位さん、この男は私が仕止めますわ。」

「お前闘えるのかよ！？」

「私を誰だと思っていますの？学園都市第5位の超能力者、心理^{メンタル}掌握^{ウツ}ですわよ？」

得意げに言う天上院は一步前に出てゼロルドへと言い放つ。

「貴方のような奇人に学園都市は譲りませんわ。」

「奇人とハ酷い言われようダ。よし、お前から殺そう。」

学園都市最強の精神感応系能力者、心理掌握の闘いが始まった。

「オイオイ何だアイツら。」

学園都市北側ゲート。垣根帝督と鳴神葉次が守るこのゲートにもまた、今までとは違う奴らが現れていた。

「こいつらが超能力者？まだガキじゃねえかよ。」

「ああ、しかもこつちのは女だ。」

「僕は男だ！！」

絶叫している鳴神をよそに帝督が現れた二人を挑発する。

「おーおー何だあ？ここは仮装パーティーの会場かよ。」

ビキ

一人の男の額に青筋が走る。

「…てめえ、ぶつ殺してやるおか…!？」

「やってみろよチンピラが、格の違いを教えてやる。」

「後悔しな！壊滅将隊所属、ビドロ＝マーツィンに喧嘩売りやがったことをなあ…！」

ゴオッ…!

と垣根帝督の末元物質と巨大な質量をもつ何かが激突、周囲に突風を巻き起こした。

「なら僕の相手はアンタか。」

鳴神の前にいるのは帝督が戦っている細身とは違い大柄、いやデブ。

「女と戦うのは気がひけるなあ…」

「男だって言ってたんだろうが…！」

「君僕たちに喧嘩売らないほうがいいよ？僕ら壊滅将隊に勝てるはずがないじゃないか。」

「…言ってくれるじゃんデブちゃん。」

「デ…！？僕はふくよかなだけだ…！」

「どっちでもいいから。」

見た目にいろいろ思うところのある二人は激戦へと身を投じていった。

Ep. 30 天使の力（テレズマ）（後書き）

次回もバトルです。

Ep.31 未元物質&amp;軌道支配VSアタローン&amp;フル(前書

バトル一色です。

「ぶっ殺してやるよおお!!」

学園都市北側ゲート、その一角で垣根帝督と壊滅将隊所属、ビドロ
「マーツインが戦闘を行っている。

「種の恵みをもってこれに代替する!!光となりて的を討て!!」

ビドロが呪文のような言葉を唱えると地面から鞭のような細長い植
物が地面から飛び出し帝督目掛けて突き進む。

「ハッ、この程度で俺を倒せるとでも思ってたのかよ。」

ポケットに手をつ込んだまま向かってくる蘿のような攻撃を見て
嘲笑する。

ドバッ!!

蘿は帝督に触れることなく碎け散った。

帝督の背中から生えている翼の一枚がそれを薙ぎ払ったのだ。

「舐めてんじゃねえよチンピラが。」

「…てめえマジでぶっ殺すぞ…!!」

攻撃が通じなかったことよりも嘲笑されたことに頭にきているビド
ロは次の攻撃態勢へと移る。

「決めたぜ、お前の首搔つ切って踏み潰してやるよ。」

ビドロが手を頭上へと掲げる。するとそこに不思議な流れが発生する。

「俺は土星を司る天使、アラトロン（Aratron）の力を扱テレスマう者——！」

そう叫んだのと同時、いきなりビドロの姿が消えた。

『消えた……？空間移動系の能力を使ったのか？』

帝督が周囲を見回してみるがビドロの姿を認めることはできない。

「面倒くせえマネしやがって。」

『俺の姿が見えねえからって焦ってんのかよお。』

帝督の脳内に直接響くビドロの声。やはり周囲に奴の姿がない。

「ケツ、隠れねえとなんにもできねえチキン野郎が粹がつてんじゃねえよ。」

『吠えてろカスが。てめえは俺の姿が見えねえまま殺されるんだよ。』

「なるほどな。」

『ああ？』

「てめえがバカな野郎で助かったぜ。まさか自分からタネ明かしてくれるとはな。」

『!!--』

「バカだなてめえ、今ので確信したが空間移動系の能力じゃねえな。てことはてめえの姿は俺から見えてないだけでそこに存在してるってことだ。なら話は早えじゃねえか。」

帝督は空気中にただよっている極小の粒子に自らの末元物質ダークマターで生成した物質を混同させ空気中の反射を無効にする。光の屈折を利用して姿を眩ましていた鳴神のような能力であるのならばこれで奴の姿が目視できるようになるはずだ。

……しかし

『…見えねえ?』

末元物質によって支配された空間になってもビドロを捉えることができない。

『どうなって ……』

ゴンッ!!

帝督の思考が追いつく前に後頭部に重たい衝撃が走った。

「グッ…!」

『ギャハハハハ！！残念だったなあクソガキ！！俺は姿を眩ませるわけじゃねえ、本当にその場に“存在してねえ”んだよ！！』

「チツ…クソ野郎が…。」

後頭部に手を当てながら周囲を見回す帝督。さっきのビドロの言葉が気になっていた。

『存在してねえだと？空間移動系じゃねえってのにどうやってここを攻撃してやがるんだ？』

そんなことを考えているとき、不意に帝督は自分の首辺りの異変に気づいた。

そこは今しがた殴られた箇所である。

ざらざらとした感触、冷たく硬い質感。

「…石？」

石だった。

帝督が殴られた後頭部、正確には髪の毛の生え際辺りが石化していた。

『教えてやるよ、土星を司るアラトロンの力は石化と今の消える能力だ！！このままじゃ不様なオブジェが出来上がっちゃうなあ！！』

脳内に響き渡る不快な声に顔をしかめる。それよりもこの状況をどうにかしないと奴の言う通りオブジェの出来上がりだ。

「…どうするかな。」

「ギャハハハハ、一方的な虐殺は楽しいなあ!!」

ビドロは帝督のすぐ後ろにいた。

しかしその距離は絶対的に遠い。

それもそのはず、今ビドロは帝督と同じ空間にいないのだ。空間移動というわけではない。ビドロは帝督のいる空間から土星の力を利用し干渉不能の領域を造り出しているのだ。言ってしまうえば帝督は地球、ビドロは土星に立っているようなものであり、当然先程帝督が未元物質によって確認していても地球外の物質まで想定して演算していなかったため補足できないのだ。

「てめえは黙って俺に殺されてりやあいんだよ。」

ビドロは懷から魔術師に全く似合わない拳銃を取り出す。

そしてその銃口をやつくりと帝督の頭に向ける。

「楽しんでよかったんだが、すっぱり終わらせてやるよ。」

ビドロが引金を引く。

数秒後、その場には硝煙と鉄の匂いが充満した。

横たわる帝督は動かない。

「ふう、なんで攻撃が当たらないのかなあ。」

帝督たちより少し距離をとったところで戦っている鳴神と壊滅将隊の魔術師。

「なんで君は攻撃しても効かないのかな？」

「俺は壊滅将隊所属、月を司る天使、フル（phur）の力を扱う者、ポルティ＝フレンコ。お前の攻撃が効いてないわけじゃないぞ？ただ俺は月の力で痛みが消滅させられるからすぐに回復するだけで。」

「…反則じゃん。」

げんなりする葉次。

そんな彼をよそにポルティはそのふくよかな体型そのままに跳躍、高さ3mあたりまで垂直に舞い上がる。

「えええー！！デブのくせに！！」

「デブじゃないふくよかだ！！」

高く舞い上がったポルティはそのまま重力にまかせ葉次に向かって自由落下。

彼の体重は180キロ、そんなものが重力によってさらに威力が増して襲いかかってきては普通の人間ならば象が蟻を踏み潰すがごとくひとたまりもないだろう。

だが、そもそも鳴神葉次は普通の人間ではない。

落下してくるポルティに照準を合わせ、静かに告げる。

「軌道を確認、質量182kg、速度36km/h、軌道修正。」

葉次の半径4mに入った瞬間、ポルティの巨大な身体はまるで葉次を避けるかのように右側へと落下位置を変えて地面に激突する。

地面から起き上がり服についた土を落としながらポルティは特に痛がる様子もなく葉次に言う。「厄介な能力だなあソレ。攻撃が全部避けられちゃうじゃんか。」

「お互い様ってやつだよ。」

でもさ、

葉次は続ける。

「僕の軌道^{オーバーヒット}支配はただ守るだけじゃないんだよ!!」

葉次は小型のダイナマイトを無数に取り出して瞬時に着火、それをポルティに向かって適当に放り投げる。

「軌道を支配、着弾箇所を上方155cmに修正、落下速度+21km/h。」

そう言うやいなや今まで目的なく落下していたダイナマイトが魚雷のように一直線にポルティへと向かっていく。

「むう!?!」

「すぐ回復するんならそんなことできないくらいに吹っ飛ばすしか

ないじゃん。」

次の瞬間、

ポルティに13のダイナマイトが接触、爆発した……

「ギャハハハハ！！あゝすかつとした！！」

銃弾を頭につけ地面に崩れおちた帝督を確認して土星の領域から現れるビドロ。

目の前には血を流して臥している垣根帝督。

「まったくこのクソガキが、手間とらせやがってよお！！」

ガンッ！！

と帝督の脇腹に容赦なく蹴りを入れる。

「……………あ？」

頭に銃弾を受けて死んだはずの少年。

しかしその少年の手がビドロの足を確かに掴んでいる。

「…やつと捕まえたぞこの野郎…」

「な！？確かにてめえの脳天ブチ抜いたはずだ！！」

予測していなかった事態に焦るビドロ。

「てめえが俺の能力でも干渉できない物質で身を隠してるのは分かってた。俺の脳内にない情報じゃいくらなんでも干渉不可能だからな。だから誘ったんだよ、てめえのその傲慢な態度なら間違いなく殺したかを確認しにくるはずだ。ならその状況を作り出してやればいい。」

「だが！確かに銃弾は…！！」

「残念だが、俺の未元物質に銃弾なんざ通用しねえ。」

何事も無かったかのように起き上がる帝督。その身体から血は一滴も流れてはいない。

「さあ、あとはこの石化をなんとかするだけだ。どうせてめえを殺せば治るんだろ？」

「…！！…ああ、いいぜクソガキ。今度こそ完全にブチ殺してやるよおおお！！」

ビドロが殺気を全身から放ちながら走ってくる。

「チンピラが、俺に勝てると思ってんのかよ。」

またビドロが目の前で消えた。

だが帝督は別段警戒することもなく立ちつくしている。

シュンッ

背後からいきなり現れたビドロが思いきりなぐりかかる。

『殺^とった　！！』

勝負は一瞬だった……

「があ…！？」

地面に叩きつけられたのはビドロのほうだった。
完璧なタイミングだったはず、奴は反応すらできずに殺されるはずだ。

「残念だったなチンピラ。」

「ばが…なあ！？てめえに…俺の感知はできない…はずだ…！！」

「ああ感知なんかしてねえよ、俺の周り数cmに未元物質を展開して擬似的な反射を使っただけだ。」

「なあ…！？」

地面に倒れたままビドロは驚愕を露にする。

「まあそういうことだ。これ借りるぜ。」

ビドロが落とした拳銃を拾い上げながら帝督は言う。

先程ビドロがそうしたように、ゆっくりと銃口をビドロの頭へと向ける。

「俺は善人じゃねえからさ、容赦なんてしねえし情けなんかかけねえよ。」

どこまでも冷たい言葉だった。

「ま…待て…!!」

なにかをビドロが言う前に帝督は鉛玉を返事の変わりに撃ち込んだ。

タンタンッ

乾いた銃声が夜空に響き渡った。

「さて、どうなったかな？」

ダイナマイトを爆発させた葉次は粉塵が晴れるのを待った。

「…うわ。」

粉塵の先に現れたのは見事に上半身が吹き飛び足だけを残した身体。周囲には四散した肉片が生々しく存在感を示している。

「さすがにここまでやれば…ゲッ」

見れば散らばった肉片がポルティの身体を再び形成すべくゆっくりと集まっていく。

「ウソでしょ…。」

ここまでやつてもまだ死なない。一体どこまでやれば死ぬのかわからなくなつた葉次は殺すことを諦めて作戦を変更する。

「軌道支配、対象の軌道を停止。」

葉次が告げると集まっていく肉片がそこでピタリと停止する。自身に及ぶ攻撃の軌道を変更するための効果範囲は半径4mだが自身から放つ場合は最大で11mにまで範囲を拡大することができるのだ。

その効果の影響を受けた肉片はもとの位置に戻ることはなくその場に留まり続けている。

「あとは…っ」と

葉次は下半身が残された場所へと歩いていく。その下半身（断面）にダイナマイトをまるでバースデーケーキの蠟燭のように差し込んでいき、火をつけた。そこから急いで離れる葉次。後ろでは大きな爆発が巻き起こり、残されていた下半身は跡形もなく吹き飛んだ。

「ふう。」

「あ、帝督。」

「おう鳴神。」

「勝ったんだ。」

「てめえ舐めてんだろ。」

「気のせい気のせい。」

北側ゲートの門前に集まった二人は倒した魔術師を横目に再び警戒を始める。

「まったくつくづくお前が6位なのが疑問だな。」

「ん？それはね…？」

意地の悪い笑みを浮かべて葉次は帝督に言う。

「秘密。」

「よしお前を殺して吐かせよう。」

「死んだら喋れない喋れない。」

未元物質と軌道支配、二人の超能力者によって北側ゲートが突破されることはなかった。

Ep.31 未元物質&amp;軌道支配VSアトロン&amp;フル（後書

次回は心理掌握さんのターンです。

Ep・32 戦況は刻一刻と変化する（前書き）

とある？の新OPを見ました。

いや〜いいですねえ。特に『グループ』の4人が揃って歩いている所は暗部大好きな私にとってどストライクでした（　　）

やっぱり原作13巻までなんですな。

テッラのPVはなんだったのか…

まあそんな話は置いておいてEp・32をお楽しみ下さい。

Ep.32 戦況は刻一刻と変化する

学園都市東側ゲート。

学園都市が誇る超能力者（レベル5）の第5位、天上院真紀と壊滅将隊所属、火星を司るファレグの力を行使するゼロルド・ピピンが対峙している。

お互いに未だ動きはない。
が、確かに戦いは始まっていた。

「プラグイン精神接続……か。」

「何ですかソレ？」

負傷して外壁に寄りかかっていた麦野が発した単語に絹旗が反応する。

「アイツが学園都市最強の精神感応系能力者だったのは知ってるでしょう？」

「超知っていますが、メンタルアウト確か心理掌握でしたか。」

「そ、あいつの能力は表向きな戦闘には向いてないんだけどさ。相手の精神と自分の精神を接続したりできるらしいんだよね。」

麦野の発言に驚愕する絹旗。

「それはまさか……!!」

「アイツ、今からあの男の精神のつとるつもりだね。」

＊

『接続完了…、意外とすんなり侵入できましたわね。魔術などという力を持っているのなら防がれるとふんできましたのに。』

天上院が接続したのはゼロルドの神経中枢。ここには人間でいう心、精神があると彼女は考えている。

『さて、とりあえず戦闘不能にでもなつて頂きましょうか。』

見渡す限り真っ白な空間。どこまでいっても果てが見えないその空間を天上院が歩き始めた。

彼女が今探しているのはゼロルドの五感の1つ、視覚を司る場所だ。彼女が接続している間は相手も意識を手放すため動くことはできないが何らかの力によって行動可能になったときに自分の身体を攻撃されては困るため予め戦闘において重要な視覚を始めに潰しておくのだ。

『あつたあつた、コレですわね。』

彼女の目の前にあるのは直径1mほどの宙に浮いた球体。周りの空間が真っ白であるのに対してこの球体は血液のような赤色をしてい

る。

『では早速……』

言っやいなや天上院はその浮いている赤い球体を思いきり引つ掻いた。

ギギギギ

という音と共に球体には傷がつき、つい先程まで赤かったはずの球体は活動を停止したかのように周りの空間のような真っ白な球体へと色を変えた。

この球体を完全に破壊することも彼女はできる。

しかしそれをしないのは彼女なりの優しさ。

いや、『表』の世界に住んでいる故の甘さだろうか。

仮にもしこの場に一方通行や垣根帝督がいたのであれば躊躇なく目の前の球体を粉々に破壊していたはずだ。

だが彼女はただの中学生、たとえ学園都市に7人しかいない超能力者（レベル5）であろうがまだ中学2年生の女の子なのだ。

おそらくこれが戦争であろうが彼女は人を殺めることはしない。

それは同じ常盤台の超電磁砲、レベル0の幻想殺しと同じような考えだった。

……ただし、

彼女は“どちらかと言えば”善人に分類される、というだけである。

『さあ、次はどこを潰して差し上げましょうかしら？』

ニコやかに微笑む天上院。彼女には上条や御坂とは決定的に異なる点が存在する。

彼女は悪人の場合死なない程度であれば何をしてもいいと考えている。

それは善人と呼ぶには些か異常であり、悪人と呼ぶには些か甘い。

故に彼女は常盤台では二年生にして学校内で最大派閥の頂点に君臨し、心理掌握メンタルアウツという能力の二つ名とは別に彼女本人を差す異名をもつ。

“ 善悪不明の女王 ”

そんな彼女は視覚を潰したあと、聴覚を潰すべく探し回っていた。

『ふむ…、聴覚ならばこの辺りにあるはずなのですが…。』

彼女が辺りを見回して探しても、聴覚の球体は一向に見つからない。場所を変えて探し直そうと考えていたとき、不意に声が聞こえた。

『人ノ視覚を潰しておいて聴覚まで潰しにかかるか…、とんだガキだな。』

『！？』

その声に反応して振り返ると、そこにはいるはずのない相手、ゼロルド♠ピピンが立っていた。

＊＊

二人ともが動かない戦いを繰り広げていた学園都市東側ゲート。

しかし不意にその均衡は破られることとなった。気づいたのは二人をずっと眺めていた絹旗だ。

「麦野、超動きがありますよ。」

外壁に寄りかかって土御門と連絡を取り合っていた麦野は気づくのが一瞬遅れてたが、すぐに異変に気づいた。

「…バカな…!？」

思わずそんな言葉が出てしまった。

麦野は第5位の能力をよく知っている。

以前バンクに侵入して調べたことがあったからだ。

それによれば心理掌握が精神接続を継続している間、対象者は現実世界において行動不能となる。と記されており、事実今まで全く動きがなかった。

……のだが、

突然、テンガロンハットを被った男、ゼロルド「ピピンが少しずつ天上院の方へと歩き始めたのだ。

「有り得ないわ……！！アイツの能力はまだ継続中のはずよ……！！？」

「あの男一体何者なんですか……。」

少しずつ、しかし確実に天上院へと近づいていくゼロルドにただならぬ不安を感じた2人がとった行動は1つ。

天上院とゼロルドの間に割って入ることだった。

その行動は暗部に長い間身を置いていた彼女たちにしてみれば考えられない行為であり、また自分でも理解してはいなかった。

「超ありませんね。この私が人助けなんて。」

自嘲気味に絹旗が笑う。

「仕方無いわよ、さつき土御門から聞いたんだけどこの女は重要人物らしいから死んでもらっても困るしね。」

右肩を負傷しながらも好戦的な笑みは崩さない麦野。

現実世界において彼女らもゼロルドと闘うこととなる。

『そんな！？あり得ませんわ！！』

余りの衝撃につい声が大きくなる天上院。

そう、有り得ないのだ。

精神感応系の能力者でもない人間が、精神世界に侵入することなど。

『全く、俺ノ視覚ヲ潰しておいテ更には聴覚まで潰す気なのかヨ…。

』

ヤレヤレと言った表情で言うゼロルド。

彼はこれといった変化も見られず気だるそうに首を回している。

『アナタ、精神感応系の能力でも持っているんですの！？』

『ア？何だそリヤ。そんなもん持ってねえヨ。』

『ならばどうして精神世界に入ってこられるのですか！！』

『アア、ここって俺の精神世界なの力。』

ゼロルドの発言に余計に混乱する天上院。

（どういうことですか…？彼はここが自分の精神世界であることを知らない…？）

『へえそつかそつか。初めて自分の内側見たワ。』

何だか楽しそうに言うゼロルド。どうやら本当にここが何処なのか知らずに侵入してきたようだ。

『一体どうやって…?』

『ン?... まあいいカ、冥土の土産ってことデ教えてやるよ。』

その場にドカツと座り込んで話しはじめる。

『俺ハ火星ヲ司るファレグの力テレスマを行使する人間ダ。その能力は“分離”と“戦闘”。』

火星を支配、司る天使、ファレグ。

この天使はもともと“戦”を司る天使だ。

『“戦闘” ってのハ相手のいる戦場、戦闘スタイルに自由に干涉できる能力、“分離” ってのハおまけみたいなもんデ文字通り自分を分離させる能力ダ。』

それを聞いた天上院は全て納得がいった。

つまり彼は自分の戦場、今はこの精神世界に干涉し強引に侵入することでここを戦場という一種のフィールドにしたのだろう。

それならば自分の意思とは無関係に相手の戦場に干涉するということになるため、彼が先程までここが何処か分からなかったのにも説明がつく。

ちなみに今の天上院には知る由もないが現実世界において麦野と絹旗が闘っているのはゼロルドの精神を二分に分離することで完全な精神接続を完了させなかったために動けるゼロルド本人である。

結果として、

今現在ゼロルド＝ピピンという男は実際に2人存在することになる。

『成程、そういうことでしたのね…。』

天上院は冷静に状況判断するが、正直劣勢と言っていいだろう。

そもそもこの精神接続ができるのは学園都市中を探しても彼女1人しかない。

故にこの精神世界において彼女は他人と遭遇したことがないのだ。そしてそれを計算に入れていなかった現在の彼女は、ほぼ丸腰。とてもではないが勝算は低い。

『さあテ、俺の失つた視覚はお前ヲ殺せば元に戻るのかナ？』

テンガロンハットを放り投げ、目は見えていない筈なのに目を見開き殺気を放つゼロルド。

『やるしかありませんわね。』

覚悟を決め、臨戦体制へと移行する天上院。

二人の距離は凡そ20m、常人では干渉はおろか侵入も許されない精神世界において、心理掌握メンタルアウトとファレグの闘いが始まった。

「…ああ、分かってるつつつてんだろぅがニコライ。しくじりやし

ねえよ。」

学園都市から少し離れたホテルの最上階。その一室で通信用の霊装を使用して連絡をとる1人の青年。

「ハッ、お前俺をナメてんのか？やられるわけねえだろうが。」

腰にまで届きそうなブラウンの髪の毛を束ね、ソファに座りながら言う青年。

「お前は俺を誰だと思ってんだよ。 “神の友”^{ラゲエル}だぜ？」

それだけ言うと彼は一方的に通信を切った。

深く腰かけたソファに座り直し天井を見上げる。

「…神浄…ね。まったくフィアンマの野郎は何考えてやがるんだ。」

壊滅将隊（Palamedes）所属、その頂点。

ロシア成教の大司教と同等の権限を持ち、自らは“神の友”の力を振るう者。

ヴァンフォーレ＝レインロッド

彼の思惑が学園都市を窮地へと導いていく。

Ep. 32 戦況は刻一刻と変化する（後書き）

そろそろ終盤に突入していこうというところです。

E p・33 心理掌握と原子崩し（前書き）

本当は心理掌握の闘いは1話で終わる予定だったんですが能力について考えていたら前回だけでは終わらず、今回にまで及んでしまいました；

では楽しみ下さい

Ep・33 心理掌握と原子崩し

学園都市東側ゲート付近。

そこには巨大なクレーターが幾つもできており、厚さ3mを誇る学園都市の外壁もあちこちが陥没していた。

そんな戦地の中心、ゲート前に『アイテム』のメンバーである麦野沈利、絹旗最愛は立っていた。

二人とも無傷ではなく、麦野は右肩から出血、左足を挫いており、絹旗も左腕をやられている。

「くそつたれが、コイツ化物かよ…。」

忌々しそうに目の前にいる敵、ゼロルドⅡピピンを睨み付ける。

「超規格外すぎます。」

息も絶え絶えといった感じで絹旗が左腕を押さえながら言う。

彼女たちの後ろには天上院真紀、そしてその更に後ろには学園都市への入口、ゲート。

このゲートだけは突破させるわけにはいかない。
そしてこの少女、天上院も死なせてはいけない。

「まったく…、割に合わない仕事だわ。」

「超同感です。後であのアロハシャツに追加料金要求しましょう。」

ジリッ

と二人とゼロルドの距離が縮まる。

近づいたのはゼロルドだ。

「どうしタ？かかってこいヨ。」

両手を広げ挑発するゼロルドに対し、二人は中々攻撃に移ることができない。

しかしここで絹旗が動いた。

「はああああ!!」

勢いよくゼロルドの懐へと飛び込み下からゼロルドの顎を目掛けて
アップーを繰り出す。もちろん室素装甲オフエンスアーマーによって強化された拳で、
だ。
だ。
だ。

「何度やってモムダなんだヨ!!」

ゴキヤッ

拳が潰れる生々しい音が響き渡る。
それは絹旗の右拳が砕けた音だった。

「うっ…うあああアああ!!」

絶叫がこだましその場に倒れ込む絹旗。そこに追い討ちをかけるようにゼロルドが攻撃を仕掛ける。

「ほうら、死ぬなヨ？」

邪悪な笑みとともにゼロルドは倒れている絹旗に向かって右手を突き出す。

ドゥッ！！

瞬間、絹旗が地面にクレーターをつくってめり込んだ。

「ぐあああ…！！」

ベキベキ

と尺骨の折れる音がした。

「大丈夫、折ったわけじゃないヨ？ただ骨を“分離”しただけ。」

絹旗の左腕を踏みつけながらテングロンハットをクルクルと回し楽しそうにゼロルドが言う。

彼の能力“分離”は何も自分だけに作用するのではない。

彼が触れたものであれば好きな数（上限は4）に分離させることができる。

もちろん人体の内部、骨を別々に分離させることもできる。

今しがた絹旗を攻撃したのはコレだ。

「ぐうう…！！」

踏みつけられる左腕に激痛を感じ絹旗が呻き声を洩らす。

「まったク何でこんな所に某が駆り出されなければならんのダ。ポルティにでも任せておけばいいだろう二。」

壊滅将隊内であつてももちろん実力差はある。司る星の特性によつて相性なども変わるため一概に言うことはできないが今ここにいるゼロルド^二ピピンという男は、その壊滅将隊メンバーの中でも上位に入る人間だ。

逆に今会話にでたポルティという男は最低辺にいるメンバーである。

「絹旗!!」

麦野が地面に臥して動かない絹旗を見て声を荒げる。

『くそが…、これじゃじり貧だ…。倒すこともできない、倒してもいけない。勝ち目がないじゃないか…』

そう、

麦野は目の前にいる男を倒してはいけないのだ。

『早く戻つてきやがれ心理掌握!!』

彼女がゼロルドを倒せない理由、それは心理掌握^{メンタルアウト}の能力にあつた。心理掌握が能力を使用し他人に精神接続^{ブレイクイン}する場合、彼女自身の精神も接続されることになる。

もしその状態でゼロルドを倒した場合、ゼロルドの精神に接続したままの天上院の精神は接続解除^{ブレイクアウト}することができず、彼の精神に閉じ込められることになってしまう。

つまり、
ゼロルドを倒すということは、彼女の精神もろとも破壊してしまう
ということなのだ。

ゼロルドを倒すにはまず、天上院がゼロルドの神経中枢から接続を
解除し自分の精神へと戻らなくてはならない。

さらにゼロルドの実力も相まって、ここまで一方的な構図が出来上
がってしまったわけだ。

「どうしタ？お前は来ないの力？」

動かない絹旗には眼もくれず、麦野へと視線を移すゼロルド。

「来ないのなら……こちらから行くゾ」

トンッ

軽い音がした。

そして気がつけば、目の前にまでゼロルドが接近し右腕を突きだそ
うとしている。

「クソがー!!」

麦野も迎撃すべくメルトダウンを放つ。

そして
……

＊＊

『ぐっ…』

ゼロルドの精神世界内、心理掌握こと天上院は大苦戦を強いられていた。

『カカカカ、不様な女。まさか俺がここにくるなんて予想できないよナ』

目の前の男、ゼロルド。ピピンは片手でテンガロンハットをクルクルと回しながらピアスのついた唇をゆっくりと吊り上げる。

（くっ…、完全に計算外でしたわ…。自分の能力に干渉されるなんて）

精神世界において敗北とは“死”ではない。いや、死という概念が存在しない、という方が正しいだろう。

精神世界においての戦闘は、血を流さない。

実体を持っていないからだ。この場にいるのは思念体、所謂魂のようなものであり、敗北とはこの思念体の“消滅”、または自らの肉体への回帰が“不可能”になる事を指す。

これを考慮した場合、圧倒的に不利なのは天上院だ。

感覚神経を潰される危険性はあるが自分の精神世界内であるため回帰が“不可能”ということはないゼロルド。

それに対して天上院は自らの精神世界にいないため五感を潰される危険はないが“消滅”と回帰の“不可能”という二つの危険に晒されることとなる。

……戦況は不利。

だがしかし、戦況は今現在も変化するものである。

『さア、そろそろ消えテもらおう…力…』

精神世界においてゼロルドが感じたのは頭痛。脳の内側がぐちゃぐちゃに掻き回されるような。

『ガ…貴様…某二何をしタ!?!』

突然の痛みに頭を抱えてふらつくゼロルド。それを見て天上院はゆっくりと微笑む。

『…ようやく繋がりましたわね』

『ああ!?!』

『その頭痛の原因の理由は簡単なことですわ。私が脳内に侵入し3、4程重要器官を潰させていただきましたので。』

『!?!』

意味がわからない、といった表情を見せるゼロルドに対して天上院

は続ける。

『アナタ私が精神だけにしか接続できないと考えてございません？私が接続できるのは感情を司る“精神”、思考を司る“脳”、電気信号と五感を司る“神経”の3つですわ。』

先程までとは違い得意気に言い放つ天上院。

『学園都市最強の精神感応系能力がこの程度でやられるわけがございませんでしょう？私は3つの心理を掌握できる人間。故に十徳ナイフとも呼ばれますのよ。』

『でワ…この頭の痛みハ…』

『ご明察。アナタの“脳”に接続して五感へと繋がる重要器官を潰して日常生活に支障をきたすようにしましたの。』

ゼロルドは目の前の少女を甘く見ていた。その結果がこのような不測の事態を招く。彼は察していた、このフィールドでは彼女に勝てない。

『ここハ…仕切り直すでしょう力…』

『？』

訝しげに顔をしかめる天上院の目の前で、ゼロルドは煙のように姿を消した。

『消えた！？…いえ、確かあの男は“分離”と“戦闘”という能力を使って精神に強引に干渉したんでしたわね。ならば今のはその能

力を解除して外へと出ていったということですね』

闘う相手が存在しなくなった以上、彼女がここに留まる理由はない。潰すはずだった五感が見つからない以上、回帰が“可能”であるうちに戻るのが得策だ。

そう思い彼女は接続を解除、自らの身体へと意識を戻していった。

麦野沈利のメルtdownーがゼロルドの腹部に直撃した。

「!？」

「グオオオオオ!!」

先程までとは様子が違う。明らかに足元がふらついているのが分かる。

それを見た麦野は何かに気づき背後に振り返る。

「ハッ、…遅えんだよ小娘が」

「誰が小娘ですって？」

麦野の視線の先には軽口を叩く1人の少女。

天上院真紀が、そこに立っていた。

天上院は麦野の隣に立ち、前方のゼロルドを見据える。

「あれはお前の仕業か？」

「ええ、少し脳の中に侵入して重要な器官を幾つか潰させていただけでしたの。」

それを聞いて麦野は絶句。

こいつ何てこととしてやがるんだ、
という表情を天上院へと向ける。

「本当はいろいろと準備が面倒なのですが今回はそれがいいように働きましたわ」

一頻り話をしたあと、二人はゼロルドへと視線を向ける。

頭を抱え足がおぼつかない所を見ると、どうやら分離していた身体の痛みもフィードバックされるのだろう。

「…クソガ、某、こんな屈辱は始めてダ…」

ドスの効いた低い声で二人を睨み付けるゼロルド。

しかしやはり脳へのダメージは相当なのか、時々身体が不自然に上下している。

だがそれでも壊滅将隊という極秘の組織の人間の意地プライドなのか、彼はその痛みには決して屈しない。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

目の前の的を分離すべく、腕を突き出し突進するゼロルド。

的は直接的な戦闘能力に欠ける天上院だ。
ターゲット

「ナメてんのかてめえは」

しかし、麦野がそれを許さない。

天上院とゼロルドの間に割って立ち、無事な左手をゼロルドへと向ける。

「絹旗のぶんだ、喰らつとけ」

ゴウッ！！

麦野の左手から圧倒的な光量のメルトダウナーが放たれる。

それは今までのメルトダウナーの比ではなく、その光は突っ込んでくるゼロルドをそのまま呑み込み、後には何も残さなかった。

先程までとは一点して静寂に包まれる学園都市東側ゲート。

そのあちこちに大小様々なクレーターや亀裂があるものの、死傷者は出ていない。

「よつと」

倒れていた絹旗を肩で支えながら立つ麦野は土御門へと連絡をとっている。

「オイグラサン野郎、絹旗をそつちに預けるぞ」

『分かった、今から結標が回収にあたる』

「麦野：すみません」

かろうじて意識を保っていた絹旗が麦野に謝罪の言葉を述べる。本来ならばそんなことが言えない程身体中に激痛が走っているはずだ。

「私：超役立たず：でしたね」

麦野はそんな絹旗の頭にポンと手を置き、一言だけ言った。

「後はアタシたちに任せな」

その返事をする前に、絹旗は結標の座標移動ムーブポイントによって第7学区の病院へと搬送されていた。

「アナタは大丈夫なんですか？」

右肩を負傷し腕一本使い物にならなくなっている麦野に対して天上院が言う。

「この程度でダメになるほど私は雑魚じゃないわよ」

フンツと鼻を鳴らして言い放つ麦野。

学園都市第4位と第5位が東側ゲートを防衛する。

「ぶはっ、ゼロルドの野郎殺られやがった」

学園都市統括理事長の本拠地、窓のないビルの“屋上”。
そこに“神の友”^{ラグエル}は立っていた。

「ふむ…北と東は制圧されているみたいだな」

タンッ

屋上から跳躍し、壊滅将隊の頂点、ヴァンフォーレ＝レインロッド
はゲートを破壊するべく向かう。

その先に待つのは学園都市第2位と第6位。
次元の違う闘いが始まるうとしている。

E P ・ 3 3 心理掌握と原子崩し（後書き）

次回

学園都市南側ゲート！！

E p・34 第1位とアステカの魔術師（前書き）

今回ちょっと気合い入れました。

なので少しばかり長いです（＾w＾）

読んでくださっている方々本当にありがとうございます！！

ではE p・34 始まります。

Ep.34 第1位とアステカの魔術師

その周囲には無数の無機質な白い正方形の物質が無造作に辺り一面に転がっていた。

学園都市南側ゲート、その一角で闘うアステカの魔術師、海原光貴と壊滅将隊のメンバー、アルガ「ディバイド」。

『分解』と『構築』という正反対な性質の術式や霊装を使用する二人の闘いは自然に消耗戦へと切り替わっていた。

「アナタは本当に厄介ですね」

「人がせっかく構築したモノごとく分解しといてよく言うよ。アンタのほうが相当厄介だ」

海原の手には黒曜石で出来たナイフ、トラウイiscalパンテクウトリの槍が握られ、アルガの手には霊装『グザファン』が握られている。

（まずはあの大剣をどうにかしなくてはいいかもしれませんが…）

海原のトラウイiscalパンテクウトリの槍とアルガのグザファンでは相性が悪すぎる。海原が分解しようとしてもアルガが構築から更に構築すると1度や2度の分解では分解しきることができない。海原のほうが不利なのだ。

「どうしたんだよ好青年。もう降参とか？」

グザファンを片手でクルクルと振り回しながら海原に言うアルガ。
彼にはまったく焦りの表情は見られない。
むしろ楽しんでいるくらいすらある。

「貴方を倒せば私もゆつくりできるんですがね」

霊装を片手に自嘲気味に笑いながら海原はアルガを見つめる。

「俺を倒す？無理だね」

海原の発言を一蹴して言うアルガ。

「俺は金星を司るハギト（Haggith）の天使テレズマの力を扱う人間。」

グザファンの真っ白な剣が光を灯し明滅しはじめる。

「お前なんか敵う相手じゃねえんだよ!!」

ゴオッ!!

輝くグザファンを横に一振り。たったそれだけの行為で烈風が、構築された無機質な固まりが海原を襲う。

海原はそれを金星の光で反射して分解しようと槍を対象に構える。

しかし、金星の光が反射されることはなかった。

「!？」

突然効力を失ったトラウイスカルパンテクウトリの槍に目をやる。しかしそんな時間を相手が待ってくれるはずもない。

烈風と無機質な固まりが海原を直撃した。

「ガハ……!!」

そのまま学園都市を覆う外壁へ直撃した海原。背骨は軋み、口からはドロドロとした液体が溢れる。

そんな彼を嘲笑うように、アルガは口元を吊り上げて言う。

「だからムリなんだって。アンタのそれ金星の光を反射して攻撃してるんだろ。俺のグザファンが何でこんな光ってるかわかる？」

未だに光を灯しているアルガのもつグザファン。身体が悲鳴を上げつつも海原は思い至った。

「まさか……」

「大正解。俺は金星を支配する天使の力を使う。金星の光をこのグザファンに全て集めたんだよ」

トラウイスカルパンテクウトリの槍が効力を失ったわけではなかった。

反射する光が存在しなかったのだ。

「金星の光を全て集める……？アナタどれだけの魔力を有しているん

ですか…」

簡単に言ってくれるが、全ての金星の光を集めるなど一介の魔術師100人で行っても成し遂げられるものではない。

それを、目の前の少年はたった1人で当然のごとくやってのけてしまっている。

嫌でも実力の差を認めざるをえなかった。

「…そうですね」

相手が格上であることは承知した。

「…アナタが私程度の魔術師では到底倒せないということはわかりました」

だが、それが負けてもいい理由にはならない。

「ですが」

彼は学園都市を守らなくてはならない。

「私は、アナタを倒しますよ」

あのツンツン頭に彼女とその周囲の世界を守ってもらいたいと。しかし、いい加減に自分も立ち上がるべきだ。

「守りたいものがココにはありますから」

そろそろあの少年に借りを返してもいいだろう。

そう言った海原の瞳にはただ、目の前の少年だけが映っていた。

*

地形が変わっていた。学園都市南側ゲートの一角、海原とアルガが闘っている場所よりもさらに南、近くに架かっていた鉄橋はくの字に折れ曲がり、流れる川は幾度の衝撃波によって四方に撒き散らされ、その量を半分程にまで減少させていた。

そんな地形に変えた張本人、学園都市1位の超能力者、一方通行と壊滅将隊のメンバー、ゴード＝ライムラン。

二人の闘いは常人の目で追える速さではなかった。

空中で30秒程殴り合いをしていた二人はタンツと軽い音をたて地面に着地した。

「ふむ、やはり貴様には私の術式が効いていないようだな」

「てめエは何で反射を喰らわねエンだよ」

二人は無傷であった。それは相手の能力が効いていない、というわけではない。

事実、一方通行の反射はきちんと発動しているため、自分への物理的なダメージはない。ゴードにしても自分の能力が発動しているのにも拘わらずダメージを負っていない一方通行を不審に思っているだけだ。

「…てめエ何者だ？」

「ふむ、申し遅れた。私はゴード^{テレズマ}・ライムラン、木星を支配するベートル（Bethor）の力を行使する者だ」

「あア？木星だ？」

ベートルだのテレズマだの理解できない単語に首を傾げる一方通行。

「魔術を知る者ならばこの単語を聞いただけで逃げ出すものなのだな」

「ハッ、悪いな。あいにく俺はそんなモノ信じちゃいねエからよ」

「よかるう。ならば見せてやる」

ゴードの周囲を暴風が渦巻き彼を覆っていく。

「木星が太陽系最大の惑星だということは知っているだろう？」

ゴードは言う。

「何故そこまで巨大な惑星になったのか解るか？」

一方通行は何も言わずただゴードを睨み付ける。

「答えは簡単、“吸収”したからだよ。周囲の物質を」

「…あア？」

「これが私の司るベトールの術式、“吸収”と“破壊”だ。」

そう言うやいなやゴードは一方通行の懷へと潜り込む。
一方通行は動かない。

「ふむ、また動かないのか？」

「必要ねエって言ってるだろう」

「いいのか？」

最後にゴードが言う。

「今の私の拳には“破壊”術式が組み込まれているぞ？」

瞬間
……

ゴッー！！

反射を設定していたはずの一方通行の身体が宙を舞った。

「ガッ……！！」

空中で態勢を立て直しかろうじて地面に着地する。

（反射が破られた……？）

殴られた腹部に手を当て眼前のゴードを再び睨む。

「言っただろう。“破壊”術式を組み込んだと。先程までは“吸収”術式のみだったから貴様自身にダメージはなかったが、破壊術式はそうもいかんぞ」

近づいてくるゴードは両の拳を握り一方通行を倒すべく術式を発動する。

「安心しろ。私はアルガとは違って武器の類は使わん」

一方通行は脚力のベクトルを操作しゴードへと突っ込んでいく。

「ナメてンじゃねエぞ三下がアア!!」

ゴガンッ!!

一方通行の拳がゴードの顔面を捉えるよりも速く、ゴードの拳が一方通行の腹部を直撃した。

「俺を倒す？ハハ!!冗談だろ!?!たかだか一介の魔術師風情がこの俺を倒すって!?!」

海原の宣言に一頻り笑ったのち、彼の表情は信じられないくらい冷たいものになっていた。

「…ナメんじゃねえぞ雑魚が…!!」

その表情に先程までの少年らしさは微塵も存在しない。あるのはただ憤怒と侮蔑のみ。

「言った以上は倒しますよ。男に二言はありませんから」

そう言うと海原は手に持っていたトラウイiscalパンテクウトリの槍をポイツと投げ捨てた。

「オイオイその霊装捨てたらお前に何が出来るんだよ」

「ご心配なく。私の霊装はこれ1つではありませんよ」

海原は懐からある霊装を取り出す。それは以前絹旗と闘ったときに使用していた“ヴァルハラ”の杖”

……ではない。

取り出したのは杖ではなく、稲のような植物を10本程集めて縛ったもの。

アルガはそれに見覚えがあった。

「まさか…それは…!!」

「さすがは博識ですね。アナタが考えているとおり、この霊装の名は“ケツアルコアトルの葦”。アステカの最高位の霊装です」

アルガの顔色が変わった。“ケツアルコアトルの葦”という霊装はアルガの“構築”にとっては余りにも相性が悪すぎる霊装だ。

「ご存知ですね。この霊装の術式は……」

海原が植物の束を持ち、アルガに向けて言い放つ。

「“消滅”」

霊装“ケツアルコアトルの葦”の術式。

束になっている植物に触れた物質は分解という過程を省略して消滅する。

“構築”と対を成す“分解”よりもさらに上に位置する“消滅”。アルガにとっては正に天敵だ。

「さて、行きましょうか」

「チッ…、なめんな!!」

二人はお互いに走り出し距離を縮める。アルガはグザファンを真横に一振り、無機質な生物を構築。

「ユニコーン!!」

現れたのは角を生やした真っ白な馬。

アルガはそれをもう一度斬りつけて構築し直す。

対して海原がとった行動はとても単純な^{シンプル}ものだった。

植物の束から1本を抜き取り、それにフツと息を吹き掛けて襲い来るユニコーンにその植物を触れさせる。たったそれだけ。

たったそれだけで、アルガが構築したユニコーンは一瞬で消し飛んだ。

「な……!!」

2度も構築し分解しにくくしたのにもかかわらずそれを問答無用で消滅させる霊装、“ケツアルコアトルの章”。

アルガのグザファンでは圧倒的に分が悪かった。彼の“構築”では対の“分解”に相對するのが精一杯であり、もう1ランク上の“消滅”に対抗するには“発生”の術式を行使しなくてはならない。

だが、彼は発生術式は使えない。
故に顔に焦りの色が見え始める。

「くそ……!!」

アルガはもう1度、グザファンを一振りしてユニコーンを構築、さらにもう1度、簡単に分解できないように強化し、海原を仕留めべく突進させる。

海原は動かない。

ただ、植物の1本を手にとり息を吹き掛けてユニコーンに触れただけ。

先程同様、ユニコーンは一瞬で消し飛んだ。

「不毛ですね」

「ぐ……!!」

近づく海原に対し、アルガは無意識のうちに1歩後退りしていた。

「あ……!？」

それに気付いたアルガは、自らの行為が許せなかった。
そしてその怒りは自然に海原へと向けられる。

「うおオオオオオ!!」

海原に突進しグザファンを真上から振り下ろそうと頭上に構える。

それでも、やはり海原は動かない。

先程の動作を繰り返し、それをアルガに触れさせた。

「!？」

「終わりです。これで」

瞬間、この世からアルガという存在が消し飛んだ。

「宣言通り、倒させてもらいましたよ」

ケツアルコアトルの葦を懷にしまい、踵^{きびす}を返してゲート前へと向かう。

不気味なほどの静寂が、その場を支配していた。

内臓の位置が変わる。気道が詰まる。
視界が揺らぐ。

ゴードの拳は想像以上のダメージを一方通行に与えていた。
ゴード自身の腕力もあるがそれ以上に組み込まれた“破壊”術式によって反射を破られたことは少なからず一方通行を動揺させていた。

「貧弱な身体だな」

一方通行を殴ったゴードが拳を持ち上げながら言う。

「チツ、付け上がりやがって…」

口の中に溜まっていた血を吐き出し、ゆっくりと立ち上がる。

「貴様なんぞが学園都市最強の超能力者だと？笑わせる話だ」

ピクッ

僅かに一方通行の身体が反応する。

“最強”という単語に。

「…確かにこのザマじゃ学園都市最強は引退かもしれねエが…」

首をゴキゴキと鳴らし、先程までとは違った表情を見せる。
それは自らの意地^{プライド}を誇る強い瞳。

「あのガキの前では…」

両足を交互に踏み鳴らし、地面に亀裂を走らせゴードを襲う。

「俺は最強を名乗り続けるって決めてんだ!!」

ゴオッ!!

弾丸のようにゴードへと突っ込む。

反射は意味がない。

それでも学園都市最強という意地^{プライド}が彼を突き動かす。

「その意気だけは認めてやろう」

それを迎え撃つ形でゴードの拳が一方通行の顔面へと向かっていく。

交差は一瞬、

吹き飛んだのはゴードの方だった。

ズシャアッ

と3m程その巨体が吹き飛ばされ、ゴードは信じられないものでも見たかのような表情で一方通行を見据える。

「バカな…!!? 何故破壊術式が通じない!?!」

「考えてみりゃ簡単な話だったんだ」

ゴードを睨み付けて一方通行はその紅い瞳に殺意を宿す。

「破壊術式だかなんだか知らねエがそいつは身体に触れねエと意味がねエンだろ？しかもお前には“吸収”つつもうつひとつの術式がある」

思い出していたのは9月30日、木原数多と闘ったときのこと。

「こっちの反射が破壊されるンじゃ反射は使えねエ。だからためエの身体に触れる直前で拳を引いたンだよ」

「！？」

「都合よくてめエには吸収術式つてのがあンだろオが。そいつは何でも吸収しちまうンだろ？たとえ拳の威力だろオがよ」

「！！」

一方通行が使用した戦術は以前彼に木原がとった戦術だ。相手に触れる直前で拳を引き、それで逆にダメージを与える。

“吸収”術式を使用しているゴードが吸収するのは通常は威力だ。普段は痛みは吸収されこれといったダメージを与えられることはない。

……ただし、

その容量も無限ではない。

これまでの戦闘によってゴードの吸収術式の容量はほぼ限界だった。そして今の一撃、ゴードの吸収術式は完全に崩壊した。

「そうか…先程からむやみやたらに突進していると思えば…。こういうことか！！」

「大体そんな意味不明なモンに限界がないはずがねエンだ」

一方通行はゴードに近づき、静かに言う。

「これが最強だ」

ゴードは立ち上がり、一方通行を潰すべく全身全霊の一撃を破壊術式に込める。

「なめるなよ少年！！私は壊滅将隊だ！！」

容量を超えた今ゴードに吸収術式は使えない。

一方、破壊術式がある以上一方通行は反射は使えない。

つまるところ、お互いに防御不可能。

だが、一方通行は笑っていた。

何故なら、防御できないだけで、きちんと反射自体は作用しているからだ。

事実、先程ゴードは吹き飛んだ。

あれは反射が効いていたからだ。貧弱な一方通行の腕力だけであるの巨体を吹き飛ばすなどできるはずもない。

「悪いがお前に攻撃ターンなンぞ用意されてねエ」

脚力のベクトルを操作し一気にゴードの目の前にまで距離を詰め、凶悪な笑みと共に言い放った。

「こっから先は一方通行だ!!」

ゴードの拳は空を切り、一方通行の拳は顔面へと直撃した。

ゴードは水平に15m程吹き飛ばされ、今はもう水量の減った川へと直撃、大量の水が衝突とともに真上に舞い上がり、少し遅れて雨のように降り注ぐ。

一方通行は何も言わず、ただ静かに電極のスイッチを切った。

E p . 3 4 第1位とアステカの魔術師（後書き）

次回

ようやくシンシン頭のターンです

Ep.35 2人の作戦（前書き）

少し長くなりそうなので2話にわけます。

Ep.35 2人の作戦

学園都市西側ゲート、その一角。

周囲に漂う液体金属特有の刺激臭が鼻をつくその場所に、壊滅将隊所属、水星を司るオフィエルナンバーセブンの力を使うシオンⅡラファールガと学園都市第7位の超能力者、最大原石の削板軍覇が立っていた。

ただし、シオンは無傷だが軍覇は身体のおちこちが銅へと変質している。

「なかなか頑丈ですね最大原石。大抵の人間ならば身体が硬直して動けないはずなんですが」

軍覇の左肩に始まり、右脇腹、右太股、左足首はかけられた水銀によつて銅へと変質し、軍覇自身思うように動かすことなどできていない。

だが、

「…効かねえぞクソ野郎」

彼の目からは、闘志が消えることはない。

「こんな程度で…俺を倒せるとでも思ってたのか？」

まだ自由に動かせる右腕をシオンに真っ直ぐ突き出し、彼は吼える。

「てめえらに一歩たりとも学園都市の地を踏ませるつもりはねえ！

「！」

ダッ

銅へと変質した足を無理矢理に動かし、シオンに向かって走っていく。

「流石は最大原石。私の想像以上ですよ。」

待ち構えるシオンに焦りの色はない。

ただ向かってくる軍覇を興味深そうに見つめているだけだ。

「喰らえ！！」

大きく振りかぶられた軍覇の右拳が唸りをあげてシオンの顔面へと向かっていく。

「すごいパンチ！！！」

軍覇の咆哮と共にその右拳がシオンの顔面を直撃

……しなかった。

「何だ！？」

軍覇の拳がシオンの鼻スレスレで停止している。もちろん故意に止めたわけではない。

「ようやくですか」

シオンは目の前の軍覇に向かって言い放つ。

「どういうことだ!？」

わけがわからない、といった表情の軍覇はシオンに問いかける。

「なに、アナタの足が完全に機能を停止した。ただそれだけですよ」

「!？」

足と言われて軍覇は自分自身の足に目をやる。先程水銀をかけられた右太股と左足首が先程までとは比べものにならないくらい変質し色がより濃い茶色へと変色していた。

「なかなか時間がかかりましたが、やはりアナタも人間ということですね」

「てめえ…まさか」

「お気づきですか。そうです、アナタの銅は完全に酸化したのですよ」

酸化

10円玉が長い年月をかけると色が変色するアレだ。

シオンは水星の術式によって銅による人体酸化の速度を極限にまで高めている。

「このまま放っておけばアナタは銅像になりますね」

「……!!」

銅にされた部分を触ってみるが全く感覚がない。おそらく深部にまで変質が及んでいるのだろう。

「まあ、その身体で頑張ったほうじゃないですかね」

シオンは首から“ストラトフの首飾り”を外し、それを宙へと放り投げる、

ゴォッ!!

とその霊装から放たれた衝撃波が身動きのとれない軍覇に直撃する。

「ガフッ!!」

もろに喰らった軍覇は口から血を吐き出す。

「安心してください。私に人間をいたぶる趣味はありませんから。一思いに殺してあげますよ」

シオンはゆっくりと軍覇に近づき、懷から水銀の入った小瓶を取り出す。

それをゆっくりと軍覇の頭上に持っていく、蓋を外し、そして

……

ドロドロした液体が、軍覇の顔を濡らした。

*

「キャハハハ！！どしたのお！？全然当たらないわよお！！」

軍覇よりもやや離れた西側ゲート付近、“幻想殺し（イマジンブレイカー）”の上条当麻と“超電磁砲^{レールガン}”御坂美琴と壊滅将隊所属、ウイディン^ルレットが一方的な戦いを繰り広げていた。

「くそっ！！ちょこまかと！！」

美琴がウイディンに電撃を放つ。音速よりも遥かに早い電撃を避けるなど常人には不可能なはずなのだが、ウイディンは完全に見切つてそれを避けている。

「アッハッハー。そんなの私には当たんないわよー」

完全にこちらを舐めているのかウイディンは全く攻撃態勢に移る気配がない。

先程からずっと御坂の電撃を避け続けているだけだ。

「埒があかないわね！！」

そう言うと美琴はスカートのポケットからゲームセンターのコインを取り出し、それを宙へ弾く。

ピイイン

高い金属音を響かせ宙を舞ったコインはやがて重力に任せて落下し始め、それが美琴の手に触れた瞬間、

思わず目を瞑ってしまうほどの莫大な光量、そして一瞬遅れて轟音が轟く。

学園都市第3位の代名詞、“超電磁砲”が音速の3倍の速さでウィディンへと向かっていく。

「へーこれが超電磁砲ね」

超電磁砲がウィディンに着弾するまでのほんのわずかな時間、そんな時間の中、確かに当麻はウィディンの声を聞いていた。

「期待外れね」

瞬間、確かにウィディンへと向けて放たれた超電磁砲が、彼女に触れることなく弾けとんだ。

「御坂の超電磁砲が通じない!？」

「ちょっとは期待してたのに、残念ねえ」

ウィディンはつまらなそうに二人を見据えて言う。

「私は太陽を司るオク（Och）の天使の力を使うのよ?こんなチンケな技で私を倒せるわけがないじゃない」

「天使だと!？」

当麻が思い出したかのように言う。

「ま、^{ラグエル}“神の友”には及ばないけどね」

そう言うとういディンは今までとは違ってかわって当麻たちとの距離を詰めるために歩き出した。

「退屈させないでお？ “幻想殺し（イマジンブレイカー）”」

ドンッ!!

ういディンが地面を蹴って当麻の目の前にまで詰め寄る。

「!?!」

「面白い力よねえ。ソレ」

ういディンの蹴りが脇腹を直撃する。

「ガハッ……」

そのまま横へと薙ぎはらわれる。

「幻想殺し相手に魔術なんて使うわけがないでしょ?」

嘲笑しながら膝をついてういディンを見つめている当麻を見据える。

「…無視すんなよゴラアアア!」

バチバチバチ!!

青白い電撃がウィデインを襲う。

「あら、いたんだ」

しかし、やはりその電撃は弾けとんでしまう。

「どうなってるのよ…」

「学園都市のレベル5は優秀な頭脳の持ち主なんですよ? だって考えてみなさいよん」

「くっ…」

学園都市で3番目に優秀な頭脳をもつ御坂美琴だが、魔術などというオカルトは完全に専門外であり、しかも自分が今までに体験したことのない技の破られかたをしているため、予想すらもたてられない。

一方通行には超電磁砲は反射された。

上条当麻には打ち消された。

だが、今この目の前にいる女はそのどちらにも属さない方法で超電磁砲を打ち破った。

(あの弾けとんだような消滅のしかた…、一体なんだったのよ)

……消し飛んだ？

ふと、

美琴は消し飛んだという表現に違和感を感じた。

（私の超電磁砲を、消し飛ばす…？）

反射でも消滅させるわけでもない。

そもそも超電磁砲はウィディンの皮膚に触れてはいない。
体表ギリギリのところで周囲に弾け消えていったのだ。

（弾く…ひっかかるわね）

そして美琴はある仮定をたてる。

（…もう1度試してみる必要があるわね）

美琴はもう1度ポケットからコインを取り出す。

「また超電磁砲…？それつまんないのよね」

「言ってられるのも今のうちよ!!」

コインを弾き、身体中から紫電を走らせる。

「喰らえ!!」

指から弾かれたコインは閃光を撒き散らしながら一直線にウィディ

ンのもとへと飛んでいく。

ウィディンは相変わらずこれといった対処をしようとはしていない。

「だからムダなんだってば」

結果は先程と全く同じだった。

ウィディンの身体に触れるか触れないかというところで美琴の放った超電磁砲は四方に弾けとんだ。

(…やっぱりね)

今まで仮定だったものがこれで確信に変わった。

「ちょっとアンタ、いつまで座ってるつもりなのよ」

美琴は少し離れたところで座っていた当麻に声をかける。

「いやー、地味に脇腹が効いてて」

「そんなことより。ちょっと耳貸しなさいよ」

美琴が人差し指をクイツと動かして当麻を呼ぶ。

「なんだよビリビリ」

「アンタさ、……………」

「…はあ！？それ一步間違えたら俺が死ぬだろー!!」

「大丈夫よ！！アンタそれくらいじゃ死なないから」

「それ大丈夫じゃねーよ！！」

「うつさい！！これしか手はないのよ！！」

ワーワーギャーギャーと口喧嘩のように言い争う二人。

「とにかくく！！これでいくわよ！！」

「…不幸だ」

身体中から紫電を迸らせている美琴に対し全身から不幸オーラをど
んよりと醸し出す当麻。

「作戦会議は終わったのかしらん？」

それを今まで見ていたウィデインが口を開く。

「ええ。アンタを倒す算段は調ってるわ」

「…いくら倒すためとは言えそんな危険に上条さんは手を出したく
ありません…」

「アンタの能力、“還元”なんでしょ？」

「！！」

美琴の発言に表情が変わるウィデイン。

「その様子だと凶星みたいね」

「…よくわかったわね」

「考えてみれば超電磁砲が弾けとぶように消えていったのがおかしかったのよ。あれは還元で超電磁砲が強制的にその性質を戻されていたからなんだわ」

「正解 でもわかったところでなにができるのかな？」

「それを今から見せてやるわよ！！」

言葉と同時に当麻が走り出し、美琴は両手をスカートのポケットに突っ込む。

二人の作戦が始まった。

Ep.35 2人の作戦（後書き）

次回終盤へ突入！！

E p . 3 6 幻想殺しと超電磁砲そして底知れぬ闇（前書き）

今までで一番長いです。

といってもそこまではですが（笑）

Ep・36 幻想殺しと超電磁砲そして底知れぬ闇

削板軍覇は動かない。左足は完全に銅へと変質し、どれだけ動かさうとしてもピクリともしない。

そんな状態の軍覇に水銀の入った小瓶を手にとって近づいてきたシオン。

「一思いに殺してあげますよ」

そう言つて瓶の蓋を開け、中身を軍覇へとかける

……よりも前に、軍覇の顔に液体が零れ落ちた。

「……………!?!」

驚愕しているのは軍覇ではない、今まさに息の根を止めようとしていたシオンだ。

軍覇の顔に零れ落ちた液体は水銀ではない。水銀は未だシオンが手にしている小瓶の中に残っている。

軍覇の顔についた液体の正体、それは血だ。

より正確に言えば、シオンの口から溢れ出した血。

「ガハッ…！？一体何が…？」

起こったことが全く理解できず、口から溢れる血を瓶を持っていない左手で塞ぐ。

しかしなおその手を伝って血は流れ続けている。

「…貴様…！！何をした…！！？」

鮮血を吐き散らしながらも目の前の身動きできない軍覇を睨み付ける。

「ようやく効いたか…」

軍覇は不敵に笑う。

「さっきの俺の攻撃…、覚えてるか？」

「…？」

言われてシオンは先程の攻防を思い出す。

確か彼の攻撃は空を切り、自分の攻撃は直撃していた。

「…それがどうしたというのです」

「あれはな、俺がわざとはずしたんだ」

「！？」

「単純に特攻仕掛けてもお前みたいに頭の回転早いやつはすぐに見

切ってカウンター喰らわせるからな…。だから、敢えて外したんだ」
左足と右腕が銅へと変質し、ともに立つことさえも難しくなっている軍覇だが、その瞳に諦めの色はない。

「俺の拳が空振りしたとき、不安定な念動力場をお前の腹当たりに造っておいた。それは相当不安定で、腕を持ち上げただけで破裂してしまうほどの、な」

ニイツ

と軍覇は笑う。

一方シオンは憤怒にその表情は歪んでいる。

「…成程。つまりは時限式の攻撃だったというわけですね」

口から垂れた血を手の甲でグイッと拭き取り、静かにシオンは告げる。

「…殺す」

首のネックレスを引きちぎり“ストラトフの首飾り”の術式を発動、衝撃波が動けない軍覇へと襲いかかった。

「ハハハハハ！！死ぬがいい！！」

衝撃波によって地面が抉られ砂鏝が宙を舞い、視界が遮られる。視界が晴れた先に待っているのは、血まみれの銅像と化した削板軍覇の死体。

そのはずだった。

「……!？」

シオンは我が目を疑った。

目の前の光景が信じられなかった。

そこにあつたのは血まみれの銅像などではない。

確かに額からは血が滲み、右腕と左足は完全に銅化している。

しかし、そこにはこの状況を楽しんでいるかのような軍覇の笑みが存在した。

「何故生きている!?!いや、何故そこから銅化が進行しない!？」

シオンが最も不可解に感じていた点、それは銅化の進行速度だ。通常一般人男性ほどの体積なら20cc程の水銀で15分もあれば銅像が出来上がる。これはシオンが酸化を極限にまで高めているからであるが、目の前の少年には少なくとも30cc以上の水銀をかけているし、既に35分程の時間が経過している。

にもかかわらず、削板軍覇はまだ体積の3分の1程度しか銅への変質が見られない。

「どうなっているんですかアナタの身体は……!!」

「そんなもん決まってるだろうが」

そんなシオンの考えをバカバカしいとでも一蹴するような調子で、
さも当然のように軍覇は言い放った。

「根性だよ」

「！…！どこまでもアナタは私を馬鹿にしますね…」

軍覇の発言に頭が沸騰する。

「残念だけどな」

その思考を遮るように、軍覇は言った。
左手を持ち上げながら。

「根性でできねえことなんてねえんだぜ」

その手に握られていたのは、本来シオンの首にあつたはずのもの、
ストラトフの首飾り。

「な！！」

「衝撃波から首飾りを形成し直すときに奪わせてもらつたぜ」

そう言うつと軍覇は持っていた首飾りをそのまま握り潰した。

「これでお前には水銀しか残つてねえぞ」

「フツ…十分ですよ。もう時限式の攻撃など仕掛けてはいないので
しょう。後はコレをアナタにかけるだけで終了です」

「わかってねえな」

「？」

「言っただろうが」

軍覇の銅化した部分が、僅かに動いた。

その動きは徐々に大きくなり、やがて一步を踏み出す。

「ばかな！？銅化した部分に神経など存在しない！！動かせるはずがない！！」

目の前の現実をシオンは受け入れる事が出来なかった。

それは理屈がわかっていいるからこそ受け入れられない現実。

『根性』で全てを説明してしまう少年を、全力で否定しようとするればするほど自らの理論が通用しないことを痛感する。

「お前は何にもわかってねえよ」

パキパキ

と音をたてながらゆっくりとシオンに接近する軍覇。

シオンの頭では処理しきれない。

「根性がねえお前には分からないかもしれねえから教えてやる」

何もできない。

どうしようもない。

様々な負の感情がシオンの脳内を渦巻く。

結果、シオンはただ体を強張らせたまま立っていることしかできない。

対して、削板軍覇の行動はいたって単純。^{シンプル}
変質して銅へとかわった右腕を、ただ構える。

「今からお前に教えてやるぜ」

そしてその銅の拳を全力で振り抜く。

「これが根性だ!!」

軍覇の拳がシオンの鳩尾に直撃した。

「ウボガアア!?!」

冷静な判断能力を失ったシオンはそのまま10m程水平に吹き飛び、学園都市を覆う外壁に激突。
動かなくなった。

「...おつ」

シオンが意識を手放したからか、軍覇の銅化が解除され生身に戻っていた。

「俺もまだまだだな」

夜空を見上げ、1人呟く。

「修行のし直しだな」

その夜空には綺麗な星が広がっていた。

*

「キャハハ！！何をする気！！？」

こちらに向かって走ってくる当麻と両手をポケットにつっこんだ美琴を見て楽しそうにウィディンが言う。

「私の“還元”術式が露呈したところでどーにもならないわよ！！」

ドッ！！

ウィディンの回し蹴りが当麻の脇腹に突き刺さる。
だが、

「捕まえたぞ、ウィディン！！ルレット」

その足をしっかりと掴んで離さぬように絞める。

「御坂！！」

足を掴んだままの当麻が後ろの美琴に叫ぶ。

「そのまま離すんじゃないわよお!!」

美琴はポケットからコインを二枚取り出し、それぞれ両手で弾く。宙を舞うコインは両方が同じような軌道を描き、やがて美琴の指に触れた。

ドゴンッ!!

両手から放たれた2射の超電磁砲が閃光を撒き散らしながらフレミングの法則に則り音速の3倍で目標物へと飛んでいく。

「チッ!!」

明らかに今までのウィディンとは様子が違う。

「離さねーよウィディン!俺と一緒にちよっくら地獄まで付き合ってもらっぜ!!」

ウィディンの足にしがみつきながら当麻が言う。

放たれた超電磁砲は一つはウィディンへ、もう一つは当麻へと向かっている。

「アナタ、死ぬ気!?!」

仲間の攻撃が向かってきているというのに目の前のシンシン頭は足を離すつもりはないらしい。

「悪いな。俺は動くつもりはねえよ」

「くそ!!」

当麻が足を掴んでいる以上、自身の還元術式は幻想殺し（イマジンブレイカー）に打ち消されてしまい使用は不可能。

このままでは超電磁砲を生身で受けることになってしまう。

「あああああああ!!」

2射の超電磁砲がウィディン、当麻に当たるか当たらないかといった瀬戸際。
当間は動いた。

右手を向かってくる超電磁砲にむけ、触れる。それだけで超電磁砲は打ち消された。

「まだ終わりじゃねえぞ」

ウィディンのほうを見て当麻は言う。
もう一発残っている。それは一直線にウィディンへと向かい、
そして……

……超電磁砲が直撃した。

「やったの!?!」

超電磁砲が着弾したのを確認した美琴が視線を先に移す。

やがて、1人の人影が塵芥の向こうから歩いてくるのが見えた。美琴は一瞬警戒したが、その影がウィデインのものではないとわかり警戒を解いた。

……現れたのは服のあちこちが焦げた上条当麻だった。

そして彼は開口一番、

「おい御坂！！お前ちよつとは加減つてもんを考えろよ！！あと俺が動くのが一瞬でも遅かったら即死だったぞ！！」

「アンタにはその変な力があるんだからいいじゃない」

「手首より先だつつつてんじゃねえか！！それ以外は普通に食らっちゃまうんだよ！！」

当麻と美琴が立てた作戦

まず当麻がウィデインに接触を図る。

その状態をつくることで当麻の幻想殺し（イマジンプレイカー）が発動、ウィデインの“還元”術式を無効化する。

無効化することに成功したら次は美琴が後方から超電磁砲を2発、1発を当麻スレスレに、もう1発をウィデインめがけて発射する。

ウィデインに当たるか当たらないかという瀬戸際にまで超電磁砲が迫ってきたら意表をついてその1発を当麻が幻想殺しで打ち消す。

（ここで打ち消さないと死ぬ）

そしてもう1発が還元術式が無効化されているウィディンに着弾する瞬間、当麻が死に物狂いでその場から離脱。

結果、還元術式を発動させる時間を与えることを許さず、美琴の一撃がウィディンに直撃。

当麻も完全にはその被害を免れることができず、服のところどころが焦げるという結果となった。

「…こんな方法しかなかったのかよ」

あわや死にかけた当麻が疑惑の表情で美琴を見つめる。

「しょうがないじゃない！！アイツの還元を無効化するにはアンタのその右手じゃなきゃできないんだから！！」

当麻の右手に視線を落としビシッと指差す美琴。

「ホントにタイミングずれてたら上条さんは死んでたんですからね
！！」

最早泣きそうな当麻が切実に叫ぶ。

「アンタはそれくらいじゃ死なないじゃない」

美琴はそれを一蹴。

やがて2人はウィディンが立っていた場所へと視線を移す。

未だに土や塵芥が舞っていて視界はよくないが、だんだんそれも晴れてきた。

……そこにいたのは、超電磁砲が直撃したはずのウィディン＝ルレット。

「な！？御坂の超電磁砲は直撃したはずだろ！？」

「…全く、やってくれたわね」

ウィディンが静かに呟く。もちろん無傷、というわけではない。当麻が手を離れた瞬間に“還元”術式を発動したとしても超電磁砲の速度に間に合うはずもなく、相応のダメージを負っていた。服のあちこちは膨大な熱と光量によって消滅し、肌は赤黒くただれている。

しかし、美琴の超電磁砲が直撃してこの程度のダメージだ。普通の人間が御坂の全力を受けたらこの世には何も残らないだろう。

「ちよーっと焦ったわよ……」

荒い息を吐きながらそれでも妖艶な笑みは崩さずに言うウィディン。美琴は再びポケットに手をつつこんでコインを取り出そうとしたが、それを止めた。

「…何のつもり？」

「ちょっといいか」

美琴にそう言い、当麻はウィディンに向かって言い始めた。

「お前、自分が何やってるか分かってるのか」

「戦争でしょ。だからなによ」

「なんでロシアが日本にでばってきてるんだ」

「そんなの私には知ったことじゃないわよ。命令があつたから動いた。それだけよ」

それを聞いた当麻は静かに奥歯を噛み締めた。

「…お前らは、このゲートの奥に何も知らない一般人が大勢いることを知ってて、こんなことをやってんのか」「はあ？何を言っているのか意味がわからないけど。戦争なのよ？何をするか解りきっているじゃない」

バカバカしいといった調子で言い放つウィディン。

「…お前は命令があれば誰でも殺そうとするのかよ」

「それが壊滅将隊の意志なら、遂行するだけよ」

この女は間違っている。

そう当麻は思った。

自分が甘い考えでいることも、世界はそんなに甘くないということも全部わかった上で、それでもこの女は間違っている。

そう思った。

「この戦争だって上でふんぞり返ってるだけのグズどもが起こしたものでしょけど…、そんなものはどうでもいいのよ。大切なのは自分の命、それを守るためなら戦争だろうが殺人だろうがなんでもするわよ」

「……ふざけんなよ」

一歩、ウィディンに向かって踏み出す。

「結局てめえは逃げてるだけじゃねえか！！都合のいい口実に隠れて、他人を犠牲にして！！そんなんで胸張って生きていけるのかよ！！」

「誰だって自分が一番でしょう？」

そう言ってゆっくりとウィディンは手を伸ばす。

「まさかとは思うけど…私が“還元”術式しか使えないとは思っていないわよね？」

ウィディンの掌に空気の塊のようなものが渦を巻いて集まっていく。

「私にはもう1つの術式があるわ。“圧縮”術式がね」

ウィディンは圧縮した空気の塊をこちらに向かって歩いてくる当麻に向かって投げつける。

「…効かねえよ」

パキイン

その圧縮された空気の塊を幻想殺し（イメージブレイカー）で打ち消す。

「わかってるわよ、そのくらい」

「…!!」

圧縮された空気の塊が打ち消され、その中から現れたのは無数の石。ウィデインは予め打ち消されることを予測して石を同時に組み込んでいたのだ。

「…っ!!」

異能力でつくられたものではないものは当麻の幻想殺しは何の役にも立たない。

飛んできた無数の石を腕の前に構えることでなんとかやりすごす。

「やっぱりそういうのは打ち消せないのねえ」

当麻の額からは血が流れている。

それでも、上条当麻は止まらない。

「ウィデイン＝ルーレット」

右拳を握り締め、当麻は叫ぶ。

「お前が身勝手な理由で学園都市を潰そうってんなら…」

自分の意志をもう1度再確認するかのように。

「まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す!!」

言葉と同時に、当麻は走り出した。

躊躇などない、ただ前へと。

「随分となめてくれるわね!!」

ウィデインは伸ばした腕を当麻へと向け、“圧縮”術式を発動させる。

「!!!ガハッ!!!」

いきなり当麻は吐血した。苦しそくに肩を上下させ、ウィデインを睨み付ける。

「今圧縮したのはアナタの心臓よ」

ウィデインは基本的に存在すると確信できるものならば圧縮することができる。

それは人間の臓器であっても例外ではない。

当麻は右手を心臓のあたりに持っていく、触れる。

パキィーン

当麻を襲っていた激しい痛みが消えてなくなる。

「…うおおおー!!」

止まることなく、ウィディンへと突っ込んでいく。

「チッ!!」

ウィディンは当麻のいる一体の空気を圧縮しにかかる。
圧殺しようとしているのだ。

「遅え!!」

圧縮しきる前に、当麻の右拳がその空気を思いきり殴りつけた。
瞬間その魔術は打ち消されたあの空気へと戻っていく。

「うおおおおー!!」

そのままスピードを落とさずに当麻はその拳が届く範囲にまで潜り込む。

「っ!!」

ウィディンが再び術式を発動させるよりも速く、幻想殺し（イメージブレイカー）を秘めた拳がウィディンの顔面を直撃した。

そのまま5mほど吹き飛ばされる。

「…ガッ…!!」

地面へと叩き付けられたウィディンは全身を走る痛み顔に顔をしかめ

る。

「立てよウィディン＝ルーレット」

そんなウィディンに傷だらけの上条当麻は尚も言う。

「お前に教えてやる。人間の強さってやつを!!」

「ハッ、戯言ばかり言ってくれちゃって…」

口に溜まった血を吐き出しながらゆっくりと起き上がり言う。

「終わりにしてあげる…何もかも!!」

彼女は両手を頭上に持ち上げ、大量の魔力を使い“圧縮”術式を発動、直径10m程の空気を50cm大にまで圧縮させる。

圧縮された空気はその形を留めるのが難しいほどの気流を内部で生み出していた。

「ねえ…、これを還元したらどうなると思う？」

「!?!」

「キャハハ!! 圧縮した空気を一気に還元したら、気圧の変化でこら一体に暴風程度じゃ済まない衝撃波が四方八方に吹き荒れるわよお? 空気はもとからあったものだから、その右手でも打ち消せないでしょう?」

ゴオオオオオオッ!!

と圧縮された空気の周りを空気の渦が渦巻き始める。

上条当麻にこの衝撃波を打ち破る技や策はない。

上条当麻1人であれば、誰にも頼ることができない状況であったのなら、彼はこの技で成す術なく倒れていたかもしれない。

だが、上条当麻は1人ではない。

彼の後ろには、頼もしすぎる仲間がいる。

御坂美琴

彼女はわかっていた。言葉を交わしたわけではないが、ただ漠然とあの少年がどう動くのか。

ならば、自分はそのサポートをするだけだ。

その時、振り返った当麻と美琴の目が合った。それだけで充分だった。

アイコンタクトのみで、2人は完全に同調する。

「死ねえ！！」

次の瞬間、ウィデインは圧縮した空気を還元、さんざん圧縮されてきた空気が一気に解放され、信じられない量の空気が衝撃波として当麻に襲いかかる。

「わかってるわよ！！」

叫んだのは美琴だ。

彼女はポケットから取り出した2枚のコインを宙に弾き、落下してきた順に連射する。

放たれた2発の超電磁砲は衝撃波なともせず突き進み、空気の層をぶち抜いていく。

人間1人が通れるくらいの隙間が超電磁砲によって造られた。連射していたためそう簡単にその隙間が閉じてしまうことはない。

「しっかりやんなさいよ!!」

背を向けて走っていく少年へ投げ掛けた。

（ありがとな御坂!!）

超電磁砲が造った隙間に身をよじらせ、強引にウィディンへと突っ込んでいく。

「ムチャクチャだわ!!」

彼女の最大魔術を受けながらも突っ込んでくる少年を見て恐怖を感じていた。

（底が知れない…!!）

そしてその思考は途中で遮られることとなる。

何故なら ……

「うおおおおー!!」

上条当麻の拳が彼女の顔面を捉え、今度こそ起き上がることはなかったからだ。

*

学園都市北側ゲート。

第2位と第6位が防衛するこのゲートの周辺は、もはや地形が変わっていた。

そんな地に立っているのは腰まである漆黒の黒髪に黒いワイシャツ、黒いパンツに黒いブーツという上から下まで真っ黒な男。

壊滅将隊リーダー、
ヴァンフォーレ＝レインロッド

「…こんなもんか」

そう言っただけでポケットに手を突っ込みその場から去っていく。

後に残っていたのは、叩きのめされて意識を失い、力なく地面に倒れ臥している垣根帝督と鳴神葉次の姿だった。

E p . 3 6 幻想殺しと超電磁砲そして底知れぬ闇（後書き）

学園都市紛争編がなかなか終わりません（ ; ）

Ep.37 眼前に立つのは漆黒の頂点

学園都市内部地下の一角、ホテルの1室のような部屋に、魔術師であり多角スパイである金髪サングラスにアロハシャツの男、土御門元春は立っていた。

「…あり得ない」

ゆつくりと、静かに呟く。

その顔からは焦燥と不安が感じられる。

「垣根と鳴神が…瞬殺だと…？」

いや、それよりも気になることを言っていた…

「ラグエル（Raguel）…“神の友”だと…！？」

確かに、先程の垣根からの通信でそのような言葉が聞こえてきた。もしそれが本当ならば、もはや自分の手に終えるレベルではない。

土御門は壁を思いきり殴りつけ、絞り出すように言った。

「最悪だ…！！！」

*

同時刻、学園都市西側ゲート。
シオンを倒した削板軍覇とウィディンを倒した当麻、美琴の3人はゲート前に集まっていた。

「上条に超電磁砲、無事だったか」

「まあな、削板も無事で何よりだ」

「私が簡単にやられるわけじゃないじゃない」

いや、アナタつい数時間前に1度病院送りになってますからね。
などとは口が裂けても言えない当麻。

「もう月が隠れちまったな」

漆黒の空を見上げ、当麻が言う。先程まで淡く地上を照らしていた光は雲に覆われ届くことはなく、ただ暗い闇だけが周囲を支配している。

「だってもう夜中の2時よ？そりゃ明かりなんて外灯以外にあるわけないわよ」

美琴がカエル型の携帯を取り出して時刻を確認する。

戦闘で手一杯だったため今まで気づかなかったがこの内戦が始まってから既に8時間が経過していたのだ。

「腹減った…」

当麻たちの隣で腹を押さえた軍覇が元氣無く呟く。相当減っている

のだろうか先程から軍覇の腹辺りで爆音が断続的に鳴り続けている。

「…それ、腹の音か？」

「当たり前だろう」

顔を引きつらせて聞く当麻にさしも当然であるように返答する軍覇。

いや、普通の人間はそんなバイクのエンジン音みたいな音は鳴らないだろ。と内心思う当麻だったが、本当に倒れそうだったためポケットに何かないかと探してみる。

「削板、こんなもんで良かったら食うか？」

当麻が取り出したのはカロリーメイトだ。

「食う！！上条お前は神様だ！！」

「いやそんな言わんでも…」

当麻の手からカロリーメイトを素早く受け取り一口で全て食べきった軍覇が言う。

とそんなやりとりをしていると、御坂の持っている通信用の霊装に通信が入った。

『御坂か、ちょっと上やんに変わってくれ』

「土御門、ちょっと待ってて」

そう言うつと御坂は自身の霊装を手にとって当麻の耳辺りにまでもっていく。

「何だ？」

「土御門からよ」

言われた当麻は通信に耳を傾ける。

『上やんか』

「土御門、どうしたんだよ」

『マズイことになった』

霊装越しに伝わってくる土御門の声がいつものお調子者の声とはかけ離れていることに気づいた当麻も自然と顔が陰しくなる。

「どうした？」

『…北側のゲートが制圧された』

「！？…あそこは2位と6位が守ってただろ！？」

『ああ、垣根と鳴神はおそらく戦闘不能だ。とりあえずは回収して病院に搬送はしたが…、おそらく御坂みたいにすぐに復帰、というわけにはいかないだろう』

「…壊滅将隊って奴の仕業なのか？」

『正確にはそのリーダー、ヴァンフォーレ・レインロットだ』

「リーダー！？」

『ああ、そいつははっきり言っちゃえば神の右席と同等、いやもしかしたらそれ以上かもしれない』

当麻はその言葉の重さを理解していた。

神の右席と同等。

以前学園都市に侵入しその機能の大部分を停止させた前方のヴェント、アヴィニオンでC文書を使用しようとしていた左方のテッラ。この2人と実際に戦った経験を持つ彼だからこそ分かる現実、奴らは化物じみている。

そんな奴が、学園都市に侵入すればどうなるのか。
火を見るよりも明らかだろう。

「…俺たちはどうすればいいんだ」

『正直な話、この戦力でヴァンフォーレを倒すのはほぼ不可能だ。
だが上やん、お前がいれば解らない。神の右席を退けてきた、上や
んなら』

「そいつは今どこにいる」

『奴は北側から時計回りにゲートを制圧するつもりようだ。今は
東側に向かつてる』

「なら俺もすぐに…」

『いや、おそらく東側は間に合わない…、上やんは南側に向かつて
そこをなんとか死守してくれ』

「…わかった」

『それから御坂』

霊装を持っていた御坂に土御門が話しかける。

『御坂は万が一に備えて内側に戻ってきてもらう。傷口が開いても
困るしな』

「…わかったわ」

『それから削板』

「なんだ」

『そういうわけだからこの西側ゲートはお前1人になる。頼めるか
「任せる。命に代えてもここから先は一步も進ません!!」』

『そついうわけだ、皆頼むぞ』

そう土御門が言って通信は切られた。

御坂は内部に移動するため予め指定されていたポイントに移動し、
結標の座標移動↑ポイントでこの場を後にした。

当麻も南側ゲートに向かうために行動を開始。ここからかなり距離があるがそんなことも言っていられない。

当麻は学園都市の外壁を左手に見ながら、それに沿って全速力で走り出した。

＊＊

学園都市東側ゲート。そこに立っているのは学園都市第4位の超能力者（レベル5）である麦野沈利と同じく超能力者で第5位の天上院真紀。

ゲート前に立っている2人だが、先程の戦闘で身心ともにダメージを受けていた。

麦野は身体の至るところから血を流し、右腕は使い物にならないだろうし、天上院も精神接続ブラグインによって大量の精神力を消費し身体中を倦怠感が襲っていた。

そんな万全とは程遠い状態の彼女たちだが、そんな事を敵が気にして待ってくれるわけがない。

2人の前に現れたのはこちらにゆっくりと歩いてくる男。

腰まで届く長い黒髪、全身真っ黒な服装、それが夜の闇と同化して不気味な気配を漂わせている。

「誰だてめえは」

麦野が眉間に皺を寄せ明らかに敵意を剥き出しにして言う。

「うん？……ああ、お前が第4位の原子崩し（メルトダウナー）か」
ガサガサとポケットから紙を取り出して麦野の顔と交互に目を向ける。

「無粋な方ですわね。名を名乗りもしないなんて」

麦野の隣で天上院が挑発にも似た刺々しい言葉を放つ。

「おお、お前メンタルアウト心理掌握か。何だよここにもレベル5が2人もいるのかよ」

面倒くさそうにポケットに紙をしまいながら言う男。

「ま、自己紹介ぐらいはしとくか。俺は壊滅将隊のリーダー、ヴァンフォーレだ」

「リーダー？」

壊滅将隊のリーダーという言葉に反応する麦野。自分をここまで負傷させたのはその壊滅将隊のメンバーであり目の前の男はそのリーダー。実力的にはかなり上。

「オイオイそんな怖い顔すんなよ」

警戒や緊張など全くすることもなく、ヴァンフォーレは軽々しく言う。

「でもまっ、お前らは優秀だぜ。さっきの奴らみたいにいきなり攻撃を仕掛けてこないあたりはな」

「…さっきの奴ら？」

「ああ、何だったかな…そうだ2位と6位の奴らだ」

「「！？」」

何の気なしに言われたその言葉に二人は大きな衝撃を受けた。

2位と6位が負けた？

この男に？

6位のほうはよく知らないが、麦野は2位がどれ程強大で強力かをよく知っている。彼に勝てる人間など学園都市には1人しかいないだろう。

そんな彼が、負けた。

男にこれといった外傷がないところを見ると圧倒的だったのだろうか。

「…なあ、そこどいてくれねえか？俺だってむやみやたらに殺したくはねえんだよ」

絶対的上からの意見。目の前にいるのが敵と認識などしていないと

いう物言い。

麦野にはそれが耐えられなかった。

「…舐めた事言ってくれるじゃねえか…！！焼き殺してやるよ…」

「こんな無粋な殿方に聞く耳など持ちませんわ」

天上院も同様にヴァンフォーレの前に立つ。

「チツ、面倒くせえなあ…」

「簡単に勝てると思ってるじゃねえぞクソ野郎が」

「あ？んな事思ってもいねえよ」

麦野の発言に溜め息をつきながら答えるヴァンフォーレ。

「お前ら目の前の蟻を敵だと思えんのか？」

ブチッ

麦野の血管からそんな音が聞こえたような気がした。

「…殺す…！」

「怒んなよ。ただ事実を言ったただけだ。俺とお前らじゃあそれだけの差があるってことだ」

ゴォッ！！

何も言わず、麦野がメルトダウンを放った。それはヴァンフォーレの僅かに右側を通過し大量の熱を残して消えていく。

「…もう喋るな。その口溶かしてやるからよ」

「ハッ。やれるもんならやってみやがれ」

麦野と天上院、ヴァンフォーレが激突した。

学園都市南側ゲート。そのゲート前にいる一方通行と海原光貴は土御門から通信を受けていた。

「てことは何だア？そいつが北側制圧してこっちに向かってるってのかア？」

「そうだ。おそらく東側も制圧されるだろう、何としてもそこで食い止める」

「“神の友”^{ラグエル}ですか…とんでもない大物が出てきてしまいましたね」
『今そっちに上やんも向かってる。頼んだぞ』

「あん？アイツも来やがるのか。邪魔にしかならねエと思うがな」

「彼の右手はなかなか役に立ちますよ。身を持って知っているでしょう？」

「チッ」

音のない夜に、彼らの会話だけが辺りに響いていた。

ただ、男が立っていた。ヴァンフォーレ・レインロード、彼はとくにこれといった動きを見せるわけでもなく、勝利を手にした。ゲート前には力無く地面に倒れ臥している麦野と天上院。

「…ガハッ…」

麦野が口から赤黒い血を吐き出す。

「お、何だよ生きてるじゃねえか」

まだ息がある麦野を見て嘲笑するヴァンフォーレ。

「…どうして、わたくしの精神接続フラグメンが出来ませんの…？」

天上院もまだ意識があり、あり得ない事実にとだ愕然としている。

「何だよまだ二人とも意識があんのかよ。殺すのも面倒くせえんだよなあ」

長い黒髪を揺らしながらゆっくりと二人に近づいていくヴァンフォーレ。

「お前ら、もう寝ろ」

……学園都市東側ゲートは制圧された。

少年、上条当麻は走っていた。走り出してからかなり時間はたつ筈なのだが、一向に南側ゲートが見えてくる気配がない。ただただ続く学園都市の外壁。

「くそ、ゼエ…こんなことなら御坂のレポート待つて、俺も移動すればよかった…ゼエ…」

荒い息を吐きながら上条当麻は走る。

何としても南側で食い止めなくてはならない。南側が突破されれば削板しかない西側は防ぎきれないだろう。

「くそっ!!」

額から流れる汗にも構わず、当麻は夜の学園都市外周を疾走する。

学園都市南側ゲート。一方通行と海原が防衛するこのゲートに、全身真っ黒な男が現れた。

「…てめエが“神の友”^{ラグエル}つつう野郎か」
「如何にも。俺はヴァンフォーレ」レインロード。よろしく」

軽く会釈をするヴァンフォーレに対して忌々しそうに舌打ちをする一方通行。

「チツ、気に食わねエ野郎だ」

「お前は…成程お前が学園都市第1位の一方通行か。そっちのお前は…学園都市の人間じゃねえのか？」

ポケットから取り出した紙を見ながら二人を見るヴァンフォーレ。

「ま、どーでもいいわそんなことは」

ポケットに紙をしまい、ゆっくりと顔を上げるヴァンフォーレの顔は凶悪な笑みに満ちていた。

「どうせ全員俺の前では立つことすらできねえんだからよ」

ベコオツ!!

突然海原が地面に叩き付けられた。

「ガハッ…?」

いきなりの衝撃に肺の空気が全て吐き出される。尚も海原の身体は深くめり込んでいく。

反射を展開していた一方通行はそれに巻き込まれず立っている。

「ほお、流石は学園都市最強。2位の奴もそうだったがこのくらいじゃやられはしないか」

「俺をあんな三下と一緒にすンじゃねエ」

「そうかよ」

ズドンッ!!

一瞬で一方通行の視界が揺らぐ。

何だ、今、何をされた?

それが反射を破られ顎を殴られたという事実気づくまで数秒もかった。

「チイツ!!」

揺らぐ視界を無理矢理振り払い、赤い瞳で目の前の男を睨み付ける。

「いいねえ。2位はこれで御陀仏だったぜ、流石は第1位ってことだな」

「なめてンじゃねエそ…!!」

「なめてねえよ」

いつの間にか一方通行の鼻先10cmのところまで接近していたヴァンフォーレが、一方通行の意識を刈り取るべくその拳を顎目掛けて打ち出す。

（チツ、反射が効かねエ！！）

ベクトル操作も間に合わない。

ヴァンフォーレもこれで終わると確信していた。

パキイン！！

だが、ヴァンフォーレの拳が当たったのは一方通行の顎などではなかった。

触れているのは、右拳。

「…ああ？」

唐突に自分の顔の横から突き出された拳に怪訝な顔をする一方通行。その出所を知るべく、顔を後ろに向ける。

……そこに居たのは、忌々しいツンツン頭の高校生。

「…勝手に手出してンじゃねェよ、クソツタレが」

「ひでえ！！結構危機一髪な場面を救ったと思ったのに！！」

「お前は…」

ヴァンフォーレがその少年を見て口元をつり上げる。

「そうかお前が…」

楽しみに言うヴァンフォーレは、始めて敵と出会ったかのように言
った。

「“幻想殺し（イマジンブレイカー）”！！」

一方通行の隣には、汗だくになった上条当麻が立っていた。

Ep.37 眼前に立つのは漆黒の頂点（後書き）

次回

神の友VSツンツン&一通！！

今思ったんですけどこの小説って主人公誰なんでしょうね（笑）

EP・38 幻想殺しと学園都市最強のレベル5（前書き）

結末を考えていたら遅くなりました；

あと長くなりそうな感じだったので2分割しました。

Ep・38 幻想殺しと学園都市最強のレベル5

学園都市南側ゲート。“幻想殺し（イマジンプレイカー）”上条当麻と学園都市最強の超能力者一方通行、そして壊滅将隊のトップである“神の友”ヴァンフォーレ・レインロードが月も隠れた夜空の下で対峙している。

「お前が“幻想殺し（イマジンプレイカー）”か。初めまして、俺はヴァンフォーレ・レインロードだ」

「……お前が壊滅将隊のリーダーなんだな？」

「如何にも」

「何で日本政府と手を組んでるんだ。ロシア側に利益なんかあるのか？」

「それはあるに決まってるだろう」

馬鹿馬鹿しいと言わんばかりにヴァンフォーレが笑う。

「ここがどこだか理解しているのか？科学の総本山、学園都市だぞ？ここを落とせば魔術と科学の均衡は崩れ去り世界から学園都市は消える」

ヴァンフォーレは当たり前だとばかりに続ける。

「解るか？ロシア側が日本政府に協力してる理由なんてそんなもんなんだよ。魔術サイドに傾くなら好都合、とでもニコライの野郎は考えてるんだろうな」

当麻と一方通行はただヴァンフォーレを見据えている。

「……オイ三下ア、アイツは俺が潰す」

「いや、お前だけじゃ多分無理だ」

「あアン！？てめエぶつ殺されてエのか？」

この2人、全くと言っていいほど息が合わない。仕方ないと言えばそれでおしまいなのだが如何せんこの状態は芳しくない。

「オイオイ仲間割れなんてよせよ」

「あア？誰がコイツと仲間だと？」

赤い瞳をギラつかせてヴァンフォーレを睨む一方通行。

「そう睨むなよ。すぐに終わる」

ヴァンフォーレは軽く両手を上げ、パンツと手を叩いた。それだけ、たったそれだけの行為だったはずだ。

……なのに、当麻と一方通行の2人は地面に叩きつけられた。

「なあッ！？」

「ぐッ……！！」

「不思議そうな顔してるな2人共。まあそれもそうだな、片や異能の力なら何でも打ち消しまう摩訶不思議な右腕を持つ幻想殺し（イマジンブレイカー）と片や全ての攻撃を反射することが出来る学園都市最強のレベル5が揃って地面に臥してんだからなあ」

嘲笑つかのように2人を見下しながらヴァンフォーレは言う。

（どうなってんだア……！？反射は効いてる筈だろオが）

頭をフル回転させ状況の把握に努める一方通行。その隣では当麻が右手を無理矢理口に持つて行き、そして噛んだ。

パキイン！！

幻想殺しが発動し謎の能力を打ち消すことに成功する。

「一方通行！！」

続いて一方通行の背中に触れる。

「……相変わらずワケ解らねエ能力チカラだな」

「褒めてんのか？」

「殺すぞ」

ダッ！！

と再びヴァンフォーレへと走り出す。

「おらア！！」

走りながら一方通行は落ちていた小石を蹴飛ばす。ベクトル操作されたそれは弾丸の如くヴァンフォーレに向かっていく。

「甘いなあ」

しかし、ヴァンフォーレは身体を半歩ずらしそれを避ける。

「うおおおおオー!!」

その間に当麻はヴァンフォーレの懷に潜り込み渾身のアッパーを顎目掛けて垂直に振り抜く。

「惜しいな」

ゴンッ!!

顎を拳で打ち抜かれ脳内が揺れる。

ただし、アッパーを喰らったのはヴァンフォーレではなく当麻のほうだ。アッパーを打つ直前にカウスターを喰らっていた。

「余所見してンじゃねエぞクソ野郎がアアアアア!!」

一瞬でヴァンフォーレの背後に回りこんだ一方通行がその腕を思いきり突き出す。触れれば勝ち、彼はそう思っていた。

「あー、そんなんじゃダメだわ」

ヴァンフォーレは素早く身体を倒して足を上げる。回し蹴りが一方通行の顔面を直撃し吹き飛ばされる。

「肉弾戦では俺には勝てねえよ。絶対にな」

膝をつく当麻と一方通行に向かって言い放つ。

「幻想殺し（イマジンブレイカー）はよく解ってるんじゃないか？」

「!？」

当麻は意味が解らないといった表情でヴァンフォーレを見る。

「俺は聖人だ」

「!？」

聖人

世界に20人程度しか存在しない神に選ばれた存在。

「神裂と同じ……？」

「俺はあんな雑魚とはレベルが違うけどな」

吐き捨てるように彼は言った。

「まあ俺と単純な肉弾戦でいい勝負できるのはウィリアム・オルウエルと騎士団長、……あとはイスラム勢教のアイツぐらいじゃねえかなあ」

「……聖人だろうが何だろうが、俺はお前をぶっ倒す。学園都市には1歩たりとも入れさせねえ!!」

「……あのガキの居場所を、これ以上奪うンじゃねエEEEEEEEEエ!!」

2人は立ち上がり、そして聖人へと向かっていく。

「いいねえ、夜明けまで暇を持て余す心配はなさそうだ」

ニイツ

とヴァンフォーレは口元を吊り上げて笑う。

「良いこと教えてやるよ」

当麻と一方通行の攻撃を避けながら飄々と言う。

「タイムリミットは夜明けまでだぜ」

「何!？」

「あア？」

当麻と一方通行の動きが止まる。

「此处に来るまでに北と東の学園都市のゲートは制圧してきたからな。夜明けと共に日本政府の後続部隊が学園都市内部に侵入する」

「ッ!!」

当麻は唇を噛む。

時間が無い、彼はそれをよく解っていた。

「侵入した後は簡単だよなあ。統括理事会を拘束して外交を絶つちまえばそれで科学の街はサヨナラだ」

当麻はポケットから携帯を取り出して時刻を確認する。

AM03:55

日の出はおそらく午前6時から6時半の間。

残された時間は凡そ2時間。それまでに目の前のヴァンフォーレを倒し北と東のゲートを再び防衛しなくてはならない。

状況は最悪。

ならば取れる手段はコレしかない。

「……………一方通行」

「何だ三下ア」

「……………学園都市を守る為だ」

「……………チツ、学園都市なンざどうだっていいがあのがキが傷つくのだけは許さねエ」

「決まりだな」

「忌々しいが仕方ねエ」

当麻と一方通行はゆっくりと顔を上げ、その瞳でヴァンフォーレを見据える。

「「共同戦線だ」」

EP・38 幻想殺しと学園都市最強のレベル5（後書き）

というわけで2人の共同戦線です！！

E p . 3 9 弱点攻略術式（前書き）

すいません中々話がまとまらず更新が遅くなりました……

結局決着がまだつきません（ - ” - ; ）

Ep.39 弱点攻略術式

「共同戦線だ」

学園都市南側ゲートの一角、壊滅将隊のリーダーにして聖人、ヴァンフォーレ・レインロッドを倒すべく、彼ら2人は互いに力を合わせることに。

「何か作戦はあんのか三下ア」

「……ない」

「あゝア!？」

「だがとりあえず奴の能力は俺の右手で打ち消すことができる」

「チツ、こっちは反射が全く効かねェんだよ」

ヴァンフォーレの正面に立つ当麻と一方通行は正面を見据えたまま顔を向けることなく会話を続ける。

「ならまずは奴の術式を攻略することからだな」

「それが簡単に出来たら苦労しねェつつうんだ」

一方通行は忌々しそうに舌打ちして頭を掻く。

（反射は正常に作動してるのに何故効かねェ？最初の一撃、あれは

防げたんだ)

例えばヴァンフォーレが現れた時の最初の一撃、地面にめり込んだ海原と違って一方通行にはその能力は効いていなかった。

(重力?……いや、違うな。もしそうだってんなら重力を反射しちゃった俺は空の彼方だ)

何か大切なことを見落としている。
そんな感覚を一方通行は感じていた。

(奴の能力は変更できる……?だとしたら急に反射が効かなくなつた説明はつく……)

いつまでも答えが出ない問題に怨めしそうに目の前の男を睨み付ける。

「……仕方ねエ」

一方通行の腰が下がり、両手を開く。

「援護しやがれ三下」

そう言う一方で一方通行は足の運動量のベクトルを操作。弾丸の如くヴァンフォーレへと突っ込んでいく。

「解らねエなら確かめるまでだ!!」

両腕を突き出してヴァンフォーレの体に触れようと試みる。

（奴がいくらワケが解らねエ能力チカラを使つてたとしても触れさえすればそれで終わりだ！！）

「あー、そんなんじゃダメだ。そんなんじゃ俺には指一本触れられないぞ」

ゴドンッ！！

最初にヴァンフォーレに遭遇した時のように一方通行の身体が地面に叩きつけられめり込んでいく。

「ガハッ……！！」

「ヒントをやるうか。お前の反射には弱点がある、それを自覚してるかは解らんがな」

（俺の反射の……弱点だア……！？）

地面にめり込みながらも必死に打開策を練ろうとするが上から押し潰されるような圧力が一方通行を襲い正確な思考能力を奪っていく。

「一方通行！！」

一方通行の後ろを走っていた当麻が彼を助けるべく走ってくる。

「お前だつて例外じゃないんだぜ？」

ズドンッ！！

「ぐあー!!」

一方通行と同様に当麻も押し潰されるように地面へと叩きつけられる。

（何が……どうなってるんだ？）

ギシギシと骨の軋む音が聞こえるがそれにも構わず当麻は強引に右手を顔にまでもってくる。

そしてその右手を肌に触れさせる。

パキイン!!

幻想殺しが発動してヴァンフォーレの術式を打ち消して押し潰すかのような重圧から解放される。

「本当に便利な右手だな、幻想殺し」

「一方通行!!」

ヴァンフォーレの言葉になど耳を貸さず未だに地面に磔にされたような一方通行の身体に触れる。

「……チツ、あの野郎オ一体どんな能力^{チカラ}使ってやがるんだ」

重圧から解放されてゆっくりと起き上がる一方通行。
その顔は苛立ちと疑問に満ちている。

「さっきヒントやったんだから自力で解答に辿り着けよ」

「なめやがって……!!」

ギリッ

と奥歯を噛む。

一方通行の反射は正常に作動している、しかしまるでヴァンフォーレは反射など存在していないかのように自分に攻撃を喰らわせてくる。

（このままじゃじり貧だ……奴の能力の正体を掴まねェと話にならねェ）

「オイ三下ア」

「何だ？」

隣で同様に何やら思案していたのか俯いて顎に手を当てていたに一方通行は彼にとって不幸な任務を言い渡す。

「突っ込め」

「なんでだあああ!!」

「チツ、早く行けよ磨り潰すぞ」

一方通行の赤い瞳が苛立たしげに当麻を睨み付ける。

「……うう、上条さんは今日何度目かの台詞を叫ばないとやっていけません……」

ガツクリと肩を落として口から魂まで吐き出してしまつのではない

かというくらい大きな溜め息を吐く。

それでは皆さん御唱和ください。

「不幸だああアアアアッ！！」

そう言いながら何だか目尻に透明な液体を溜めた当麻は右拳を握りしめながらヴァンフォーレへ決死の特攻を仕掛けるべく走り出す。

「オイオイお前死にたがりか何かなのか？」

当麻が振りかざす拳を身体をずらして避けると体勢を立て直しきれていないところへ鳩尾に膝蹴りを叩き込む。

しかし、

パキイン

当麻の鳩尾とヴァンフォーレの膝の間には例の幻想殺し（イマジンブレイカー）が。

「……ホウ、中々考えたじゃないか」

「こっちは伊達に死にかけてないんでな」

当麻は薄く笑いそこからダッシュで一方通行の元へと戻っていく。

「上等だア三下」

「死にかけたぞ　……だがこれで1つ解ったな」

「あア、奴は自分の身体に能力を使ってやがる。それがどんなモンかは知らねエが、そうと解りゃあ話は早エ」

一方通行は凶悪な笑みを浮かべると足を振り上げそのまま地面に振り下ろす。

ゴガアアアンツ！！

一方通行にを中心に地面には幾重にも亀裂が走り衝撃波がヴァンフォーレを襲う。

「てめエに近づかなきゃイイ話だろうがア！！」

亀裂が走ったことでめくれあがった地面のコンクリートを蹴飛ばして更に攻撃する。衝撃波と岩弾の両方がヴァンフォーレへと向かっていく。

「うーん、それじゃまだ5割なんだよ学園都市最強」

ヴァンフォーレは衝撃波を避け岩弾を自らの拳で砕いていく。

「俺に近づかないってのはいいけどな、俺からしたら別に近づかなくてもいいんだよ」

腕を伸ばし、一方通行に向かって言う。

ゆったりと伸ばされたその手に蹴飛ばされた岩弾が受け止められた。まるでグローブでボールをキャッチするかのように、いとも簡単に。

「……化物がア」

「それはお前も同じことだろう？化物」

一方通行の挑発にも乗らず冷めた態度で飛来する岩弾を全て受け止めていく。

ベクトル操作された岩弾の速度は軽く時速150kmを超える。それら全てに反応し掴むなど人間技ではない。

「どうしたんだ最強。こんなものじゃないだろう、お前の能力は」
チカラ

服に付着した砂を手で払いながらヴァンフォーレは見下すように一方通行に言う。

学園都市最強、その肩書を持つ者として、その発言に彼の怒りが爆発した。

「クソ野郎オがアアアアアアアアアア！！」

両手を掲げ空気を圧縮し始める。

彼の両手を中心に集められた空気が渦を巻き大気のベクトルを操作、風が一点に集中し造り出されたのは高電離^{プラスマ}気体。

「ガアアアアアアアッ！！」

極限にまで圧縮された高電離^{プラスマ}気体を操作しヴァンフォーレへと放つ。このままでは辺り一帯が吹き飛ぶほどの破壊力によってヴァンフォーレは粉々になるだろう。

「一方通行ッ！！」

一方通行の後ろにいた当麻は叫ぶ。彼はどことなく直感していた。

コレでは奴は倒せないと。

（奴の能力はきつとアレに近いものなんだ……。だとしたら一方通行の攻撃も今のままじゃ意味がない……。！！）

「下がってる三下ア！！俺はコイツをブチ殺すって決めてンだよオオオオ！！」

周囲を莫大な量の風が包み辺りの壁や地面が無惨に剥がされていく。

「ハッ、ダメだなあ学園都市最強。それはいただけない」

この高電離^{プラズマ}気体を前にしてもヴァンフォーレは動じない。期待はずれだと言わんばかりの表情を浮かべ目を閉じてしまった。

「くたばりやがれエエエエエエツ！！」

一方通行渾身の一撃がヴァンフォーレほど激突、粉塵が舞い余波が辺りを襲い衝撃波が駆け抜ける。

一方通行は動かない。粉塵の奥、そこにいる人影を認めてしまったからだ。

一方通行は動かない。いや、動けない。

目の前にヴァンフォーレが当然の如く立っていたからだ。

「ふう、威力は申し分ないな」

「てめエ……。どうやって！！」

「あん？まだ解ってねえのかよ。学園都市最強の頭脳もこの程度か？」

「……弱点、だろ？」

一方通行の後ろに立っていた当麻がふと口にした言葉。

その言葉を聞いたヴァンフォーレは満足そうに笑みを浮かべながら当麻を見据える。

「やっと解ったか」

「ああ、可笑しいとは思ってたんだ。一方通行の反射が効かない、俺の幻想殺し当たらない。何かは知らないが弱点を突いてるんだろ？」

「及第点、といったところだな」

自分の術式を言い当てられながらもその余裕ある態度は崩れない。寧ろこれからが楽しみだという雰囲気すら漂ってくる。

「幻想殺しが言ったのでほぼ正解だ。より厳密に言えば俺の術式は“弱点攻略”。騎士団長の能力無効化術式と似たようなモノだ。こいつは相手の能力の弱点や盲点を的確に突ける術式でな、だから反射の弱点や幻想殺しの盲点なんかを突いて攻撃できるってわけだな」

ペラペラと自分の術式を懇切丁寧に述べるヴァンフォーレ。

「だがまあ知ったところでどうにもならないだろう。空を見る。直に夜が明ける」

白んできた空を見上げながら当麻たちとの距離を詰めるべく歩み寄っていく。

「決着が着かなければ日本軍が侵入してはい終わり、だ。お前たちが学園都市を守るには俺に勝つしかない」

一歩、また一歩と着実に彼は2人のもとへと近づいていく。

「どうする？」

2人の目の前に立ち、顔を付き出して邪な笑みを浮かべるヴァンフオーレに対し、当麻と一方通行は事前に打ち合わせたわけでもないが、同時に拳を付き出した。

「おつとお。いきなり殴りにかかるか」

「ああ!？」

「ああ？」

（やるしかない。ここでコイツを倒さないと学園都市は守れない！）

（クソが、野郎オを早いとこ片付けねエと軍隊が侵入しちまう）

2人は拳を強く握り、目の前の男を見据え叫ぶ。

「お前のその腐った幻想を……」

「てめエみたいなクソ野郎は……」

「「ぶち殺す!!」」

午前5時。

学園都市を守る戦いの結末は近い。

Ep・40 夜明けと共に迎える終焉（前書き）

いよいよこの章クライマックスでしょうかね。

Ep・40 夜明けと共に迎える終焉

「うおおおお!!」

空も白み始め徐々に夜明けが近づき始めた学園都市。

その南側ゲートでヴァンフォーレと対峙する幻想殺し（イマジンプレイカー）上条当麻と学園都市最強の一方通行は終わることのない消耗戦に体力を確実に削り取られていく。

「おらアツ!!」

背中に小型の竜巻のようなものを取り付け水平に猛スピードでヴァンフォーレへと飛んでいく一方通行。

しかし振りかざされた拳はヴァンフォーレを捉えられず空を切り、逆に弱点攻略術式によって反射を破られカウンターを喰らってしまふ。

「ガハッ!!」

鳩尾に拳を喰らった一方通行はその場に膝をつき苦しそうに顔をしかめる。

「おおおおおお!!」

当麻も肉弾戦を挑みパンチやキックを無数に繰り出しているがヴァンフォーレはそれを受け止めたりかわしたりと一向にダメージを与える事が出来ない。

弱点攻略術式自体は当麻の右手によって打ち消すことが出来るだろうが当麻と対峙するときのヴァンフォーレはその術式を使用していない。

聖人としての純粋な身体能力だけで圧倒しているのだ。

「ホラホラどうした？早くしないと学園都市が堕ちちまうぞ？」

ヴァンフォーレとしてはこの戦いに勝つ必要は必ずしもない。引き分けでも自らの任務は達成される。

ロシア側としては学園都市にダメージを与えることができればいいわけなのだから。

（って言っても、やっぱり幻想殺しは此处で消しとくべきかねえ）

幻想殺し（イマジンプレイカー）

神の奇跡をも打ち消してしまうその能力は魔術師にとっては脅威以外の何物でもない。

できることならばこの場で仕止めておいたほうが後々厄介なことになるので済むだろう。

（となるとまずは邪魔な白いのから排除するか……）

邪魔されても面倒だした、とヴァンフォーレは考え狙いを一方通行へと搾る。

「まずはお前だ」

ブオンツッ！

大型バイクのエンジン音のような音がしたかと思えばヴァンフォーレは一方通行の目の前に移動していた。

今のはヴァンフォーレが音速以上の速さで移動した音だったのだ。

「ッ!!」

「お前ちよつと邪魔だからさ、寝てろ」

ゴドンッ

鈍い音と共に一方通行が顔面を殴られそのまま5mほど吹っ飛ばされる。

「一方通行ッ!!」

真横で吹き飛ばされた一方通行を見ながら当麻は叫ぶ。
だがその時間さえもヴァンフォーレは許さない。

「余所見とは余裕だなあ幻想殺し」

気づけば既に間合いを詰められヴァンフォーレの蹴りが肩に突き刺さる。

「ぐぁッ!!」

「余所見なんかしてたら簡単に死んじゃうぞ?」

肩を鈍い痛みが駆け抜ける。

聖人の身体能力をただの人間である当麻が受けきれぬ筈もなく、そのまま後ろによろける。

「オラもう一発だ」

ゴンッ!!

体勢を崩したところへ追い討ちをかけるようにヴァンフォーレの拳が顔面に直撃する。

「ガハッ……!!」

「オラどうするんだ？夜明けまでもう時間が無いぞ？それともここで学園都市が堕ちる所を眺めてるか？」

空は既に東のほうは少しずつ白い光が差し始め夜空を浸食している。おそらく多く見積もっても後30分程で太陽が姿を現すだろう。

「今日は快晴だから太陽がよく見えるぜ」

昇りかけの太陽を見上げながら楽しそうにヴァンフォーレは言う。

「……ふざけんな」

ゆらりと立ち上がる。身体は既に悲鳴を上げ睡眠をとっていないことが身体の倦怠感を増幅させている。それでも、上条当麻は諦めない。

「絶対に……この街は渡さねえ!!」

残りの力を振り絞り目の前の敵へと駆け出していく。その右拳は強く握りしめられている。

「ヴァンフォーレEEEEEEEEええ!!」

「いいねえ幻想殺し。やっぱそうでなくちゃ面白くねえ!!」

向かってくる当麻を避けるどころか両手を広げ迎え入れるかのよう
な拳動で満面の笑みを浮かべる。

「おおおオオオオオ!!」

咆哮と共に当麻の拳が繰り出される。

それを身体をずらして避けるヴァンフォーレに更に拳を振るう。

「ハハッ!! いい根性してるなあ幻想殺し!!」

攻撃を全て紙一重でかわしながら笑う。

(……そろそろ実力の差ってやつを教えておくか)

ピタッ

と急にヴァンフォーレが拳をかわすのを止めその場に立ち尽くした。
それを好機と見た当麻は迷うことなくその拳を鳩尾へと突き刺す。

ゴキヤッ

何かが割れたような音が響く。

ヴァンフォーレは薄く笑い、当麻はその痛みに顔が歪む。

「…………ぐあああ!!」

見れば当麻の右腕は形が何やらおかしくなっている。

「あーあー。そんな全力で殴るからだよ、折れたんじゃないか?」

痛みを堪えて拳を握る当麻に向かって言い放つ。

（何だ……！？まるでコンクリートの壁を殴ったような感触……）

痛みで複雑な思考がままならない当麻はその痛みが鳩尾を殴ったものだと思いつくのに数秒かった。

「解ったか？たとえお前が幻想殺しを使ったとしても元々の身体能力なんて打ち消せないだろう。これが俺とお前の力の差だよ」

一方通行の時のように能力を打ち消せばなんとかなる相手ではない。前方のヴェントの時のように強大な味方がいるわけでもない。左方のテッラの時のように解りやすい弱点があるわけでもない。ステイルや神裂のように聞く耳を持つてくれるわけがない。

ヴァンフォーレ「レイノロッドとは、まったく異質。

彼は自分の力を無闇に振りかざしたりはしない。必要最低限の能力と聖人としての力で最小限の働きで最大限の戦果をあげる。

それゆえに、相手は早々に戦意を喪失する。

「ほらどうしたよ、立ち上がらないのか？」

それは上条当麻であつても例外ではない。少しでも可能性があるなら、とかやってみないと解らないといったそんなレベルではないのだ。

立ち向かうことすら馬鹿馬鹿しくなってしまうような存在、それがヴァンフォーレ。

当麻は立ち上がらない。いや、痛みと絶望で立ち上がることができ

ないでいた。

（くそッ……身体が……動かない……！！）

力を振り絞る。

それでも、足が言うことを聞いてくれない。

「……ああ、残念」

軽く息を吐き出し、楽しみが終わりを迎えたかのような表情を見せる。

彼は空を見上げる。

「タイムリミットだ」

東の空から、太陽が昇り始めた。

山裾から僅かに差した太陽の光がヴァンフォーレを照らす。

「間に合わなかったな」

彼がそう言った瞬間、轟音が響き渡り学園都市の北と東のゲートは破壊された。

日本軍の侵攻が始まる

Ep・40 夜明けと共に迎える終焉（後書き）

まだ終わりませんでした。

Ep・41 形勢逆転といこうか（前書き）

中々アイデアがでてこないですねゝ；

Ep・41 形勢逆転といこうか

ドガアアアンッ！！

学園都市の北側と東側のゲートが日本軍によって爆破、破壊された。破壊されたゲートを潜り日本軍が隊列を組みゾロゾロと踏み込んでいく。

「クハハハッ！！残念だったなあ幻想殺し（イマジンプレイカー）！！間に合わなかったみたいだぜ！！」

目の前で膝を着き頂垂れる当麻に向かい大声で叫び、見下ろす。

「さあて……」

辺りをキョロキョロと見回し、クルリと身体を反転させて当麻たちに背を向けてゲートへと歩き出す。

「……待て……よ」

遠ざかるヴァンフォーレに向かい酷く小さな声で呟く当麻。大声を出す気力さえも失いただ拳を握りしめる。

「ああ？今のお前に興味はないんだ。再戦したいならもちっと強くなってから来いよ」

背を向けたまま手をヒラヒラと振ってその場から離れるヴァンフォーレ。

後には動かない当麻と一方通行、未だに術式が解けていない海原だけが力無く倒れていた。

（ふうん……）

外壁に沿って歩きながらヴァンフォーレは今の学園都市の状態を観察していた。

（これだけでかい爆音がしたつてのに内部で騒ぎが起きてる様子はないな……）

あれだけの爆音がしていたというのに中でパニックが発生している気配は感じられない。早朝ということもあるため全員が寝ているという可能性は極めて低い。

であるのに学園都市は何時までも静寂に包まれたままである。

（これは……）

ヴァンフォーレはある結論に辿り着く。と言うよりも、この考えしか思い浮かばない。

「……アレイスターか……」

可能性として考えられるのはアレイスターが何らかの手口を使って一般人を避難させたか防音をしているのか。

元々この内戦は基本的に一般人には秘匿されているため住人の避難は何らかの口実をつけて行われている。

それを日本軍が破り侵攻を開始した為、学園都市側の正当防衛としての応戦が認められるようになる。

「アレイスターはこれを狙ってたのか……？」

いや、

とヴァンフォーレは首を横に振る。

（アイツはこの程度の見え透いた浅知恵を働かせるようなレベルの“ニンゲン”じゃない……）

何かある。

俺でさえも到達できないような考えが。

「……おもしれえ」

ニイツ

とヴァンフォーレは凶悪な笑みを浮かべ破壊されたゲート付近から学園都市内部に目を向ける。

朝日が射し込む範囲が徐々に広がり闇が消滅していくかのような印象を受ける学園都市。しかし現実は全くの逆。

今正に学園都市は墮とされようとしている。

「いいぜアレイスター。見届けてやるよ、お前がどうやってこの窮地をひっくり返すのか」

ニコライが聞いていれば激昂しそうな発言をサラリとしてヴァンフォーレは学園都市から離れる。

（今はまだ時期じゃない……学園都市にしても幻想殺しにしても…

…まだ)

彼にしか解らない考えのもとで学園都市から一時的に手をひく。ヴァンフォーレ自身それが反逆になるということは解っているが、それによってロシアから切り捨てられるということはない。何故なら彼は大司教と同等の権限を所有しているからだ。

(……はあ、またあの口先だけは立派なジジイどもを黙らせないといけないのか……)

面倒だと言わんばかりのため息を吐き、ヴァンフォーレ＝レイノロッドは朝日に紛れ姿を消した。

残された日本軍は尚も侵攻を続ける。

*

「……フム、彼は引き下がったのか」

統括理事長の本拠地、窓のないビルの内部で培養液に逆さまに漂う“ニンゲン”。

アレイスターは空中にいくつも開かれたウィンドウを閲覧しながら興味深そうに呟く。

「彼は気付いたのか……だとすれば面白い、興味が湧いた」

不敵な笑みを浮かべるアレイスターの前には2つのウィンドウが開かれ、映像が映し出されている。

1つは高速で移動していくヴァンフォーレの姿。

もう1つは学園都市内部で動き回る人間の姿。

「神の友^{ラグエル}、君の考えは私の策略とは全く検討違いの方向へ走っているな。私は私自身の“コマ”を無下に切り捨てたりはしないのだよ……」

水中に漂うその“ニンゲン”は不適に笑って言う。

「学園都市を侮るなよ」

パンツ パンツ

短い銃声が学園都市のゲート付近でこだまする。

それは日本軍が放ったものではない。

銃弾を受け倒れていく日本軍の前に立ち塞がるのは金髪とサングラスがトレードマークの男、土御門元春。

「まったくアレイスターの野郎“神の友^{ラグエル}”が来るってことを知ってやがったんだな」

土御門は先程アレイスターからの通信を受けていた。

『どういつ事だアレイスター!!』

『何の話だ?』

『惚けるな!! 貴様神の友が来ているのを知っていたんだな!?』

『当然だ』

『……ツくそつたれが』

『それよりいいのか?』

『何の事だ?』

『直に夜が明ける。日本軍がゲートを突破し内部に侵攻してくるぞ?』

『!! 南側ゲートにいる一方通行と幻想殺しはどうしたんだ!?』

『君の想像通りだ。彼らでは“まだ”神の友には勝てない。時間切れだな』

『……ッ!! それを俺に伝えてどうしろと言った』

『決まっているだろう。侵入した日本軍を撃退したまえよ』

『こつちにはまともに動ける奴が殆どいないんだぞ』

『彼らの力ならば問題はあるまい』

『……くそつたれが』

「全く……アイツは何を考えているんだか……」

向かい来る日本軍の足を的確に撃ち抜きながら先程のアレイスターとの通信を土御門は思い出す。

アレイスターはこの状況になることを見越していたのだ。

ならば、突破口も用意されているのだろう。

「それが俺たちとはにやー……」

アレイスターにしては人に頼りすぎている気がするが、其れさえも計算のうちなのだろう。

空になった薬莢が地面に落ち、マガジンを素早く交換し再び発泡。日本軍も応戦として発砲してくるが土御門は建物の陰に隠れコレを交わす。

弾丸が目の前を飛び交う戦場で土御門は通信用の霊装を取り出して耳に近づける。

「そつちの首尾はどうかニヤー？」

「ええ、こちらは完了したわ」

土御門の問い掛けに反応したのは結標淡希だ。

『ならこつちに戻ってきてくれ。俺だけじゃ流石にこの数は捌ききれないぜい』

「死んだら骨は拾ってあげるわよ？」

『このままだと骨も残らなそうなんですたい』

「はあ……解ったわよ、直ぐに行くから待ってなさい」

ブツ

通信を切った結標は軽くため息を吐いたあとで周りを見回す。周囲に広がる亀裂、クレーター。

「……一体どんなことをすれば地形がこんな事になるのかしら」

学園都市を囲む外壁さえも所々が陥没していた。
学園都市南側ゲート。

そこに居た3人を座標移動で移動させた後、結標も戦場へと向かった。
↑プロポイント

「ゲート突破、これより目標物に向けて侵攻を開始する」

学園都市北側ゲート。爆薬によってゲートを破壊した日本軍は統括理事会を拘束すべく侵攻を開始、学園都市内部へと足を踏み入れる。

「ちょっとー、何を勝手に踏み入れてくれちゃってんのかしら」

不意に聞こえる声。

日本軍に向けられているであろう言葉を発した少女は堂々と日本軍300名の前に腕を組んで仁王立ちしていた。

それを見た日本軍のリーダーらしき男が部下に言う。

「あれは誰だ」

問われた部下は書類を取り出して確認したあとリーダーの男へと伝える。

「ハッ、御坂美琴。この学園都市に7人しかいないレベル5の第3位です」

「ホウ。まだ幼いではないか、あれが超能力者とは……先陣の我が軍は一体何をしていたのだ？」

彼らは先陣の日本軍が何故ゲートを突破できなかったのか理由を知らない。

故に、目の前に立つ少女がどれ程の戦闘能力を有しているのかも知らない。

「お嬢さん、おとなしくそこを通してくれないかね」

リーダーらしき男が諭すような口調で仁王立ちの美琴に話しかける。

「……そんな相談にのるでも思ってたの？」

前髪からバチンツと紫電を放ちながらあからさまに不機嫌さを醸し出している。

「……困ったな。このままでは君を殺してでも通らなくてはならないのだが」

「やってみなさいよ。やれるもんならね！..」

「……チツ、ガキが粋がりやがって」

先程までとは違い苛立たしげに舌打ちしてリーダーの男が300人へと指令を下す。

「目の前の障害を排除しろ」

「それはいけませんね」

リーダーの指令に反応したのは部下たちではなく、あちこちが擦りきれてボロボロになったスーツを着た青年だった。

「う、海原!？」

「これはこれは御坂さん、アナタもこちらに派遣されたのですか」

「てことはアンタも……?」

「ええ」

ニコニコと笑顔を見せる海原に若干疲れたようにひきつった笑みを浮かべる御坂。

「……おい、アイツは誰だ」

「……データにありません」

「ふん。まあいい、アイツも殺せ」

新たに現れた青年がデータにないということには特に気にすることもなくただ平淡に殺せと言い放つ。

「いけねえな。そいつはいけねえよオッサン」

しかし、またしても指令に反応したのは部下ではなかった。
突如上空から降ってきた白い特攻服のような学生服をきた男。

「てめえら性根が腐ってやがるな。俺が叩き直してやろうか」

「…………おい、アイツは誰だ…………!!」

ビキッ

と額に青筋を浮かべたリーダーが忌々し気に部下に尋ねる。

「削板軍覇。学園都市第7位のレベル5です」

「ほう。またレベル5とやらか、全く学園都市はこんな子供を戦場に駆り出さなくてはならんほど人員が不足しているのか？」

ハント

と鼻で笑いながら目の前の3人を見下すように言う。

「ねえ、何か私達馬鹿にされてない？」

「そんな雰囲気ですねえ」

「根性がねえ奴等だな」

学園都市北側ゲート。侵入してきた日本軍300名に対峙するのは
学園都市が誇る超能力者2人と魔術師。

朝陽が射し込み始める学園都市に轟音が響き渡った。

「あら、生きてたの」

学園都市東側ゲート。座標移動で移動してきた結標は建物の陰に隠れながら発砲を続ける土御門を発見してそんなことを呟いた。

「それは俺に死んでくれと言っているように聞こえるぜい」

「あながち間違いではないわね」

「他の奴等は？」

「もちろんよ。直ぐに解るわ」

「なら安心だ。1人じゃ300人相手にできないからな」

土御門がそう言った直後、ゲート付近にいた日本軍の後方辺りの兵士がいきなり吹き飛ばされた。

「来たか」

吹き飛ばされた兵士達が無造作に空中を舞いコンクリートに叩きつけられていく様子を見て土御門が言う。

「なんだあ!？」

日本軍の兵士たちが突然吹き飛ばされたことに前線にいた兵士たちが何が起きたのか理解できずに声を荒げて情報を求める。

「ぐわあ!！」

「ギャツ!！」

尚も続く日本軍兵士たちの悲鳴。徐々に徐々にその悲鳴が前線へと近付いてくる。

「幻想殺しは病院に搬送させたけれど」

「それでいい。どっちみち上やんの能力は一般人には役に立たないからな」

「そう。なら私も戦線に出るわよ」

「ああ、これで最後だ。温存なんていらない、存分に暴れろ」

結標は土御門との会話を終えて建物の陰から出ていく。

走って移動するわけでもなく、死角について移動するわけでもない。

ただまっすぐ。

日本軍へとゆっくりと歩いていく。

「隊長!! 前方から接近してくる女が!!」

「何だと!?! さっきまでの金髪じゃないのか!?!」

「違います！！女です！！手に持っているのは……懐中電灯？」

「そいつも殺せ！！それよりも後方はどうなっている！？」

「依然として何が起きているのか解りません！！」

「くそっ！！後方も発泡しろ！！」

前方と後方から訪れる驚異に隊長の指令で一斉に発泡。

しかし、

「あゝア？」

聞こえてくるのは日本軍の声ではなく、後方から迫り来る驚異。

「こちらスタボロにされて苛々してンだよ……」

悪魔のような邪悪な笑みを浮かべる白髪の少年が首をゴキゴキと鳴らしながら歩いてくる。

「ぐわあっ！！」

「ギャア!!」

前方からも悲鳴が響き渡る。

「次はなんだあ!？」

隊長が前方へと振り返る。見れば前線で発泡していた何人かの兵士の手の甲にコルク抜きのようなものが突き刺さっている。

「あらあら。なかなか良い声で哭くじゃない」

懐中電灯をクルクルと回しながらニツコリと笑う結標。

土御門もそれに続いて建物の陰から現れる。

「さあ」

サングラスの位置を整えながら土御門は周りを見て言う。

「形勢逆転といこうか」

Ep・41 形勢逆転といこうか（後書き）

いよいよクライマックスです!!

Ep・42　そして始まるいつもの1日（前書き）

学園都市内戦編完結です。

Ep・42 そして始まるいつもの1日

「……ん」

うつすらと重たい瞼を持ち上げる。

「……またここに来ちまったか……」

彼、上条当麻は第7学区にある病院のベッドの上で目を覚ました。

「おや、気がついたんだね」

重たい身体を持ち上げて声がしたほうに視線を向けると病室の入口にカエル顔の医者が相も変わらずといった感じで立っていた。

「君は余程ここが気に入ったとお見受けするんだね」

「……俺は入院マニアじゃないんですけどね」

苦笑気味にカエル顔の医者に言葉を返す当麻。
身体のおちこちが痛み顔を歪ませる。

「動かないほうがいい、普通なら1ヶ月は入院が必要な怪我をしているんだ」

「でも俺は……」

「事情は解っている。今君が出ていっても銃を持った軍人相手に何ができるというんだ」

「ッ……！！」

当麻の“幻想殺し（イマジンプレイカー）”は異能の力を打ち消す以外には全く使い道がない代物だ。

「でもみんながまだ闘ってるってのに……！！」

「つけあがるなよ。君が居なくとも彼らならきつと大丈夫だ。だからまずはその傷を治すのが君の仕事なんだね」

「……」

「誰にでもできることとできないことがある。たまたま君ができないことが今起きているだけだ」

「……そうなんですかね」

「そうだ」

「……」

その後何も言わずにカエル顔の医者は病室をあとにした。当麻は何も言わず、ただ射し込む朝陽に身を当てていた。

*

「一方通行ッ!!」

学園都市東側ゲート。日本軍と絶賛交戦中の土御門元春はゲート付近で戦闘している一方通行に向かって叫ぶ。

「あアッ!？」

「くれぐれも殺すなよ!!」

「バカかてめエはア!!こいつら俺達を殺すつもりでいやがるじゃねエかよオ!!」

「表で暴れてどうすんだッ!!」

「ッ……!!」

土御門の言葉に反論できなくなる一方通行。アイツを守るためなら何だってすると決めた筈なのに、近くに居れなくなると考えると躊躇われる。

ギリッ

奥歯が碎けるのではないかというくらいに力を込めて噛み締める。

「ツツツクソツタレがアアアア!!」

轟ッ!!

振り上げた足を思いきり地面に叩きつける。地面には亀裂が走り、周囲には衝撃波が発生し、近くにいた日本軍の兵士たちを忽ちに巻き込み吹き飛ばしていく。

地面に叩きつけられた兵士たちだが、重傷を負っている者はいるが死亡した者は見られない。

一方通行なりに加減しているのだ。

「オオオオオオオオオオオオッ！！」

脚力のベクトルを操作して日本軍の列へと突っ込んでいく。

数秒後、列の中心で突風が巻き起こり、兵士たちが紙切れのように舞い上がる。

「くそっ！！化物かあいつは！！」

その様子を前方から目視していたリーダーは焦燥にかられていた。

（くそっ！！ロシア側が学園都市はもう虫の息だというから夜明けと同時に突入したというのに、話が違うではないか！！）

ロシアからの報告と目の前の学園都市の人間を前に情報が誤報だったということを知り、退くに退けなくなった日本軍は進むしかない。

「殺せえええ！！」

兵士たちにそう指示を出し、兵士はライフルを持ち出して前方にいる金髪サングラスにアロハシャツというふざけた格好をした少年に狙いを定める。

しかし、銃の扱いは彼のほうが何枚も上手なようで、兵士たちが銃弾を装填して引金をひくよりも早く金髪サングラスはライフルを持った兵士の足だけを正確に撃ち抜いていく。

パンパンパンッ！！

「ぐあつー!!」

「ギャッ」

「グッ……!!」

撃たれた兵士たちは皆同じようにライフルを落とし膝をつく。痛みを顔にしかめ戦意を喪失している者もいた。

「ええい、もう構わん!! 大砲を持ってこい!! 学園都市ごと木っ端微塵にしてやるッ!!」

リーダーである男が後ろに居た部下に指示をとばし、ガラガラと移動式の大砲が4人がかりで運ばれてくる。大きさは3m強。威力で言えば御坂美琴の超電磁砲レールガンと何ら遜色ないレベルである。それを自らの横に配置させ、リーダーは叫ぶ。

「装填ー!!」

ガコンッ

砲弾が装填され狙いを定める。

「撃てー!!」

放たれる言葉。

しかしそれに大砲はピクリとも反応しない。

「……?」

いつまでたっても砲弾が発射されないことを怪訝に思ったリーダーが顔を大砲の方へと向ける。

「ヒッ……！？」

思わず干上がったような声をあげるリーダー。

振り向いた先に居たのは、白髪赤眼の悪魔のような笑みを浮かべる少年。

少年は上空から降ってきて大砲に直撃、そのまま大砲は轟音を立てて爆発し、粉塵の中から無傷で現れたのだ。

「あ……あ……」

二の句が次げない。

余りの恐怖に自分がいつのまにか尻餅をついていることすら気づけない。

「ッたく……こちら苛々してんだ。余計な手間とらせんじゃねえよ……！！」

赤い2つの眼がリーダーである男をギロリと睨み付けるとそのまま男はだらしなく泡を吹きながら気絶してしまった。

「……なめてンのか？」

目の前で不様な醜態を晒している男を見下し、興が削がれたかのようにつまらなそうな表情を浮かべる一方通行。
彼が振り返ると重傷を負ったり気絶した兵士たちが地面に倒れ臥している。

「フウ……」

土御門も殲滅が完了したと判断したため銃を適当に放り投げサングラスについた誇りを服の裾で拭う。

「お疲れさん一方通行。東側ゲートの制圧は完了だ」

「こんな雑魚共に時間を割かれるなンざ死ンでも御免だぜ」

くだらなそうにチョーカーのスイッチに手を伸ばしオフにする。ゲートに立て掛けてあったトンファー型の杖に手を伸ばし、歩いてその場を後にする。

現在時刻

A M 0 6 : 1 2

東側ゲートの日本軍の殲滅が完了した。

時は少し遡り

現在時刻

A M 0 6 : 0 3

学園都市北側ゲート。

「な、何だこのガキどもはッ!？」

ライフルを構える1人の日本軍兵士が叫ぶ。

我々の侵攻を妨げるように現れた2人の男と1人の少女。

勝敗など言うまでもない。丸腰の子供3人に完全武装した300人の訓練された兵士達。

何の障害にもならず突破できる筈だった。

しかし、

蓋を開けてみれば防戦一方。あり得ない、とこの兵士は思った。

1人の少女はゲームセンターなどでよく見るメダルゲームのコインを指で弾いたかと思えば155mm砲と同等の威力の砲撃を放ち、白い特攻服のような学ランを着用した少年は何だかよく解らないかけ声とともにただのパンチで大人の10人程をまとめてぶっ飛ばし、黒いナイフを持つ青年は次々とライフルや拳銃を手を触れずに分解していく。

通常では考えられない事態に日本軍の兵士たちは軽いパニックになりかけていた。

そのパニックになりかけの精神をギリギリの所で支えていたのはリーダーの男の迅速な指示。

やるべき事を見失わなかったため何とか自らの仕事をする事ができたのだ。

だが、

「ライフル射撃を続行！！前方へ配……」

「すごいパンチ」

「おぶるううお！？」

そのリーダーが白い少年に殴られ、5 m程水平に吹き飛んでいく。そのまま学園都市の外壁へと衝突しズルズルと落ちながら意識の糸をプツツリと切り離す。

司令塔を失った兵士たちに必然的に訪れるのは混乱。

皆が皆ライフルを構え狙い定めることなく無造作に乱射する。

「ちょっ！！こいつらおかしくなつたわよ！？」

「リーダーを削板さんが倒したことでパニックになってるみたいですね」

「悠長に言つとる場合か！！」

「御坂、海原！！こっちに撃ってくるぞッ！！」

削板の言葉で御坂と海原も銃弾を避ける。無数の弾丸が乱射され、同士討ちも引き起こしているようだ。

「アイツらどうやって倒すのよ！？」

「私の槍では多人数には向きませんからねえ」

「言つとる場合かぁ！！」

「おや来ますよ」

見ればライフルの弾を撃ちきった兵士たちがライフルをこん棒代わりにして振りかぶりながら接近してくる。

「……ああ、もう！！手加減すんの難いのよ！？」

痺れを切らした美琴がバチバチと雷撃を向かってくる兵士たちに放つ。

「ギャッ！！」

「アバババババ！！」

「グオオッ！？」

雷撃を喰らった兵士たちは黒焦げになって地面に倒れていく。

「あちらは削板さんがやってくれているみたいですね」

海原の視線の先を美琴も見る。

すると削板が日本軍の中心へと飛び込み好き勝手に暴れているのか削板を中心にして兵士たちが次々に吹き飛ばされていく。

「……人間てあんな簡単に吹き飛ぶものだったかしら」

げんなりしながら削板が兵士を倒していく様子を見つめる美琴。

全員を倒すのにそれ程の時間はかからなかった。

「うし、倒したぜ」

何だかとても良い笑顔で削板がこちらへ戻ってくる。

AM06:15

北側ゲートの制圧が完了した。

「フム、やはりこんなものか」

アレイスターは目の前に開かれたウィンドウを見ながら小さく呟いた。

そこには倒された日本軍の兵士たちを学園都市の外に運んでいる暗部の下部組織の姿。

「やはりこの程度では奴らを使う必要はないな」

そう言いながらアレイスターはもう一つのウィンドウを開く。そこに記されていたのは暗部組織の名前と構成員。

グループ

スクール

アイテム

ブロック

メンバー

次々とスクロールされていく画面の最後に写し出されたもの。

キャラバン

そのウィンドウを見るアレイスターの不気味な笑みだけがその場に不気味な空気を漂わせていた。

「あーだりイ」

一方通行は回収車に乗り込んで忌々し気に言う。

「今回の仕事は腑に落ちない点多すぎるニヤー」

同じく乗り込んでいた土御門がトーストにバターを塗りながら言う。
ちなみにその隣では結標がクロワッサンを片手に紅茶を飲み、海原はニコニコしながらそれらを傍観している。

「あの野郎オ……勝手に消えやがって……」

一方通行の言っているのはヴァンフォーレのことだろう。

口には出さないが手も足も出なかったのが相当悔しいようだ。

「結局この内戦は終わったと見ていいのかしら？」

紅茶を含んでいた結標が土御門に尋ねる。

「ああ、ロシア側からはニコライ・トルストイの独断であるとヴァンフォーレからの通達があつて和解した」

「彼も戦闘に参加していたのですか？」

海原が土御門の答えに疑問を投げ掛ける。

「奴は大司教と同じ権限を持っているし何より壊滅将隊は秘匿されるべき組織だからな。向こうも公にはしたくないんだろうな」

「日本とは？」

「日本ともどうやら和解したようだ。どんな手を使ったのかは知らんが向こうの首相が通達してきた」

「まあもともと一般人には気付かれないように行なった闘いだっただけだしね」

「わだかまりを作りたくはないんだろうよ。何しろ事がばれれば学園都市に子供を預けている親から政府へとバッシングが酷いだろうからな」

「割に会わねエ仕事させやがって」

一方通行は完全に睡眠モードに入っただのか座席を限界まで倒して頭の後ろで腕を組み瞼を下ろしている。

「誰かマジック持っていないかしら？」

結標がニヤニヤしながら尋ねる。

「マジックスプレー筆、何でもあるぜい」

土御門が懷から四次元ポケットのように次々とマジックやスプレーを取り出す。

「額に肉って書いた一方通行も見てみたいわよね」

「殺すぞ」

まだ起きていたらしい一方通行が結標の発言に反応する。
結標の持っていたマジックを奪いとりそれを土御門のサングラスへと投げつける。

「ぶへッ!!」

「次なめた真似しやがったらミンチにすんぞ」

再び身体を横にする一方通行。

サングラスが割れていないか気にする土御門。

再びマジックを手にとる結標

ただニコニコしながらそれを眺める海原。

『グループ』の4人を乗せた回収車は早朝の学園都市をスムーズに走っていく。

人知れず始まった闘いは人知れず終わりを告げる

今日もいつもと同じように、賑やかな学園都市の1日が始まる

Ep・42 そして始まるいつもの1日（後書き）

次回はちよつと番外編。

番外編 『一方通行』（前書き）

番外編ですが一応本編の新章にも繋がります。

番外編 『一方通行』

日本との内乱を終えて3日。学園都市は相も変わらずただただ平和な日常で溢れていた。

そんな賑やかな学園都市の街中を1人杖をついて歩く男。

明らかに一般人とは纏う空気が異なる白髪の少年は現在第一五学区を歩いていた。

第一五学区は学園都市最大の繁華街がある学区、所謂流行発信基地でテレビ局などのマスコミ関連施設の多い学区である。

何故そんな学区を一方通行が歩いているのか。それを知るには時間を少々遡る必要がある。

『あア？外部組織との情報受渡しだア？』

『グループ』のアジトの1つ、その内部で一方通行は面倒くさそうに言葉を吐いた。現在このアジトにいるのは一方通行と土御門のみで、結標と海原はそれぞれ別の任務で出払っている。

『ニヤー、俺が行ってもいいんだけど生憎と別の任務があるんだぜい』

ソファに腰掛けながら土御門が両手をヒラヒラさせながら言う。

『……チツ、詳しく話せ』

『理解が早くて助かるニヤー』

そう言うって土御門はデスクの上に今回の任務の資料を無造作に並べていく。

『今回の任務は今言ったが学園都市内部の組織と外部の組織との情報の受渡しを阻止して情報を出力したUSBメモリを回収することだ』

土御門の向かい側のソファにドカツと腰を下ろした一方通行がその資料の束に目を通していく。

『あア？俺らのデータじゃねエか』

その資料に記載されていた情報というのは学園都市第1位から第7位までのレベル5たちの詳細なデータ。

『そうだ。盗まれたのはお前たち超能力者の詳細な個人データだ』

『そんなモン盗ってどうしようってんだ』

『以前任務で潰した『カスタム』って覚えてるか？』

暗部下部組織の1つ『カスタム』
機密レベルで言えば『グループ』よりは下、所謂下部組織というや

つなのだが以前一方通行たち『グループ』が任務により殲滅した組織だ。

『あア、親船暗殺を企てた奴等だろ』

『そうだ。実はそいつらにまだ生き残りが居たらしくてな、そいつらがどうやったのか機密書類であるレベル5達のデータをまんまと盗み出したわけだ』

『で、それを外部のクソ野郎どもに売って自分は見返りに亡命つかア？』

『そういうことだ』

『チツ、つうことはソイツらぶつ殺してUSBメモリを回収すりやいいわけだな』

『ああ、場所は第一五学区のテレビ局だ』

土御門が地図をテーブルの上に広げながら必要事項を端的に説明する。

赤くマークされた箇所は学園都市でも大手のテレビ局だ。

『ハッ、わざわざ人ゴミの中で受渡しなンざいい趣味してンじゃねエか』

『受渡しはおそらくこのテレビ局内のどこで行われる。残念だがここから先の情報は入手することができなかった』

『充分だ』

一言そう言って一方通行は腰掛けていたソファから立ち上がり立て掛けてあったトンファー型の杖を手にとる。

『受渡しの予定時間は？』

『午後１時、今から２時間後だ』

『敢えて人通りが多い時間に受渡してそれに紛れるつもりでいやが
ンのか』

『おそらくそうだろうな。しくじるなよ、失敗はお前の居場所を無くすことになる』

土御門が言っているのはデータにあった絶対進化計画のことだろう。クローンとはいえ１万體もの人間を殺したと知れば一方通行本人はもちろん学園都市上層部も危険が及ぶ。

それを理解している上で、一方通行は土御門に言い放つ。

『俺を誰だと思ってやがる』

現在時刻は１２時半、受渡しの予定時刻までは３０分程残っているが、一方通行は既に目的地であるテレビ局の前まで到着していた。

眼前に聳え立つ巨大なビル。上層には電波塔であろう物体がたっている。

「……この中から探せつて広すぎんたるオが」

パツと見ても50階以上はありそうな巨大なビルを前に、面倒くささに苛まれながらも局内へと足を踏み入れる。

ガーツ

と自動扉が開き、1階のロビーへと進み周りを不自然にならないように見回す。

昼時とあって社員食堂へ向かうサラリーマンやOL、携帯で何やら話すディレクターやソファに座って新聞に目を通す老人など様々な人間が目につく。

しかし、

（此処には居ねエみてエだな……）

一方通行はロビーに『カスタム』の人間、あるいは外部組織の人間は居ないと判断する。

別段確証があるといったわけではないが、一方通行は確信を持ってロビーをもう一度見渡す。

（此処に居る奴等からは闇の臭いがしねエ……つつことは上か？）

いつそこで派手に暴れてしまおうかとも一瞬考えたが即座にその考えを頭の中から排除する。

あくまでも此処は『表』の世界。『裏』の住人である自分が暴れても得るものは何もない。

（表の人間にバレずにかつ安全に取引が行える場所……）

目の前にある案内図を見上げながら一方通行は思考する。

（地下……いや確か此処は地下は駐車場だけだった筈だ。屋上……もねエな、監視カメラが何台も稼働してやがる）

頭の中の情報と目の前の情報を照らし合わせながら速やかに処理していく。

（なら個室か……？プライベートルームなら監視カメラは仕掛けられてねエ筈だ。だがそうなるとテレビ局のお偉いさんが絡んでくる事になっちまう……）

そこまで考えた一方通行はポケットから携帯を取り出して通話ボタンを押す。

TRRR… TRRR…

『どうしたんだニヤーツ！？』

携帯越しに聞こえてくるのは何だか異様に切羽詰まったように声を荒げている土御門元春だ。

「大至急俺の携帯にテレビ局の監視カメラの設置箇所と部屋の見取図を送れ」

『それくらい俺じゃなくて上に頼めよ……っつてうおお！？』

「……お前今どんな状態に居んだよ」

『それは話すと長くなるから省くニヤーツ!!』

携帯越しに聞こえる足音と荒い息づかいからどうせまた任務でしくじったんだろうと適当に結論を出して一方通行は乱暴に通話終了ボタンを押し、携帯を閉じた。

それから数十病後、携帯のバイブが振動し土御門からメールが届く。添付されていたファイルを開き、テレビ局内の監視カメラ設置箇所と部屋の見取図を基に取引場所に使用される可能性のある場所を片っ端から潰していく。

そして最後に残った場所は

「第8スタジオ……」

テレビ局内部にある12のスタジオのうち最も高い階に位置するスタジオであり此処は収録にアクシデントがあったときのスペアであるため滅多に使用されることはない。

「ハナツから此処だと気づくべきだったか」

携帯の画面の時刻を確認し忌々しそうに舌打ちする。

P M 0 0 : 4 7

取引予定の1時まで残り13分。

この1階ロビーから第8スタジオのある39階までエレベーターを使っても3分かかる。

つまるところ残された時間は10分あるかないか。

エレベーターに乗り込み、独特の浮遊感を味わいながら39階へと向かう。

一方通行はゆつくりと左手を首筋に伸ばし、チョーカー型電極のスイッチをオンにする。

チンッ

小気味のいい音とともにエレベーターが停止し、ドアが開く。

第8スタジオの入口前には2人のスーツ姿の男達。一般人を装ってはいるが、一方通行には解る。

「……明らかに挙動がこっちの住人じゃねエか」

おそらく彼らは『カスタム』生き残りのメンバーだろう。外部組織の人間ではないように思われる。

取引予定の1時まで残り7分。

……一方通行はコソコソと動き回るのを止めた。

カッン、カッン

と入口へと繋がる通路の真ん中を堂々と歩いていく。その一方通行に気付いた見張りの男達の顔が一気に青ざめていく。

そんな彼らに一方通行は口元を吊り上げ、言葉よりも早く行動を開始した。

ドギャツ！！

入口を見張っていた2人の人間もろとも両開きの扉が勢いよく破壊されて吹き飛ぶ。

中にいたのは『カスタム』の構成員5人と外部組織であろうスーツを着た男3人。

一方通行の素性をよく知らない外部組織の人間たちは白髪赤眼の少年を見てもこれといった反応を見せないが、『カスタム』の構成員たちは最早言葉も出ない。

そんな彼らを見無視し、ズカズカと我が物顔で明かりが消えたスタジオへと踏み込み一般人がテレビ局内にいることも構わず凶悪な笑みを全面に押し出して叫ぶ。

「ゴミ掃除だクソツタレがアアアアア！！」

任務は滞りなく終了した。

番外編 『一方通行』（後書き）

まだ番外編続きまーす

番外編 『土御門元春』（前書き）

番外編その2です。

今回は土御門編

番外編 『土御門元春』

暗部組織『グループ』。その構成員である土御門元春は先日の内戦に幾つかの疑問を抱いていた。

特に、アレイスターの考えについて。

（奴はこうなる事さえも予測してたつてのか……だとしたらそれ以上の戦力が学園都市側にある、俺達でさえ知らない何かが……）

グループのアジトの1つでパソコンのキーボードを叩きながらハックを開始する。狙いは学園都市統括理事会と理事長の周辺データ。

次々とウィンドウに表示されるパスワード入力画面と警告表示を突破しながら学園都市上層部へと潜り込んでいく。

「……これか」

タタンッ

とエンターキーを押してウィンドウに表示されたのは統括理事会直属の実行部隊。この機密レベルに自分たちの所属する『グループ』や垣根帝督の『スクール』、麦野沈利がリーダーの『アイテム』、更には『ブロック』や『メンバー』などの暗部組織があり、構成員などが組織名の下に羅列されている。

画面をスクロールし次々と表示される情報に目を通していると、不意に土御門の手が止まった。

「……何だ？」

サングラス越しでも解る怪訝な表情を浮かべ食い入るようにパソコンの画面を見つめる土御門。

画面に表示されていたのは今まで土御門自身も見なかった名称。

キャラバン

画面にはそうとしか記載されておらず、組織名の下に構成員などは一切表示されていない。

それどころかコレが暗部組織であるかどうかも疑問だ。

「……つい最近までこんな名前は記載されていなかったぞ……これも全て貴様の思惑だということか、アレイスター……」

パソコンの画面を凝視しながら思案するも、アレイスターの考えなど理解できる筈もなく、いたずらに時間だけが過ぎていく。

ガチャッ

そんな折、先程呼び出した一方通行がアジトへとやって来た。

「いきなり呼び出しやがってまた任務かア？」

見るからに不機嫌そうな表現を浮かべながら土御門とは向かいのソファに腰掛ける。

「そんなところだ。詳細はこの書類に目を通しておいでくれ」

土御門は今回の任務の内容が書かれた紙を一方通行に渡す。

「あア？外部組織との情報受渡しだア？」

紙に目を通しながら一方通行が身体から面倒くせエと言わんばかりの雰囲気を一気に醸し出す。

「ニヤー、俺が行ってもいいんだけど生憎と別の任務があるんだぜい」

嘘である。

本来ならば今日の土御門に任務は与えられていない。

土御門自身も今日は非番だと解っていたため義妹の所にも行つて手料理を振る舞ってもらおうと考えていた。

……のだが、

先日の内戦に些か疑問の残る節が多かったため進路を舞夏のいるマンションから近くのアジトへと進路を変更し、潜ってみれば案の定これまで見たことがなかった単語が記載されていた。

（何故このタイミングで表示されるようになったかは解らないが…
…調べてみる価値はありそうだ）

一方通行が嫌々アジトを出てテレビ局へ向かってから数分後、閉じていたパソコンを開き再び上層部への侵入を開始する。

先程『キャラバン』と表示されたページにアクセスし、どうにかしてそれについての情報を入手しようと手当たり次第にハッキングを開始、異常な速さのタイピングで次々と現れる包囲網を突破し更に下へと潜っていく。

「……違う、これじゃない……これも違う」

ブツブツと呟きながら必死に画面と向かい合う土御門。
今の彼には周囲のものが全く見えていない。

「……ッ!」

土御門の表情が一気に曇り忌々しそうに舌打ちする。

「クソツタレが!」

ダンッ!!

とパソコンを置いているテーブルを叩く。パソコンの画面には赤い警告文とERRORの文字。これ以上侵入することを許さないネット側の最後通告だ。

(どうする……!? 流石にこれ以上は俺の身が危険……)

これ以上侵入を続ければ最悪パソコンに逆探知をかけられ自分の居場所が向こうにバレてしまう可能性だつてある。
そんな一か八かの賭けをメリット無しに行うほど土御門は愚かでは

ない。

……が、

「今日の土御門サマは一味違っぜい」

挑戦的な笑みを浮かべ警告表示を無視して再びキーボードを叩き始める。

（多少のリスクは承知の上だ。そのリスクを冒してでもこの情報は手に入れる価値があるはず……！！）

そう思い一心不乱に画面に現れる警告文やダミーの情報、ファイヤーウォールなどと格闘しながらさらに深部へと潜っていく。

（あと少し……！！）

額から流れる汗にも構わず、ひたすらスクロールされるデータに目を通していく。

（これで……！！）

侵入成功。

そう思い一瞬気を抜いたのがいけなかった。

ピーッ！！ピーッ！！

「!!」

突如パソコンから警報にも似た音が発せられ、画面には赤い警告文がそこかしこに広がっている。

「クソツタレ!! まんまと嵌められたわけか!!」

このままでは自分の居場所が完全に向こうに知れ渡ってしまう。土御門は瞬間立ち上がり、アジトから出て別のアジトへと走る。

（早くここから離れないとマズい!! 幾らなんでも迂闊すぎた!!）

自らの失敗を悔やむが時既に遅し。

人通りが全くない裏道を走っている筈のだが足音が一つではない。

土御門がおそろおそろ後方へと首を回してみれば……

（オイオイ居場所が割れるのが早すぎるぞ!!）

後方から黒スーツの男が5人ほど追いかけてきていた。

（まったく面倒なことになったな……!!）

厄介なことに奴等は既に銃を抜いている。ここは人通りが全くない裏道、いつ発砲されても可笑しくない。

「うお!?! いきなり撃つてきやがった!!」

土御門のすぐ横を弾丸が通りすぎていく。右へ左へ細い路地を通り何とか奴等を撒こうとするが、ピッタリと後を追走してくる。

「くそッ、しぶといな……!!」

後ろを振り返りながら土御門が走り続けていると、ふと携帯のバイブが振動している事に気付いた。

（誰だこんな時に!？）

無視しようかとも考えたが、結局ポケットから携帯を取り出して通話ボタンを押す。着信は一方通行からのものだった。

「どうしたんだニヤーツ!？」

全力で走り回っているせいか息が荒い。

『大至急俺の携帯にテレビ局の監視カメラの設置箇所と部屋の見取図を送れ』

「それくらい俺じゃなくて上に頼めよ……ってうおお!？」

土御門の頬を弾丸が掠め、じんわりと血が滲む。

『……お前今どんな状況に居ンだよ』

一方通行が半ば呆れたように尋ねてくるが、生憎今の土御門に懇切丁寧に説明する時間などないわけで、

「それは話すと長くなるから省くニヤーツ!!」

一刻も早く通話を終えるためにこう言う他なかった。

一方通行が通話を終わらせると土御門はすぐに携帯をしまい再び全力逃走に移る。

土御門が無事に奴等を撒いたのは、逃走開始から2時間後だった。

番外編 『土御門元春』（後書き）

まだ番外編続きます。

番外編 『結標淡希』（前書き）

きつとこんなだろうな、という作者の妄想WW

短いのはご勘弁を；

番外編 『結標淡希』

一方通行がテレビ局に出向き、土御門が黒づくめの男たちと鬼ごっこを繰り広げていた頃、同じく『グループ』の一員、結標淡希は簡単だった任務を終え、居候先のオンボロアパートに戻っていた。

「結標ちゃん、折角早く帰ってきたのですから今日こそお料理するですよ」

扉を開け一歩踏み入れた途端に掛けられた言葉に少々げんなりしながらもとりあえず靴を脱ぎ、中へと入っていく。

『さあさあレッツクッキングです』と隣でおたまを持って言うのはこの部屋の住人であり教師である月詠小萌だ。身長135cmとどう見ても小学生にしか見えない体格をしているがちゃんと大学を卒業しているらしい。

「はあ……わかったわよ」

羽織っていたブレザーを脱ぎサラシの上からTシャツを着て小萌が待つキッチンへと向かう。

「今日は家庭的に肉じゃがを作ってみましょう」

どこからか用意してきたエプロンを手渡され小萌の隣に立つ結標。

「まずはジャガイモを面取りします」

はい、と小萌が結標にジャガイモと包丁を渡す。

「……面取り？」

エプロンを着用した結標がジャガイモと包丁を受け取るが面取りの意味がわからず立ち尽くしている。

「面取りとは角を削ぐことなのですよ」

隣で小萌が手本としてジャガイモの皮を剥き包丁で角を落としていく。

「なるほどね」

見よう見まねで結標も皮を剥き、包丁で角を落としていく。

「おおっ、なかなか器用ですね結標ちゃん！」

「こんなのお手の物よ」

「では次に移りましょう」

ジャガイモの面取りを終え、それを6切りにした後は玉ねぎを2cm位の幅で楕形に切っていく。

「どうしたのですかー結標ちゃん？」

「な、何でもないわよ……」

執拗に目をゴシゴシと擦りながら玉ねぎを切っていく結標を見て小萌は小さく微笑む。

「終わってたわよ」

「では次です。このお鍋にジャガイモと玉ねぎを入れてヒタヒタになるようにお水を入れて下さい」

小萌に言われたように少し大きめの鍋に先ほど切ったジャガイモと玉ねぎを入れ、水をジャガイモと玉ねぎが浸かるまで入れる。

「これを強火にかけて煮立せるのです」

コンロをひねって強火で煮ていく。

「結構大変なのね」

「何言ってるんですか結標ちゃん、これからなのですよ」

しばらくして煮立ったようなので次の行程へと進む。

「中火にして砂糖と味醂を大さじ1……だったかしら」

「それで合ってます。そうしたら10分程また煮ましょう」

「待ってる時間が勿体無いわよね」

「待ってる時間というのもお料理の一部なんです」

割とせっかちな性格なのか結標がじれったく煮えるのを待っていると諭すように小萌が言う。

10分後。

「醤油大さじ1を加えてください」

「大さじ1ね……入れたわ」

「では3分煮ましょう」

「また待つわけ？」

再び待たなくてはならないのが嫌なのか結標はため息をはく。

3分後。

「では豚肉を広げて入れてください」

「入れたわよ」

「豚肉の色が変わったら醤油大さじ1と1/2、味醂大さじ1を加えて灰汁を取ってください」

小萌に言われた通りに豚肉の色が変わったら醤油と味醂を入れ、丁寧に灰汁をすくっていく。

「灰汁がとれたら落とし蓋をして」

「落し蓋をして?」

「10分煮ます」

「またあ?」

「落し蓋をして煮ることでしたっかり味が逃げずに染み込むのですよ結標ちゃん」

もういい加減うんざりしてきた“待つ”という行程に結標が飽き飽きしていると小萌が何やらその重要性を説明しだした。それを話半分で聞いていると、10分が経ったようなので落し蓋を外す。

「強火にして汁気を飛ばすのです」

コンロを強火にしながら小萌が言う。

「最後に味を調えたら完成です」

完成した肉じゃがを皿に盛り付け、小さな丸いテーブルへと運んでいく。

本日の昼食。

ご飯と味噌汁と肉じゃが。

テーブルにつき、『いただきます』と手を合わせたあと結標は初めて作った肉じゃがを一口食べる。

「どうですか?結標ちゃん?初めて作った肉じゃがのお味は」

「……美味しいわ」

「そうでしょう？作った人の気持ちが料理にはこもっていますからねえ」

嬉しそうに肉じゃがをパクつく小萌が言う。

「そんなものかしら」

「そんなもんです」

2人で小さなテーブルと料理を囲みながら緩やかな時間を過ごす。

(……たまにはこんな1日もいいものね)

『裏』の人間であるが故に手に入れられないである筈の日常が、そこにはあった。

そんなことを考えながら肉じゃがを口に運ぶ結標の口元は、心なしか弛んでいた。

そう。

今はまだ知る由もない。

彼女はおるか『グループ』、そして全ての暗部組織をも巻き込む事件がすぐそこまで迫ってきているということに。

番外編 『結標淡希』（後書き）

この流れで行くと次は……

番外編 『海原光貴』（前書き）

これで番外編は最後になります。

あと、これはE p . 4 2、5を兼ねてます。

まあ新章への序章みたいな感じですかね。

番外編 『海原光貴』

他の『グループ』の3人がそれぞれの昼下がりを過ごしている頃、同じく『グループ』のメンバーである海原光貴は、任務を早々に終え常盤台中学の近くにやって来ていた。

時間帯的には昼食の時間であるため給食を食べるために移動している生徒たちが目につく。

何故彼がこんな所、正確に言えば常盤台中学の正門前にまで来ているのかと問われれば、まともな理由など存在しないと言わざるをえない。

彼女

御坂美琴とその周囲を守りたいと思い、そしてそれはとあるレベル0の少年へと託された。

ということは暗部に身を置く海原と表の世界を生きる御坂が接触する、という行為は避けたほうがいい。彼女までこちらに引き摺り込むわけにはいかないのだから。

では何故海原は現在進行形で常盤台前で立っているのか。

理由は単純。

それでも彼は彼女が気になるのだ。

見た目爽やかな青年である海原光貴、しかし正体は中米最大の魔術結社『翼ある者の帰還』の元魔術師だ。

今被っているこの『海原光貴』は本人が別で存在しているため、あ

まり出歩くのは得策ではない。

「御坂さん……」

海原は常盤台の校舎を見上げ呟く。

（何故こちらに関わってしまったのですか……）

脳裏によぎる先日の内戦、学園都市上層部はこの内戦を一般人には秘匿しながらもレベル5である御坂美琴を戦線に投入した。同じく第5位の天上院についても同様だが、これで彼女らは少なからず“こちら”に足を踏み入れてしまった。

「いつまでもこの平穏が続けばいいんですが……」

人知れず小さく呟く海原。解っている、そんなことはあり得ないということ。

だから、表の世界を生きる彼に彼女を守ってくれと頼んだのだ。今はもう、自分の出る幕ではない。遠くから見守り、彼女の幸せを願うことで、少しでも彼女の力になる。

そう内心で決心した海原は踵を返して常盤台から離れる。いくら常盤台の理事長の孫であっても本来ならば学校に行っている時間帯だ。怪しく思われないとは言いきれない。

なるべく人目につくのを避けるため角を曲がって裏道へと入っていく。

天気は快晴であるのに対して裏道は日が届いていない所もあって薄

暗い。

チンピラのスキルアウトが如何にも好みそうな場所だ。

「……」

ある程度裏道を進んだところで、海原はふと立ち止まった。

（平和ボケでもしてたんですね……）

尾けられている。

そう認識するのがかなり遅れた海原はそう思うしかなかった。

真っ昼間でありながらピンポイントで海原を尾行しているあたり、表の人間ではないだろう。

いや、背後から感じる明らかな『裏』の気配と殺気がそれを確かなものへと変えていく。

（何故私を狙っているんでしょうか……）

思考を巡らせていると立ち止まった海原を見て尾行が気付かれたと悟ったのか背後から1人の人間が現れた。

海原はゆっくりと振り返る。

「やつほー」

何とも能天気な声で、

「アンタ海原光貴……エツアリでしょ？」

「そうですが何か？」

現れたのは秋も本番だというのに黒いキャミソールとデニム生地の上着、ショートパンツ、ヒールが少し高めのサンダルという夏真っ盛りの恰好をした15歳程の少女。

「そっかそっかー。アンタがエツアリかー、中米最大の魔術結社つてのも興味はあるんだけどー」

「!？」

魔術結社という単語に反応する。

暗部に身を置く者であつても魔術のことを知っているのはほんの一握りだ。

「……魔術を知っているんですね」

それを馬鹿にされていると受け取ったのか

「あつたり前じゃんッ」

と肩まで伸びている明るめの茶髪を靡かせながら少女はムスツとして答える。

「何故私を尾けていたんです？」

「理由なんて1つしかないでしょ？」

先ほどの能天気な雰囲気は消え失せ、冷酷な表情へと変貌した

彼女の口から発せられる言葉。

「始末するために決まってるじゃん」

ゴッ！！

と目に見えない巨大な波が押し寄せてくるかのような威圧感が海原を襲う。

そして同時に直感した。

この少女は危険だ

「……………」

海原は無言で懷からトラウイiscalパンテクウトリの槍を取り出し、少女へと突き付ける。

だが少女の顔色は何一つ変化することなく、

「いいの？そんな分解することしか能のない霊装なんかでさ」

嘲笑うかのような物言い。彼女は尚も続ける。

「本気で私と殺り合うつもりなら最低でも“ケツアルコアトルの葦”くらい出しなよ」

「……………ッ！！」

まさか霊装まで把握されているとは思っていなかった。
槍を握る手に不自然に力がこもる。

「そこまで調べ上げているのですか……」

「簡単よ。上層部のデータを拝見するだけだから」

「!？」

拝見するだけ？

簡単に言ってくれるがそんな事は普通の人間では不可能だ。
事実、この時点では海原は知らないが土御門が上層部にハックを仕掛けた結果明らかにヤバそうな連中と命を賭けた鬼ごっこをするハメになった。

そんな重要機密をあっさりと拝見できてしまうような目の前の少女。

（底が知れない……とはこういう事を言うんですかね……）

額を嫌な汗が流れる。出会った瞬間から感じてはいた、その闇の深さを海原は肌身で捉える。

「さあーて、お仕事の時間かなー」

（おそらく彼女は暗部の人間で間違いない……ですがその権限の強さが我々と明らかに違う……一体どういう……）

「あ、もしかして私のこと暗部の人間だと思ってる？」

海原の思考を、少女の陽気な声が遮った。

「まー暗部っちゃあ暗部なんだろうけどさ。アンタらみたいなやつちいのとは違うんだよねえー」

ゆっくり歩きながら海原へと接近していく少女は海原の思考を読み取っているかのように話す。

「まあ管轄の違いってやつかな？所詮アンタらは統括理事会の狗なわけだし」

瞬間、

彼女が消えた。

海原が脳内で消えた、と現象を理解したときには、既に事は終わっていた。

「……ッ!？」

トラウイスカルパンテクウトリの槍を使用する暇も、攻撃を避ける時間さえも与えられず、ただ海原は膝を折り、陽射しの届かない冷たいコンクリートの上に倒れる。

「こんなもんじゃ『グループ』の壊滅なんて楽勝じゃない？」

血溜まりの中に沈む海原を見ながら少女は口元を吊り上げる。

彼女は携帯を取り出して画面をスクロールし、通話ボタンを押す。

「もしもし？私だけど。うん、『グループ』の1人を殺ったわ。そ
ちの状況は？そう、じゃ今からそっちに向かうわ」

ボタンと携帯を閉じ、海原を一瞥して少女は姿を消した。

E p i s o d e 4 2 . 5

暗部総力戦編

S T A R T

番外編 『海原光貴』（後書き）

次回 新章突入
暗部総力戦編！！

Ep・43 学園都市に響く闇〈caravan〉（前書き）

今回から新章突入！！
暗部総力戦編です！！

では楽しみください

「ホントにいいの？」

「君達がそう望むのであれば、そして出来るというのならば。やってみるがいいさ」

学園都市統括理事長の本拠地、窓のないビル。

培養液のような液体に浸かり、逆さまで漂っている世界最高の魔術師であり科学者。

アレクスター・クロウリーは眉一つ動かすことはせずそう断言した。

「いいの？アンタのプランとやらがご破算になっちゃうかもしれないよ」

アレクスターと向き合って話をしているのは夏真つ盛りのような服装をした見た目15歳ほどの茶髪の少女。

「例えそうなたとしても私の計画の範疇だ。プランに支障をきたす程ではない」

「ふん。じゃ、いいんだね」

「無論だ」

「全滅かもよ？」

「そうだったのならそれは私のプランには必要のない人材であったというだけだ」

「……私はアンタの考えがわっかんないな」

「元より理解しえる者などいないのだよ。それはもちろん君とて例外ではない。あまがいつばめ天海 燕」

天海 燕と言われた少女は肩を竦め、ヤレヤレといった感じで両手を振ってアレイスターに背を向け歩き出す。

本来ならば空間移動能力者を使用しなくては出入りすることも出来ない窓のないビル。テレポーター

しかし彼女はテレポートをすることなくビルから出ていった。

これは彼女の能力ではない。権限の問題である。一定以上の権限を持っている人間についてはこの窓のないビルに入ることが出来る。

とは言っても、この権限を持っている人間は学園都市中で10人にも満たない。

多角スパイとしてよく出入りしている土御門でさえ結標とテレポートしなくては窓のないビルに入ることはいかないのだ。

誰も居なくなつた空間で1人、アレイスターは空間に映し出したウインドウに意識を向けていた。

『グループ』

土御門元春

一方通行

結標淡希

海原光貴 UNKNOWN

『スクール』

垣根帝督

()

()

() DEAD

『アイテム』

麦野沈利

絹旗最愛

フレンジーセイヴェルン

滝壺理后

『ブロック』

佐久辰彦

手塩恵未

山手

鉄鋼

『メンバー』

博士

()

() (シヨチトル)

查楽

『幻想殺し』

『異分子』

浜面仕上

『プラン形成』

御坂美琴

削板軍霸

天井院真紀

『媒体』

鳴神葉次

『ドラゴン』

エイワス

ヒューズⅡカザキリ

次々と画面をスクロールさせていく。

そしてその画面の一番下、これ以上はスクロールできない所に記載されている情報。おそらくアレイスターしか閲覧不能な情報が、そこにはあった。

『キャラバン』

遊馬

天海 燕

日次 庭示

三日月 獄

これから学園都市の闇で始まるであろう事態を思案し、僅かに口元を吊り上げる。

すぐそこまで迫った脅威は、人知れず牙を剥こうとしていた。

*

「…………フ、やはりそうか」

第七学区のとあるカフェ。

オープンカフェとなっているカフェのテーブルにノートパソコンを置き、先程までカタカタとキーボードを叩いていた白衣を着た初老の男がため息とともに呟く。

「急がなくては…………全てが手遅れになる前に」

暗部組織の1つ、『メンバー』のリーダーである博士がパソコンを閉じ、残っていたコーヒーを飲み干して席を立つ。

博士の隣をついてくる機械の犬のようなモノから発せられる男の声
が言う。

『どついつ事です？』

「なに、極々簡単なことだ」

『？』

意味がわからないのか機械の犬からは何も聞こえない。

その沈黙を破るかのように、太陽の昇りきった青空を見上げ、目を細めてこう言った。

「全面戦争。それだけのことだ……」

昼下がりの学園都市とは対極に位置するような言葉を残し、博士と機械の犬は消えていった。

「……アレは絶対ないと思うんだが」

「この映画の良さが超理解できないなんて所詮浜面は超浜面ということでしょう」

暗部組織『アイテム』の構成員である見た目12歳ほどの少女、絹旗最愛とアイテムの下部組織に身を置く浜面仕上は今ももう廃れて廃業寸前の映画館のドアを開き、1人は満足したように、1人はゲツソリとした様子で外に出た。

「いやお前のセンスのが理解できねえよ！！何で開始5分で主人公が見ず知らずのオッサンと駆け落ちしてんだ！！」

「直球だなオイ！……はい買ってきます、買ってきますからその固めた窒素をどうにかしてくれ！」

アメリカンドックをもぐもぐリスみたいに頬張る絹旗に買ってきたもう一本を手渡す。

それを空いているほうの手で受け取りながら

「私の治療をしたのはあの冥土返し（ヘブンキャンセラー）ですからね。あの医者の手にかかれれば数日で超この通りってわけです。わかりましたか超浜面」

「そっぴや麦野もピンピンしてたな」

「麦野も超肩をやられたんですけどすっかり万全です」

「すげえなその医者」

浜面はそんな重傷を数日ではぼ完治させてしまう冥土返しという医者に思いを馳せる。

きつとすげえイケメンでキビキビ手術していくんだろっなあ、という勝手な妄想を添えて。

と、そこで浜面は絹旗の表情が先程までとは違うことに気がついた。頬張っていたアメリカンドックは完食し、残った棒を加えて道を挟んだ向こうにある広場に視線を向けている。

「？ どうしたんだ？」

「ちょっと黙ってください」

いつにもなく真面目なトーンで話す絹旗にただ事ではないと直感した浜面も同じく広場へと視線を向ける。

広場には幾つかの移動式屋台が出店しており、それを昼休みを迎えた学生やサラリーマンが買いに来ている。日常の至って普通の一コマだ。

絹旗が見ているのは彼らではない。

移動式屋台を越え、小さなベンチに腰かけている少女。もう秋も本番を迎えようとしているのにキャミソールにショートパンツという、夏真っ盛りな恰好をした茶髪の少女が、屋台で買ったであろう棒付きキャンディを舐めながらこちらを凝視していた。

「ッ!？」

少女と目が合ったと思った瞬間、浜面の身体から嫌な汗がドツと吹き出す。

ヤバイ。

少しの間ではあるが暗部に身を置いている浜面の危機管理能力が赤信号を発している。

「絹旗……」

「珍しく超勘が良いですね浜面」

「アイツ……」

「ええ、正直超ヤバイです」

アメリカンドックの棒を指揮棒のようにヒラヒラと振りながら絹旗が言う。

隣に座る浜面は目も会わせたくないのか広場を見ないようにしている。

「アレは暗部の人間でしょうが……見覚えが超ありません。新しく入った奴でしょうか？」

ふむ、と持っていた棒を近くを通った清掃ロボットの前に落として回収させ、腕を組んで思索する。

「どうするんだ？」

「とりあえず今は仕掛けてくる気配はなさそうですし、ここは超様子見といきましょう」

ベンチから立ち上がる気配がない少女を見ながら、絹旗は浜面に告げた。

浜面たちがいる通りと少女がいる広場の間を通る道路を一台のトラックが通った。

「なッ!？」

「!？」

トラックが通過した後、広場のベンチに座っていた筈の少女の姿は消えていた。

「テレポーター空間移動能力者……？」

そう考えるのが最も妥当だと思うが、暗部組織の中に空間移動能力者は数人しかいない。

それが奴だとは考えにくかった。

「……何だか超やばい予感がします」

奴が消えた広場を見つめた絹旗がポツリと呟いた。

第一八学区の大通り。昼休みの時間帯だけあって外の店で昼食をとる学生やサラリーマンで道は混雑していた。

左右に立ち並ぶレストランや喫茶店は満員状態である。

そんな通りの中を、見た目ホスト崩れのような少年が歩いていた。

「はあ、だりい」

内戦という大きな山を越えた後に過ごす日常は彼、垣根帝督にとっては退屈以外の何物でもなかった。

周りを見ればやる気のない面をした学生やオッサンに〇し、帝督は思わずため息をつく。

「あー、つまらねえ」

内戦が終わってから『スクール』に回されてくる仕事は簡単な仕事ばかりであり、ほとんどは下部組織の人間だけで行えるものだ。

つまり、垣根帝督は内戦以降暗部の仕事を行なっていない。

それは帝督自身が内戦で重傷を負い、昨日まで第七学区の病院に入院していたからなのであるが、傷も癒えた今の帝督にとって今の日常は平和すぎて息苦しいものだった。

そんな状態の帝督であつたから、日常から明らかに逸脱した人間が向こうから歩いてくるのを見逃すわけがなかった。

(アイツ……)

学生やサラリーマンに紛れてこちらに歩いてくる少年。

ワックスを使っているのかどこかのレベル0のようなツンツンが髪の毛の上の方だけにあり、他は肩口まである襟足など全体的には帝督の髪型と似ているところが多いかもしれない。

音楽を聴いているらしくポケットから伸びているイヤホンを耳につけて、こちらに歩いてくる少年と垣根帝督が真横ですれ違う。

すれ違う瞬間、確かに垣根帝督は聞いた。

イヤホンをしている男が帝督の耳に呟いた、『キャラバン』という単語を。

バツ!!

と帝督は振り替えるが、すでに少年は人混みに紛れ姿が見えなくなっていた。

Ep・43 学園都市に蠢く闇へcaravan《（後書き）

本当は原作15巻をちょっとオリジナル要素入れてやろうと思ったんですが、メンバーとかブロックとか余りにも情報が少ないのが多すぎるため暗部総力戦編で色々過去を捏造します（笑）

そして多分帝督とか麦野は五体満足のままです；

Ep. 44 動き出す其々の思惑（前書き）

暗部組織が行動開始です

Ep・44 動き出す其々の思惑

午後3時。

テレビ局に向き取引を潰してきた一方通行と上層部に侵入し命懸けの鬼ごっこをするハメになった土御門元春、任務を早々に終え平和に昼食を作っていた結標淡希は現在、第二二学区のアジトの1つに居た。

第七学区のアジトを使わない……というか使えないのは先程土御門がヘマをやらかして差押えられたからだ。

第二二学区は第七学区の隣に位置し、面積は学園都市内で最小の学区である。

しかしその小さな面積を補って余りあるほどに地下街が発達しており、地下数百メートルにまで開発が行われている。

そんな地下街の一角に佇む一見何の変哲もない不動産屋のような建物に、『グループ』の3人は居た。

内部は閑散としており、何もない部屋の中央に少し大きめの硝子のテーブル。それを四方向から囲うように高級そうなソファが置かれている。

結標以外昼食をまだ摂っていなかったため、テーブルの上には見るからにカロリーの高そうなジャンクフードが無造作に並べられている。

そのうちの一つ、如何にも辛そうな真っ赤な骨付きチキンにかぶりつきながら一方通行が

「ンで？結局オマエは何やってたンだよ」

ギクウツ

と土御門の肩が大きく上下に揺れる。

「そうね。いきなりアジトを変えるなんて何かあったのかしら？」

用意されていた雑誌に適当に目を通していた結標も気になっていたのか一方通行に乗っかって土御門を問いただす。

暗部組織においてアジトが変わるのは別段珍しいことではない。足がつかないようにする為や情報を混乱させるなど色々とメリットがあるからだ。

しかし、しかしだ。

つい先程土御門からの連絡で集められた一方通行と結標には、このアジトにやってきた土御門が汗だくだったことが理解できない。

見るからに修羅場だったと解るような表情でクタクタになって入ってきた土御門を見て哀れだと思ったのがつい15分程前。

ようやく汗も引いてきて巨大なハンバーガーに食らいついていた時に一方通行からのこの質問。

必然、土御門は口の中のものを吐き出してしまった。

「げふあげぼごほ!？」

「汚エ……」

「……とりあえず口の周り拭いたら？」

まるで汚物でも見るかのような2人の視線に耐えられなくなった土御門は一旦席を外す。

数分後、口の周りに付着していたハンバーガーの残骸を処理して戻ってきた土御門がふと気付いたように言う。

「ん？そっぴや海原はまだか？」

「あん？オマエちゃんと連絡したのかよ」

「俺はちゃんとメール送ったよ。ほら」

そう言つて土御門は携帯の画面を一方通行にズイツと見せる。画面にはメールの送信ボックスが表示されており、確かに集合時間を記載したメールが海原にも送られていた。

「おかしいわね。アイツ時間には律義だったはずよ？」

「んー、何かちよつと引つかかるニヤー」

土御門は携帯を耳に当てて海原の携帯へと電話を掛けるが、

『お掛けになつた電話番号は、現在電波の届かない所にあるか

……』

「やはりおかしいな。いつもならワンコールで出る海原の携帯が繋がらないだど？」

先程まで口元にレタスをくつつけていた時とは全く違つ表情を見せる土御門。

「で？結局オマエが仕掛けたハッキングで何か掴めたのかよ」

食事を終えてソファに横になっていた一方通行が口を開く。

「……解ったことは極僅かだ。上層部が何か隠してる事と、……
『キャラバン』という名称」

「『キャラバン』？何ソレ、暗部組織？」

「解らない。そこまで具体的に記載されていなかったからな」

「……もしかしたらその『キャラバン』ってのと海原が携帯に出ね
エのは何か関係があるのかもしれないねエな」

「『キャラバン』ってのに海原がやられたとも言っわけ？」

一方通行の発言に結標が馬鹿馬鹿しいとでも言っように首を横に降りながら、

「アイツはあの内戦からも無事に生還した奴なのよ？学園都市の人間で海原を倒せる奴なんてそうそう居ないんじゃないかしら」

「あくまで仮定だっつってんだろオがシヨタコン女」

「なッ！？な、なな何を根拠にそんなシヨタ……！！」

一気に顔が赤くなる結標などお構い無しに一方通行は土御門と会話を続ける。

「もしそいつらが暗部組織であるとして、同じ暗部組織の人間の海原を殺る理由が解らねえ。同じ任務で邪魔だつつうなら話は解るが、アイツの今日の任務は確か人捜しだろ」

「まだ海原が殺られたと決まったわけじゃない。むしろ問題なのは『キャラバン』の情報が俺たち『グループ』や『スクール』などと比べて圧倒的に少ないことだ」

「機密レベルが俺たちよりも上ってかア？」

「ああ。それにアレイスターが関与しているのはまず間違いないだろう。奴のことだ、また何か仕掛けているに違いない」

「……とりあえず私達はどうするべきなのかしら？」

一応の平静を取り戻した結標がズズツとストローの刺さったグラスのアイスティーを飲みながら尋ねる。

「特に何も。いや、何もできないと言った方が正確だな。此方に情報が無い現状で行動を起こすにはリスクが高すぎる。それこそ『キヤラバン』とかいうモノの思う壺だろうからな」

「てことは向こうが動くまでこっちは手出しできねエわけか」

「とにかく今は海原の安否の確認が最優先だ。この仮定が間違いであったのならばソレに越したことはないが、万が一の可能性としてそういう事を頭に入れておけ」

「……チツ、面倒くせエ」

＊

「はあ？黒いキャミソール女？」

第三学区のとある高級ホテル。そこにアジトを構える暗部組織『アイテム』のリーダー、麦野沈利はコンビで買ってきたであろう鮭弁をテーブルに広げながら呆けた声で言った。

「はい、超間違いないです。アイツ暗部の人間ですよ」

「つつつてもそんな奴見たことないわよねえ」

「結局見間違いだったんじゃない？」

麦野の隣でカレーを頬張っていた金髪碧眼の少女、フレンドが茶化すように絹旗に言う。

「いや、間違いねえよ。実際俺も見んだ」

「ふうん……で？そいつを捜そうってわけ？」

何やら鮭弁が美味しくなかったのか持っていた箸を投げ出し背もたれにもたれかかる麦野に絹旗は答える。

「ええ。よく解らないですけどアイツからは超ヤバイ感じがしました。あの超浜面でも気づくくらいです」

「オイそれ俺のこと馬鹿にしてねえか？」

「へえ……それは相当ね」

「お前も普通に答えてんなよ！！」

「ぐだぐだと超うるさいですよ浜面。超頭が高い、とりあえず跪け」

「なんでだよ！！」

「大丈夫だよ。私はそんなはまづらを応援してる」

今まで居たのか？というくらい空気だった天然系脱力少女の滝壺が浜面に言う。

「でもこのまま放つとくつてわけにもいかないようね」

スッ

と美しい動作で麦野が腰掛けていたソファから立ち上がる。
そしてそのままドアへと向かい、クルツと首だけ振り返って、

「行くわよ。調べるなら早い方がいいわ」

それを聞いた『アイテム』の面々も麦野に続き部屋を後にする。

＊＊

時を同じく、第八学区。

生徒よりも教職員のマンションが多いこの学区の一角、割と新しいマンションの一室で『ブロック』のメンバーは何やらせつせと作業をしていた。

「これで座標移動↑ポイントを説得できるのか？」

そう言うのは大柄な男、佐久辰彦だ。

「心配、ない。奴が少年院の、子供たちを助けだそうとしていることは、既に掴んでいる」

まるで子供に話しかけるようにゆっくり丁寧に答えるのは手塩恵未。

「そつえば聞いたか？」

山手という青年が思い出したように言う。

「何がだ？」

「つい先日学園都市と日本が内戦したって話」

「あああれだろ。なんかロシアまで軍事介入したつつ」

「それが、どうかしたのか？」

「いやなんでも日本軍と応戦したのは警備員とかじゃなくて学生の能力者たちだったらしいんだよ」

「ケツ、ガキに戦争やらせるなんざアレイスターの野郎イカれてるぜ」

忌々しそうにアレイスターを罵る佐久の隣で、手塩は沈痛な面持ちで俯いていた。

（また……子供が、犠牲になるのか）

やりどころのない怒りに拳を握る。

また過去のように子供たちが巻き込まれている、それを仕組んでいるかもしれないアレイスターに対し、手塩はギリツと奥歯を噛み締める。

「よし完成だ」

制作していたものが完成し満足そうに笑う佐久。

「これでアレイスターのやつを出し抜く」

「ああ」

「そうだな」

「残念だよ」

「！！」

「ッ！？」

「誰だ!？」

この部屋に居る者ではない声が響く。

「やだなあ。そんな警戒しないでいいって」

「……子供？」

手塩が呟く。

その言葉通り、いつの間にかこの部屋にやって来た来訪者は見た目12歳くらいの少年だった。

「こんにちわ、『ブロック』の皆さん」

ニヤッ

と少年が笑いながら言う。

「!!お前……暗部組織の人間か!？」

『ブロック』という単語を口にした少年により一層警戒心を抱く佐久。

「暗部組織?うーん、惜しいな。暗部は暗部でもアンタらみたいな雑魚とは違うぜ」

明らかに見下してモノを言う少年に佐久がキレた。

「てめえ!!」

拳を握り締め少年に殴りかかる。

「佐久よせ！！」

手塩の制止も佐久には届かない。

「あゝあ」

手塩とは対照的に今正に殴られそうになっている少年からは緊張や焦燥といった類いは一切感じられない。
寧ろ不気味な笑みが濃くなるばかりだ。

「俺はアンタらみたいな能力も使えない大人には興味ないんだけど」
スッ

と少年は振り下ろされる拳に右手を突き出す。

「これじゃあ殺しちゃうかもなあ。あくまで戦闘不能にして排除することが任務だったんだけど」

瞬間

ゴドンッ！！

佐久が床に叩きつけられ、意識を手放した。

「なッ！？」

目の前の光景を未だ理解できていない手塩と山手に向かい、少年は凶悪な笑みを浮かべ言った。

「俺の名前は三日^{みかづき}月 獄^{ひこや}。覚えなくてもいいよ、どうせすぐ何も考えられなくなる」

「ふむ」

窓のないビルの内部。
目の前に開かれたウィンドウに変化があったことをアレイスターは認めた。

「そうか、これで残りは……」

そのウィンドウには、

『ブロック』

佐久辰彦 DELETE

手塩恵未 DELETE

山手 DELETE

鉄鋼 UNKNOWN

Ep.45 たかが学園都市最強

日もだいぶ西に傾き、夕焼けで茜色に染まる学園都市の一角を歩く少年。

先程第八学区の教師用マンションで仕事を終え、今は第七学区にやって来ていた。

これといった用事や仕事があるわけではない。
ただ何となく、自分と同年代くらいの少年少女がどんな生活を送っているのかが気になっただけだ。

少年、三日月 獄。

放課後とあってまだまだ学生の姿がそこかしこに見られるが、もうじき完全下校時刻を迎えるため徐々に生徒の姿はまばらになっていく。

夜が近づくにつれて生徒の数と反比例するように増えるのが武装無能力集団スキルアウトと呼ばれる者達だ。

実際に銃器などで武装しているのはスキルアウト全体の1%ほどで、殆どが学校に行かずたむろする連中や学校には行っているが夜になるとスキルアウトとして活動するチンピラのような者達である。

そんなスキルアウトがちらほらと見え隠れするような時間帯の第7

学区を三日月獄は無言で歩く。

12歳という年齢と相応の見た目とが相まって彼はそういった輩からはよく絡まれる。

しかしそれを鬱陶しいと思った事は一度たりともない。

それ以前の問題である。三日月獄はスキルアウトなど敵と認識していない。道端の石ころと同レベルの存在だ。

「……………ん？」

三日月獄が通りを歩いていると、近くのコンビニの前でなにやら輪を作っているチンピラ。おそらくスキルアウトだろう。そしてその中心には制服を着た少女。

（あの制服……………どっかで見た事あるなあ）

などと思いつながらそのコンビニの前で囲まれている少女の制服を見ながら素通りする。

（……………あ、目が合った）

囲まれている少女と自分とばっちり目が合った。そして気がついた。

（アイツ……………）

三日月獄は進路を変更し、スキルアウトの元へと向かっていく。それに気付いた少女は驚いていた。それもそうだろう。自分よりも年下の少年が10人程のスキルアウトの元へと手ぶらでやって来るのだから。

「ねえねえいいじゃん。俺らと遊びに行こうぜえ?」

「たっぷり可愛がつてやるからさあ」

「お金持つてるよねえ?」

などと聞いているだけで吐き気がする言葉を言っているスキルアウト達。

「……あ?何だこのガキ」

スキルアウトの1人が近付いてきた三日月に気が付き、怪訝な顔をする。

「おいおいヒーロー気取りか?」

「ガキは帰って寝る時間だぜ」

スキルアウト達は見た目小学生、良くて中1の少年を見て下品な笑い声を上げながら言う。

そんなスキルアウト達に三日月は、

「……邪魔」

「あゝあ?」

「邪魔だっつってんだろぅが」

ドゴンッ!!

三日月は目の前のスキルアウトの1人に触れ、一瞬で黒焦げにする。

「なッ！？てめえ能力者か！！」

スキルアウト達が一気にざわめく。

「俺はアンタらなんかに興味はないんだよ」

「んだとてめえ！！」

激昂したスキルアウトの1人が殴りかかってくるが、

バリッ！！

「ぎゃあッ！？」

一瞬で黒焦げとなり汚い地面の上に倒れる。

「そこ退けよ」

「な、なめんじゃねえええええ！！」

残ったスキルアウトも一斉に三日月に襲いかかる。

しかし、

ズドンッ！！

全員が一瞬で黒焦げになり、意識を失った。

三日月獄は何もスキルアウトから少女を助け出そうと思ってやってきたのではない。

用があつたのは寧ろ絡まれていた少女。
彼女が誰か解つたため、わざわざ三日月獄はスキルアウトに囲まれている少女のもとへとやって来たのだ。

その目的の少女は先程の光景を見て呆然としていた。
そんな少女に向かつて、三日月獄は静かに告げた。

「こんばんは、レールガン超電磁砲」

*

第八学区のマンションの一室。暗部組織『ブロック』に所属する3人は1人の少年によつて戦闘不能にされた。

何とか意識を保っていた手塩はギリツと奥歯を噛む。

あの少年はきつと暗部の人間であろう。

（何故……あんな小さな子供まで……！！）

起き上がらない身体を思いきり殴る。

彼女、手塩恵未は警備員アンチスキルにも所属する教師だった。子供をこれ以上傷つけないようにするため、学園都市の闇に自ら足を踏み入れたのだ。

しかし、目の前に現れた少年は手塩の幻想を一瞬で打ち砕いた。自ら望んで闇に身を置いている少年に、彼女は手を出すことができなかった。

あの馬鹿げた実験にモルモットとして使用された子供たちと重なっていたのかもしれない。

「…………くそ」

込み上げる悔しさに、手塩は天を仰いだ。

「ハッ、おもしれえ」

第三学区にある暗部組織『スクール』のアジトの1つ。その部屋でノートパソコンを叩いていた垣根帝督は、映し出された画面を見て楽しそうに呟いた。

「『キャラバン』……成程そういう事か。ハハッすげえな、確かにアレイスターの野郎は異常だぜ」

ドカッ

と高級そうなソファに凭れかかりながら笑う。

「どうしたの？」

部屋に居た赤いドレスの少女が尋ねる。

「なに、大したことじゃねえよ」

まるで遊園地に行くことを楽しみにする小さな子供のような表情を浮かべながら、帝督はパソコンの画面に映し出されたウィンドウを見て、

「全面戦争だ。俺たちとアレイスターのな」

「来ないな、海原」第二学区の『グループ』のアジト。
未だ姿を見せない海原に抱いていた懸念が大きくなっていく。

「本当にやられたのかしら」

「その可能性が高いな。おそらく『キャラバン』と関係しているだろう」

「なら話は簡単じゃねエか」

一方通行がソファから身体を起こし言う。

「どうせ暗部の連中の仕業だろ。なら一掃するだけだ」

「……そうだな。おそらくと言えないが、敵は『キャラバン』。他の暗部組織が絡んでいるのかどうかは不明だが……もしも表の間まで巻き込もうと言つのなら、問答無用で叩き潰す」

「できるの？」

唐突に部屋に響く声。女の声だが、結標が発したという訳ではない。

声の主は、扉を開けて目の前の3人を見つめていた。

もうすぐ秋も終わりになるうというこの時期に季節外れの黒いキャミソールにデニム地のショートパンツ。肩まで伸びた茶髪が艶やかに靡く。

「誰だデメエ」

一方通行が警戒心剥き出しで少女を睨む。

「おお恐い。そんな眼で睨まないでよ」

肩を竦めるが全く怖がっている様子はなく、寧ろこの状況を楽しんでいるような態度の少女。

「……」

しばし無言で少女を見ていた土御門だったが、可能性の1つとして

上がるモノを確かめるため、カマをかけてみることに。

「……お前、『キャラバン』か……？」

「お、大正解」

目の前に立つ少女は最重要機密であるはずの事実を隠すふうでもなく、あっさりとソレを口にした。

あっさりすぎる少女の発言に土御門はしばし呆気にとられていたが、直ぐ様思考を切り替え臨戦態勢へと移行する。

「海原をやったのはテメエか？」

「そうだよ？何か問題とかあった？」

「……そオカよ」

ゴッ！！

それ以上一方通行は何も言わず、行動で意思を示す。脚力のベクトルを操作し、弾丸の如く目の前の少女へと突っ込んで行き、

「スクラップになりやがれ」

全てを破壊する両の手を、少女に向かって突き出した。

触れれば即死。

掠めても即死。

一方通行の前では勝利という二文字は存在しない。
そこにあるのは一方通的な虐殺のみだ。

目の前の少女にしてみてもそれは同じ事、一方通行が触れた瞬間、全ては終わる。

筈だった。

「……………あア？」

「どうしたの？ 一方通行」

一方通行の怪訝な表情の理由、それは目の前の光景に他ならなかった。

「……………テメエ、どんな手を使ってやがる」

「さあね」

「……………バカな」

土御門は目の前の光景が信じられなかった。それはおそらく結標も同じだろう。一方通行の能力を知っているからこそ信じられない出来事。

一方通行の突き出した腕を、少女が掴んだ（……………）。

「案外細い腕してるのね」

突き出された一方通行の腕を掴みながら少女は楽しそうに言う。

「オマエ、何者だ？」

「『キャラバン』所属、天海燕だよ。よろしくね、第一位」

バツ

と一方通行は燕の腕を振り払い一歩下がる。

「一方通行が下がったよ。滅多に見れないもの見れたなあ」

「……舐めやがって……！！」

首をゴキゴキと鳴らし、見下しているかのような燕に舌打ちし、吐き捨てるように一方通行が呟く。

「舐めてるのはどっちかなあ？」

「ああ……？」

「あれ？意味がわからない？」

「……」

「解っていないみたいだねえ。じゃあこの燕さんが教えてあげようかしら」

肩まで届く透き通った茶髪を手で払いながら、

「ただかベクトル操作程度の能力が、学園都市最強だとも思っているわけ？」

天海燕の雰囲気が一変した。

Ep・45 たかが学園都市最強（後書き）

『ブロック』の出番これにて終了（笑）
結局過去とか全然やらなかった……

E p・4 6 複製結晶（ユニーク）と超電磁砲の上を行く者（前書き）

この章書いてて楽しい（笑）

勝手な捏造設定多数ですが（ ; ）

そんな訳でE p・4 6です。

Ep・46 複製結晶（ユニーク）と超電磁砲の上を歩く者

「たかだかベクトル操作程度の能力が、学園都市最強だとも思ってるわけ？」

第二二学区の『グループ』のアジト。そこへ単身乗り込んできた『キャラバン』の天海燕はデフォで反射が設定してある筈の一方通行の腕を何事もなく掴み、それまで纏っていた空気を一変させて、そう言い放った。

「……………んだと？」

ピクッ

と一方通行が反応し、苛立たしげに燕に聞き返す。

「意味が解らない？割と側に答えがあるのに」

15歳程の少女とは思えないほどに妖艶な笑みを浮かべ、天海燕は続けてある単語を告げた。

「暗闇の五月計画」

「……………成程な」

一方通行が全てを察した。その上で彼は燕に言う。

「で？所詮俺の劣化版でしかねエオマエが粹がってどオしょオってんだ？」

「あの計画の成功例……知ってるかしら？」

「あの計画は結局レベル5にまでは到達出来なかった筈だ。暴走した被験者に壊滅させられたンだろ」

『暗闇の五月計画』

学園都市の闇で行われていた実験でありチーム名の1つ。

『置き去り（チャイルドエラー）』を使って実験開発を行い、学園都市最強の超能力者である一方通行の演算パターンを参考に各能力者の“自分だけの現実”バーチャルリアリティを最適化、能力者の性能を向上させようというプロジェクト。

どの部分を使用するかによって防御や攻撃といった特性が現れるが、この計画は暴走した被験者によってチームが壊滅させられ中止、永久凍結された。

「それは暗部の一般論、実際はただ1人、完全に一方通行の演算パターンとリンクし、その能力を手に入れた個体が居た」

「……」

「解った？貴方は決して一方通行なんかではないってことが」

天海燕はまるで一方通行のように首をゴキゴキと鳴らし、最後に言った。

「私はその唯一の成功例、“複製結晶”^{コピーク}、アンタとまるつきり同じ能力を持つてゐるってわけ」

「……土御門、結標」

一方通行は後ろに居た2人に視線は向けず告げる。

「オマエ等邪魔だ。此处から離れろ」

「……ああ」

土御門と結標は座標移動でアジトから姿を消した。残されたのは一方通行と天海燕のみ。

「ああ、逃げられたか。まあいいや、すぐに追えば見つかると思うし」

「オイオイ何言ってくれてんだア？オマエは此处で潰す。それ以外の結末なンざ用意してねエンだよ」

「ハハッ、言うねえ一方通行。でもアンタはバッテリーが切れたら能力が使えないんでしょ？暗部の技術者が使用時間を伸ばしたらしいけど、2時間もすれば切れるでしょ」

それに比べて、と天海燕は付け加える。

「私には使用制限なんてないわよ？」

一方通行は8月31日に脳に重傷を負った。それによって自分自信では演算を行うことが出来ず、打ち止め（ラストオーダー）を介したミサカネットワークに代理演算という形で能力を使用しているのだ。

ただし、それにも制限があり、能力使用モードは現在時点で最長1時間55分しか使用できない。木原数多と闘った時の15分からは格段に長くなっているが、それでも制限があることに変わりはない。

もしも本当に天海燕が一方通行と全く同じ能力が使用できるというのなら、制限のある一方通行の方が不利である。

しかし、一方通行は首筋にあるチョーカー型のスイッチを指でトンと叩き、先程と態度を変えることなく言い放つ。

「ハンデだ」

ブチッ

天海燕の額から血管が切れたような音がした。

「……ナメやがって……!!」

「舐めてンのはどっちだクソガキが。所詮オマエの能力は俺チカラの模造品なんだよ」

天海燕の頭が沸騰しかけたが、そこで彼女は気が付いた。

「……打ち止め、だっけ？」

ピクンッ

と反応する一方通行を見て勝ち誇ったような顔をする燕。

「あの子も大変だよねえ。“不慮の事故”とかに巻き込まれてない
といいけど」

「……あのガキに手を出しやがったら、テメエを引き裂いて晒して
やるぜ」

「いいねえ一方通行。いい顔だよ、アンタに平穩なんて似合わない。
こつちの世界がお似合いさ!!」

「粹がつてンじゃねエぞ三下がアアああああああッ!!」

「ここでくたばれ一方通行アああああああああッ!!」

ドンッ!!

と2人は同時に地面を蹴り、不動産屋など簡単に吹き飛んでしまう
ほどの衝撃波を皮切りに、ベクトル操作の能力を持つ2人の闘いが
始まった。

*

「此処にその女が居たわけ？」

『アイテム』のメンバー、麦野沈利とフレンドに滝壺理后、そして直接少女を見た絹旗最愛と浜面は先程少女を見かけた広場へとやって来ていた。もう陽も暮れてきているため学生の姿はほとんどなく、昼間にあつた屋台も片付けられていた。

「まあ居るわけないわよね」

はあ、と麦野は軽く溜め息を吐き、その隣ではフレンドが『無駄骨かあ』とガツクリ肩を落としている。

「で？絹旗はどうしたいわけ？」

「……これは超私的な意見なんですけど……」

一拍置いて、絹旗は告げる。

「あの女……昔研究所で見かけたような……」

「研究所？」

絹旗の過去を何も知らない浜面がキョトンとした感じで聞く。

「浜面……」

「結局浜面ってデリカシーがない訳よ」

「はまづら……それはだめだよ」

浜面がそう言った瞬間、3人がジト目でこちらを見てくる。

いつもはフォローしてくれる滝壺でさえ、今回はそれをしなかった。

ガーンッ

と滝壺までが自分を非難していることにショックを受けている浜面は放っておいて、麦野が真面目な表情になって絹旗に尋ねる。

「……暗闇の五月計画か？」

「はい。あの女、一度だけ研究所で見たことがある気がします」

「あの実験で一つの研究所で行われていたんじゃないの？」

「そうなんです、超引つかかることにアイツだけは私と同じ研究所には居なかったんです」

「……探ってみるか」

顎に指をおき思案する麦野が上層部を漁ってみるか、と結論を出したのと彼女の携帯から着信音が鳴ったのはほぼ同時だった。

「……このタイミングで？」

携帯を取り出しながら怪訝な表情を浮かべる。

「普通に考えて超怪しいです」

「畏の可能性もあるわけよ」

「まあ出てみれば解るでしょ」

麦野は別段迷うこともなく通話ボタンを押した。スピーカーを最大にして周りのメンバーにも聞こえるようにすることも忘れずに。

ピッ

「誰だ？」

『麦野沈利、間違いないかね？』

「誰だよテメエ」

『まあそう殺気立つな。私は『メンバー』だ』

「……暗部組織の人間か」

『察しが良くて助かる』

「用件はなんだ？」

『君たち……『アイテム』は今学園都市で起きようとしている事を知っているかね？』

「……何？」

『その様子では何も知らないようだな。たまたま今まで狙われていなかったのが幸いか』

「ああ？狙われる？私が？誰が」

『『キャラバン』だよ』

「『『キャラバン』？』」

聞き覚えのない単語に麦野は小首を傾げる。

『我々と同じく暗部組織のようだが、機密レベルは我々よりも遥かに上だ』

「で？その『キャラバン』とやらは何故私たちを狙っているわけ？」

『学園都市の暗部の壊滅だよ』

「はあ？」

突飛すぎる発言に麦野はつい呆けた声を出してしまった。

「できるわけねえだろうが」

『『ブロック』という組織を知っているか？』

「あ？アレだろ、大人ばかりが集まっている……」

『『キャラバン』の一人に殲滅されたよ』

「！？」

『ハッキリ言うが奴らはレベル5級の能力者の集まりだ。
身体検査システムスキャンで測定していないだけだろうからな』

第四位の君でも敵わないかもしれんよ、という電話越しの声に携帯を握り潰しそうになるが寸前でそれを堪える。

「……で『メンバー』様はわざわざ私に何の用だ？」

明らかに怒気を込めて麦野が言う。

『なに、簡単なことだ忠告だよ』

「忠告？」

『君等程度では勝てない。もし遭遇したら背を向けて逃げたまえ、でなければ……』

ブチッ

麦野は博士が最後まで言い切る前に通話を切った。

「『キャラバン』……あの女とも超関係しているんでしょうか」

「解らないわ。でもその可能性は高そうね」

「結局もう少し電話してたらそれも聞けたんじゃない……」

「ああん？」

「……（すすすッ）」

何かを言おうとしたフレンドは麦野に凄まれて滝壺の後ろに身を隠してしまった。

「なあ何かヤバいんじゃないのか？」

先程の会話を聞いた浜面が焦ったように麦野に尋ねる。

「うるさい浜面少し黙ってろ」

苛立たしげな麦野に言われ、フレンダと同じように滝壺の背後へと回る。

ジャリ……

広場へと入ってくる人影。

最初に気付いたのは麦野だった。

「……………!!」

その姿を認め、一気に麦野が臨戦態勢へと移る。

現れた男はポケットに手をつ込み、目の前の少女たちに告げた。

「よう 『アイテム』の皆さん。ちよいと時間とらせてもらつぜ」

「こんばんは、^{レールガン}超電磁砲」

三日月はコンビ二の前で先程までスキルアウトに囲まれていた少女にそう言った。

三日月獄の目の前に立つ少女、御坂美琴は目を丸くして此方を見ていた。

十人以上も居たスキルアウト達をあっと言う間に倒してしまったのだから当然と言えば当然の反応だが。

「……アンタ、何者？」

御坂が警戒心を高めて三日月に問い掛ける。

「そんな警戒しないでくれよ。俺は三日月獄、見ての通り学園都市のしがない中学生だよ」

「……」

御坂は依然として警戒心を解こうとはしない。おそらく彼女は気付いている。この少年が自分たちとは圧倒的に違う、異質な存在であるということに。

（何？……この子、嫌な感じしかない）

目の前の三日月獄と名乗る少年を見ながら御坂は思う。

（この感じ……一方通行と同じだ……！！）

ゾクッ

と背筋に冷たいものが走るのを御坂は感じた。

いや、それよりも御坂は気になることがあった。

この少年がスキルアウトを倒すために使用した能力。

「電撃使い（エレクトロマスター）……？」

迸った閃光と火花。

確かにあれは電撃による攻撃……に見えた。学園都市最強の電撃使いである彼女が、に見えた。と確定できないのは、明らかに電撃の総量が能力で利用できるレベルを超えていたからだ。

あれは電撃なんて生易しいものではない。あれでは、あれではまるで

御坂の考えが読めたのか、三日月はああ、と頷いて言う。

「気になる？ さっきの」

「……ええ。アンタ、電撃使いなの？」

電撃使いであるならば学園都市第三位の彼女よりも強力な能力者は存在しない。

「あー違う違う。そんなんじゃないって」

右手を振ってそう答える。

「俺の能力はね、そんなチンケなものじゃないんだ」

「……!？」

学園都市最強の電撃使いを目の前にして堂々と言い放つ三日月。

「俺は雷使い（ライボルター）。電撃使いの上を行く能力者さ」

E p・47 学園都市第二位（前書き）

お気づきの方もいるとは思いますが、E p・1を改稿しました。
余りにも幼稚すぎたので……
少しはマシになってるといいなあ。

これから序盤のE pだけ改稿していくつもりです。

Ep.47 学園都市第二位

「雷使い（ライボルター）……？」

御坂美琴はその聞き慣れない単語に対して嫌な汗がドツと噴き出すのを感じた。

雷使いなど聞いたことがない。いや、電撃使い（エレクトロマスタ―）である私が学園都市第三位に位置している時点でそんなものは存在しないのだろう。

……『表』の世界には

8月21日、あの日彼女は片足を闇へと突っ込んだ。学園都市に存在する闇、すなわち『裏』へと。

一方通行と同じような全身を纏う邪悪で、凶悪で、突き刺すような、そんな雰囲気目の前の少年。

私は直感した。

コイツも、きっと一方通行と同類、もしくは……

「どうした？」

ビクッ

と美琴の身体が三日月の言葉によって強ばる。

「なんだか拍子抜けだなあ。学園都市第三位の超能力者、御坂美琴がこんな腑抜けだったなんて」

「……ッ!」

「まあ俺の任務はあくまで捕縛だし、抵抗しないならそれはそれで助かるんだけど」

「捕縛……?」

「そ。俺の任務はアンタを捕まえることなんだよね」

三日月は気だるそうに告げる。辺りはもう暗くなっていた。

「アタシを……捕まえるですって?」

無意識に拳に力が入る。先程までの恐怖は今の一言でどこかへと消えていた。今彼女の内にいるのは、平和を脅かす目の前の少年に対する怒り。

「……随分と簡単に言ってくれるじゃない。出来ると思ってるわけ?」

前髪から紫電を走らせ、臨戦態勢に入ろうとしている美琴が言う。対する三日月は質問の意味が解らない、というような顔をした後両手を肩まで上げてヒラヒラと振る。

「まあ、……余裕だな」

ピキッ

美琴の額に青筋が走る。いくらなんでも舐めすぎだ、学園都市の頂点に対してこの態度。美琴の負けず嫌いな性格も災いし、最早闘い

は避けられなくなっていた。

「言ってくれるじゃない……!!」

「有言実行ってやつ」

「アンタは此处で倒す。何が目的かは知らないけど、私がアンタを止めるわ!!」

「威勢だけはいいんだな超電磁砲。いいぜ、格の違レベルってやつを思い知らせてやるよ」

美琴と三日月の視線が交わり、そして夜の学園都市に雷鳴が轟いた。

*

「てめえは……!!」

麦野の視線の先にいる男、そいつは

「未元物質ダークマター……!!」

学園都市第二位の超能力者（LEVEL5）、垣根帝督。

「何しに来やがった」

麦野が明らかな嫌悪の表情で垣根に問う。絹旗やフレンダも同じく顔をしかめて警戒している。

「まあそんな警戒すんなよ。別にお前等を潰しに来たわけじゃない」

「上からモノ言いやがって」

「ん？第四位^ゴときが俺に勝てると思ってるのか？」

「ハッ、アレイスターに選ばれなかった第二候補^{スベアプラン}がはしゃいでんじやねえよ」

「オイオイ止めとけ、お前らが束になったところで俺には到底及ばねえよ」

麦野の挑発には乗らず、余裕の態度を崩さないまま垣根続ける。

「お前ら『キャラバン』は知ってるよな？」

「まあね」

「だったら話は早い。良いことを教えてやるよ」

「ああ？」

「お前ら、もうじき壊滅するぜ」

放たれた言葉に、麦野は嘲笑で返す。

「はぁ？何言つてんだ、できるわけねえだろ。『アイテム』だぞ」

「解つてねえな第四位。お前ごときが敵う相手じゃねえんだよ」

「ハッ、馬鹿馬鹿しい」

「麦野、超時間の無駄です。早く移動しましょう」

垣根と麦野の会話に割り込んだ絹旗が言う。空は完全に陽が落ち、代わりに星が学園都市を照らし出していた。

「そうね。ちゃっちゃんとその女を探し出すか」

麦野たち『アイテム』は垣根との会話を無理矢理終わらせ、広場を後にする。遠ざかっていく麦野たち5人の後ろ姿を見ながら、垣根帝督は静かに呟く。

「忠告はしたが……まあアイツ等じゃ無理だろうな」

クシャ、と髪の毛を無造作に軽く掻きながら、しかし、後ろから放たれる殺気には気づいていた。

「誰だてめえ」

振り返らず、後ろにいるであろう人間に問い掛ける。

「……………気付いてたか」

聞こえたのは男の声だった。垣根はゆっくりと振り返る。そこに居たのは、自分と同じ歳くらいの少年。首にはヘッドフォンをかけており、フードで頭を覆っている。

垣根はその少年に見覚えがあった。

「お前……前にすれ違った奴か」

「正解。初めまして未元物質」

少年は頭を覆っていたフードを外し、垣根帝督を見据える。

「俺は日次庭示^{ひなみていじ}。察しの通り『キャラバン』のメンバーだ」

「で？その『キャラバン』とやらが俺に何の用だ？」

「いや本当はお前じゃなくて第四位の原子崩し（メルトダウン）が目的だったんだけどさあ、まあ第二位でもいいっか」

「ああ？てめえ舐めてんのか、俺に勝てるんでも？」

日次の言葉に対し嘲笑で返す垣根。だが一見余裕に見える彼も内心は穏やかではない。

（コイツ……強えな）

目の前の少年に対し、一瞬の油断も許されないということを直感していた。

「学園都市第二位にして未元物質を有する能力者、垣根帝督……」

ハッ、随分と学園都市も弱体化したもんだな」

「なんだと？」

ピクッ

と垣根はその言葉に反応する。弱体化？コイツは一体何を言っている？

そんな垣根の疑問を、日次の一言が吹き飛ばす。

「お前みたいなのが第二位だ？笑わせんなよ小僧」

ゴッ！！

と垣根を衝撃波のような突風が襲う。広場にあつたベンチは吹き飛ばし、辺りに植えられていた木々は薙ぎ倒されていく。

垣根は白い翼を展開し飛び上がり、その突風から身を守った。夜空に浮遊する垣根を見上げ、日次は小馬鹿にするように言い放つ。

「ハッ、メルヘンな野郎だなあ。その程度の実力で第二位なんて名乗ってんのか？」

言われた垣根帝督は、

「…………ム力ついた」

ゴアッ！！

と翼をはためかせ日次に向かって急降下。キィイン、と風を切り裂く音と共に距離を一気に縮め、右拳を握り、顔面目掛けて思い切り振るう。

しかし、その拳は日次の腕に防がれた。

だが、垣根帝督に動揺の表情はない。何故なら、

「チッ……」

日次がガードした腕を見つめて舌打ちする。垣根の拳をガードした部分の服が焦げ、皮膚も赤くなっていた。

「へえ……器用な使い方をするんだな」

ブン、と腕を振って帝督と距離をとった日次が関心したように言う。腕を見れば赤くなった部位は火傷しているようだった。

「この程度で済むと思ってんじゃねえぞ」

「?……ッ」

周囲を見れば垣根帝督を中心に僅かに気流が乱れているのが肉眼で確認できる。空气中に未元物質で生成した何かを混合しているのだ。

「気付いたか?お前の周りの空气中に含まれている成分を少しいじった。今のお前の周囲の空気は吸うだけで意識障害を引き起こす代物に早変わりだぜ」

「……」

日次は垣根を見たまま何も言わない。

「これが未元物質。ここはめえの知る場所じゃねえんだよ」

余裕たつぷりに垣根帝督が目の前の少年に向かって言い放つ。

勝った。

そう確信した。

だが、

「……ハハッ！この程度で調子に乗ってんじゃねえぞ未元物質ア
あああッ！！」

日次が叫んだ瞬間、一瞬にして垣根帝督が未元物質で生成した周囲の空気が吹き飛び、辺りに爆風を巻き起こす。

「ッ！」

垣根は目の前の光景に我が目を疑った。

（なんだと……？こんな事を簡単にやってのける奴なんぞ第一位ぐ
らいしか……）

「甘い、甘いねえ今の第二位は」

「ああ……？」

「未元物質、そんなモノ脅威にも何なりやしねえ。まったくアレイスターはこんな奴を第二候補に置いて何がしてえんだ？」

「……随分と上からモノ言ってくれるじゃねえか」

「上から、少し違うな」

「ああ？」

「垣根帝督。お前が第二位に序列されたのは何時だ？」

「……覚えてねえな」

「お前がその未元物質を発現させてから第二位と序列されるまで……いくら時間がかった筈だ」

冷静な態度を崩さない垣根に対し、日次は口元に薄い笑みを浮かべながら、

「まあ結論を言ってしまうば……学園都市の超能力者は何も7人だけじゃねえんだよ」

これまでの基準を覆すような事を言い放った。

「……中々興味深い意見だが、そんなもん信じてでも思ってるのか？」

目の前の少年の言う戯言になど耳を貸さず、ただ冷淡に返す。確かに、自分が第二位と序列されたのは能力の発現から1ヶ月程経った

後だったが、それがなんだと言うのだ。

「オイオイ目の前に序列不明のレベル5がいるってのに信じないのか？」

そんな垣根の思考をまるで読んでいるかのように、日次は切り出す。

「てめえが……レベル5だと？」

馬鹿馬鹿しい、と一笑に臥してしまいたいところだが、奴の能力はレベル4クラスに収まらないということは先の突風で体感している。

「序列不明のレベル5ねえ……眉唾物もいいところだぜ」

「ああそうだな。言い方を間違えた。“今は”序列不明のレベル5だ」

「……今は、だと？」

訝しげに眉をひそめる垣根を見て、日次は告げた。

「俺は元学園都市第二位の超能力者、“ユニバーズスローラー天地創造”の日次庭示だ」

「!？」

「よろしくな、後輩」

言葉は要らなかつた。

己が能力を最大限に引き上げて、2人の第二位が激突した。

Ep・47 学園都市第二位（後書き）

というわけで工場長参戦（笑）

学園都市第一位から第三位まで巻き込まれた形になりました。
この先どうなることやら……

Ep・48 鉄橋に響く足音（前書き）

投稿遅れて本当にスイマセン……。

携帯がぼしゃって代機なのでキーが打ちづらく、さらに大学の入学式に備えて色々と準備があつたのでなかなか執筆できませんでした
(- - ;)

なんとか上がったので投稿します。
でわ

Ep. 48 鉄橋に響く足音

第二二学区にある地下街の一角。そこにあつた筈の不動産屋など存在せず、ただその残骸だけが無造作に地面に打ち捨てられていた。耳に響く風を切り裂く音。一つではない、その音は二つ。

『ベクトル操作』という学園都市の頂点に君臨する能力を有する、2人が地下街で激突した。

当然周囲への被害は甚大だ。2人が衝突する度に建物の窓ガラスは砕け散り、着地する度にコンクリートの地面には生々しい亀裂が縦横無尽に走る。

2人の闘う地下街は最早凄惨な戦場へと変貌していた。

下部組織によって辺り一帯が封鎖されたため一般人の被害こそ出ていないが、この騒ぎはおそらく地上にまで広がっているだろう。タンッ

と空中で衝突した一方通行と天海燕がそれぞれ着地する。

「流石は学園都市第一位。簡単には殺れそうにないわね」

「模造品が随分と粹がるじゃねエか」

「知ってる？オリジナルよりも模造品コピーの方がスペック的には優秀なんだよ」

「ハッ、そんなモンが俺に通用するわけねエだろオが」

お互いに退く、という選択肢は用意していない。此处で目の前の人間を排除するのか、排除されるのかの二択。

戦闘が開始されてから15分程が経過しているが、決着は見えてこない。

ドッ！！

と燕が脚力のベクトルを操作して弾丸のように一方通行へと突き進んでいく。

一方通行は近くに落ちていた建物の残骸をサッカーボールのように蹴飛ばす。

ゴバッ！！

細身の一方通行が蹴り出したコンクリート片はベクトル操作によって猛スピードで此方に向かってくる燕に衝突する。

「ちいッ！」

「ンだあ？反射の膜が薄いんじゃないかア！？」

コンクリート片と燕が衝突、怪我とまではいかないが燕に当たって砕けたコンクリート片によって燕のバランスが崩された。

一方通行はそれを見逃さない。

一瞬で燕との間合いを詰め、右腕を振りかざす。

「これでも喰らっつけ」

ドゴンッ！！

燕の反射の膜を突き破り、一方通行の拳が燕の溝尾に突き刺さる。威力そのままに燕の身体は後ろへ大きく吹き飛ばされる。

「ガッ……!!」

呻きながらも燕は進行方向とは逆にベクトルを操作してスピードを殺し、信号機の上に着地する。

「ッはあ、はあ。……女の子を殴るなんて有り得ないわね」

皮肉な笑みを浮かべて燕が言う。

「男女平等って言葉知らねエのか模造品。顔面じゃねエだけでも有難いと思いやがれ」

「言ってくれるじゃない……まさかこの程度が全力なんて言わないわよねえ？」

「ハッ、ンだももうついてこれなくなっちまったかア？」

「冗談、私が本気だとも思ってるわけ？」

「見くびんじゃねエぞ三下が。オマエがどんなに足掻こうが俺にや及ばねエンだよ」

一方通行は信号機の上に立つ燕を見上げて言い放つ。

「オマエの底は見えちまったよ」

「!!」

バゴンッ!!

と信号機のひしゃげる音と共にベクトルを操作して燕が音速の三倍

以上の速度で一方通行へと突っ込んだ。

「ンだア？底が見えたってのは禁句タブーだったのかア？」

猛スピードで突っ込んでくる燕を前にこれといった行動アクションを起こすわけでもなく、ただただその顔に凶悪な笑みを浮かべる。

「一方通行アああああああッ！！」

憤怒の形相で右腕を突き出す燕とただ悪魔の笑みを浮かべる一方通行が真正面から衝突。

周囲の建物は生じた爆風によって薙ぎ払われ、地面には大きな亀裂が走る。「……」

吹き荒れる爆風と降り注ぐガラス片の中心に立っていたのは――

――

第七学区に流れる川を跨ぐ鉄橋。以前上条当麻と闘った場所に、御坂美琴と三日月獄は立っていた。

ただし、

御坂美琴の服のあちこちは黒く焦げ落ち、対する三日月獄は無傷と

いう状態だ。

「何だ何だ？学園都市第三位っても所詮はこの程度だったことなのか？」

ポケットに手をつ込んだままの体勢で三日月は目の前の少女を嘲笑う。

「くッ……ナメんじゃ……」

美琴が大きく腕を振るう。

「ないわよッ！！」

その手には砂鉄で形成された剣。磁力を用いて形成されたそれは振動し触れた物を問答無用で削ぎ落とす。

美琴はそれを三日月に向けて振るう。

長さの調節が自在な砂鉄の剣は蛇のように蛇行し三日月へと向かっていく。

バチュンッ！！

一瞬目映い閃光が周囲を覆った。

「な……」

無意識に美琴の口から溢れる絶望にも似た言葉。

「舐めてるのは俺じゃなくてアンタなんじゃないかなあ超電磁砲^{レールガン}。」

アンタの操る電撃なんかで俺を上回れるとも思ってたの?」

その手には先程まで美琴が操作していたはずの砂鉄の剣が握られている。

「……どう…して?」

学園都市最強の電撃使い（エレクトロマスター）である御坂美琴が操る砂鉄が乗っ取られた。

それは単純に言ってしまうえば、美琴が操ったそれ以上の磁力を用いて砂鉄を乗っ取ったということだ。

「ふうん、電撃使いつて色々と応用が効くんだなあ」

手にした砂鉄の剣をまじまじと眺めながら如何にも楽しそうに三日月が笑う。

「さあどうする超電磁砲!？」

ザアッ!!

と三日月は手にしていた剣を美琴目掛けて振るう。

「くうっ!!」

普段の美琴であれば、持ち前の応用力で砂鉄の陰をただの砂鉄に戻すことも可能だが今回は違う。

自分以上の総量を持つ人間が相手ではそれを行うことは出来ない。

美琴はその剣から転がるようにして横に避ける。

「へえ、反射神経はいいんだ。流石は常盤台のエース様だ」

明らかに上から物を言う三日月をキッと睨みつけ、美琴はポケットへと手を伸ばした。

「……本当は使いたくなかったけど」

ゆっくりとポケットからゲームセンターでよく見るコインを取り出す。

「全力で撃つわ」

それを指で挟み、目の前の少年へと突きつけた。

「超電磁砲^{レールガン}か。いいねえ、やっぱり相手の最強の技を打ち破ってこそ
の完全勝利なわけだし」

三日月は待つてましたと言わんばかりの笑みを浮かべ、自信もズボンのポケットへと手を伸ばした。

「……？」

美琴が怪訝な表情を浮かべているのを見てか、三日月はポケットから取り出したたモノを見せながら言う。

「ああコレ？何の変哲もない只の鉄球だよ」

ただし、と三日月は付け加えて。

「耐熱加工は万全だけどね」

「……アンタまさか」

美琴は何かに気づき、腕を突き出したまま三日月に問いかける。

「……超電磁砲？」

「ハハツ、いい線いってるけど違うね」

三日月は持っていた鉄球を掌でコロコロと転がしながら続ける。

「アンタは確か最大で十億ボルトの電撃を扱えるらしいけど、それって理論上ではだろ？ だけど俺は違う。理論上だけじゃない、常に十億ボルトの電撃を扱えるんだ」

「……何が言いたいわけ？」

「いやだからさ、使用できる電撃の総量も威力も俺のほうが上なんだよけ」

「だからどうしたのよ」

「はぁ……つまりさ。アンタが俺に勝てるわけがないじゃないか」

「……そんなの、やってみないと解らないじゃないッ！」

それが合図となり、美琴はコインを弾いた。

ピイイーン

と音をたてて宙を舞うコインはやがて美琴の指先へと落ちていき、

そして。

莫大な光量と閃光を撒き散らし、超電磁砲が発射された。
数瞬遅れて轟音が響き渡る。

音速の三倍で発射されたコインは一瞬という間もなく三日月を直撃しすべてを飲み込む。

筈だった。

「ッ!？」

美琴が目撃したのは今までに見たことがないような光景。

「超電磁砲が……呑み込まれた……?」

有り得ない光景に呆然と膝をついた。

美琴が放った超電磁砲。手加減などは一切していない。

正真正銘の、学園都市第三位の全力。

その必殺の一撃を、三日月が放った鉄球が全て呑み込んだ。

（あれは……超電磁砲……? いや、そんな程度の威力じゃなかった。

あれは……)

「電磁キャノン砲」エレクトロキャノン

美琴の思考を継いで声を発したのは三日月だった。

「エレクトロ……キャノン？」

自らの最強の一撃をいとも簡単に打ち破られた美琴は弱々しく呟く。

「アンタの超電磁砲は音速の三倍らしいけど、俺の電磁キャノン砲は音速の五倍だ」

「な……！？」

「威力は33メガジュール。はつきり言って超電磁砲なんて相手にもなんないんだよね」

因みに、1メガジュールは1トンの車両が160キロのスピードで壁に激突したエネルギーに等しい。

「俺が放った鉄球は超音波の速度で発射されるからさ、先に超電磁砲が発射されようがほんの少しくらいの余裕はあるんだよ」

「……ッ」

美琴は尚も立ち上がり、食い下がろうと再びコインを取り出すが先

程の超電磁砲で自らが操る電撃の殆どを消費してしまったらしく次の一撃は放てそうになかった。

「なんだ電池切れ？つまんないなあ」

三日月は美琴へとゆっくり近づいていく。

「暫く眠ってもらってから」

そう言つて三日月は動けない美琴の肩に触れ、

バチュンッ！！

美琴を気絶させた。

電撃使いは電撃に対して耐性を持っているのでそれ以上の電撃を浴びせて。

ドサッ

と倒れた美琴を見届け、三日月は鉄球を取り出したポケットとは逆のポケットから携帯を取り出す。

もちろん電磁波にやられないように特別仕様だ。

キーを操作し、通話ボタンを押す。

すぐに電話は繋がった。

「もしもし遊馬？ うん、今第三位を捕まえたから」

月も雲に隠れ闇に包まれた鉄橋に三日月の声だけが響く。

「うん、解った。すぐにでもー……」

言いかけて、ふと三日月が話すのを止めた。

「ごめん遊馬。また後でかけなおす」

そう告げて通話を切り携帯をポケットへとしまつ。

カッソ

三日月と美琴しかない筈の鉄橋に確かに反響する足音。

空はほんの少しだけ雲から月が顔を出し始め、徐々に月明かりが鉄橋を端から照らしていく。

「おいおい、アンタはまだの予定だったんだけどなあ」

三日月が面倒くさそうに、しかし口元を吊り上げながら言う。

カッソ

尚も足音はこちらに近付いてくる。

「アンタは俺じゃなくて遊馬が担当だったんだけど、珍しく遊馬の予想外れちゃったなあ。まさかこんなに早く出てくるなんて」

カッソ

足音が止まり、いつの間にか三日月のすぐ目の前にまで近付いていた。

「……そこに倒れてる第三位は返してもらおうか」

「何だよ、アンタはそんなに他人想いだったっけ？」

両手を広げ、まるで歓迎しているかのような三日月は言った。

「ようこそ第六位。いや……『媒体』、と言ったほうがいいかな？」

三日月獄の目の前には、学園都市第六位のレベル5、鳴神葉次が立っていた。

Ep・48 鉄橋に響く足音（後書き）

次回

鳴神参戦！！

そして工場長と一方通行は……

Ep・49 天地創造と路地裏の少年

「第三位を返してもらおうかな」

月明かりが仄かに照らす鉄橋で、『キャラバン』の三日月獄と学園都市第六位の超能力者、なるかみ ようじ鳴神葉次が対峙した。

「予想外だよ。まさかこんなに早く表舞台に上がってくるなんてさ」

三日月がイヤミつたらしく鳴神に告げる。

「へえ、随分と威勢がいいね雷使い（ライボルター）。いつにも増してよく喋るみたいだ」

肩にかかる程度の髪の毛を掻き上げ、三日月の挑発には乗らずに鳴神は答える。

肩を露出させたシャツに七分丈のデニムにブーツ。見た目中性的な鳴神は女性のような服装をしている。

「……全くつくづくムカつくよアンタ。アレイスターのプランをぶっ壊しちやいそうだ」

先程までの美琴との戦闘では見せなかった明らかな憤怒の表情で鳴神を睨み付ける。

「何？まさか僕と殺り合うつもり」

「計画は狂ったけどそれも悪くないな」

「止めときなよガキが。君じゃ僕には敵わないよ」

「ふん……流石『媒体』は言うことがでかいね。先日の内戦じゃわざとやられたフリをしていたんだろっ？」

「それはどうかなあ」

「ふん、アレイスターのプランの駒のくせに……」

「……なんなら……試してみる？」

2人の纏う空気が一転し、突き刺すようなピリピリとした雰囲気が漂う。

仄かな月明かりが照らす鉄橋の上で、2人の“化物”の視線が交差し、そして――――

「鳴神イイイイイイイッ!!」

「……第三位は回収するよ。例え君を殺してでも」

眼が開けられないような閃光と耳を塞ぎたくなるような轟音を皮切りに、前触れなく2人は激突した。

「ユニバースルーラー
天地創造……だと？」

垣根帝督の目の前に立つ少年、日次ひなみ庭示ていじが放った言葉に脳内の処理が追いつかなくなりそうになる。

（昔の第二位だあ？んなもんが居るわけがねえ。超能力者は学園都市に7人、それは紛れもない事実の筈だ）

垣根帝督を含む超能力者として認定されている人間は学園都市に住む230万人のうちたった7人しか存在しない。それは誰もが知っている周知の事実であり、揺るぎない現実である筈だ。

「ハッ、そんな戯言を信じるとでも思ってたのかよカスが。寝言は寝てから言いやがれ」

「オイオイ暗部に身を置く人間がこの事実を認められないのかよ」

「ああ？」

「学園都市に超能力者は7人。それは“表”の世界での話だろうが」
ピクッ

と垣根の身体が反応する。恐怖や焦燥からではない、今の言葉の意味を理解してしまったからだ。

「……てめえ」

憤怒の表情を隠しもせず日次を睨み付ける。

「理解したか？第二位」

「そうか、そういうことかよ。……俺や第一位が居る此の場所さえ、お前らには『表』の世界だって言うってのか」

先程日次が口にした『学園都市に超能力者は7人。それは“表”の世界の話』という言葉。

垣根自身や一方通行は暗部に身を置くが、レベル5が7人いるということは全ての学生が認知している。それはつまり、間接的であっても垣根らの存在を知っているということだ。

つまり、日次が言いたいのは、

「お前ら程度が居る闇なんてのは、まだまだ浅いんだよ」

首からヘッドホンを外して適当に投げ捨てる。

「任務変更だ。本来は第四位の捕獲及び殺害だったが……第二位の殺害が最優先だ」

パキパキと指を鳴らしながら、垣根帝督へと視線を向ける。

「という訳だ。お前には此处でちょっとばかり愉快的死体になってもらっぜ」

「ケッ……やれるもんならやってみやがれえ!!」

ゴアッ!!

と垣根の背中から三対六枚の純白の翼が現出し、それを羽ばたかせて上空へと飛翔する。

「お得意の未元物質か」
ダークマター

「てめえにもう逃げ場なんてねえぞ」

「逃げる必要なんて何処にある？」

ダンッ！！

と日次が地面を蹴ったかと思えば、一瞬で上空を浮遊する垣根の目の前まで接近していた。

「ッー！！」

「食らいな未元物質」

空中で日次の拳が振り上げられ、そのまま垣根の顔面目掛けて振り下ろされた。

「……だから言っただろうが。俺の未元物質に常識は通用しねえ、ってな」

振り下ろされた拳は翼の一枚に防がれ、垣根自身にダメージを与えることは出来なかった。

しかし、

「……クハハハ」

夜の学園都市に不気味な笑い声が響く。

「？ 何が可笑しい。イカれちまったか？」

「常識は通用しない、ねえ……」

凶悪な笑みを浮かべた日次は躊躇することなく反対の腕を振り下ろした。

（バカが。何遍やったって俺に傷を付けることなんてできやしねえ）

垣根は再び翼をガードに使用し、未元物質によって日次の腕を破壊しようと思案していた。

が、

ゴキヤツー！

何か固いモノが打ち抜いたような感触。

口内に広がる鉄臭く、ネバネバとした液体。

揺れる視界、垣根自身何が起きたのか全く理解が出来なかった。

そして背中に走る激痛を感じて初めて、自分が顎を打ち抜かれてそのまま地面に叩きつけられたということを理解した。

（何…だ？一体どうやって……俺を攻撃しやがった……）

口に溜まった血を吐いてゆっくりと立ち上がる。顎を完璧に捉えられたためダメージは思ったよりも重く、若干足も震えている。

「クハハ、話にならねえなあ第二位。そんなのでよく今までその座をキープできてたな」

見下した笑みで垣根を見つめる日次。

「てめえ……どうやって」

「簡単だよ。お前に常識が通用しねえとか何とかは知らないが……」

一拍置いて、告げる。

「この俺にそんな理^{ことわり}は通用しねえ」

「!?!」

「この世に存在しない物質を創り出すと言っても、それはお前が頭の中で理論を組み立てて使用するもんだ」

垣根は何も言わず、ただ日次を睨み続ける。

「人間が考えられるレベルの理なんか、俺の能力^{チカラ}には全く通用しねえんだよ」

瞬間、

「ガハッ!」

突然垣根が吐血した。赤い飛沫が地面に飛び散り、ボタボタと口から赤黒い液体が垂れる。

「何が起きたか解らなかっただろ?」

「ッ……」

「これが天地創造。お前程度の人間が辿り着ける領域じゃないんだよ」

邪悪な笑みそのままに、彼の能力が帝督を襲う。2人が交差したのち、もがれた純白の翼が宙を舞った。

同時刻、第一八学区の路地裏。

スキルアウトが好みそうな暗く危険なその道を、1人の少年が歩いていた。

年はギリギリで少年といえる感じで18ぐらいだろうか。

パーマをかけた肩にとどきそうな黒髪、黒の長袖に黒いデニム、そして黒いブーツと全身を黒で統一したその少年の首元には、細いチェーンの銀のペンダントが着けられていた。

少年は何も言わず、ただ暗い路地裏を進み続ける。左右を建物に囲われた路地の上空には雲から顔を出した月がぼんやりとこの薄暗い路地を照らしている。

少年は夜空を見上げ、ぼそりと呟く。

「……超能力者、か」

その言葉の真意は一体何なのかは彼自身にしか分からない。
ただ一つ言えるのは、少年の顔が狂喜に満ちていたということ。

ジャリ、

前方から聞こえてくる足音。それは一つや二つではない。

路地裏の暗闇から現れたのはやはりと言うべきか、不良代表という
ような格好をした数人のスキルアウトたち。それぞれがバットや鉄
パイプなどを所持している所を見ると能力レベルは決して高くない
のだろう。

「おう兄ちゃん。いけねえなあ夜こんな暗い路地裏を通っちゃあ」

スキンヘッドの鉄パイプを持った男が少年に近づき言う。

「こんな人たちに襲われちゃうかもしれないよお!？」

帽子の鍰を後ろにして被っている男が顔を近づけ少年に言った。

「まあおとなしく有り金全部出すってんなら半殺しで許してやるよ」

「それとも全殺しがいいかあ!？」

「なんならこの人数相手に立ち回ってみるか!？」

「ぎやははははっ!！」

スキルアウトたちに周りを取り囲まれた少年はしかし、全く動揺し
たりしない。

いやむしろ、その顔には何とも言えない狂喜に満ちた笑みが浮かべ
られている。

「おらとつとと出せよッ!!」

気が短いのか我慢できなくなったスキンヘッドの男が胸ぐらに掴みかかるうとした。

その瞬間。

「いけねえなあ兄ちゃんたち。根性がねえよ、そんなんじゃ田舎の母ちゃんが泣いてるぜ」

スキルアウトたちに取り囲まれていた少年の背後から発せられた声。

「……ああん？誰だよてめえ」

「邪魔するってんならただじゃおかねえぞ」

一番近くにいたスキルアウト2人が突如現れた少年に接近していく。

「おらとつとと消えー！ー」

「すごいパンチ」

「ぐぼおッ!？」

「さだおーッ!!」

男の1人が吹き飛ばされ、コンクリートの壁に激突。同時に意識を手放した。

「な、なんだてめえはあ!!」

「削板軍覇!!学園都市第七位の超能力者だツ!!」

「レ、レベル5だと!?!」

「構うな、アイツから先にやっちまえ!!」

標的を取り囲んだ少年から白い特攻服のような学ランを着た少年へと変更し、持っていたバットや鉄パイプを振りかざして向かっていく。

「うらあッ!!」

ゴンッ!!

金属バットが削板軍覇の頭部に直撃、鈍い音とともに軍覇は倒れる。

「あ、あれ?勝った……?」

余りにも簡単に倒せてしまったことに動揺するスキンヘッドのスキルアウト。

しかし倒れてからきっかり3秒後。

「ぬううううんッ!!」

まるで何事もなかったかのように削板軍覇は立ち上がった。

「なあッ!？」

「直撃しただろ!！」

「こいつ人間か!？」

「やっぱレベル5ってことか……!！」

「ノンノン違うぜ兄ちゃん。俺がレベル5だってことはどうだっていいんだ。大事なのは俺が俺であることだからな!！」

「ばーんと決めポーズを決めてスキルアウトたちにどや顔を浮かべる軍覇。

「んだそのどや顔はあ!！」

「その決めポーズだせえんだよ!！」

「ぶっ殺せッ!！」

「すごいパンチ」

「「「んぎゅうつうつッ!？」「「「

一斉に襲いかかったスキルアウトたちは軍覇の一撃によって汚い地面の上に沈んだ。

「おい兄ちゃん大丈夫か？」

スキルアウトたちを一掃した軍覇は取り囲まれていた少年のもとへと向かう。

見た目的には軍覇のほう年下のように見えるがこの暗い路地裏に黒い服を着ているので正確なことは分からない。

「……ええ、ありがとうございます」

「気をつけるよ？この辺りの路地にはああいう連中が多いからな」

「そうですね……」

「俺は削板軍覇。よろしくな」

「削板って、レベル5の……？」

「ん、まあな」

「……そうですか」

軍覇は暗闇のせいで気付くことが出来なかった。レベル5だと聞いた少年が毒々しい笑みを浮かべていたことに。

「そっぴやお前、名前は？」

軍覇に尋ねられ、少年は微笑みながら告げた。

「私は遊馬ゆしまといます」

学園都市を覆う夜空に再び雲が広がり始めた。

Ep・49 天地創造と路地裏の少年（後書き）

遊馬は『あすま』と読みますが都合上『ゆうま』と読むようにさせていただきました。

鳴神に続き

軍覇も参戦！！

E p . 5 0 それが漢つてもんだろつが（前書き）

気づけばもう50話です。

此処までこれたのは皆さんのおかげです。

もうしばらくお付き合ってください m () () m

Ep・50 それが漢つてもんだろっが

「……」

ガラガラと音を立てて崩れ落ちる瓦礫片の中心に、無言で一方通行は立っていた。周囲は彼を中心に地面には円上に亀裂が走り、地下街の一角は崩落している。

その中を無傷で立つ一方通行はしかし、煮え切らない表情である一点を見つめていた。

「……チッ」

一方通行の見つめる先、地下街を覆う天井の一角に一人一人通れる程の大きさの穴が開いていた。その穴は一方通行の攻撃によって崩落してできたわけではない。

人為的に開けられたものだ。

天海燕によって。

「……クソツたれが」

一方通行と燕が衝突する瞬間、燕は大きく軌道を変えて天井へと衝突、そのまま姿を消した。

(……アイツは一体何をしにここまで来やがった……?)

腑に落ちないような表情で、一方通行は天井を見上げる。

（あの女……俺を相手に手を抜いていやがった）

思い返せば可笑しな点ばかりだった。

一方通行の脳波と完全にリンクし、同等の能力を有しているというのならば、“反射の膜が薄い”など有り得ないのだ。

天海燕は意図的に手を抜いていた。

その理由はおそらく……

（俺の演算パターンと自分の演算パターンが正確にリンクしていたかどうかの確認ってトコか……）

一方通行は首筋にある電極のスイッチを切り、そこらに落ちていたト字トンファのような杖について第二二学区を後にした。

「へえ、お前も研究機関にいたクチだったのか」

「そうなんですよ」

第一八学区の路地裏を抜けた軍覇と遊馬は人気のほとんどなくなった大きな通りを歩いていた。

時刻はそろそろ午後9時を回ろうとしており、学生の姿は全く見当たらない。時たま通る警備員アンチスキルの巡回車両が通っていくのみである。

「研究所つてえと特力研か何か？」

「特力研？」

「ああスマン。お前らには関係のない話だったな」

特力研はある程度の闇に身を置く人間でなければ詳細な情報は知らない。軍覇はそれを思い出して直ぐに訂正した。

「私が居たのは特力研ではなく叡智研ですよ」

「！？ お前、学園都市の闇に身を置いていたのか！？」

「ええ。彼処はまさにゴミ共の掃き溜めでしたよ」

平然と学園都市の『闇』を口にする少年に、軍覇は些かの疑問を抱いた。

（……コイツ、匂うな）

そんな軍覇の視線に気付いたのか、游馬がこちらを向いた。

「どうかしましたか？」

「……お前、本当に学園都市の人間か？」

突拍子もない軍覇の言葉だったが、それを聞いた瞬間、確かに游馬の表情が歪んだ。

「……何を言っているんですか？当たり前じゃないですか」

「おかしいんだよ」

「おかしい……？」

「叡智研。そいつは既に無くなっちまってるんだよ。第一位の手によってな」

「……」

「それにお前からは超能力者特有の“匂い”を感じねえ。どっちかつつつと俺たち原石に近い感じた」

月明かりに照らされながら、目の前の少年に告げた。

辺りにはもう人の気配などはなく、ただ二人が居るのみである。

「……あーあ」

沈黙が支配していた空間において、それを先に破ったのは游馬だった。

「畜生、失敗失敗。やっぱこんな作戦じゃ上手くいくわけがねえよなあ」

頭をガシガシと掻きながら溜め息を吐く。

「まったくまさかこんな所で第七位に遭遇するなんざ微塵も想定してなかったからよお、こんな狸芝居するハメになっちまったじゃねえか」

先程までの丁寧な拳動や話し方は消え、異様な鋭さの眼光が目の前の標的に的を絞る。

「何だかもうバレてるみてえだし、隠す必要もねえよな」

首元のペンダントを手で弄りながら、游馬は告げる。

「改めて初めまして第七位。学園都市統括理事長直属部隊、『キラバン』のリーダーをやらせてもらってるユーマ＝ロザリオンだ。ああ別に覚えなくても構わねえぜ」

学園都市第七位の超能力者、削板軍覇を前にして、ユーマは吐き捨てるように言った。

「どうせすぐに何も考えられなくなるからよ」

瞬間、ユーマの動きに音が置き去りにされた。

それほどの速度をしかし、世界最高の原石は迎え撃つ。

ゴウッ！！

二人が衝突したことによって発生した衝撃波が建物を大きく軋ませる。

「ほう……流石は学園都市の頂点に君臨する超能力者の一人。この程度じゃ倒せないか」

「……っナメんなよオオオオオオッ！！」

拳同士でつばぜり合いをしていた二人は距離をとり、軍覇は本気モ

ードへと移行する。

「ぬううんッ!!」

大きく振り上げた拳をそのままコンクリートの地面に叩きつけた。

バゴンッ!!

コンクリート製の破片が地面から幾重も捲れ上がる。それに向かって軍覇は拳を構えて、

「すごいパンチ!!」

アタッククラッシュ

念動砲弾によって宙を舞っていた瓦礫が巻き込まれ、音速の速さでユーマへと破片が襲いかかる。

しかし、

ユーマは動かない。

まるで動く必要などないとも言いたげなその表情は、狂喜に満ちていた。

「いいねいいね!! やっぱそうでなくちゃなあ第七位ッ!!」

ユーマは飛来するコンクリートの破片をサッカーボールを蹴るように蹴り返した。

「むっ!?!」

「この程度じゃ俺には傷一つ付けられないぜえ!!」

ダンッ、と勢いよく地面を蹴ったユーマは一瞬にして軍覇との距離を詰める。一方の軍覇も音速を超えるスピードで移動しているため人目には何が起こっているのかすら理解出来ないだろう。

「すごいパンチ!!」

「」

ユーマが何かを呟くと、軍覇の念動砲弾は威力を無くしたただの正拳突きへと成り下がった。

「眠りな」

ユーマの攻撃が軍覇に直撃した。

「……ッ!？」

あからさまなアクションがあつたわけではないが、確かに身体を撃ち抜かれたような強い衝撃が軍覇を襲った。

（こんな感じの攻撃……確か）

軍覇が記憶の底から掘り起こしたのは、理解不能の能力を使っていた金髪の青年。

あの時手も足も出なかった自分が、なんだか無性に情けなく感じる。

「……ハッ」

自らの無力さを噛み締めて、軍覇は目の前の理解不能の能力を使う少年を見据える。

「……そうだな」

「ああ？」

ユーマは怪訝そうに眉をひそめる。

「此処でまた負けるようなら……俺はただの根性無しだ」

以前守れなかったあの少女たち。

自分が招いてしまった結末を、今度こそ変えるために。

「お前は、ここで倒すッ!!」

「やる気かよ第七位。お前じゃ俺には太刀打ちできねえって今ので解らねえのか？」

軍覇にとって“未知”の能力を使用するユーマに対し、削板軍覇は揺るがない。

「ここでお前を止めねえと……学園都市は終わりだ」

「よく解ってるじゃねえか。ま、お前にはムリだがな」

「……出来る出来ないの問題じゃねえんだよ」

爪が食い込み血がポタポタと流れ落ちるほど、キツく拳を握りながら、

「俺がやらなきゃならねえと思ったことをやり抜き通すッ!!それが漢つてもんだろッ!!」

二人にもう言葉など必要なかった。

ただ、前へ。

ただ、拳を突き出す。

衝突の瞬間。

音が、光が、五感全てが消えてしまうほどの莫大な轟音が学園都市に響き渡った。

Ep. 51 軌道支配（前書き）

お待たせしました。

Ep.51 軌道支配

「……チッ」

第一八学区の一角。

周囲には元の面影など微塵もなくなっていた。

建物は瓦解し、地面には亀裂が走り、挟れている。

そんな変わり果てた地形の中心に立つ少年、削板軍覇。

と、ユーマ＝ロザリオン。

「……世界最高の原石は伊達じゃないってことか」

視線の先で立つ削板軍覇を見つめ、ユーマは嬉しそうに口元を吊り上げる。

「……だが」

それ故に残念そうに、ユーマは告げた。

「ここまでだな。ナンバーセブン 最大原石」

ユーマが言った瞬間、軍覇は電池が切れた人形のように膝を折って地面に倒れた。倒れた彼はピクリとも動かず、静寂が訪れる。

「……よっこらせつと」

倒れた軍覇にゆっくりと近付いていき、そのまま軍覇を担ぎ上げ再び路地裏へと歩き出す。
後には生々しい戦闘の爪跡だけが克明に残されていた。

「……終わったか？」

第七学区の広場で戦闘を行っていた日次ひなみ庭示は、目の前で倒れ臥している学園都市第二位の超能力者を前に小さく息を吐いた。

「ま、第二位ならこんなもんだろ。末元物質ダークマターなんざ俺の天地創造ユニバースの足元にも及ばねえんだよ」

辺り一帯に日次の声だけが淡々と響き渡る。その言葉は目の前で動かない垣根帝督に向けられているようにも、ただ独り言を呟いているようにも見えた。

「んじゃまあ。さっさと回収して戻りますか」

日次は垣根のほうへと歩を進め、気を失っているかどうか確かめようと腰を折って屈む。自然とヤンキー座りのような形で垣根の顔を覗き込むようにして、そして。

真っ直ぐに伸びてくる腕に、顔を掴まれた。

「!？」

顔を掴まれているために視界が余りよくないが、それでも手の隙間から確かに見える、殺気に満ちた二つの眼。

それは無言で日次を見つめ、やがて言葉を紡ぐ。

「テメエの天地創造つてのは確かに厄介だ」

垣根は顔を掴んでいる手に更に力を込める。ミシミシと骨が圧迫される音と、荒い呼吸音が夜の広場に小さく響く。

「……確か、テメエの天地創造にはこの世の理は通用しねえんだっ
たな」

ゆっくりと立ち上がりながら、一層掴む力を強めていく。

「だが、俺の末元物質にそんなあやふやな定義は通用しねえ」

再び垣根の背中から三対六枚の翼が現出し、掴んでいた日次を吹き飛ばした。

「ガ……ハア!？」

広場に建っていた時計台に激突、時計台には日次を中心とした亀裂が走る。

「……何故まだ動ける……？」

日次が疑問に思ったのはそこだった。
確実に戦闘不能にまで追い込んだ。
その実感もあった。

目の前の少年が有する能力である未元物質も解析が完了し、自らの
天地創造で基本構造を全て創り変えた。未元物質で掌握できる空間
など何処にも存在しない筈だ。

にもかかわらず、目の前でせせら笑う少年、垣根帝督の背後には純
白の翼が闇夜をぼんやりと照らし出している。

理解不能。

日次の脳内はその単語で埋め尽くされていた。

「理解出来ねえか？」

「……ッ」

日次は垣根の問い掛けに答えることが出来なかった。

「知ってるか。この世界は全て素粒子によって作られている」

幻想的な翼をゆらめかせながら、垣根は言う。

「素粒子ってのは分子や原子よりもさらに小さい物体だ。その種類
はいくつかあるが……この世界はそういう素粒子で構成されてるわ
けだ」

「……何が言いてえんだ」

「俺が解析した所によると、お前の『天地創造』ってのはこの世に存在する全ての現象を自由に作り替える能力だ」

「……」

日次の顔が驚愕の色に染まる。

まさかあの攻防の間に自分の能力が解析されているとは思っていなかった。

だが、と垣根は呟いて、

「俺の『未元物質』に、その常識は通用しねえ」

「言っただろうが。テメエのそんなちやちな理は俺には通じねえつてよ」

「分かってねえな。俺の生み出す『未元物質』は、この世界に存在しない物質だ。『まだ見つかっていない』だの『理論上は存在するはず』だのそんなレベルの話じゃない。本当に、存在しないんだよ（……………）」

「だからどうした？その未元物質をこの世の現象と定義して演算し直しちまえば俺の天地創造の支配下だ。所詮、お前じゃ俺の先には行けねえんだよ」

「救えねえな、テメエ」

垣根が言った途端、彼の背中であらめいていた白い翼が凄まじい光を放した。

「ッ!？」

突如として日次を襲った一瞬の光。

時間にしてほんの僅かなものだったが、日次は自身の異変に気付いた。

視界が定まらない。

「今のは月の光を利用して未元物質で生み出した光だ。太陽光には及ばねえが、テメエの眼はもう死んだ」

焼けるような熱さに眼を押さえ、見えない両眼で前に立つ少年を睨み付ける。

「……バカか未元物質。俺の天地創造は、現象全てを作り替える。当然、この失明という現象もだ」

にわかに日次の両眼が発光したかと思うと、彼の視界からボヤけたようなモヤは消えていた。

「これが俺とお前の差なんだよ。どうやったってひっくり返らねえ実力のな」

「随分とお喋りだなセンパイ？余裕がなくなってきたんじゃないか？」

「……クソガキが」

「根比べと行こうじゃねえか。俺の未元物質がテメエを飲み込むのが先か。テメエの天地創造が俺の未元物質を喰らうのが先か」

垣根帝督は口元を吊り上げる。

日次の『天地創造』が未元物質による異物の混ざった空間をこの世の定義として作り替えるのが先か。垣根帝督の『未元物質』がそれよりも先に日次を飲み込むのが先か。

「……おもしれえ。お前の未元物質を解析して二度と口がきけないようにしてやるよ」

互いの視線が交差し、動き出す。

『異世界の力を使う者』と『この世の全てを掌握する者』が、再び激突した。

「どつしたの？ボクを倒すんでしょ？」

鉄橋の上に響く澄んだ声。その持ち主は眼前で怒りの形相を浮かべ

る人物にむかつて嘲りの笑みを見せた。

学園都市第六位。

『軌道支配』オービットの鳴神葉次。なるかみ よつじ

彼は『キラバン』のメンバー三日月獄みかづきひとやに向かって言う。

「君の能力チカラじゃあボクを倒すことはできないよ」

「……ク、ソがあー!!」

怒りに身を任せた三日月は十億ボルトの雷撃を鳴神に向かって放つ。音が置き去りにされ、ただ莫大な光量のみが一瞬で鳴神に到達し全てを消滅させる。

しかし、

「だからムダだって」

バチバチと雷撃の余波が鉄橋を包む中、その中心から聞こえてくる澄んだ声に三日月は思わず舌打ちした。

「チッ……やっぱりアンタが相手じゃ分が悪いな」

「何言ってるんだよ。君ごとき、どの超能力者（レベル5）とやったって同じ結果さ。第三位は突然の事態に対処が遅れた所を上手く突いただけ。本来なら君ごときが勝てる相手じゃないよ」

「……つくづくムカつくやろうだなあ『媒体』」

「その呼ばれ方は多少の相違があるよね」

カッン

と足音が三日月に近づいていく。

三日月は再び雷撃を放つが、それらは全て鳴神を避けるようにして流れていく。

鳴神が持つ文字通りの能力、『軌道支配』によって。

「君の攻撃は食らわない。全ての軌道はボクの支配下だ」

「もしそれが本当ならアンタは第六位なんかに居ないだろ？第二位以上の能力者になれる」

「……」

「ということはアンタのその能力には何かしらの制限があるはずだ。使用範囲か制限時間か、それさえ解ればアンタなんか消し炭にしてやるよ」

直撃すれば死は免れない『雷使い』の一撃。

それを当てるために三日月は揺さぶりをかける。何処に動揺が現れても察知できるよう、全ての神経を集中させて目の前の人間を見つめる。

「……はあ、」

そんな三日月を見て、興味なさそうに鳴神は溜め息を吐いた。

「言っておくけど、ボクは望んでこの第六位にいるんだぜ？」

「!？」

「なんだいその顔は。ある程度の闇に関わっている君なら分かるでしょ？ボクがどんな理由で『媒体』なんてアレイスターに呼ばれているのか」

「…………まさかその能力はッ！？」
チカラ

何かに気付いた三日月よりも早く、鳴神は動いていた。

全ての軌道を支配下に置くことが出来る鳴神の『軌道支配』。

それは自身の動きであつても例外ではない。

自身の動きの軌道を支配した鳴神は人間の動きでは到底できない軌道で三日月へと突き進んで行く。

「…………くそが!!」

「ムダだよ。君じゃボクを倒せない」

飛来する雷撃の軌道を反らし、弾丸の速度で三日月の目の前へと到達する。

スッ、と伸ばされた白い手が三日月の鳩尾に触れる。

「!?!？」

三日月の口から、ドロツとした赤黒い液体が噴き出した。

「な…………に、を…………？」

「簡単だよ。ボクは全ての軌道を支配する。それは人体にだって作用するんだ」

鳴神が軌道を支配したのは三日月の『血液』。
血液の軌道を逆にして人体を内部から破壊したのだ。

「ガフッ!!」

止まることのない血で鉄橋の路を赤く染めながら、三日月は地に伏した。

「……く、そ。お前……お前は……」

最後まで言葉を言い終えることなく、三日月獄は動かなくなった。

「ふう」

鳴神は軽く息を吐くと近くに倒れていた美琴をおぶる。
安全な場所まで運ばなくてはいつ他のメンバーに狙われるか分からない。

「よいしょっ、と」

鳴神は美琴を背負い、月明かりに照らされる鉄橋を後にする。
そこにおびただしい量の血痕を残して。

Ep. 52 本物の悪党（前書き）

遅くなりました；
若干スランプ気味です。

Ep.52 本物の悪党

学園都市統括理事長の本拠地、『窓のないビル』。

その名の通り窓も扉も存在しない建物の内部の一角、巨大な円筒状の培養器内に漂う世界最高の魔術師にして科学者、アレイスターⅡ
クロウリーは目の前の少年を黙って見つめていた。

「第七位は捕獲した。今はあの部屋で眠ってもらってる」

「そうか。やはり世界最高の原石と言えどもまだ君には勝てなかったか」

「口には気をつけるよアレイスター。その言い方だと時間さえあれば第七位は俺に勝てると言ってるように聞こえるぜ」

「私には誰が勝とうが興味はない。あるとすれば計画に支障をきたすか否かだ」
フラン

「ハッ、一七 年も生きていると神経まで可笑しくなってくるのか？」

「もとより私に感情など存在しないのだよ。それよりもいいのか？」

「あん？」

「『キャラバン』のメンバー、三日月獄が死んだ」

「……誰が殺した？」

「『媒体』だ」

「第六位か……アイツはもともと俺の受け持ちだったはずだが……」

「あの『媒体』が君たちの思惑通りに動くわけがないだろう」

薄暗い空間に二人の声だけが淡々と響き渡る。

「……チツ、第三位も回収できなかったってことだよな」

「無論そういうことだ」

「なら第三位は後回しだ。どうせ全員片付けねえといけないんだからな」

「好きにしたまえ」

しばしの沈黙の後、ユーマが口を開く。

「……解ってるんだろうな」

「何の話だ」

「とばけやがって……まあいい」

ユーマはアレイスターに背を向け、ツカツカと建物から出ていった。ユーマの姿が見えなくなったのを確認し、アレイスターゆっくりと口にした。

「何をそんなに焦っているのだ。『ロザリオン』の末裔よ」

小さく呟かれたその言葉は誰の耳に届くこともなく消えていった。

「…………ふう」

周囲に誰も居ないことを確認し、少女は小さく息を吐いた。
少女、天海燕は先程の一方通行との戦闘を思い返す。

（流石に使用技術は向こうが上……でもアイツに使用時間の限界がある以上こちらの有利には変わらないわ）

第二二学区を離れて現在第二三学区を歩く燕は、闇夜に紛れる空港を遠目に見ながら空を見上げる。

月明かりが僅かに照らす地上。

辺りにはその明かりを遮るものなどは何も存在せず、ただ空港の滑走路が目の前にあるばかりだ。

（一方通行のバッテリーを余り減らせなかったのは残念だったけど、あの実力なら十分に渡り合えるわね）

同じベクトル操作を有する能力者。

もとは一方通行の演算パターンを使用して自らの脳に刷り込んだものだが、現在であればオリジナルとも互角以上の闘いが出来ると燕は確信していた。

「私が一方通行を倒せば、ユーマがあのか『媒体』を。庭示が『第二^{スヘア}候補』を捕縛してくれる。……アレイスターの計画も遅れざるをえないけど、アイツもそれは承知の上だし」

そうすれば、とそこまで考えて燕は思考を止めた。

理由は二つ。一つは逸る気持ちを抑えられなくなりそうだったから。

そしてもう一つは

カッン

誰も居るはずのない、無人の滑走路に確かに足音が響いたからだ。

燕はゆっくりと足音がしたほうへと視線を向ける。

「……全く」

呆れるような溜め息が口から漏れる。

「わざわざそっちから出向いてくれるなんてね」

漆黒の夜とは対照的に、どこまでも白い髪の毛。

「歓迎するわよ」

そんな暗闇の先から、深紅の双眼がこちらを見据える。

天海燕の視線の先、ゆっくりと歩きながらこちらに近づいてくる人物。

「一方通行ッ！！」

学園都市最強の能力者が、ただ静かに口元を吊り上げた。

『未元物質』と『天地創造』。

異世界の力を扱う者とその世の全ての現象を掌握する者の戦闘は、音すらも拒絶した。

垣根帝督が『^{タークマター}未元物質』によって生成した異物が混ざった空間を日次庭示の『^{ユニバースルラー}天地創造』がこの世の現象として定義し直し支配下に置く。

一見すると無限ループのような状況だが、ほんの少しずつ、しかし確実に、垣根帝督が日次庭示を押し始めていた。

「オラオラどうした『天地創造』 アアあああああッ！！」

垣根の背中から顕現した純白の翼から突風が放たれる。
もちろん、『未元物質』によって生成された異物が混入された突風

が、だ。

「チツ、調子に乗ってんじゃねえぞクソガキがアアあああッ！
」

日次は即座にその突風を解析、この世の現象として定義し突風を消滅させる。

だが、

「甘いんだよッ！！」

垣根帝督の攻撃は、これで終わらない。

月明かりによって幻想的な光を灯す三対六枚の翼のうちの二枚が、勢いよく射出された。

轟ッ！！

風を切り裂く音とともに回転しながら翼は日次のもとへと正確に向かっていく。

「クッ！！」

演算が間に合わないとは判断した日次は咄嗟に回避行動に移る。標的を失くした翼はそのまま広場の樹に激突、薙ぎ倒した。

垣根帝督が日次庭示を押し始めている原因は此処にある。

『未元物質』で生成された物質をこの世の現象として定義するには高度な演算能力が必要となる。

それを戦闘中に行うにはかなりの集中力とセンスが必要であり、それによって僅かなタイムラグが日次に生じ、『天地創造』で『未元物質』を相殺できなくなってきたのだ。

「どうしたよ『天地創造』。さっきまでの威勢は何処へ行ったんだ？」

「クソが……調子に乗りやがって……!!」

「てめえの能力はとくに解析済みだ。俺が負ける道理は存在しねえ」

髪の毛を掻き上げ、垣根は言う。

「終わりだ、『キャラバン』」

そう言った瞬間、

垣根帝督の翼がゴアッ!!と巨大化し、以前一方通行へと放った最大級の攻撃を行う。

「破滅の光!!」
アーチエンド

「ッ……!!」

翼から発せられる莫大な光量は、夜であることを忘れさせるほどのものだった。

『未元物質』によって殺人光線と化したその翼から放たれる光は、一瞬で日次庭示を飲み込んだ。

やがて光が消え、静寂が訪れた広場には、垣根帝督ただ一人が立っていた。

「一方通行ッ!!」

「よオ模造品。逃避行はもう終わりかア？」

第二三学区の空港横の滑走路、かつて上条当麻がオリアナ・トムソンと闘った場に、一方通行と天海燕は向き合っていた。

「わざわざ殺されにやって来たのかしら？」

「頭沸いてんのか？オマエごときが俺を殺せるわけがねエだろオが」

「相変わらず口先だけは達者ね」

「どっかの馬鹿がギャーギャー喚きやがるからなア」

そう言つて、一方通行は首筋にあるチョーカー型の電極へと手を伸ばし、ついていた現代的な杖を放り投げた。

「お片付けの時間だ」

ドキャッ!!

地面には幾重にも亀裂が走り、一方通行は脚力のベクトルを操作して弾丸のごとく標的（天海燕）へと突っ込んでいく。

「ナめてんのかしら？」

一方通行と全く同じ動作、速度で天海燕も一方通行へと突っ込んでいく。

学園都市の頂点に君臨するベクトル操作の能力を持つ二人の激突が生み出すのは、周囲を吹き飛ばすかなような爆風。

滑走路を囲んでいたフェンスが余波で吹き飛び、舗装されたコンクリートの地面が捲れ上がる。

二人は一旦離れ距離をとった。

「……ハハ、能力は互角みたいね？ 一方通行」

満足気な笑みを浮かべて言う燕。
しかしそれは一方通行も同様だった。

「ああ傑作だ。ソックリだよ、俺とオマエはなア」

笑いを堪えるかのような一方通行に燕は眉間に皺を寄せる。

「……何が可笑しいのよ」

その問いに、一方通行は告げる。

「傑作だぜ。この程度で俺と闘り合えると思ってるオマエのイカれ具合になア――！」

先程よりも速く、一方通行は燕の前へとベクトル操作で移動した。
いきなり詰め寄られた燕の顔色が驚愕に染まる。

「確かに俺とオマエはソックリだ！！だが決定的に違う点があるんだよ模造品！！」

勢いよく振り上げたられた拳。

“反射”がデフォルトで設定されている燕にしてみれば、一方通行の貧弱な腕から繰り出される拳になどなんの脅威も感じない。
故に、燕は動かなかった。

「馬鹿はアンタでしょ。反射が設定してあるのに効くわけがないじゃない」

対して、一方通行の声はどこまでも平淡だった。

「木原数多って知ってるか？」

ゴッ！！

突如腹部に感じた衝撃に、燕は我が眼を疑った。

（反射が……効いてない！？）

設定してある筈の“反射”の膜を通り抜け、確かに感じる鈍痛。
この事態に天海燕は正常な思考をすることができなくなった。

「何……をッ！？」

痛む腹部を抑えながら、敵意剥き出しで一方通行を睨む。

「これが俺とオマエとの違いだ」

心底楽しそうに、一方通行はそう告げた。

「実戦での経験値。これがオマエには決定的に足りてねエ」

「な……！？」

「俺たちのアジトを襲撃した時でもそうだ。実戦慣れしてるってんなら土御門と結標を逃がさずにあの場で仕留める事だって出来た筈だ。それをしねエ、あるいはできねエってのは実戦経験が足りねエって吐露してるようなモンだ」

「……ッ！！」

「こちとら一万人の『人間』を殺してンだよ。実戦経験で俺に敵うわけがねエ」

一方通行の脳裏を過るのはかつての記憶。とある少女のDNAマップを基に製造された二万体系ものクローン。

あの少年が自分を倒していなければ、おそらく自分の価値観はこれほどまでに劇的に変化しなかっただろう。

憎いことに変わりはないが、実験を止めた。ただその一点においてはあの黒髪の無能力者（レベル0）に感謝しなくてはならない。

実戦での経験という点において、木原数多との戦闘で一方通行は多くを学んだ。

第一に攻撃の寸前で拳を引き、それを反射させるという技術。
第二に自分の内に眠る異能の力。

木原数多の戦闘術は役に立つ。

事実、一方通行は先日の内戦ではその技術を駆使して壊滅将隊のメンバーを倒している。

今燕に攻撃したのも同じだ。反射が設定してあるのならば、木原数多が自分にしたことと同じことをすればいい。

奇しくも同じ能力を有する相手。

これほど対策を立てやすい相手は居ない。

首をゴキゴキと鳴らしながら、一方通行は燕を見据えて言う。

「俺とオマエの決定的なもう一つの違いを教えてやる」

狂気に満ちた表情で、

「本物の悪党ってやつをな」

Ep. 53 闇夜の闘い（前書き）

お待たせしました。

Ep.53 闇夜の闘い

「オマエに本物の悪党ってやつを教えてやる」

一方通行は腹部に手を当てる天海燕に向かって言い放った。

「……ハッ、オリジナル様は随分と余裕みたいね」

「オマエじゃあ俺には勝てねエ。傲慢や勝手な憶測なんかじゃねエ、当然の道理だ」

「私に一発入れたくらいで良い気になっているわけ？ 甘過ぎるわね第一位」

「百発でも千発でも喰らわせてやるから安心しな」

「……!!」

「ゴミ掃除の時間だ」

轟ッ!!

一方通行の背中にベクトル操作によって生み出された小型の竜巻にも似た四つの翼を駆使し、一気に燕との距離を縮める。

「ちッ!!」

一方通行の突進を回避すべく、脚力のベクトルを操作して後方へと飛び退く。

しかし、それよりも一方通行は速かった。

「ちまちまと逃げてンじゃねエぞ模造品がアアあああッ!」

ゴバツ!!

という周囲を震わせる轟音とともに一方通行は音速を超える速さで燕へと突き進む。

余りの速さに空気を切り裂く音が鎌鼬のように周囲のフェンスや地面に傷をつけていく。

「ッ

!？」

燕が事を認識した時には既に、腹部に鈍い衝撃が走り抜けていた。

通常なら有り得ない、反射の膜の外部からの攻撃。

胃から込み上げてくるものを無理矢理に押し留め、燕は一方通行から距離をとった。

（また……、反射は設定されているはず。……何故？）

何度か咳き込んだ後、幾分か冷静さを取り戻した燕はゆっくりと一方通行へと視線を向ける。

彼女は知らない。

一方通行の能力を解析し、発現させた研究者のことを。

木原数多という、ベクトル操作を知り尽くした人間のことを。

「……どうして私の反射が効かないのかしら？」

「ンだア？ 教えてほしいのか？」

「別に。 ただ少しばかり厄介かなと思った…… だけよッ!!」

ゴバツ!!

と地面を蹴った燕はベクトル操作によって一方通行のごとく、音速の速さで突っ込んでいく。

振り上げられる両手。

ただの人間が触れれば死は避けられない『毒手』が、一方通行に迫る。

「私の反射が効かなくても、ベクトル操作は効くわよねえ!？」

突き出された両手が、一方通行の顔に降り下ろされ、そして、反射された。

「っ !？」

「バカかオマエ。 反射が効いてンのに届くわけねエだろオが」

「そんな!？ アンタの攻撃は通るのに私の攻撃は通らないって言うの!？ そんなスペック聞いてないわッ!!」

「スペックじゃねエンだよ模造品。 これが“経験値”の差ってやつだ」

悠然と一方通行は言う。

彼女の知らない対ベクトル操作の戦闘方法は、やはり効果があった。

攻撃の寸前で拳を引く、ただそれだけの行為が、燕の身体に確かにダメージを蓄積していく。

「とつとと終わらせて研究所に逆戻りさせてやるよ」

ピクン、

『研究所』という単語に燕が反応した。

「……研究所だって？」

ワナワナと震えだした肩を押さえ、燕は憤怒に満ちた眼で一方通行を睨み付ける。

「あそこへは戻らない……絶対に!!」

瞬間、燕の周囲から衝撃波が巻き起こり、辺り一帯の地面を捲り上げていく。

「戻らない……!!二度とあんなところには!!」

先程まででない、焦燥にも激怒にも似た感情。

「そのために……テメエを殺してワタシが第一位になるって決めたんだからよオ!!」

天海燕の口調が、変わった。

遊馬こと、ユーマ＝ロザリオンは暗闇に包まれた第七学区の街中を一人静かに歩いていた。

辺りに響くのはユーマの足音だけであり、先程までは時折聞こえていた自動車のエンジン音も今はもう聞こえなくなっていた。

（……おかしいな）

歩きながら携帯を取り出して、ユーマはふと思った。

（日次と燕からの定刻連絡がない。戦闘中か？……それとも）

まあどちらでも構わない、と思考を無理矢理終わらせてユーマは携帯をポケットにしまった。

彼にとって同じ『キャラバン』のメンバーが死のうが大した問題ではない。

重要なのは自分の目的が達成されることだ。

そのための『キャラバン』。

そのための超能力者（レベル5）の打倒。

ユーマにとって『キャラバン』などという枠組みがどうなるかと興味はない。

超能力者を打倒し、『ロザリオン』の名を知らしめること、それだけが彼の望みであり、また使命でもある。

雲の流が速い。

そのせいで月の光も陰り、地上にまで月明かりが届かず、学園都市を闇が覆う。

(……)

そんな闇の中から聞こえる、ヒールが地面を踏み鳴らす音。

カッソ、

足音は一つではない。

(……フッ)

暗闇から現れた人物を確認し、ユーマは内心で小さく笑った。

「俺はついてる。まさか一日で二人も鉢合わせるなんてな」

「あぁん？」

ユーマの発言に、現れた少女は訝しげに眉をひそめた。

「鉢合わせたんじゃないよ。こっちがテメエをわざわざ探し出したんだ」

そこに居たのは学園都市第四位の超能力者、麦野沈利をリーダーとする暗部組織、『アイテム』の面々と下部組織の一人、浜面仕上。

「結局アンタが『キャラバン』って組織のリーダーってわけよ」

金髪碧眼の少女、フレンドが両手に爆薬を構えながら言う。

「面倒な相手はさくつと超速攻で倒すにかぎります」

ベストタイプのパーカーを身に纏う見た目一二歳くらいの少女、絹旗最愛がフレンダの隣に立って言った。

「滝壺は浜面と下がってな。ここは私達がやる」

フレンダや絹旗よりも一步前に出た麦野が、振り向かずにつづ。麦野の視線は既に目の前の標的に向けられていた。

「デメエが『キャラバン』の頭だつてことはもう調べがついてる。何故超能力者（レベル5）を狩ってんのかは知らねえが、私の前に立った以上、生きて帰れると思うんじゃねえぞ」

パキパキッ、と麦野は指を鳴らして臨戦態勢へと移行する。

対して、ユーマの態度は変わらない。

「……ああ？ 何か勘違いしてんじゃねえか原子崩し（メルトダウン）」

吐き捨てるように告げる。

「お前程度の能力者と俺が同じ土俵に立つてるとでも思ってたのか？」

ブチッ、と麦野のこめかみで何かが切れたような音がした。

「……の、野郎……ッ！」

麦野が激昂したのは、なにも挑発されたからではない。

原因は、ユーマの瞳。

まるで虫けらでも見ているかのような瞳を目の当たりにし、彼女の苛立ちは頂点に達した。

「んだその相手にすらならねえって眼はあッ!!」

ゴバツ!!

と麦野が突き出した腕から曖昧なままの電子が発射された。

全力を出せば第三位の超電磁砲すらも瞬殺できてしまうほどの威力を有する一撃。

『原子崩し（メルトダウナー）』。

その膨大な熱量で周囲の地面を融解させながら突き進むメルトダウナーは、しかし、ユーマに届くことはなかった。

「!?!」

麦野が驚愕に目を見開く。

「この程度の能力で、俺と闘い合えらとでも思ってたのかよ。笑えねえ冗談だぜ」

「超加勢しますよ麦野!!」

呆氣にとられた麦野に代わり、オフエンスアーマー室素装甲を纏った絹旗が近くにあった街路樹を根本辺りからへし折り、カー杯に横薙ぎに振るう。

ビュオッ!!

と街路樹が風を切り裂く音が響き渡り、風圧で葉がヒラヒラと散っていく。

そんな中で、ユーマは片手でその街路樹を受け止めていた。

「なッ!？」

「ちゃっちい能力がなあ。燕のほうが万倍マシだぜ」

街路樹を受け止めたユーマは、横向きにそれを払い街路樹を持っていた絹旗ごと近くのおフィスビルの外壁に叩き付けた。

「カッ……!!」

衝撃によって肺から根こそぎ酸素が吐き出される。

ミシミシと肋骨がイヤな音をたて、徐々に身体に激痛を感じ出す。

(……窒素装甲を纏っているのに、超威力が……)

ガクンッ

と頭が垂れ、そこで絹旗は意識を手放した。

「絹旗っ!!」

動いたのはフレンダだ。

両手の爆薬を着火し素早くユーマへと投げつける。

「あん?こんなモンが効くわけねえだろうが」

宙を舞う爆弾を避け、そのままフレンダのもとへと駆け出す。

が、

「結局、裏の裏をかくつてのが重要な訳よ」

「!？」

カツ!!

と莫大な光量がユーマの足元から放たれる。

そこにあつたのは太い修正テープのような白い線。

いつの間にかフレンドはその線にツールを当てていた。

普段であればユーマがそれに気付かないわけがない。

しかし、今、この状況。

月明かりが雲によって隠れ、光源が無くなったこの状況で、注意を向けなければ見えないような地面の線になど誰も気に留めないだろう。

結果。

一般人が誰一人としていない深夜の第七学区に、不釣り合いな爆発が巻き起こった。

「ふっふーん。結局アンタは死ぬ運命にあつたってわ……」

フレンドの口から溢れる言葉が、不意に途切れた。

「……………うぁ……………ッ」

そして微かに聞こえる苦痛に満ちた呻き。

「フレンダッ！！」

麦野が叫ぶ。

粉塵が晴れた先に見たのは、フレンダの首を掴み、持ち上げている
ユーマの姿。

その身体に砂埃は付着していても、傷は一つもない。

「なかなか良い戦略だったぜ。だがな、俺にはそんな小細工は通用
しねえんだ」

首を掴む力を強めていく。

「ぐうッ……………」

フレンダから嗚咽にも似た声が漏れる。

「不様だよなあ。仮にも学園都市の暗部組織の一角を担う人間だろ
？ ちよつとは俺を楽しませてみるよ」

嘲りながら、ユーマは尚も力を強めていく。
ギシッ、とフレンダの骨が軋む。

「ッ……………」

フレンダは何も言わない。手足はブランと垂れ下がり、顔からは生
気が消えていた。

「……フン」

ユーマは興味無さげにフレンドを放り投げ、視線を麦野へと向けた。

「あとはテメエただで第四位。どうする？ 逃げ出すか？」

「……」

「なんだよ。怖くて喋れねえのか？」

ブチンッ

「あん？」

「……こんな気分は久しぶりだよ」

ゆっくりと、麦野は髪の毛を掻き上げる。

その動作にこれまでね優雅さはなく、ただ乱暴に、ただ乱雑に。

「本当に久しぶりだよ……！！ ここまで人をぶち殺したいと思ったのはよオオオおおおおおお！！」

麦野沈利の激昂によって、本来セーブされているメルトダウンナーのリミッターが外れつつあった。

Ep.53 闇夜の闘い（後書き）

次回

一方VS燕

麦野VSユーマ

決着！！

Ep.54 第二三学区の攻防

第二三学区で一方通行が天海燕と対峙し、第七学区で『アイテム』の面々がユーマⅡロザリオンと戦闘を繰り広げている頃、第二学区のアジトからテレポートした土御門と結標は、『グループ』のアジトの一つである第十学区のプレハブに居た。

プレハブ内は簡素な造りで、黒い革製のソファがコの字型に並べられ、その中央にテーブルが置かれているのみである。

そんなプレハブ内で、ひたすらにパソコンと睨み合うようにキーボードを叩いていた土御門が、その手を止めた。

「なんてこった……」

「どうかしたの？」

土御門とは反対に座っている結標が言う。

「『キャラバン』のリーダー、遊馬の本名はユーマⅡロザリオンだ」

「？ 日本人じゃないの？」

訝しげに結標が言う。パソコンの画面に表示された遊馬のデータ。以前どれだけ調べても得られなかったデータが画面上には表示されていた。

おそらくアレイスターが操作しているのだろうと適当な予測をつけた土御門が、ユーマについて話し出す。

「ユーマ＝ロザリオン。こいつはローマ正教の魔術師だ」

「!？」

「ロザリオンの一族は代々ローマ正教内で強い権力を持っていた。だが前方のヴェントの学園都市侵攻によって起きた波紋の皺寄せがロザリオン一族に押し寄せ、その権力は地に落ちた」

「没落貴族つてところかしらね」

「まさにそうだな。だがロザリオンの一族は厄介だ」

「厄介？」

「この一族は魔術師としても超一級品。おそらく単体でも学園都市に大打撃を与えられるだろう」

土御門は苦虫を噛んだような表情を浮かべて言った。

「おそらく奴の目的は学園都市の最高戦力である超能力者（レベル5）を倒すことでのローマ正教内の威厳の回復だろう。……手強いな」

「あら、随分と弱気じゃない」

「『ロザリオン』の一族が使った魔術つてのは少ばかり特殊だな」

「特殊？」

「ああ。それは」

「ブチコロシてやるよ……ッ!」

女性のものとは思えない程低い声で、麦野は言った。

「いいぜ。来いよ第四位、テメエで二人目だ」

言ってユーマが一步を踏み出そうとした瞬間、彼の頬を巨大な光線が掠めた。

粒機波形高速砲。

『原子崩し（メルトダウナー）』、本来では有り得ない電子を曖昧なままの状態で強引に操作する能力。

右手を突き出す格好の麦野は、それを一直線にユーマへと撃った。

「外れたんじゃない。外したんだ」

これまでとは明らかに違う麦野の雰囲気、ユーマは内心で少し驚いていた。

（第四位は激情家だった筈だが……心理変化でもあったのか？）

ユーマは眉をひそめる。今、目の前で対峙している麦野沈利という超能力者は、ブチ殺すなどという言葉とは裏腹にどこまでも冷静に見えた。

それは単に戦闘に関してはそうなのか、あるいは『アイテム』の面々が倒されたことで何かしらの変化が彼女自身に起きたのかどうかは定かではないが。

「随分と余裕じゃねえか第四位。わざと外しただあ？ テメエ最初で最後のチャンス逃したんだぜ」

「ああん？ 私の前に立った時点でお前の死は決定事項なんだよ」

ゴバツ！！

と麦野の周囲から無数のメルトダウンが一斉に掃射される。

対し、ユーマは動かない。

ただ一言、

「つまらないな」

呟いた瞬間。

メルトダウンが、消滅した。

「ッ……」

先程と同じ展開に麦野は唇を噛む。

自分の能力では目の前の敵を倒せない。
チカラ

そんな現実が麦野の精神をガリガリと削りとっていく。

「つまらねえよ第四位。第七位みたいに俺を楽しませてくれ」

凶悪な笑みを浮かべ、ユーマは麦野のもとへと一直線に歩いていく。

「チッ！」

麦野は再びメルトダウナーを放射、しかし、またしてもそれはユーマにダメージを与えることなく消えるように霧散していく。

「人間が最も恐れるのは理解不能の力だ」

コッ、コッと麦野への距離を縮めていくユーマ。

「俺の能力が理解出来ないだろう？そして、恐怖は伝播する」
チカラ

ちらつ、とユーマは麦野の背後に立っていた浜面と滝壺に視線を向けた。

「怖いんだろう？この俺が」

「っ……」

浜面は滝壺を抱く形でユーマと睨み合う。しかし、やはりその顔には恐怖が貼り付いていた。

それは滝壺も同様であるらしく、カタカタと小刻みに肩が震えている。

「滝壺……？」

浜面が心配そうに滝壺の顔を除き込む。

「いや……あの人の、近くにいたくない……」

消え入りそうなほど小さな声で滝壺が呟く。

「あの人は、AIM拡散力場を感じられない。感じるのは、ただひたすらに深い憤怒だけ」

「AIM拡散力場を感じられない……？」

滝壺の言葉に反応したのは麦野だった。

（AIM拡散力場を感じられない……？　だとしたらコイツは超能力者ではなく、あの魔術師って類いの人間か……？）

思考のための一瞬の隙。

それをユーマが見逃すはずがなかった。

「オイオイいいのか？　考え事なんかしてる暇はねえぞ」

麦野がそちらに意識を向けた時には、ユーマは既に行動を終えていた。

ただ、右手を縦に振るう。

たったそれだけの動作で、麦野の胸から腹にかけて、パツクリと刃物で切り裂かれたような傷口から鮮血が噴き出した。

「な……ッ!？」

着ていた秋物のコートがどす黒く変色していくのを目の当たりにして麦野が膝を折る。

「まだ意識あんのか。流石は学園都市が誇る最高戦力だ、そのタフさにだけは敬意を評してやるよ」

余裕の笑みを浮かべてユーマが嘲笑混じりに麦野に言う。

「だがまあ、それもここまでだ」

ゆつくりと、再び振りかざされる右手。

麦野は口から垂れる鉄臭い液体を手で拭いながらユーマを見上げる。

「てめえは……絶対に殺す」

「そんな瀕死状態で言われても何にも怖くねえよ第四位」

勢いよく振りおろされたユーマの右手は、生温かな液体を噴出させた。

「デメエを殺してワタシがオリジナルになるつつつてンだよオ!!」

天海燕の口調が変貌した。

『暗闇の五月計画』によって一方通行の演算パターンを入力されたことによる副作用のようなものか、感情が激しく高ぶると一方通行と同じような口調に変化する。

「ンだア？ 研究所送りがそんなにイヤかよ模造品」

しかし、激昂し口調の変わった燕を目の当たりにしても、一方通行は笑みを崩さない。

「オマエがそこまでしてキレる理由が解らねエなア。あの研究なんてやってるトコロに碌な場所なンざありやしねエ」

「オマエはあの実験を知らねエからそんな事が言えるンだよオリジナルがアアあああああッ!!」

怒りを撒き散らすように、燕は両腕を突き出し一方通行へと突き進んでいく。

「……ハッ、」

向かってくる燕に対し、ただただその顔に凶悪な笑みを刻みこむ一方通行は、首をゴキゴキと鳴らしながら言う。

「オマエ程度が身を置く“闇”なンざ大した事ねエンだよ」

瞬間。

「……ッ!?」

天海燕の視界が、上下左右反転した。

そして数瞬ののちに腹部を襲う鈍痛。

それが先程と同様拳を引くことで与えられたダメージだと燕が認知したときには、一方通行は燕の目の前にまで距離を縮めていた。

「一つ実験してみようじゃねエか」

「ッ!?」

「オマエの反射を俺が反射するとどオなるンだろオなア?」

いかにも楽しげに右腕を躊躇なく突き出す。反射が展開されている燕の身体に触れた途端、衝撃波が周囲に吹き荒れる。

「あア、無理矢理擦じ込ンじまうわけか」

「ちいッ!」

ガバッ!!

と燕は身体を反転させて一方通行から逃れる。

ゴロゴロと滑走路を転がり、やっとの思いで態勢を立て直してギロツと一方通行を憎悪の瞳で睨む。

「……余裕ブツこいてンじゃねエぞ一方通行アアあああッ!」

轟ッ!!

大気さえも拒絶するような爆音とともに、周囲から燕へと大気が吸収されるように集まっていく。

生成されるのは、以前一方通行が上条当麻と闘った時に使用したモノ。

プラズマ
高電離気体。

「殺す……殺してやるよ第一位。……テメエを殺して、ワタシがオリジナルに!!」

最早周囲の状況など意にも介さず、ただ能力を行使する。己が目的のために。

圧縮された大気はバチバチと音をたて、半球体のような姿で燕を包む。

「死ねッ! 一方通行!!」

高電離気体が一方通行を巻き込むべく膨張していく。

「そろそろ終わりにしてやるぜ模造品ッ!!」

ダンツと地面を勢いよく蹴った一方通行は自らプラズマの中心地へと向かっていく。

そして

一方通行と燕の間に、一つの影が割り込んできた。

「!？」

突如として現れた人間に一方通行は眉をひそめ、燕は我に帰ったかのようにプラズマを消失させた。

「誰だデメエ」

吐き捨てるように一方通行が言う。

「んーホントについてるな俺は」

現れた人間は、一方通行の問いかけなど無視して満足そうに言った。

「……ユーマ」

先程までの激昂から一転、怯えきったような燕が小さく呟いた。

現れた人間、ユーマは燕のほうへと身体を向け、

「燕、やっぱりお前じゃ荷が重かったか」

「違うのっ!! これはその……!!」

「御託はいらねえ」

「ッ……」

「薄々気づいてはいたんだ。お前じゃ第一位は倒せねえってな。やっぱ無理だったな」

カツカツと燕のほうに歩み寄り、そして。

「使えねえコマに、用はねえ」

天海燕の腹部に、風穴が開いた。

Ep. 54 第三学区の攻防（後書き）

次回

最終決戦開始！

Ep・55 悪党気取りのクソ野郎

「え……？」

突然の行為に思考がついていかない。

現状を受け入れることを本能が否定する。

数秒の時間差を要してやってきた言葉に出来ない程の激痛は、立つことはおろか呼吸することさえも許してはくれない。

ビシャッ

滑走路の一端で鉄臭い液体が地面を浸す。

天海燕は倒れてようやく、自らの腹部に空洞ができていることを理解した。

「どう……して……？」

霞む眼でユーマを見上げながら、燕は言った。

「使えねえコマに用はない。お前はここで用済みだ」

ゴミでも見ているかのような蔑んだ瞳で見下すユーマは、最早燕に対する興味など微塵も持ち合わせてはいなかった。

「やつぱ『暗闇の五月計画』の完成品と言っても所詮は模造品。オリジナルの一方通行に勝てるわけがねえよな」

「ッ……」

最早話すことなどできなくなった燕は、揺らぐ視界でキッとユーマを睨み付ける。

「オイオイそんな眼で見るなよ」

せせら笑うように。

「潰したくなっちまうだろうが」

グシャッ

少女の身体から、頭部が消えた。

辺りに散らばる肉塊が、それが以前頭部であったものだからうじて判別させる。

「……さて、これで邪魔者は消えた。殺り合おうじゃねえか一方通行」

血で汚れたブーツを地面に擦り付けながらユーマが言う。
彼にとっての興味は現在一方通行へと向けられている。

「……」

一方通行は何も言わず、ただユーマを見つめる。

しかし、

確かにその眼は怒りに満ちていた。

ユーマもそれを感じ取ったのか、一方通行へと口を開く。

「オイオイ何だあ？そんな眼しやがって。お前にとってはコイツなんて赤の他人、気に留める必要なんざねえだろうが」

「……」

「チツ……ム力つくんだよなあそんな眼で見られるとよあ」

ガシガシと頭を掻きながらユーマはため息を吐いた。

「何感情的になってんだよ悪党が。テメエは俺と同じ、いや。俺なんかとは比べ物にならねえくらいの悪党じゃねえか」

吐き捨てるように一方通行に向かって言葉を投げる。

「……悪党ねエ」

怒りを全身から顕にしていた一方通行から紡がれた言葉は、それに反して静かなものだった。

「悪党……。オマエは何も解っちゃいねエよ」

「ああ？」

怪訝そうに眉をひそめるユーマを尻目に、一方通行は続ける。

「オマエは悪党って言葉の意味を吐き違えてンだよ」

「なんだと？」

「……チツ、何で此処までイライラすんのか疑問に思ってたが、ようやく解った」

一拍おいて。

「似てンだよ。俺とオマエは」

「……何？」

「つつても昔の俺とだ。悪党気取って逃げの口実を作ってた俺とそっくりなんだよ」

一方通行の思考の海から拾い上げられたかつての記憶。

『絶対能力者計画（レベル6シフト）』

レディオノイズ
量産能力者を二万通りの戦闘環境で殺害することで、前人未踏のレベル6へと足を踏み入れようという、正気の沙汰とは思えない計画。

その計画に、自分はノってしまった。

『シスターズ
妹達』。

彼女たちは単価にして一八万円の実験動物。
倫理的な問題は発生しない。

そんな風に自分に言い聞かせながら、次々と実験をこなしていった。絶対能力者（レベル6）に到達すれば、無駄な争いはなくなる。そう自分に言い聞かせながら、内でざわめく罪悪感を消去し実験をこなしていった。

だが、

疑問と罪悪感だけが日に日に膨れ上がっていった。

自分は本当に正しいのだろうか。

絶対能力者になったとして、本当に無駄な争いなくなるのだろうか。

妹達は、殺しても構わない存在なのだろうか。

が、今更葛藤したところで実験は既に始められてしまっている。後戻りすることはできない。

……本当にそうだったのだろうか。

止めたければ、いくらでも申し出ることが出来たのではないだろうか。

自らの意を表明していれば、研究者たちを止めることが出来たのではないだろうか。

結局、自分で逃げ道を作っていただけだったのだ。

悪党を気取って、自分にはこの道しかないと決めつけていただけ。他にある無数の道を見ようとせず。

そんな折、とある無能力者の少年がこの実験を凍結させた。

忌々しいあの無能力者は、自分にはないモノを持っていた。今更『表』に引き返せるなどとは思っていない。

ならば、大事な守りたい人をこちらに堕ちないように支えよう。邪魔する者がいるならば容赦なく殺そう。守りたい人のためならば、己は悪魔にだって魂を売ろう。

そんな決意を内に秘めて、一方通行は正面に立つユーマに向き直った。

「オマエは逃げてるだけなんだよ。悪党気取りのクソ野郎が。とつと元の居場所に引き返しやがれッ!!」

轟ッ!!

一方通行が降り下ろした脚はコンクリートの地面に幾重にも亀裂を走らせ、衝撃波がユーマを襲う。

「悪党……気取りだぁ……?」

俯きながら呟くユーマの握られた拳は震えていた。

「……ツフザケてんじゃねえぞボケがアアあああああッ!」

ゴバツ!!

ユーマの叫びとともに地面に敷かれたコンクリートが勢いよく捲れ上がり衝撃波を防いだ。

尚も捲れ上がったコンクリートの勢いは留まらず、そのまま一方通行へと突き進む。

「くたばれ第一位!」

空中で無数に乱舞するコンクリートが一方通行に向かって降り注ぐ。

だが、一方通行にそんな物理的な攻撃は通用しない。

デフォルトで設定してある反射によってコンクリートの雨を難なく防いだ一方通行は、次なる一手を打つ

よりも速く、“ソイツ”は一方通行とユーマの間に割って入った。

「あア!」

「あん!」

訝しげに空から降ってきた“ソイツ”を睨み付ける一方通行とユーマ。

そんな二人に、“ソイツ”はこの空間にそぐわない陽気な声で言った。

「間に合ったかな？真打ち登場だよー」

一方通行は以前一度この人物と面識があった。日本との内戦の際、共に学園都市側として闘った人物。

ユーマもデータ上ではこの人物を知っていた。超能力者の中で、最も警戒しなくてはならない人物。

ユーマは忌々しそうに、現れた人物に告げた。

「出やがったな。……『媒体』」

「やつほうユーマ〓ロザリオン。君の野望をめちゃくちゃにしに来たよ」

颯爽と現れた学園都市第六位の超能力者は、ユーマ〓ロザリオンの眼前でにこやかに微笑んだ。

Ep・55 悪党気取りのクソ野郎（後書き）

いよいよ物語も佳境に突入しました。

水分支配はかなりスランプでなかなか更新できませんがこちらはかなりスラスラと更新できますf ^ ^ | ^ ^ ;

完結までもうしばらくお付き合いください。

Ep・56 虚数学区・五行機関〈ANGEL〉

突如として現れた学園都市第六位の超能力者（レベル5）、アレイスターのプランにおける重要人物であり『媒体』。

なるかみ ようじ
鳴神葉次。

最早滑走路の面影など消え失せた第二三学区の一角で、彼は静かに微笑んだ。

「君の野望をめちやくちやしに來たよ」

見た目美少女の少年から放たれる言葉に、ユーマは動じず告げる。

「『媒体』か……いずれはめえも消さないといけねえとは思ってたが、まさかこのタイミングで乱入してくるとはなあ」

「このタイミングで入って行かないと、君が僕に触れることなく一方通行に倒されると思ったからね」

「ああん？」

「いくらバッテリーの残量に限界があるからって、君が一方通行に勝てるっても？」

言われたユーマはわなわなと震え出す。

「……随分と面白え冗談を言ってくれるじゃねえかよ第六位。俺じや第一位には勝てねえってかあ？」

迸る怒気を間近で受ける鳴神はしかし、全く動じない。

「普通に考えてそうでしょう？片や学園都市最強の超能力者。片や一介の魔術師。結果は火を見るよりも明らかだと思っけどね」

ブチィッ

ユーマのこめかみから鈍い破裂音が聞こえたような気がした。

「……いいぜえ。なら『媒体』、てめえから消してやるよ……！！」

ダンッ、と勢いよく地面を蹴り鳴神へと向かうユーマだが、唐突にその進路は塞がれた。

その進路を塞いだ張本人、一方通行。

「勝手に二人で盛り上がってねエでよオ、俺も混ぜてくれってなァ！！」

無造作に振り下ろされた右足が地面を砕き、烈風とともにユーマを襲う。

「邪魔だ第一位イイイイイッ！！」

咆哮とともに一方通行が発生させた烈風が消滅、宙を舞っていた瓦礫はガラガラと地面に落下した。

「！？」

「下がってていいよ第一位」

驚愕する一方通行の横で一步前に出た鳴神が告げる。

「あア？そりゃこっちの台詞だ第六位。オマエはすっこんでな」

「君に出張ってもらつと僕に皺寄せがくるんだよねえ」

「何を訳の解らねエ事言つてやがる」

「まーまー。一方通行、君は少し黙つて見ててよ。まだ彼の能力チカラの正体も解つてないんでしよう？」

「……チツ」

鳴神に凶星を突かれた一方通行は忌々しそうに舌打ちし、電極のスイッチに手をかけた。そのまま近くに転がっていた杖をつき、前に立つ鳴神へと言う。

「用が済んだらすぐに退け。アイツの相手は俺だ」

「はいはい。彼の野望さえ打ち砕けば僕にはどうでもいいことだからね」

適当に相づちを打つて、数歩前に出る。

ユーマは相も変わらず、険しい表情を浮かべていた。

「君のことは調べさせてもらつたよ」

「……ああ？」

「ユーマ＝ロザリオン。ローマ正教の魔術師で上位の人間。ロザリ

オン家の復興の始まりとして魔術と対を為す科学の総本山学園都市の最高戦力を狙った」

「……それがどうしたってんだ」

「僕には一つ解らないことがあるんだ」

一拍おいて、鳴神が尋ねる。

「……君の“上”には誰が居る？」

核心を突く鳴神の言葉に、ユーマはしばし無言を貫くが、

「……さあな、少なくともテメエには関係のない話だ。気にかける必要なんざねえよ」

「ま、いいんだけどね。誰が絡んでいようが僕の役目は君の目的を果たせなくすることだから」

「ハッ、できるもんなら……やってみやがれッ！！」

ゴバッ！！

という轟音と共に、正体不明の衝撃波が鳴神に向けて放たれる。滑走路を囲んでいたフェンスは余波で大きく軋み、烈風が鳴神と一方通行の髪の毛を乱雑に薙ぐ。

「……ふうん」

迫りくる衝撃波を目の前にして、鳴神は小さく呟いた。

「これ（・・・）は、『最上居城』……？」
ヴェルハラ

オービット
軌道支配によって衝撃波の軌道を横に反らし、鳴神は言葉を吟味しながら言う。

「これは……アイツの北歐王座とは違うのかな。向こうのほうも仕組みは難解で複雑で理解不能だけど。その点で言えばこっちだってよっぽど理解不能な能力だよねえ……」
フリズスキャルヴ
チカラ

言って、鳴神は初めて構えをとった。

『キャラバン』のメンバーである三日月獄との戦闘時でさえ突っ立ったままで応戦していた超能力者が、初めて。

つまりは、そこまでしなくてはならない程の強大な能力を持つ人間が居ること。

鳴神は瞬時にそれを理解していた。

「ヘエ……まさか一発で俺の魔術が見抜かれるとは思ってなかったよ。流石は『媒体』、アレイスターが『幻想殺し（イマジンプレイカー）』や『第一候補』と同列に置く重要人物ってところか」
メインプラン

自らの魔術が看破されたにもかかわらず、ユーマは凶悪な笑みを浮かべたままだ。

「で？」

その根底にあるのは、絶対的な自信。

「俺の魔術の正体を知ったところで、テメエに何が出来る？」

負ける筈がないという、微塵も揺るがない絶対的な能力チカラに対する信
頼。

「テメエの『軌道支配』オービットじゃあ俺の『最上居城』ヴェルハラを止められねえ。
後ろの第一位だろおがそれは同じだ」

漆黒の夜空の下でユーマの言葉だけが周囲に木霊する。

鳴神は構えを崩さず、一方通行はその後ろで気だるそうに杖を片手
にそれを聞いていたが、

「……オイ第六位」

一方通行が、ゆっくりと口を開いた。

「暫くは黙って見ててやろうと思ってたが……も才限界だ。そこ退
きやがれ」

ゴキゴキと首を鳴らしながら鳴神の横に立つ。

「限界くるの早くない？」

「五月蠅エ。もともと待つなンざ俺の性に合わねエンだよ」

一方通行は首元にある電極のスイッチに再び手を伸ばし、ついてい
た杖を適当に放り投げた。

「じゃあ、共同戦線と行きますか」

「俺の邪魔だけはするンじゃねエぞ」

努めて明るく言う鳴神に投げ捨てるように一方通行は返す。

直後、学園都市第一位と第六位の超能力者（レベル5）が、音速を超える速さで一直線にユーマのもとへと突っ込んでいった。

『ヴェルハラ 最上居城』

この術式を一言で言い表すならば、『説明できない力』である。

その一切が表現不能で説明不能、理解不能な攻撃術式。

本来の北欧神話の伝承に登場する居城には存在しない攻撃機能を強引に利用することで術式をより一層『説明不能』なものへと進化させている。

攻撃の範囲や威力の定義すらも曖昧なまま放たれる『説明できない現象』という点においては、以前削板軍覇が闘ったオッレルスの北フリ欧王座と酷似している。

しかしただ一点。

北欧王座とは明らかに違う点が存在する。

それは『最上居城』という名からも解るようにこの術式の基盤が“城”であるということ。

城とは本来、防御に重きをおく要塞。

『説明不能』な攻撃に加え、その防御力さえも機能する『最上居城』は『北欧王座』よりも厄介な代物と言えるかもしれない。

そんな『理解不能』な能力を振るうユーマ^{チカラ}||ロザリオンの攻撃が、突き進む鳴神と一方通行を直撃した。

ミシミシ、という鈍い音が一方通行の肋骨の辺りから聞こえる。

「なッ !?」

反射が効いていない。それ自体は初めてではないため驚きは少なかったが、一方通行の意識はそこにではなく、ユーマの攻撃自体に向いていた。

(未元物質^{ダークマター}……!?! いや、それならまだ理屈は解る。だがこれは、この攻撃は……!?!)

理解不能。

そんな攻撃が、休むことなく一方通行を襲う。

「チッ!」

口から垂れる赤い液体をそのままに一端ユーマから飛び退くことで距離をとる。

「なんだなんだあ？第一位サマが退くとは何時から学園都市はこんな腑抜けに成り下がったんだあ？」

歪んだ笑みをその顔に刻みながらユーマが言い放つ。

「……僕の『軌道支配』でも制御しきれないなんてね……」

先程の攻撃を能力で避けようと試みた鳴神も理解不能の攻撃を演算しきれず、腹部にダメージを負っていた。

理解不能、説明不能なユーマの魔術を演算することなど不可能。いくら学園都市最高峰の頭脳を持っていたても、理解すらできない、言葉にすることもできないのではどうすることもできない。

今この状態。

圧倒的不利な状態からの逆転の一手を一方通行は模索する。

（奴の理解出来ねエ攻撃自体をどオにかしねエと話にならねエ。バツテリーは……能力使用モードは残り二分でトコか）

口内に溜まっていた血をそこらに吐き捨て、電極の状態を確認する。

「一方通行」

ふと、鳴神から告げられる言葉。

「ちょっと離れててね」

「あん？」

いきなり自分から離れるという鳴神に訝しげに眉をひそめるが、次の言葉を聞いた瞬間、一方通行の目は大きく見開かれた。

「虚数学区・五行機関。僕はその一部だから」

一方通行の脳内に浮かんできたのは、九月三日に学園都市に現れた天使のような物体。

「……そうか」

ポツリ、とユーマが呟く。

「それが『媒体』の本質だったのか!!」

眩い光が鳴神を包み込み、やがてその光は天にまで達した。

Ep.56 虚数学区・五行機関へANGEL（後書き）

こんばんわ。

作者の晃甫です。

なんだか色々と独自解釈の詰め込まれた今回でしたがユーマの魔術について少しばかりの解説を。

お分かりだとは思いますが参考にしたのはオッレルスフリズスキャルヴの北欧王座です。

これは北欧神話では主神オーディンが座る王座のことだということで、ならオーディンが住む城を出して見ようじゃないか。

ということでオーディンの住む最上の城ヴェルハラヴェルを元に『最上居城』という名前をつけさせてもらいました。

術式についてはほぼ北欧王座と同じですが文中でも触れたように城ということで攻防に優れた魔術という設定です。

厨二臭い設定なのはご勘弁くださいf ^ | ^ ;

Ep. 57 第六位 人間（前書き）

お待たせしました。

ちよつと詰め込みすぎた感がありますが f ^
| ^
;

Ep.57 第六位 人間

鳴神葉次なるかみ よつじの体から莫大な光量が発せられた。

それはさながら光の柱のように、天高く昇っていく。

「……………そおか」

ポツリ、とユーマが鳴神の姿を視認して呟く。

「それが『媒体』の本質ってやつかアあああッ!!」

一方通行は鳴神の姿に強烈な既視感を感じていた。

脳裏に過るのは九月三日の翼にも似た光。あの時は打ち止め（ラストオーダー）救出のため凝視していなかったため、同じであるかは判別がつかないが、この圧倒的な存在感は少なくとも『人間』が辿り着ける領域ではないと理解させるには充分だった。

九月三日、この日に上層部を調べて表示された作戦名。

その名はまさに、今この目の前のことを表しているのではないかと一方通行は考える。

《ANGEL》

尚も巨大な光の柱は天に昇る。

第二三学区から立ち上る光は、遠く離れた第七学区からも視認できるほど膨大なものだった。

「……動いたか」

学園都市統括理事長の本拠地、『窓のないビル』の内部で一人の人間が口にした。

男にも女にも子供にも老人にも聖人にも囚人にも、見方一つで何にでも見える学園都市のトップ。世界最高の科学者にして世界最悪の魔術師、アレイスター・クロウリーは逆さまで巨大な円筒の水槽に漂いながら空中に表示されたウィンドウに目をやった。

そこに映し出されているのは第二三学区の鳴神と一方通行、そしてユーマ＝ロザリオン。

「フツ……流石は『媒体』。ああも完璧に虚数学区を制御下におくとはな」

モニター越しに映る変貌した鳴神の姿を確認し、僅かに口元が弛む。

「ヒューズ」カザキリでもあそこまで完璧に掌握できまい。それでこそ『媒体』なのだな」

アレイスターは誰も居ない空間で、ポツリと呟いた。

「ドラゴン
第零候補」

幻想的。

現在の鳴神の姿を一言で言い表すのならばこの言葉が最も適切だろう。
いま

光の柱は徐々に細くなり、やがて夜空に溶けるようにして消えた光の中から現れたのは、全身を発光させた鳴神葉次。

ただ、先程までとは明らかに違うのは、その頭上と背中。

金色に輝く身の丈ほどの八枚の翼。

天使の輪を連想させる円上の物質。

この二つが、鳴神を人間という存在からかけ離れていた。

「……何だよその姿」

呆然としながらも、一方通行は言った。

「んー。これが僕の『媒体』って言われる所以ってやつかな」

体から淡い光を放ちながら、鳴神は言う。

「僕は虚数学区の鍵。アレイスターが計画を成就させるために必要な“機材”。僕を介して計画は進行していくんだよ、だからこそ『媒体』。『ヒューズ』カザキリ、『エイワス』と同列の人成らざるモノ、それが鳴神葉次の本質ってやつさ」

一方通行にはヒューズ「カザキリやエイワスなど聞き覚えのない単語など理解することが出来なかったが、一つだけ気にかかることがあった。

「じゃあオマエは……人間じゃねエってのか？」

先程までの鳴神の姿を見たことがあるのなら、当然の疑問。

どこからどう見ても人間にしか見えない先程までの鳴神とはかけ離れた現在の鳴神は静かに告げる。

「……そうだよ」

表情に変化は見られないが、その声色はどこか悲しげだった。

「僕はA I M拡散力場の集合体。人間じゃないんだよ」

鳴神の背中から現出していた八枚の翼が大きく開かれる。

「ユーマ〓ロザリオン。君の野望は……ここで砕くッ!!」

轟ッ!!

と羽を飛ばたかせて烈風を巻き起こす。

対して、『最上居城』^{グエルハラ}に最大の自信を持つユーマは一步も動かず、ただその口元を吊り上げていた。

「いいぜいいぜえ!! 流石は『媒体』だ、第四位や第七位なんかとは比べ物になんねえよ!!」

鳴神が放った攻撃に対して回避や防御といった行動は一切とらない。目にも止まらぬ速さでその烈風へと突撃し、右手を振るい烈風を薙いだ。

「こんなんで俺を止められるとも思ってたのかよオオオオオオオオオッ!!」

獣じみた咆哮をしながら、ユーマは鳴神へと突撃する

「テメエの相手は俺だろオが」

ことは叶わず、一方通行がユーマと激突した。轟音が周囲に響き渡り、大気を震わせる。

「ッ！邪魔だあ第一位！！今の俺はテメエに興味はねえんだよ！！」

「奇遇だなアクソ野郎！！俺も同感だア！！だからとつとと楽になれ！！」

脚力のベクトル操作によって音速の速さで突撃する一方通行を、
『ウェルハラ最上居城』を有するユーマが迎え撃つ。

訪れるのは、

周囲全てを消し去ってしまうかのような莫大な衝撃波。
音すらも置き去りにした二人は、正面から激突した。

「ん……」

小さな揺れを感じて、少女は目を覚ました。

「……は……？」

もやがかかって思考がはつきりしない頭を無理矢理に覚醒させ、
記憶を掘り起こす。

「……アイツ……！！」

雷使い（ライボルター）と名乗った少年を思い出し、少女、御坂美琴は奥歯を噛み締めた。

自分の最強の技さえもあっさりと破られ、耐性があつたはずの電撃によつて意識を奪われた。

「私……どうやってここに？」

疑問として残つたのは負けて意識を失つた自分が何故、常盤台中学女子寮の扉にもたれかかっていたのか。

「まさかアイツが……？ いや、有り得ないわね。なら誰が」

そこまで言つて、美琴の声は大きな揺れによつて遮られた。

「きゃあ！？」

慌てて近くにあつた扉に身体を預け、辛うじて倒れることを免れる。

「い、一体何が……！？」

美琴の炫きは虚空の夜空へと消えていく。

「ああ、？」

地震のような揺れを感じ、垣根帝督は空を見上げた。

「さっきの光の柱といい今の揺れといい、何だっただ？」

いや、解ってる。空を見上げたまま帝督は思案する。

おそらくはこれも『キャラバン』が関係しているのだろう。

日次の話では奴の上にまだ二人の構成員がいるようだったが、戦闘が始まったのだ。

「誰が闘ってやがる？」

学園都市第二位の自分でさえもかなり手こずった相手である。実力差がかなりある第三位以下では相手にならないだろう。

となれば、

「第一位か……？」

その可能性は高い。

第一位は最近暗部に堕ちてきた人間だが実力は確かだ。駆け出されていたとしても不思議ではない。

「……クハッ」

そう考えた帝督は小さく笑う。

「面白え。やっぱテメエは俺の計画に邪魔な人間みてえだ」

現在進行中の計画を思い、帝督は一方通行の排除を決意する。

「やつは第二候補スベアプランなんかじゃあダメだ。アレイスターの野郎を出し抜くためには奴の計画の要、第一候補メインプランにならなけりやあな」

邪悪な笑みを浮かべたままの垣根帝督は、水面下で静かに計画を進行していく。

E p . 5 8 彼らの決意と最後の闘い（前書き）

遅くなり申し訳ありません；

いよいよラストスパートです。

最後までお付き合いください（＾w＾）

Ep.58 彼らの決意と最後の闘い

学園都市第一位と魔術師の激突は巨大な衝撃波となって周囲に襲いかかった。

アスファルトの地面は無惨に抉れ、滑走路を囲んでいた鋼鉄のフェンスは原形を留めておらず、二人の激突が如何に強大なものだったかを知るには充分だった。

充満する粉塵の中、二匹の獣の咆哮が響き渡る。

「おおオオオおおおおおおお!!」

「邪魔だ第一位イイイイイイ!!」

一方通行の右腕がユーマの腹部に触れる。ただの人間であればあばら骨が粉々に砕けているであろう一撃を、しかしユーマは何事もなかったかのように反撃する。

「おらあ!!」

乱暴に振りかざされた右腕が、正体不明の衝撃波を生む。

「チッ!」

舌打ちしながらも一方通行は退かない。

正体不明の衝撃波へと自ら突っ込んでいき、ユーマへと詰め寄る。

「……………ああん?」

その様子を見て怪訝そうに眉をひそめるユーマ。

（いやいや可笑しいだろうが。『ヴェルハラ最上居城』は理解不能の攻撃術式だぞ、いくら奴が学園都市最高の頭脳を持っていたとしても理解できねえんじや演算処理して反射することなんざできねえだろうが）

ユーマが使用する攻撃術式『ヴェルハラ最上居城』は理解不能、正体不明の魔術だ。当然、一方通行であつてもそれは理解することなど出来ない。

だが、現に目の前の白髪の少年は爆発的な速度で衝撃波を突き破りながらこちらに接近してきている。

（一体どうやって……？）

そこまで思考して、ユーマはようやく気がついた。

この場にいる、

第三者の存在を。

「……そおか」

その口元が、邪に歪む。

「これもテメエの仕業か、第六位イイiiiiiiiiiii!」

轟!!

とユーマを中心に竜巻のような烈風が巻き起こる。

それはこちらに接近してきていた一方通行の勢いを止め、上空に浮遊する鳴神にまで及ぶ。

「テムエの『軌道支配』^{オービット}じゃあ俺の『最上居城』^{ヴェルハラ}は防ぎきれねえ！
！食らいやがれ！！」

襲いかかる烈風を目の前に、上空を浮遊する鳴神は小さく笑う。

「ムダだよ」

言って、背中から生えた金色の八枚の翼をはためかせ烈風を薙ぎ払った。

「なッ！？俺の魔術が、防がれた！？」

「この姿になった僕にはA I M拡散力場を乗っ取りでもしない限りもう物理攻撃は通用しない。詰みだ」

言って、鳴神は金色に輝く翼をはためかせて烈風を発生させる。
ユーマも対抗すべく『最上居城』^{ヴェルハラ}を使用して衝撃波を打ち出した。
が、

いとも簡単に、鳴神の烈風はユーマの『最上居城』を打ち破った。

「！！！」

驚愕に目を見開くユーマは初めて回避行動をとった。烈風を避けるべくゴロゴロと地面を転がる。

そこに、学園都市第一位の追撃が迫る。

「おらアアああああああッ！！」

最早目の前の獲物の喉笛を引き裂くことしか考えていない獰猛な獣のような咆哮とともに、脚力のベクトルを操作してユーマの懐へと

潜り込む。

「……ハッ！ 忘れたのかよ第一位！！ テメエじゃ俺の攻撃を防ぎきれねえってことをよお！！」

目前にまで迫る一方通行の顔を睨み付けながら、ユーマは右腕を乱雑に横に振るう。

だが、そこから正体不明の衝撃波が生み出されることはなかった。

「！？」

自らの異変を知覚したときには、既に一方通行の毒手がユーマの腹部に触れていた。

「くだばりやがれ、このクソ野郎がアアアあああああ！！」

ベキゴキッ！！

骨が軋み、そして粉々に砕ける不快な音。

そして数瞬の後。

「……アアアあああああああ！！」

耳をつんざく程の絶叫が、第二三学区に響き渡る。

パタパタッ

と地面に赤い斑点が描かれ、腹部を押さえながらユーマは片膝をつ

く。

「……ッはぁ！……ハア、ガハッ……」

これまで感じたことのない痛みで顔が苦痛に歪む。

戦況は一変し、一方通行と鳴神がユーマを追い詰める。

「これがテメエの限界だ」

「ハア……ガフッ。……ハ、たかが一発入れたくらいで……もう勝利宣言たあ余裕じゃねえかよ第一位……」

「この状況見て解ンねエのかボケが。テメエはもう負けたんだよ」

荒い息を吐きながら尚も食い下がるうとするユーマに対し、一切の感情を捨て去った声で一方通行が言い切った。

「それじゃあ、そろそろこの闘いにも終止符を打たせてもらおうか」
今まで空中を浮遊していな鳴神が、その金色の八枚の翼をはためかせながら地上へと降りてくる。

「……俺が、負けただと……」

地面に這いつくばるユーマの眼が、その色を変え始める。

「オイドオすんだよコイツ。殺すのか」

「いや、殺しはしないよ。このまま統括理事会の眼前に叩き付けていろいろと吐いてもらうから」

鳴神はユーマの目的を知っている。

それを統括理事会、さらにはその上が利用して超能力者（レベル5）たちを狙わせた。

その理由を問い詰めなくてはならない。

まあ、はぐらかされることは目に見えているが。

「……それでも、僕らみたいな『暗部』だけでなく第三位みたいな表の人間を狙ったってことの意味を知ってもらわないとね」

自嘲気味に笑う鳴神。その手は、きつく握りしめられていた。

（……チッ）

そんな鳴神を横目に、一方通行は内心で舌打ちする。

結局はこの《化物》も、表にすぎろつとしているのではないか。

かつて己がチャチな自尊^{プライド}心のように、もう戻れない、深く暗い闇の底にまで堕ちてきてしまっているというのに。

「……それはないよ」

そんな一方通行の思考を遮るように鳴神はハッキリと言い切った。その言葉に一方通行の紅い瞳が見開かれる。

「僕がどう足掻いたところでもう『向こう』の世界には戻れない。だったら……こんな不条理な世界でクソツタレな上層部と相討つことだけを考えるさ。……君と同じでね」

「……そオカよ」

それ以上、鳴神に対して言葉を紡ぐことが出来なかった。
理解してしまったからだ。この少年が、自分と余りにも酷似しているということに。

であるからこそ。

閉じかけていたその口を、一方通行は今一度開く。

「……確かに俺とオマエの考えつてのには通ずる部分があるのかも
しれねエ」

ただ真っ直ぐに。

鳴神を見据えて。

「だがな、決して俺とオマエは同じじゃねエ」

決して本人の前では言えないであろう言葉だったが、何故だか今は
すんなりと口に出すことが出来た。

「俺は、上層部のクソツタレと相討ちなンざ死ンでも御免だ」

脳裏に過るのは第三位によく似た少女。
悪にまみれた自分を屈託のない笑顔で迎えてくれる、数少ない彼が
守りたい者。

「もう俺は、あのガキをこっちの世界に引き摺り込んだりしねエッ」

一方通行が言葉に出した決意と、地面に這いつくばっていたユーマから突如として莫大な熱量が放出されたのはほぼ同時だった。

Ep. 59 君臨する本物の闇（前書き）

いよいよクライマックスです!!

Ep.59 君臨する本物の闇

一方通行の、なるかみ よつじ鳴神葉次の視界を、莫大な光量が遮断する。

ユーマ自身から放たれる光とそれに伴う膨大な熱量は、深夜の第二学区を別世界かのように思わせる。

ユーマの体から発せられていた光は、やがて熱とともに一方通行と鳴神に襲いかかる。

（熱い……！？ 俺の反射が効いてねエのか！？）

一方通行自身が有害、と判断したものは全てを反射する絶対の膜。それが全くと言っていいほど機能していない。

余りの高温に後ろに飛び退いて距離を取る一方通行とは対称的に、上空を浮遊している鳴神はその場から動こうとはしない。

（これは……！？ 僕のAIM拡散力場が乱されかけてる。魔術……？ でもこの姿は……！）

眼前に立つユーマだった筈の人物を見て、鳴神は最悪の結論を叩きだそうとしていた。

全身から迸る人間では到底耐えうることなど不可能である熱量。それに比例するかのように禍々しい光が明滅している。

ある種、ステイルの使う『魔女狩りの王』^{イノケンティウス}のような姿と似通っているかもしれない。

だが、イノケンティウスなどとは比較にもならないほどの邪な殺気が一方通行と鳴神に向けて放たれており、それは最早『異形』として形容できなくなっていた。

「オイオイどオなってやがる。コイツはこんな隠し玉を持ってやがったのかよ」

肌に刺すような痛みをジリジリと感じながら一方通行が言う。

「どうやら、僕らはとんでもない禁断^{パンドラ}の箱を開けちゃったらしいよ」

「あア？」

「『最上居城』^{ヴェルハラ}。これは“コイツ”を封印するための要塞みたいなものだったんだ」

「封印だア？一体何を封印してたつつうんだ」

「コレだよ」

鳴神は言って地上で莫大な光と熱を吐き散らすユーマだったモノに視線を移す。

「……フェニックス」

鳴神が発した言葉と同時に、これまでにない衝撃波が巻き起こり、その膨大な熱量が瞬く間に収縮していく。それに比例するかのように視界を覆っていた光も小さくなり、やがてそれは一つの形を創り出した。

「……ンだアレは」

学園都市最高の頭脳を持つ一方通行でさえ、現象の説明がつかない。突然ユーマから莫大な光と熱が放出され、暫くするとそれが掃除機に吸収されるようにあっという間に収縮し、そこに居たのはユーマなどではなく、真紅に燃える身の丈ほどの鳥だった。

「フェニックス。……こんな怪物を『ヴェルハラ最上居城』は封印していたなんてね」

額を伝う汗にも構わず、現れた怪物から視線を外すことなく鳴神が言う。

「フェニックスだア？そんな想像上のモノが現れたってのかよ」

「想像上ではないさ。北欧神話には伝承として二匹のフェニックスが記されているよ」

「二匹？」

「聖鳥としてのフェニックスと悪魔としてのフェニックスさ。そして最悪なことに……今僕らの目の前にいるのは悪魔のほうだ」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて言う鳴神に対して、一方通行は疑問を口にする。

「アイツ（ユーマ）はどうなったんだ」

「……恐らくはあのフェニックスに自我を取り込まれてるね。ロザリオンの一族は代々コレを封印してきた一族だったんだ、道理で魔力の総量が桁違いなはずだよ」

「アイツを殺すにはどうしたらいい」

「難しいね。知っていると思うけどフェニックスっていうのは『生』と『死』の象徴だ。つまり、不死身ってことなんだよ」

「チツ……面倒くせエな」

「倒そうと思うと、相当苦勞するね」

「デメエ何とかできねエのかよ」

上空を浮遊する金色に輝いている鳴神に向かって苛立たしげに一方通行が問い掛けるが、

「僕とアレでは勝手が違うんだよ。僕は科学でアレは魔術。使用する回路が違うんだ」

「使えねエな」

「君だって似たようなモンだろう?」

そんな会話を続ける二人に、化物となったユーマが待つ筈がない。業火に燃える翼を大きくはためかせ、咆哮が轟く。

『

!!』

大気全体を震わせるフェニックスの咆哮は、到底人間の言葉で表現できるものではなかった。

さらに、

「ッ!?!」

反射によつて音を遮断していた一方通行の鼓膜に鋭い痛みが走る。数秒の後、ドロリ、と耳内から垂れてきた赤い粘ついた液体が地面を濡らした。

「ガッ……!?!」

左手で耳を抑えながら、根源である燃え盛るフェニックスをギロリと睨み付ける。

「一方通行!!」

上空に静止していた鳴神が地上へと降り立つ。

「……来るンじゃねエ」

そんな鳴神を言葉で押し留め、一方通行は右足を振り上げ、そして勢いよく振り下ろした。

ベクトル操作された一撃によって幾重にも生じた亀裂とともに衝撃波がフェニックスに襲いかかる。

だが。

『！！』

再び放たれた人外の咆哮によって、いとも簡単に一方通行の攻撃は掻き消されてしまった。

「クソツタレが……………！」

舌打ちとともに毒づく一方通行を、フェニックスは捉えた。
直後。

「！？」

フェニックスの広げられた真紅の翼が、鞭のように一方通行を横薙ぎに吹き飛ばした。

「ゴ……………ガアツ……………！？」

反射を展開しているはずの一方通行を襲う激しい痛み。

燃え盛る翼は、容赦なくその皮膚を焼いていく。それは今までに感じたことのない痛みだった。

（炎が……………消えねエ！？）

翼から燃え移ったのか衣服に付着した火の粉が消えない。どころか、逆にその勢いを増そうとしている。

「駄目だ一方通行！！すぐに服を脱げ！！フェニックスの炎は消えない。全てのモノを焼き付くすまでは決して消えることがないんだ！！」

鳴神の叫びが一方通行の無事な右耳に届いたころには、既に全身を炎が包んでいた。

業火に包まれた一方通行を、更にフェニックスは攻撃する。

広がる翼が、華奢な少年を容赦なく薙ぐ。かろうじて保っていた意識が飛びそうになりながらも、一方通行は必死に逆転の一手を模索していた。

そんな少年に、止めと言わんばかりの一撃が直撃した。

「ゴ……フツ……！！？」

内臓が焼け爛れているかのような激痛。いくら学園都市最強の超能力者であろうが、肉体的には平均以下の痩せた少年がそれに耐えることなど出来る筈もなく、怒りに満ちた真っ赤な瞳はやがて閉じられ意識の糸がブツツリと切れた。

「一方通行！！」

それを間近で見ていた鳴神が急いで駆け寄ろうとした。

その時。

ゴアッ！！

と一方通行の全身を包んでいた業火が、何かによって一瞬で消し飛

んだ。

「!？」

驚愕に目を開く鳴神。だがさらに、彼は驚愕することになる。

傷だらけな筈の少年が、フラリと立ち上がったのだ。意識が覚醒したわけではないのか、腕はダランと垂れ下がり、表情は俯いているために伺い知ることはできない。

「一方………通行……？」

鳴神は一方通行のこの状態に思い当たる節があった。

九月三日

そして。

一方通行の背中から、悪意と憎悪を象徴するような真つ黒な翼が噴き出すように現れた。

墨よりも更に黒く、鳴神の光をも呑み込んでしまいそうな、正体不明の噴射の羽。

息を飲む鳴神を余所に、ソレは言葉を紡いだ。

「i h b f 殺w q」

化物と化物の闘いが始まる

。

Ep.60 Near The Future (前書き)

『とある暗部と学園都市』。
これにて完結でございます。

Ep. 60 Near The Future

第二三学区の飛行場は、原形など留めているはずがなかった。

化物と化物の激突。

真紅と漆黒の激突。

鳴神は、ただその被害を被らないように上空で傍観することしかできなかった。

（アレが……アレイスターの行っていた一方通行の『第一候補』メインプランたる所以……。確かに、アレならアレイスターの計画に密接に関係してるね、あの翼……科学がバカらしくなってくるよ）

地上で繰り広げられている戦闘を見つめながら、あの真つ黒な翼について思案する。

（あれは超能力なんて生易しいものじゃない……あれは、きっと向こうの……）

そこで鳴神の思考はフェニックスの耳をつんざくような咆哮によって遮られた。半ば反射的に視線をずらすと、そこにはブチブチと強引にフェニックスの翼をもぎ取る一方通行の姿があった。

『

！！』

声にならない咆哮が周囲に響き渡る。常人であれば完全に精神が崩壊してしまうような咆哮を直に聞きながらも、一方通行は行動を止めない。

憎悪と悪意に塗り潰された漆黒の翼が、容赦なくフェニックスの体を突き刺す。

フェニックスは逃げようにもガツチリと細い腕で掴まれており身をよじることしかできない。

「b f w p引v裂g j z」

呻くようにそう言つと、掴んでいたフェニックスの翼をもぎ取つた。だが、不死身であるフェニックスはもぎ取られた部分から直ぐ様炎が噴出し翼が生み出される。これではいたちごっこでしかない。如何なる物理的攻撃を受けようが再生してしまう化物を相手に、自我を失つた化物がとつた行動、それは。

「i h b f殺w q」

ドオッ！！

と夜空よりも黒い漆黒の翼が爆発的に噴射する。

掌から吹き出した説明不能の不可視の力が、激しく燃え盛るフェニックスへ襲いかかった。

再生を繰り返すフェニックスを襲つた一撃は、再生させる肉体をこの世界に残すことを許さない。瞬く間にフェニックスは呑み込まれ、再生することなど不可能なようこの世から消滅させられていく。粒子単位でも残っていれば再生が可能なフェニックスだが、それさえ

も残らない。

やがて訪れる完全なる消滅。断末魔ともとれるフェニックスの咆哮を最期に、ただの荒地と化した第二三学区の飛行場に静寂が訪れた。そこに立っていたのは通常の姿に戻った鳴神葉次。その視線の先に居たのは、先程までの化物と化していた姿とは違い、糸がプツリと切れたように微塵も動かず地面に倒れる白髪の少年の姿だった。

「フム」

学園都市統括理事長の本拠地である『窓のないビル』。窓も入口も存在しない、如何なる衝撃にも揺るがない要塞のような建物の内部に設置された円筒状の容物の中に逆さまで漂う人間。アレイスターⅡクロウリーは何もない空中にポツンと一つだけ表示されたウィンドウを眺めて興味深そうに呟いた。

「やはり『第一候補^{メインプラン}』は成長の余地がある。成長の余地のない『第^下零候補^{ラコン}』とは違ってな、いい機会か。これを機に『第^下零候補^{ラコン}』を破棄、ヒューズⅡカザキリとエイワスのみに移行する」

言葉と同時、ウィンドウに表示されていた鳴神の欄がバツサリと消去される。

さらに別のウィンドウが前触れもなく現れ、それを見たアレイスタ

ーは口元をつつすらと吊り上げる。

「……ほう。神の右席の一人。後方のアックアか」

それはある種脅迫文のようでもあり、招待状のようでもあった。適当に目を通してそのウィンドウを閉じると、新たにウィンドウを開く。

「さあ、神の右席の襲撃をどう切り抜ける？ 『幻想殺し（イマジンブレイカー）』」

ウィンドウには黒髪のツンツン頭の少年が表示されていた。

「よお。お前が新しいメンバーってことでいいんだよね？」

第三学区にある『スクール』のアジトの一つである高級ホテルの一室で、垣根帝督は皮ばりのソファに腰掛けながら目の前に立つ男に向かって言った。

「そうだ」

垣根の前に立つ男は抑揚のない声で続ける。

「任務というのは？」

男、砂皿緻密は問い掛ける。それに対して垣根は言葉ではなくクリップで留められた二、三枚の書類を放るよつに渡すことで問いに答えた。

「お前、磁力狙撃砲を使うんだってな」

砂皿の足元に置かれたスーツケースに視線を落としながら垣根が言う。

「任務つてのは簡単だ。明後日第七学区のコンサートホール前広場で統括理事会の一人、親船最中が講演を行う。コイツを狙撃しろ」

「何故また統括理事会を狙撃する？」

砂皿の質問に小さく舌打ちした後、垣根は嘆息しながら言う。

「んなことはどうでもいいだろ。狙撃手スナイパーつてのは理由がねえと銃を持てねえのかよ」

「……承知した。万が一失敗した場合は？」

キツチリしている性格なのか依頼の内容を把握するために細々と質問を繰り返す砂皿だが、返ってきた答えに思わず聞き返そうとしてしまった。

「ああ。いんだよ失敗したら失敗したで。大切なのはこの行為自体だからな」

垣根帝督の邪悪な笑みに、砂皿は背筋が凍ったような気がした。

「……っ、一体何だったんだあのガキは」

教師用のマンションで『ブロック』の一人、佐久は痛む頭を擦りながら体を起こした。

「あの子も、きつと被害者、だ」

先に目を覚ましていたらしい手塩が壁に背中を預けて言う。
山手はまだ気絶しているらしく冷たい床に這いつくばっていた。

「まあアクシデントはあったが計画に変更はねえ。明後日、外部と共にアレイスターの野郎を出し抜く」

「もとより、そのつもりだ」

「外壁の辺りにスタンバイしてくれりゃあいいよな。外壁の上を警備してる厄介な警備ロボットの交代の際にできる僅かな穴は発見できたし、あとは上手くやるだけだ」

「そう、ね。あとは、案内人だけ」

「だな。聞くところによると結標淡希は『グループ』に所属しているらしい。最悪実力行使にでるしかないだろうな」

「子供を、傷つけるな、よ」

「わかってる。あくまでも実力行使は最終手段だ。話し合いで穏便に済むってんならそれがいいに決まってる」

真夜中のマンションの一室で静かに、だが確実にその時は近づいている。

「……………」

目が覚めると、そこには見慣れた天井があつた。第七学区のあのカエル顔の医者がある病院。その一室で一方通行は目を覚ました。

「……………」

身体をベッドからむくりと起きあがらせると小さな痛みが頭を襲う。それを振り払うかのように何度か頭を左右に振ると、一方通行は自分に向けられている視線に気がついた。

「チツ……。何の用だ」

一方通行の視線の先、病室の入口の扉を開いて立っていたのは白衣を着た初老の男、カエル顔の医者だ。

「何の用だ、とはまた随分な言い草だね？ボロボロな状態で運ばれてきた君を治療したのはボクなんだよ？」

「別に頼ンじやいねエ」

「君が死んだら悲しむ子がいるだろう？僕は患者が望むものはなんであろうと用意してみせるんだ」

ペースを掴ませないカエル顔の医者との会話は一方通行を苛立たせるには充分だったが、今はそんなことよりも気になることがあった。

「……俺は、どうなった？」

第二三学区。あの場所で鳴神と『キャラバン』のリーダー、ユーマⅡロザリオンと闘っていた。そしてフェニックスだのなんだの変貌したユーマに手も足も出なかった。

確かにここまでは覚えている。

しかし、そこから先の記憶が完全に欠落してしまっている。モヤがかかっているようにハッキリしないなどではない。本当に全く記憶にないのだ。断片すらも掴むことができない。

（そついや、前にも似たようなことがあったな……）

あれは確か九月三〇日。木原と雑居ビル内で闘っていたときだ。バッテリーの充電が切れた瞬間までは記憶がある。切れてからも、何を聞いていたのかは覚えていないが臍気で微かに記憶に残っている。だが、どこかからか記憶が完全に無くなっているのだ。

「それはきつと脳に負担がかかりすぎたからなんだね？」

そんな一方通行の思考をまるで読んだかのように、カエル顔の医者
は言った。

「君に何があつたかは知らないが、相当な負担が脳にかかっていた
形跡があつたよ。それこそ常人であれば発狂してしまうほどのね」

「……記憶にねエな」

「それは脳が危険だと判断してのことかもしれない。とにかく、こ
れ以上の無理は禁物なんだね？」

「……チツ」

抵抗することもなんだか馬鹿らしくなってきた一方通行は、そのま
ま後方に向かつて倒れ込む。ボフンツという音とともに一方通行は
ベッドに横になり、カエル顔の医者に背を向ける。

それ以上はカエル顔の医者も何も言わず、静かに病室を後にした。

病室に沈黙が訪れる。この部屋に設置されている六台のベッドだけ
が存在感を示し、白を基調とした病室には少年が一人

……だけだと思っていたのだが。

「奇遇ですね。一方通行」

突如として耳に入ってきた声に、一方通行は隣のベッドと仕切りになっていたカーテンをシャツ、と開く。

「……ここで何してやる」

「何って、ここは病院ですよ。入院に決まっているじゃないですか」

ベッドに居たのは、温和な笑みを浮かべた海原光貴だった。

「死んだと思ってたぜ」

「おや心配してくれていたのですか」

「違エよ。補充するのが面倒なだけだ」

ニコニコしながら話す海原はいつものスーツとは違い簡素な手術衣を身に纏っており、ちらつと見える腹部には包帯がビッシリと巻かれていた。

それを見る一方通行の視線に気がついたのか、海原は頭を掻きながら苦笑いして、

「いやあ、少しばかり油断していました」

「馬鹿が。んなことだと野垂れ死ぬぞ」

「そうですね、気をつけます」

二人しか居ない病室での会話。なんとも言えない独特の空気を醸し

出しているこの空間に充てられたのか、ポツリと海原が口を開く。

「一方通行」

「あん？」

「貴方は今、幸せですか？」

「……何が言いてエンだ」

海原の問いに怪訝そうに眉をひそめながら一方通行が海原のほうへと頭を回す。

海原は一方通行と視線は合わせず、ただ前の一点のみを見つめて言う。

「守る者が出来て、守るべき世界が見えて、貴方はその幸せに気づいていますか」

「……」

「自分は幸せですよ。フラれてはしまいましたが、彼は約束してくれました。彼女とその周囲を守ってみせると。ならば自分もそれに遠巻きながら荷担します。彼女が笑顔で過ごせるように、害なす者はこの『闇』から潰します」

それは一方通行に言っているというよりは、自分自身に言い聞かせる決意のようなものだった。その瞳には強固な意思が見え隠れし、海原の決意の強さが垣間見えたような気がした。

「……ハッ」

それを踏まえた上で、一方通行は言を紡ぐ。

「守る者だ、守るべき世界だ関係ねエ。俺は俺がやるべきことをやるだけだ。たとえそれがどんなクソツタレな仕事だろオが、あのガキが『こつち』に引き摺り込まれねエよオにな」

思考を過るのは、空色のキャミソールに男物のグレーのワイシャツを着た第三位によく似た少女。異様な存在感を放つ頭部のアホ毛をピコピコと揺らしながら自分の横をトコトコついてきた少女は、明後日にはこの病院から退院するそうだ。

会に行こう。

などとは全く思わなかった。いや、思えなかった。

学園都市の暗部に身を置く自分が、何も知らない『表』の世界を生きる少女に干渉してはいけないような気がしたからだ。

出来ることなら、こんなクソツタレな世界とは完全に縁を切ってしまいたい。

出来ることなら、あの口やかましい女教師と世話焼きの研究員の住むあのマンションでガキと一緒に暮らしてみたい。

だが、そんなことは不可能だ。

自分とあいつらとは、生きている世界が違うのだから。

「……行」

ならばせめて、あいつらがこちらの世界に踏み込んでしまわぬよう、『闇』を駆逐しよう。

「…方…行」

あいつらを守るためなら、俺はどんな汚れ仕事だろうがこなしてみせる。

「一方通行！」

ここまで思考して、一方通行はようやく自身が呼びかけられているということに気がついた。どうやら相当深く思考していたらしく、目の前に立つ金髪にサングラスという存在感バリバリの少年に全く気がつかなかった。

「よう一方通行。元氣そうだなによりだ」

軽い調子で言う土御門元春に対して、特に表情を変えることもなく一方通行は言う。

「用件を話せ」

話が早くて助かる、とでもいうような満足げな笑みを浮かべて土御門は言った。

「ご指名だ。ちょっとフランスまで行ってもらっぜ」

「で、結局麦野はどうしてこのファミレスの前で寝てたわけ？」

「私が知るわけないでしょうが」

ムスツとした表情を浮かべた少女、麦野沈利は机上に置かれたシャケ弁のシャケの切身に割り箸を突き立てながら不機嫌そうに言った。

「あの超強かった男はどうなったんでしょっか？」

「さあね。でもまあ私らが今こうして生きてるってことは、どっかの誰かがアイツを処分したんでしょっよ」

向かいに座る絹旗の質問を適当な調子で返す麦野。だが、内心はあの男のことを考えていた。

（アイツ、私のメルトダウンーも通用しなかった……第一位や第二位でない限りあんなことはできない……）

あの男に敗北し、目が覚めたら『アイテム』の面々はこのファミレスの裏口の壁に綺麗に並べて放置されていた。あの男がこんなことをするとはとてもではないが考えにくい。となれば考えられるのは第三者の存在だが、

（もしも警備員だ^{アンチスキル}としたらあんなとこに寝かせてはおかずに詰所まで連れていかれてるはず……。てことは私達が暗部に身を置いていることを知っている人間の仕業か………？）

どこまで考えようと全く答えが見当たらない問いに苛々がつる麦野はその綺麗な茶髪をガシガシと掻いて考えるのをやめた。気を取り直すべく、ポケットから携帯を取り出してメールボックスにあるメールを開く。

「でさ、今日の任務の話なんだけど

」

『アイテム』がそんな会話をしている頃、彼女たちをファミレス裏口に移動させた張本人、学園都市第六位の超能力者（レベル5）、鳴神葉次は第七学区のとある路地裏でとある『存在』と対峙していた。

「そこまで驚愕してはいないようだな」

「まあね。一方通行のあの翼を目にしたときから解ってはいたさ。
僕はもう廃棄^{やくたす}なんだってね」

そこに在るのは、黄金の髪を靡かせながら宙に浮く、人形^{ひとがた}の存在。

「僕を消しに来たんだよね？ エイウス」

エイウス。

『ドラゴン』というコードネームによって分類され、これまで鳴神
が同じ立場として居た存在。

「私もこのようなことはしたくないのだがな」

「……僕が黙って殺されるとでも思っているのか？」

「ふむ。まあ……そうだな」

刹那。

ドバツ！！

と正体不明の衝撃が鳴神の上半身を斜めに貫いた。軌道^{オービット}支配を発動
させる時間すらも与えられない。

それはまるで重たい斧や刀で一刀両断されたような感覚。
そう頭で知覚したところには、鳴神の身体は路地裏の壁に容赦なく叩
き付けられ、そのままベシヤリと暗い地面に倒れこんだ。直後に冷

たいコンクリートの地面には信じられない量の鮮血が溢れる。それは傷口からだけではなく口や鼻、果てには両の眼からさえも溢れた。

「が……………っは、アアアあああああッ!？」

AIM拡散力場の集合体である鳴神でさえ、何が起きたのか分からなかった。エイワスの攻撃は、分析することもできない。

「ほう。流石は人外の『ドラゴン』。一時的ではあるが私と同じ位にまできただけのことはある。この程度では死なぬか」

対して、エイワスのはんびりした調子で言った。

そして鳴神は見た。

血に溢れて視界が赤く染まりながらも、確かにその目に捉えた。

淡く光を放つ金色の長い髪を掻き分けるように、その背中から翼が生えていた。

もはや視界を完全に遮断してしまいそうなほどに輝き過ぎる輝きを放つ翼。

ゴールドと表現することはできない、青ざめた輝きのプラチナ。言葉としては矛盾が生じるかもしれないが、鳴神にはこうとしか表現することができなかった。

「く……………ああアアアあああああッ!！」

瀕死の重傷を負っている身体を無理矢理叩き起こし、鳴神の身体が黄金の輝きを放つ。エイワスとはまた違った輝きを放つ翼が鳴神の背中から生み出された。

「おオオおおおおおアアアアあああああッ!！」

「……プロト＝ナルカミか」

地面を蹴って真っ赤に染まった身体を輝かせながら向かってくる鳴神に、エイワスは小さく首を横に振った。

「その程度か。残念だが、その程度ではホルスを生きる私にはh o s e f 敵q i e r d ない」

轟音が炸裂した。

それは黄金と青ざめたプラチナという、二種類の翼が正面から激突した衝撃波だった。

ゴアッ！！

と鳴神とエイワスを中心にして爆風が巻き起こる。だが、闘いは互角などではなかった。

真っ赤な鮮血だけが飛び散り、爆風によって宙を舞う。

ベシヤリ、と。

人が倒れる音がした。

「終わりか」

血だまりの中に沈む鳴神を見つめ、エイワスは簡素な言葉を口にした。

「では楽にしてやろう」

スツと伸ばされたエイワスの右手が、鳴神の真っ赤に染まった頭部

に触れる。たつたそれだけ。ただそれだけの行為だが、それによってバギンツ！と音をたてて鳴神の頭部は破壊された。それにつられてか肩から順に足元に向かって空気に溶けるように身体が消滅していく。

「今までご苦労だったな。プロト（試作品）＝ナルカミ」

鳴神の最期を見届けることもなく、エイワスはその場から姿を消した。

後には何も残らなかった。

フランスに向かうために黒塗りの回収車に乗り込んだ一方通行は、車窓の外に見える変わり果てた飛行場を横目に思案していた。

（幸せか……ねエ）

海原の言葉を心中で反芻しながら、決まってる、と吐き捨てた。

「俺の幸せなンざどオだっていい。あのガキの世界さえ、あのガキの幸せさえ守れりゃあな」

車が停車したのを確認すると、スライド式のドアを開いて外に降り

立つ。

「今に見てるクソ暗部。出し抜いてやるからよ」

誰に言うでもなくそう溢した一方通行は、フランス、アヴィニヨン
行きの音速旅客機に乗り込んだ。

E
n
d

Ep.60 Near The Future (後書き)

皆さま、これまで『とある暗部と学園都市』をお読みくださって本当にありがとうございます。

この小説は私自身の処女作で、至らない点も多くあったとは思いますが、まずは完結できたことにとりあえずの達成感を感じています。

もともとこの小説は暗部が書きたい！！ という私の勝手な妄想から始まった小説なので主人公は暗部全体、特に定めてはいませんでした。（なんだか後半は一方通行が主人公みたいになってました
がWW）

オリキャラもそこまで多くなかったですね。科学サイドの重要人物では鳴神くらいだったのではないのでしょうか。

設定や時事などに矛盾など多々ありますが、そこは目を瞑ってもらえると有難いですf^_^；

さてさて。

まだまだ書きたいことはたくさんあるのですが、一応はこういった形で完結とさせていただきます。

皆さま、この5ヶ月間本当にありがとうございます！！

できたら新作でお会いしましょう！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9340p/>

とある暗部と学園都市

2011年6月14日01時46分発行